

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部の設置								
フリガナ設置者	ガッコウホウジン ドウシシャ 学校法人 同志社								
フリガナ大学の名称	ドウシシャダイガク 同志社大学 (Doshisha University)								
大学本部の位置	京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町601番地								
大学の目的	本大学は、教育基本法にのっとり、学校教育法の定める大学として、学術を教授研究し、あわせてキリスト教的教育の特色を發揮し、国家社会に有用な人物を養成することを目的とする。								
新設学部等の目的	グローバル地域文化学部グローバル地域文化学科は、グローバル化する21世紀の国際社会に柔軟に対応するために、外国語能力に優れ、国際的教養を有し、各種の言語圏における地域文化の形成と多様性への理解を基礎に、それぞれの地域が抱える様々な課題にグローバルな視点をもって取り組める人材を養成することを目的とする。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	グローバル地域文化学部 [Faculty of Global and Regional Studies] グローバル地域文化学科 [Department of Global and Regional Studies] 計	年	人	年次人	人	学士 (グローバル地域文化学)	平成25年4月 第1年次	京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町601番地	
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	同志社大学 平成25年4月より次のとおり変更 ・グローバル地域文化学部グローバル地域文化学科設置 [定員増] (180名) 社会学部教育文化学科 [定員増] (15名) スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科 [定員増] (60名) (平成24年3月認可申請済み) ・商学部商学科 850名(±0名) 昼間主コース (700名)、夜間主コース (150名) 昼夜開講制によるコース制を廃止 (平成24年4月届出済み) ・理工学研究科電気電子工学専攻(博士前期課程) [定員増] (10名) 応用化学専攻 (博士前期課程) [定員増] (20名) 文学研究科英文学・英語学専攻(博士後期課程) [定員増] (2名) 文化情報学研究科文化情報学専攻(博士後期課程) [定員増] (3名) 理工学研究科情報工学専攻(博士後期課程) [定員増] (3名) 電気電子工学専攻(博士後期課程) [定員増] (4名) 機械工学専攻(博士後期課程) [定員増] (5名) 応用化学専攻(博士後期課程) [定員増] (4名) 数理環境科学専攻(博士後期課程) [定員増] (1名) (平成24年5月届出予定)								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位			
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等
	新設分	グローバル地域文化学部	20	15	0	17	52	0	
		グローバル地域文化学科	(25)	(17)	(0)	(15)	(57)	(0)	(23)
	計	20	15	0	17	52	0	66	
		(25)	(17)	(0)	(15)	(57)	(0)	(23)	

学 部 等 の 名 称	専任教員等						兼 任 教 員 等
	教授	准教授	講師	助教	計	助手	
神学部 神学科	11 (11)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	14 (14)	1 (1)	22 (22)
文学部 英文学科	14 (14)	8 (8)	0 (0)	3 (3)	25 (25)	0 (0)	51 (51)
文学部 哲学科	8 (8)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	24 (24)
文学部 美学芸術学科	5 (5)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	33 (33)
文学部 文化史学科	10 (10)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	59 (59)
文学部 国文学科	10 (10)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	47 (47)
社会学部 社会学科	7 (7)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	9 (9)	0 (0)	26 (26)
社会学部 社会福祉学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	12 (12)	0 (0)	50 (50)
社会学部 メディア学科	6 (6)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	8 (8)	0 (0)	11 (11)
社会学部 産業関係学科	4 (4)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	8 (8)	0 (0)	12 (12)
社会学部 教育文化学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	58 (58)
法学部 法律学科	29 (29)	8 (8)	0 (0)	5 (5)	42 (42)	0 (0)	91 (91)
法学部 政治学科	12 (12)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	15 (15)	0 (0)	2 (2)
経済学部 経済学科	44 (44)	8 (8)	0 (0)	8 (8)	60 (60)	0 (0)	71 (71)
商学部 商学科	26 (26)	15 (15)	0 (0)	13 (13)	54 (54)	0 (0)	55 (55)
政策学部 政策学科	30 (30)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	36 (36)	2 (2)	29 (29)
文化情報学部 文化情報学科	16 (16)	8 (8)	0 (0)	5 (5)	29 (29)	0 (0)	41 (41)
理工学部 インテリジェント情報工学科	7 (7)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	0 (0)	48 (48)
理工学部 情報システムデザイン学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	11 (11)	0 (0)	23 (23)
理工学部 電気工学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	12 (12)	0 (0)	38 (38)
理工学部 電子工学科	9 (9)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	11 (11)	0 (0)	3 (3)
理工学部 機械システム工学科	7 (7)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	11 (11)	1 (1)	30 (30)
理工学部 エネルギー・機械工学科	10 (10)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	27 (27)
理工学部 機能分子・生命化学科	9 (9)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	13 (13)	1 (1)	23 (23)
理工学部 化学システム創成工学科	10 (10)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	20 (20)
理工学部 環境システム学科	5 (5)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	11 (11)	0 (0)	6 (6)
理工学部 数理システム学科	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	11 (11)
生命医科学部 医工学科	8 (8)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	11 (11)	0 (0)	31 (31)
生命医科学部 医情報学科	8 (8)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	11 (11)	1 (1)	35 (35)
生命医科学部 医生命システム学科	8 (8)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	15 (15)	0 (0)	44 (44)
スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	15 (15)	2 (2)	0 (0)	3 (3)	20 (20)	0 (0)	21 (21)
心理学部心理学科	10 (10)	5 (5)	0 (0)	4 (4)	19 (19)	1 (1)	32 (32)
グローバル・コミュニケーション学部 グローバル・コミュニケーション学科	10 (10)	14 (14)	0 (0)	5 (5)	29 (29)	0 (0)	43 (43)
学部 計	382 (382)	119 (119)	0 (0)	80 (80)	581 (581)	7 (7)	995 (995)

教 員 組 織 の 概 要

教 員 組 織 の 概 要	既 設 分	国際教育インスティテュート	1 (1)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	13 (13)	兼任教員は複数の学部・学科の科目を担当する場合は、重複してカウント。 計は実数。
		キリスト教文化センター	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	
		理工学研究所	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	
		歴史資料館	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	
		免許資格課程センター	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
		日本語・日本文化教育センター	1 (1)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	8 (8)	0 (0)	34 (34)	
		全学共通教養教育センター	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	433 (433)	
		その他の教育研究組織計	5 (5)	8 (8)	0 (0)	6 (6)	19 (19)	0 (0)	479 (479)	
		計	387 (387)	127 (127)	0 (0)	86 (86)	600 (600)	7 (7)	1,373 (1,373)	
		合 計	407人 (412)	142人 (144)	0人 (0)	103人 (101)	652人 (657)	7人 (7)	1,400人 (1,378)	
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		291 (291)	388 (388)	679 (679)					
	技 術 職 員		2 (2)	0 (0)	2 (2)					
	図 書 館 専 門 職 員		31 (31)	37 (37)	68 (68)					
	そ の 他 の 職 員		1 (1)	0 (0)	1 (1)					
	計		325 (325)	425 (425)	750 (750)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	722,920㎡	5,521 ㎡	0 ㎡	728,141㎡					
	運 動 場 用 地	184,143㎡	0 ㎡	0 ㎡	184,143㎡					
	小 計	907,063㎡	5,521 ㎡	0 ㎡	912,284㎡					
	そ の 他	238,453㎡	0 ㎡	0 ㎡	238,453㎡					
合 計	1,145,516㎡	5,521 ㎡	0 ㎡	1,150,737㎡						
校 舎	専 用	332,877㎡ (332,877 ㎡)	5,065 ㎡ (5,065 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	337,942 ㎡ (337,942 ㎡)					
	共用する他の 学校等の専用			0 ㎡	0 ㎡					
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設					
	388 室	176 室	470 室	41 室 (補助職員 89 人)	3 室 (補助職員 0 人)					
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数						
	グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科			56 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科	113,554〔96,836〕 (105,294〔89,796〕)	1,934〔1,907〕 (1,934〔1,907〕)	*1,629〔1,625〕 *(1,629〔1,625〕)	8,999 (8,999)	0 (0)	0 (0)			
	計	113,554〔96,836〕 (105,294〔89,796〕)	1,934〔1,907〕 (1,934〔1,907〕)	*1,629〔1,625〕 *(1,629〔1,625〕)	8,999 (8,999)	0 (0)	0 (0)			
図 書 館	面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数						
	16,278㎡	2,670席		1,141,385冊						
体 育 館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要								
	10,580㎡	プール、弓道場など13施設、施設総面積6,393.14㎡を有する。								

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	届出学部全体 図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費及び運用コストを含む。	
		教員1人当り研究費等		935千円	935千円	935千円	935千円			
		共同研究費等		44,730千円	44,730千円	44,730千円	44,730千円			
		図書購入費	5,000千円	46,464千円	49,185千円	51,869千円	54,505千円			
		設備購入費	5,000千円	10,302千円	16,188千円	21,993千円	27,693千円			
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1,109千円	942千円	955千円	968千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料, 寄付金, 資産運用収入により充当する。							
既設大学の状況	大学の名称 同志社大学									
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
		年	人	年次人	人		倍			
	神学部									
	神学科	4	60	-	240	学士(神学)	1.15	昭和23年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	文学部									
	英文学科	4	300	-	1200	学士(英文学) 学士(国際教養)	1.07 1.05	昭和23年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成19年度より昼夜開講制によるコース制廃止
	哲学科	4	65	-	260	学士(哲学) 学士(国際教養)	1.07	平成17年度	同上	
	心理学科	4	-	-	-	学士(心理学)	-	平成17年度	同上	平成21年4月より学生募集停止
	美学芸術学科	4	65	-	260	学士(美学芸術学) 学士(国際教養)	1.14	平成17年度	同上	
	文化史学科	4	120	-	480	学士(文化史学) 学士(国際教養)	1.05	平成17年度	同上	
	国文学科	4	120	-	480	学士(国文学) 学士(国際教養)	1.09	平成17年度	同上	平成19年度より昼夜開講制によるコース制廃止
	社会学部									
	社会学科	4	82	-	328	学士(社会学) 学士(国際教養)	1.11 1.05	平成17年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	社会福祉学科	4	93	-	372	学士(社会福祉学) 学士(国際教養)	1.09	平成17年度	同上	
	メディア学科	4	83	-	332	学士(メディア学) 学士(国際教養)	1.15	平成17年度	同上	
	産業関係学科	4	82	-	328	学士(産業関係学) 学士(国際教養)	1.12	平成17年度	同上	
	教育文化学科	4	60	-	240	学士(教育文化学) 学士(国際教養)	1.16	平成17年度	同上	
	法学部									
	法律学科	4	650	-	2600	学士(法学) 学士(国際教養)	1.06 1.03	昭和23年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	政治学科	4	200	-	800	学士(政治学) 学士(国際教養)	1.17	昭和23年度	同上	
	経済学部									
	経済学科	4	850	-	3400	学士(経済学) 学士(国際教養)	1.04 1.04	昭和23年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	商学部									
	商学科									
	昼間主コース	4	700	-	2800	学士(商学) 学士(国際教養)	1.03 1.03 1.06	昭和24年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	夜間主コース	4	150	-	600	学士(商学)	0.91	平成9年度	同上	
	政策学部									
	政策学科	4	400	-	1600	学士(政策学) 学士(国際教養)	1.03 1.03	平成16年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成20年度より昼夜開講制によるコース制廃止
	文化情報学部									
	文化情報学科	4	280	-	1120	学士(文化情報学)	1.07 1.07	平成17年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	

	学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 設 年 度	所 在 地		
既 設 大 学 等 の 状 況	理工学部						1.16				
	インテリジェント情報工学科	4	80	-	320	学士(工学)	1.11	平成6年度	京都府京田辺市多々羅都谷1番地3	平成20年度工学部を理工学部 に名称変更 平成18年度知能工学科 を名称変更	
	情報システムデザイン学科	4	80	-	320	学士(工学)	1.18	平成16年度	同 上		
	電気工学科	4	75	-	300	学士(工学)	1.11	昭和24年度	同 上		
	電子工学科	4	85	-	340	学士(工学)	1.12	昭和38年度	同 上		
	機械システム工学科	4	90	-	360	学士(工学)	1.18	昭和24年度	同 上		
	ロボット・機械工学科	4	70	-	280	学士(工学)	1.16	昭和38年度	同 上		
	機能分子・生命化学科	4	80	-	320	学士(工学) 学士(理学)	1.22	平成6年度	同 上	平成20年度 機能分子 工学科を名称変更	
	化学システム創成工学科	4	80	-	320	学士(工学)	1.12	平成6年度	同 上	平成20年度物質化学工 学科を名称変更	
	環境システム学科	4	50	-	200	学士(工学) 学士(理学)	1.22	平成16年度	同 上		
	数理システム学科	4	40	-	160	学士(理学)	1.33	平成20年度	同 上	平成20年度開設	
	生命医科学部							1.16			
	医工学科	4	90	-	360	学士(工学)	1.19	平成20年度	京都府京田辺市多々羅都谷1番地3	平成20年度開設	
	医情報学科	4	90	-	360	学士(工学)	1.13	平成20年度	同 上	平成20年度開設	
	医生命システム学科	4	60	-	240	学士(理学)	1.17	平成20年度	同 上	平成20年度開設	
	スポーツ健康科学部							1.09			
	スポーツ健康科学科	4	150	-	600	学士(スポーツ健康 科学)	1.09	平成20年度	京都府京田辺市多々羅都谷1番地3	平成20年度開設	
	心理学部							1.07			
	心理学科	4	150	-	600	学士(心理学)	1.07	平成21年度	京都府京田辺市多々羅都谷1番地3	平成21年度開設	
	グローバル・コミュニケーション学部							0.99			
	グローバル・コミュニケーション学科	4	150	-	300	学士(グローバル・ コミュニケーション学)	0.99	平成23年度	京都府京田辺市多々羅都谷1番地3	平成23年度開設	
	大学院										
	博士前期課程										
神学研究科											
神学専攻	2	20	-	40	修士(神学) 修士(一神教研究)	0.75	平成19年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地			
文学研究科											
哲学専攻	2	10	-	20	修士(哲学)	0.25	昭和25年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地			
英文学・英語学専攻	2	20	-	40	修士(英文学) 修士(英語学)	0.27	昭和25年度	同 上			
文化史学専攻	2	15	-	30	修士(文化史学)	0.66	昭和26年度	同 上			
心理学専攻	2	-	-	-	修士(心理学)	-	昭和36年度	同 上	平成21年4月より学生募 集停止		
国文学専攻	2	10	-	20	修士(国文学)	1.20	昭和37年度	同 上			
美学芸術学専攻	2	5	-	10	修士(美学) 修士(芸術学)	1.20	昭和63年度	同 上			
社会学研究科											
社会福祉学専攻	2	10	-	20	修士(社会福祉学)	0.85	平成17年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地			
メディア学専攻	2	5	-	10	修士(メディア学)	1.10	平成17年度	同 上			
教育文化学専攻	2	7	-	14	修士(教育文化学)	0.85	平成17年度	同 上	平成23年4月より名称変 更		

	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
既 設 大 学 等 の 状 況	社会学専攻	2	10	-	20	修士（社会学）	0.30	平成17年度	同 上	
	産業関係学専攻	2	5	-	10	修士（産業関係学）	0.30	平成17年度	同 上	
	法学研究科									
	政治学専攻	2	40	-	80	修士（政治学）	0.14	昭和25年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	私法学専攻	2	45	-	90	修士（法学）	0.87	昭和26年度	同 上	
	公法学専攻	2	45	-	90	修士（法学）	0.49	昭和38年度	同 上	
	経済学研究科									
	理論経済学専攻	2	25	-	50	修士（経済学）	0.08	昭和25年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	応用経済学専攻	2	25	-	50	修士（経済学）	0.16	昭和25年度	同 上	
	商学研究科									
	商学専攻	2	65	-	130	修士（商学）	0.44	昭和25年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	総合政策科学研究科									
	総合政策科学専攻	2	70	-	140	修士（政策科学） 修士（ヒューマン・マネジメント） 修士（グローバル・イノベーション）	0.62	平成7年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	文化情報学研究科									
	文化情報学専攻	2	30	-	60	修士（文化情報学）	0.68	平成19年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	
	理工学研究科									
	情報工学専攻	2	60	-	120	修士（工学）	1.31	平成10年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	平成24年度 工学研究 科を名称変更 平成20年度知識工学専 攻を名称変更
	電気電子工学専攻	2	60	-	120	修士（工学）	1.36	昭和30年度	同 上	平成20年度 電気工学 専攻を名称変更
	機械工学専攻	2	80	-	160	修士（工学）	1.29	昭和30年度	同 上	
	応用化学専攻	2	60	-	120	修士（工学） 修士（理学）	1.64	昭和30年度	同 上	平成24年度 工業化学 専攻を名称変更
	数理環境科学専攻	2	25	-	50	修士（工学） 修士（理学）	0.90	平成10年度	同 上	
	生命医科学研究科									
	生命医科学専攻	2	-	-	-	修士（工学） 修士（理学）	-	平成20年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	平成24年4月より学生募 集停止
	医工学・医情報学専攻	2	90	-	90	博士（工学）	0.95	平成24年度	同 上	平成24年度開設
	医生命システム専攻	2	20	-	20	博士（理学）	1.00	平成24年度	同 上	平成24年度開設
	スポーツ健康科学研究科									
スポーツ健康科学専攻	2	8	-	16	修士（スポーツ健康科学）	1.18	平成22年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	平成22年度開設	
心理学研究科										
心理学専攻	2	10	-	20	修士（心理学）	1.00	平成21年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成21年度開設	
アメリカ研究科										
アメリカ研究専攻	2	-	-	-	修士（アメリカ研究）	-	平成3年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成22年4月より学生募 集停止	
グローバル・スタディーズ研究科										
グローバル・スタディーズ専攻	2	45	-	90	修士（アメリカ研究） 修士（現代アジア研究） 修士（グローバル社会研究）	0.83	平成22年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成22年度開設	

	学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 設 年 度	所 在 地	
既 設 大 学 等 の 状 況	博士後期課程									
	神学研究科 神学専攻	3	5	-	15	博士（神学） 博士（一神教研究）	1.46	昭和28年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成19年度歴史神学専攻を名称変更
	文学研究科 哲学専攻	3	5	-	15	博士（哲学）	0.46	昭和28年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	英文学・英語学専攻	3	2	-	6	博士（英文学） 博士（英語学）	0.83	昭和30年度	同 上	
	文化史学専攻	3	4	-	12	博士（文化史学）	0.75	昭和30年度	同 上	
	心理学専攻	3	-	-	-	博士（心理学）	-	昭和39年度	同 上	平成21年4月より学生募集停止
	国文学専攻	3	3	-	9	博士（国文学）	0.77	昭和61年度	同 上	
	美学芸術学専攻	3	3	-	9	博士（芸術学）	1.11	平成 8年度	同 上	
	社会学研究科 社会福祉学専攻	3	4	-	12	博士（社会福祉学）	1.25	平成17年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	メディア学専攻	3	2	-	6	博士（メディア学）	1.00	平成17年度	同 上	
	教育文化学専攻	3	3	-	9	博士（教育文化学）	1.10	平成17年度	同 上	平成23年4月より名称変更
	社会学専攻	3	5	-	15	博士（社会学）	0.40	平成17年度	同 上	
	産業関係学専攻	3	2	-	6	博士（産業関係学）	0.33	平成17年度	同 上	
	法学研究科 政治学専攻	3	5	-	15	博士（政治学）	0.40	昭和28年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	私法学専攻	3	5	-	15	博士（法学）	0.46	昭和38年度	同 上	
	公法学専攻	3	5	-	15	博士（法学）	0.60	昭和51年度	同 上	
	経済学研究科 経済政策専攻	3	5	-	15	博士（経済学）	1.00	昭和32年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	商学研究科 商学専攻	3	5	-	15	博士（商学）	0.66	昭和40年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	総合政策科学研究科 総合政策科学専攻	3	15	-	45	博士（政策科学） 博士（ヒューマン・テクノロジー） 博士（ソシオ・イノベーション）	1.48	平成 9年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	
	文化情報学研究科 文化情報学専攻	3	2	-	6	博士（文化情報学）	2.00	平成19年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	
	理工学研究科 情報工学専攻	3	2	-	6	博士（工学）	1.00	平成12年度	京都府京田辺市多々羅 都谷1番地3	平成24年度 工学研究科を名称変更 平成20年度 知識工学専攻を名称変更
	電気電子工学専攻	3	3	-	9	博士（工学）	0.88	昭和32年度	同 上	平成20年度 電気工学専攻を名称変更
	機械工学専攻	3	3	-	9	博士（工学）	1.77	昭和32年度	同 上	
	応用化学専攻	3	3	-	9	博士（工学） 博士（理学）	0.99	昭和34年度	同 上	平成24年度 工業化学専攻を名称変更
	数理環境科学専攻	3	2	-	6	博士（工学） 博士（理学）	1.00	平成21年度	同 上	平成21年度開設

	学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 設 年 度	所 在 地		
既 設 大 学 等 の 状 況	生命医科学研究科 生命医学専攻	3	-	-	-	博士（工学） 博士（理学）	-	平成20年度	京都府京田辺市多々羅 都合1番地3	平成24年4月より学生募集停止	
	医工学・医情報学専攻	3	2	-	2	博士（工学）	1.00	平成24年度	同 上	平成24年度開設	
	医生命システム専攻	3	12	-	12	博士（理学）	0.08	平成24年度	同 上	平成24年度開設	
	スポーツ健康医科学研究科 スポーツ健康科学専攻	3	3	-	3	博士（スポーツ健康科学）	0.00	平成24年度	京都府京田辺市多々羅 都合1番地3	平成24年度開設	
	心理学研究科 心理学専攻	3	4	-	12	博士（心理学）	0.83	平成21年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成21年度開設	
	アメリカ研究科 アメリカ専攻	3	-	-	-	博士（アメリカ研究）	-	平成 5年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成22年4月より学生募集停止	
	グローバル・スタディーズ研究科 グローバル・スタディーズ専攻	3	18	-	54	博士（アメリカ研究） 博士（現代アジア研究） 博士（グローバル社会研究）	0.58	平成22年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成22年度開設	
	一貫制博士課程										
	総合政策科学研究科 技術・革新的経営専攻	5	10	-	40	修士（技術・革新的経営） 博士（技術・革新的経営）	0.05	平成21年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地	平成21年度開設	
	脳科学研究科 発達加齢能専攻	5	10	-	10	博士（理学）	0.50	平成24年度	京都府木津川市木津川台 4丁目1番地1	平成24年度開設	
	専門職学位課程										
	司法研究科 法務専攻	3	120	-	360	法務博士（専門職）	0.72	平成16年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地		
	ビジネス研究科 ビジネス専攻	2	70	-	140	ビジネス修士（専門職）	0.52	平成16年度	京都市上京区今出川通 烏丸東入玄武町601番地		

既設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	同 志 社 女 子 大 学						所 在 地		
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率			開 設 年 度
	学芸学部 英語英文学科	4				学士 (文学)	1.15	昭和 40年度	京都市上京区今出川 通烏丸東入玄武町 六〇貳番地壹	-平成19年4月から入学 定員を次のとおり変 更。 入学定員 200人 160人 [40] 3年次編入学定員 50人 5人 [45] ・平成21年度より学生 募集停止
	日本語日本文学科	4				学士 (文学)		平成 元年度	同 上	-平成19年4月から3年次 編入学定員を次のとお り変更。 30人 5人 [25] ・平成21年度より学生 募集停止
	音楽学科 演奏専攻	4	75	5	310	学士 (音楽)	1.10	昭和 40年度	京都府京田辺市興戸 南針立九七番壹	
	音楽学科 音楽文化専攻	4	40	5	170	学士 (音楽)	1.09	昭和 40年度	同 上	
	情報メディア学科	4	120		480	学士 (情報メディア)	1.20	平成 14年度	同 上	
	国際教養学科	4	80		320	学士 (国際教養学)	1.15	平成 19年度	同 上	
	現代社会学部 社会システム学科	4	300	10	1,220	学士 (社会システム)	1.12 1.10	平成 12年度	同 上	-平成16年4月から入学 定員を次のとおり変更 400人 300人 [100]
	現代こども学科	4	100		400	学士 (現代社会)	1.17	平成 16年度	同 上	-平成19年4月から3年次 編入学定員を次のとお り変更。 20人 10人 [10]
	薬学部 医療薬学科	4				学士 (薬学)		平成 17年度	同 上	-平成18年4月から6年制 課程へ移行
	薬学部 医療薬学科	6	120		720	学士 (薬学)	1.13 1.13	平成 18年度	同 上	
	表象文化学部 英語英文学科	4	160	5	650	学士 (文学)	1.07 1.08	平成 21年度	京都市上京区今出川 通烏丸東入玄武町 六〇貳番地壹	-平成21年4月開設
	日本語日本文学科	4	130	5	530	学士 (文学)	1.06	平成 21年度	同 上	-平成21年4月開設
	生活科学部 人間生活学科	4	80		320	学士 (生活科学)	1.18 1.25	昭和 42年度	同 上	
	食物栄養科学科 食物科学専攻	4	55		220	学士 (生活科学)	1.17	昭和 44年度	同 上	
	食物栄養科学科 管理栄養士専攻	4	80		320	学士 (生活科学)	1.12	昭和 44年度	同 上	

	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入 学 定員	編入学 定員	収 容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地	
既 設 大 学 等 の 状 況	大学院 文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）	2	8		16	修士 （英語英文学）	0.43	昭和 42年度	京都市上京区今出川 通烏丸東入玄武町 六〇貳番地壹	
	文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）	3	4		12	博士 （英語英文学）	0.16	昭和 50年度	同 上	
	文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）	2	10		20	修士 （日本語日本文化）	0.70	平成 9年度	同 上	
	文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）	3	4		12	博士 （日本語日本文化）	0.41	平成 12年度	同 上	
	文学研究科 情報文化専攻 修士課程	2	5		10	修士 （情報文化）	0.70	平成 20年度	京都府京田辺市興戸 南針立九七番壹	
	国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程	2	10		20	修士 （国際社会システム）	0.20	平成 16年度	同 上	
	薬学研究科 医療薬学専攻 博士課程	4	4		4	博士 （薬学）	0.75	平成 24年度	同 上	・平成24年4月開設
	生活科学研究科 生活デザイン専攻 修士課程	2	5		10	修士 （生活デザイン）	0.60	平成 20年度	京都市上京区今出川 通烏丸東入玄武町 六〇貳番地壹	
	生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程	2	8		16	修士 （食物栄養科学）	0.31	昭和 43年度	同 上	
	附属施設の概要	名 称：薬用植物園（同志社女子大学薬学部と共用） 目 的：薬用植物の栽培と品質に関する研究ならびに薬用植物の自生状況の研究 所 在 地：京都府京田辺市興戸地蔵谷57 設置年月：平成17年4月 面 積：1,007㎡								

（注）

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「-」又は「該当なし」と記入すること。

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要														
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
必修科目	グローバル地域文化論	1前	2						2					私バス 兼1 兼1 兼1 兼1
	グローバル・スタディーズ論	1後	2									1		
	グローバル地域文化入門	2前	2						1	2				
	グローバル地域文化の基礎	2後	2							3				
	グローバル地域文化導入セミナー	1前	2						4	3		2		
	グローバル地域文化入門セミナー	2後	2						2	1		3		
	グローバル地域文化発展セミナー	3前	2						8	5		4		
	グローバル地域文化発展セミナー	3後	2						8	5		4		
	グローバル地域文化専門セミナー	4前	2						8	5		4		
	グローバル地域文化専門セミナー	4後	2						8	5		4		
	卒業論文	4通	8						8	5		4		
小計(11科目)	-	-	28	0	0				14	10	0	6	0	兼1
(グローバル・イシュー科目群)	グローバル・イシュー(グローバル化の世界史)	2・3・4前	2							1				兼1 兼1 兼1 兼1
	グローバル・イシュー(ジェンダーと地域文化)	2・3・4後	2									1		
	グローバル・イシュー(社会開発論)	2・3・4前	2										1	
	グローバル・イシュー(異文化理解と紛争の抑止)	2・3・4後	2											
	グローバル・イシュー(越境する地域文化)	2・3・4前	2											
	グローバル・イシュー(人間の安全保障論)	2・3・4後	2											
	グローバル・イシュー(シチズンシップ論)	2・3・4前	2							1				
	グローバル・イシュー(地球規模課題とアフリカ)	2・3・4後	2											
	小計(8科目)	-	-	0	16	0				2	1	0	1	
選択必修科目B群(スタディ・アブロード科目群)	サマープログラム・英語A	1・2・3・4後	4						1					隔年 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1
	サマープログラム・英語B	1・2・3・4後	3						2					
	サマープログラム・英語C	1・2・3・4後	2											
	サマープログラム・ドイツ語A	2・3・4前	4						1					
	サマープログラム・ドイツ語B	2・3・4前	3											
	サマープログラム・フランス語	2・3・4前	4									1		
	サマープログラム・中国語	2・3・4前	4							1				
	サマープログラム・スペイン語	2・3・4前	4							1				
	サマープログラム・ロシア語	2・3・4前	4						1					
	サマープログラム・コリア語	2・3・4前	3						1					
	スプリングプログラム・英語A	2・3・4前	4						1					
	スプリングプログラム・英語C	2・3・4前	2									1		
	スプリングプログラム・英語D	2・3・4前	1						1					
	スプリングプログラム・ドイツ語	3・4前	3						1					
	スプリングプログラム・フランス語	2・3・4前	3									1		
	スプリングプログラム・中国語	2・3・4前	1						1					
	スプリングプログラム・スペイン語	2・3・4前	1						1					
セメスタープログラム・英語	2・3・4後	4							2					
セメスタープログラム・英語	2・3・4後	4							2					
スタディ・ツアー	3・4前	2						3						
海外インターンシップ	2・3・4後	2						1						
小計(21科目)	-	-	0	62	0				12	4	0	3	0	兼4
選択必修科目C群(外国語関連科目群)	(英語)													兼1 兼1 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2
	コミュニケーション・イングリッシュ1	1前	1									1	4	
	コミュニケーション・イングリッシュ2	1後	1									1	4	
	アナリティカル・リーディング1	1前	1						1	1		1		
	アナリティカル・リーディング2	1後	1						1	1		1		
	イングリッシュ・セミナー1	2前	1						1	1				
	イングリッシュ・セミナー2	2後	1						1	1				
	イングリッシュ・セミナー3	2後	2						1					
	イングリッシュ・ワークショップ1	2前	1						1	1				
	イングリッシュ・ワークショップ2	2後	1						1	1				
	イングリッシュ・ワークショップ3	2前	2						1					
	アカデミック・イングリッシュA	2・3・4前	2									1		
	アカデミック・イングリッシュB	2・3・4後	2									1		
	プロフェッショナル・イングリッシュA	2・3・4前	2						1					
	プロフェッショナル・イングリッシュB	2・3・4後	2							1				
プレ・イングリッシュ・プラクティクム	1・2後	4							1					

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	イングリッシュ・プラクティクム1	1・2後		4						1							
	イングリッシュ・プラクティクム2	1・2前		4						1							
	言語文化研究1	3・4前		2					1								
	言語文化研究2	3・4後		2					1								
	現代地域事情・上級講読(英語圏)1	3・4前		2					1								
	現代地域事情・上級講読(英語圏)2 (ドイツ語)	3・4後		2					1								
	ドイツ語入門	1前		2								1			兼1		
	ドイツ語入門	1後		2								1			兼1		
	ドイツ語応用1	2前		1											兼1		
	ドイツ語応用2	2前		1											兼1		
	ドイツ語応用3	2後		1											兼1		
	ドイツ語応用4	2後		1											兼1		
	ドイツ語インテンシヴ	1・2・3・4前		3						1			1				
	ドイツ語インテンシヴ	1・2・3・4後		3						1			1				
	ドイツ語インテンシヴ	2・3・4前		3									1		兼1		
	ドイツ語インテンシヴ	2・3・4後		3									1		兼1		
	ドイツ語インテンシヴ	3・4前		2									1		兼1		
	ドイツ語インテンシヴ	3・4後		2									1		兼1		
	ドイツ語文化事情1	3・4前		2									1				
	ドイツ語文化事情2	3・4後		2									1				
	ドイツ語表現法1	3・4前		2									1				
	ドイツ語表現法2	3・4後		2									1				
	言語文化原典演習(ドイツ語)1	3・4前		2							1						
	言語文化原典演習(ドイツ語)2	3・4後		2							1						
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏)1	3・4前		2						1							
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏)2	3・4後		2						1							
	ドイツ語会話初級1	1・2・3・4前		1									1				
	ドイツ語会話初級2	1・2・3・4後		1									1				
	ドイツ語会話中級1	1・2・3・4前		1									1				
	ドイツ語会話中級2	1・2・3・4後		1									1				
	ドイツ語会話上級1	1・2・3・4前		1											兼1		
	ドイツ語会話上級2	1・2・3・4後		1											兼1		
	(フランス語)																
	フランス語入門	1前		2						1			1				
	フランス語入門	1後		2						1			1				
	フランス語応用1	2前		1									1				
	フランス語応用2	2前		1									1				
	フランス語応用3	2後		1									1				
	フランス語応用4	2後		1									1				
	フランス語インテンシヴ	1・2・3・4前		3						1			1		兼1		
	フランス語インテンシヴ	1・2・3・4後		3						1			1		兼1		
	フランス語インテンシヴ	2・3・4前		3									1		兼2		
	フランス語インテンシヴ	2・3・4後		3									1		兼2		
	フランス語インテンシヴ	3・4前		2						1							
	フランス語インテンシヴ	3・4後		2						1							
	フランス語インテンシヴ	4前		2									1				
	フランス語インテンシヴ	4後		2									1				
フランス語文化事情1	3・4前		2											兼1			
フランス語文化事情2	3・4後		2											兼1			
フランス語表現法1	3・4前		2									1					
フランス語表現法2	3・4後		2									1					
言語文化原典演習(フランス語)1	3・4前		2						1								
言語文化原典演習(フランス語)2	3・4後		2						1								
現代地域事情・上級講読(フランス語圏)1	3・4前		2									1					
現代地域事情・上級講読(フランス語圏)2	3・4後		2									1					
フランス語会話初級1	1・2・3・4前		1											兼1			
フランス語会話初級2	1・2・3・4後		1											兼1			
フランス語会話中級1	1・2・3・4前		1											兼1			

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	フランス語会話中級2	1・2・3・4後		1											兼1	
	フランス語会話上級1	1・2・3・4前		1											兼1	
	フランス語会話上級2	1・2・3・4後		1											兼1	
	(中国語)															
	中国語入門	1前		2												兼2
	中国語入門	1後		2												兼2
	中国語応用1	2前		1												兼1
	中国語応用2	2前		1												兼1
	中国語応用3	2後		1												兼1
	中国語応用4	2後		1												兼1
	中国語インテンシヴ	1・2・3・4前		3					1							兼1
	中国語インテンシヴ	1・2・3・4後		3					1							兼1
	中国語インテンシヴ	2・3・4前		3						1						兼1
	中国語インテンシヴ	2・3・4後		3						1						兼1
	中国語インテンシヴ	3・4前		2								1				兼1
	中国語インテンシヴ	3・4後		2								1				兼1
	中国語インテンシヴ	4前		2					1	1						
	中国語インテンシヴ	4後		2					1	1						
	中国語文化事情1	3・4前		2							1					
	中国語文化事情2	3・4後		2							1					
	中国語表現法1	3・4前		2												兼1
	中国語表現法2	3・4後		2												兼1
	言語文化原典演習(中国語)1	3・4前		2												兼1
	言語文化原典演習(中国語)2	3・4後		2												兼1
	現代地域事情・上級講読(中国語圏)1	3・4前		2									1			
	現代地域事情・上級講読(中国語圏)2	3・4後		2									1			
	中国語会話初級1	2・3・4前		1												兼1
	中国語会話初級2	2・3・4後		1												兼1
	中国語会話中級1	2・3・4前		1												兼1
	中国語会話中級2	2・3・4後		1												兼1
	中国語会話上級1	2・3・4前		1						1						
	中国語会話上級2	2・3・4後		1						1						
	(スペイン語)															
	スペイン語入門	1前		2									1			兼1
	スペイン語入門	1後		2									1			兼1
	スペイン語応用1	2前		1												兼1
	スペイン語応用2	2前		1						1						
	スペイン語応用3	2後		1												兼1
	スペイン語応用4	2後		1						1						
	スペイン語インテンシヴ	1・2・3・4前		3							1		1			
	スペイン語インテンシヴ	1・2・3・4後		3							1		1			
	スペイン語インテンシヴ	2・3・4前		3						1			1			
	スペイン語インテンシヴ	2・3・4後		3						1			1			
	スペイン語インテンシヴ	3・4前		2												兼1
	スペイン語インテンシヴ	3・4後		2												兼1
	スペイン語文化事情1	3・4前		2												兼1
	スペイン語文化事情2	3・4後		2												兼1
スペイン語表現法1	3・4前		2									1				
スペイン語表現法2	3・4後		2									1				
言語文化原典演習(スペイン語)1	3・4前		2									1				
言語文化原典演習(スペイン語)2	3・4後		2									1				
現代地域事情・上級講読(スペイン語圏)1	3・4前		2									1				
現代地域事情・上級講読(スペイン語圏)2	3・4後		2									1				
スペイン語会話初級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話初級2	1・2・3・4後		1												兼1	
スペイン語会話中級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話中級2	1・2・3・4後		1												兼1	
スペイン語会話上級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話上級2	1・2・3・4後		1												兼1	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	(ロシア語)																
	ロシア語入門	1前		2					1				1				
	ロシア語入門	1後		2					1				1				
	ロシア語応用1	2前		1									1			兼1	
	ロシア語応用2	2前		1									1				
	ロシア語応用3	2後		1									1				
	ロシア語応用4	2後		1												兼1	
	ロシア語インテンシヴ	1・2・3・4前		3						2							
	ロシア語インテンシヴ	1・2・3・4後		3						2							
	ロシア語インテンシヴ	2・3・4前		3						1				1			
	ロシア語インテンシヴ	2・3・4後		3						1				1			
	ロシア語文化事情1	3・4前		2						1							
	ロシア語文化事情2	3・4後		2						1							
	ロシア語表現法1	3・4前		2						1							
	ロシア語表現法2	3・4後		2						1							
	言語文化原典演習(ロシア語)1	3・4前		2										1			
	言語文化原典演習(ロシア語)2	3・4後		2										1			
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏)1	3・4前		2						1							
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏)2	3・4後		2						1							
	ロシア語会話初級1	1・2・3・4前		1						1							
	ロシア語会話初級2	1・2・3・4後		1						1							
	ロシア語会話中級1	1・2・3・4前		1												兼1	
	ロシア語会話中級2	1・2・3・4後		1												兼1	
	ロシア語会話上級1	1・2・3・4前		1						1							
	ロシア語会話上級2	1・2・3・4後		1						1							
	(コリア語)																
	コリア語入門	1前		2													兼2
	コリア語入門	1後		2													兼2
	コリア語応用1	2前		1													兼1
	コリア語応用2	2前		1													兼1
	コリア語応用3	2後		1													兼1
	コリア語応用4	2後		1													兼1
	コリア語インテンシヴ	1・2・3・4前		3						1				1			兼1
	コリア語インテンシヴ	1・2・3・4後		3						1				1			兼1
	コリア語インテンシヴ	2・3・4前		3										2			兼1
	コリア語インテンシヴ	2・3・4後		3										2			兼1
	コリア語インテンシヴ	3・4前		2						1							兼1
	コリア語インテンシヴ	3・4後		2						1							兼1
	コリア語文化事情1	3・4前		2													兼1
	コリア語文化事情2	3・4後		2													兼1
	コリア語表現法1	3・4前		2						1							
	コリア語表現法2	3・4後		2						1							
	言語文化原典演習(コリア語)1	3・4前		2										1			
	言語文化原典演習(コリア語)2	3・4後		2										1			
	現代地域事情・上級講読(コリア語圏)1	3・4前		2													兼1
現代地域事情・上級講読(コリア語圏)2	3・4後		2													兼1	
コリア語会話初級1	1・2・3・4前		1													兼1	
コリア語会話初級2	1・2・3・4後		1													兼1	
コリア語会話中級1	1・2・3・4前		1													兼1	
コリア語会話中級2	1・2・3・4後		1													兼1	
コリア語会話上級1	1・2・3・4前		1													兼1	
コリア語会話上級2	1・2・3・4後		1													兼1	
(インドネシア語)																	
地域文化理解のためのインドネシア語1(文法)	1・2・3・4前		2													兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語2(文法)	1・2・3・4後		2													兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2													兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語4(講読)	2・3・4後		2													兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語5(講読)	3・4前		2													兼1	
(トルコ語)																	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	地域文化理解のためのトルコ語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのトルコ語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのトルコ語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2								1			
	地域文化理解のためのトルコ語4(講読)	2・3・4後		2								1			
	地域文化理解のためのトルコ語5(講読) (ポルトガル語)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語4(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語5(講読) (アラビア語)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語4(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語5(講読) (イタリア語)	3・4前		2											兼1
	イタリア語初級	1・2・3・4前		1											兼1
	イタリア語初級	1・2・3・4後		1											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語1(コミュニケーション)	1・2・3・4後		2											兼1
	イタリア語中級	2・3・4前		1											兼1
	イタリア語中級	2・3・4後		1											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語2(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語3(講読) (フランス語・カナダ)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのフランス語(カナダ)1(講読)	2・3・4前		2											兼1
地域文化理解のためのフランス語(カナダ)2(コミュニケーション)	2・3・4後		2											兼1	
小計(208科目)		-	0	374	0					19	13	0	17	0	兼56
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	(地域文化の形成)														
	ヨーロッパ地域文化の形成1	1・2・3・4前		2							1				
	ヨーロッパ地域文化の形成2	1・2・3・4後		2							1				
	ヨーロッパ地域文化形成論1	2・3・4前		2								1			
	ヨーロッパ地域文化形成論2	2・3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論1	3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論2	3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論3	3・4前		2						1					
	(地域文化の多様性)														
	ヨーロッパ地域文化の多様性1	1・2・3・4前		2									1		
	ヨーロッパ地域文化の多様性2	1・2・3・4後		2									1		
	ヨーロッパ地域文化論1	2・3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化論2	2・3・4後		2						1					
	ヨーロッパ言語・文化論1	2・3・4前		2							1				
	ヨーロッパ言語・文化論2	2・3・4後		2								1			
	ヨーロッパ地域文化特論1	3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化特論2	3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化特論3	3・4前		2											兼1
	ヨーロッパ地域文化特論4	3・4後		2									1		
	ヨーロッパ地域文化特論5	3・4前		2									1		
ヨーロッパ地域文化特論6	2・3・4後		2											兼1	
(地域と地球規模の課題)															
ヨーロッパの課題1	2・3・4前		2							2					
ヨーロッパの課題2	2・3・4後		2									1			
ヨーロッパの課題3	2・3・4前		2						1						
ヨーロッパの課題4	2・3・4後		2							1					
ヨーロッパの課題5	3・4後		2											兼1	
ヨーロッパの課題6	3・4前		2											兼1	
ヨーロッパの課題7	3・4後		2						1						

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	(地域文化の形成)																
	アジア・太平洋地域文化の形成1	1・2・3・4前		2						1							
	アジア・太平洋地域文化の形成2	1・2・3・4後		2						1							
	アジア・太平洋地域文化形成論1	2・3・4前		2									1				
	アジア・太平洋地域文化形成論2	2・3・4後		2									1				
	アジア・太平洋地域文化形成特論1	3・4前		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化形成特論2	3・4前		2												兼1	
	(地域文化の多様性)																
	アジア・太平洋地域文化の多様性1	1・2・3・4前		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化の多様性2	1・2・3・4後		2							1						
	アジア・太平洋地域文化論1	2・3・4後		2						1							
	アジア・太平洋地域文化論2	2・3・4前		2						1							
	アジア・太平洋言語・文化論1	2・3・4前		2							1						
	アジア・太平洋言語・文化論2	2・3・4後		2						1							
	アジア・太平洋地域文化特論1	3・4前		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化特論2	3・4後		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化特論3	3・4前		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化特論4	3・4後		2												兼1	
	アジア・太平洋地域文化特論5	2・3・4前		2												兼1	
	(地域と地球規模の課題)																
	アジア・太平洋の課題1	2・3・4前		2							1						
	アジア・太平洋の課題2	2・3・4後		2									1				
	アジア・太平洋の課題3	2・3・4前		2												兼1	
	アジア・太平洋の課題4	2・3・4後		2												兼1	
	アジア・太平洋の課題5	3・4後		2												兼1	
	アジア・太平洋の課題6	3・4後		2									1				
	アジア・太平洋の課題7	3・4前		2									1				
	アメリカ	(地域文化の形成)															
		南北アメリカ地域文化の形成1	1・2・3・4前		2						1						
		南北アメリカ地域文化の形成2	1・2・3・4後		2						1						
		南北アメリカ地域文化形成論1	2・3・4後		2						1						兼1
		南北アメリカ地域文化形成論2	2・3・4前		2												
		南北アメリカ地域文化形成特論1	3・4前		2							1					
南北アメリカ地域文化形成特論2		3・4後		2												兼1	
(地域文化の多様性)																	
南北アメリカ地域文化の多様性1		1・2・3・4後		2						1							
南北アメリカ地域文化の多様性2		1・2・3・4前		2							1						
南北アメリカ地域文化論1		2・3・4後		2												兼1	
南北アメリカ地域文化論2		2・3・4前		2												兼1	
南北アメリカ言語・文化論1		2・3・4後		2												兼1	
南北アメリカ地域文化特論1		3・4前		2						1							
南北アメリカ地域文化特論2		3・4前		2						1							
南北アメリカ地域文化特論3		3・4後		2							1						
南北アメリカ地域文化特論4		2・3・4後		2									1				
南北アメリカ地域文化特論5		2・3・4前		2												兼1	
(地域と地球規模の課題)																	
南北アメリカの課題1		2・3・4前		2						1							
南北アメリカの課題2		2・3・4後		2						1							
南北アメリカの課題3	2・3・4後		2						1								
南北アメリカの課題4	2・3・4前		2									1					
南北アメリカの課題5	3・4後		2												兼1		
南北アメリカの課題6	3・4前		2							1							
(専攻科目)	フィールドワーク	3・4前		2									1				
	発信スキル実践	2・3・4前		1						1							
	小計(74科目)	-	0	147	0	-	-	-	18	11	0	10	0	兼21			

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
選択科目B群 (地域文化研究隣接科目群)	ヨーロッパ	ヨーロッパの思想史	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパ社会史1	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパ社会史2	2・3・4後	2												兼1	
		ヨーロッパの政治史	3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパの経済	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパの経済史	2・3・4前	2												兼1	
		ロシア・東ヨーロッパの政治	3・4後	2												兼1	
		EUの政治	2・3・4後	2												兼1	
	アジア・太平洋	アジアの教育と社会1	2・3・4前	2												兼1	
		アジアの教育と社会2	2・3・4後	2												兼1	
		中国の政治	3・4前	2												兼1	
		南アジアの政治と社会	3・4後	2												兼1	
		東アジアの国際関係	2・3・4後	2												兼1	
		アジアの経済	3・4後	2												兼1	
		中国の経済	3・4前	2												兼1	
		アセアンの経済	3・4前	2												兼1	
	韓国の経済	3・4後	2												兼1		
	アメリカ	アメリカ文化の歴史1	2・3・4前	2												兼1	
		アメリカ文化の歴史2	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの経済	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの経済史	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの政治と外交	2・3・4後	2												兼1	
		ラテンアメリカの政治と社会	3・4前	2									1			兼1	
小計(23科目)		-	0	46	0	-	-	-	0	0	0	1	0		兼16		
選択科目C群	免許・資格関連科目	日本文化史概説	2・3・4通	4												兼1	
		東洋文化史概説(1)	2・3・4前	2												兼1	
		東洋文化史概説(2)	2・3・4後	2												兼1	
		西洋文化史概説(1)	2・3・4前	2												兼1	
		西洋文化史概説(2)	2・3・4後	2												兼1	
		地理学1	2・3・4前	2									1			兼1	
		地理学2	2・3・4後	2												兼1	
		地誌学	2・3・4前	2												兼1	
		社会学概論	1・2・3・4後	4												兼1	
		経済原論	3・4前	4												兼2	
		哲学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		哲学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		倫理学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		倫理学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		宗教学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		宗教学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		全学共通教養教育科目	(同志社科目)														
	建学の精神とキリスト教		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教と人間1		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教と人間2		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教とは何か1		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教とは何か2		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教会と現代文化		1・2・3・4前	2												兼1	
	人物から学ぶキリスト教の歴史		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教の歴史と同志社		1・2・3・4前	2												兼1	
	(キャリア形成支援科目)																
	キャリア開発と学生生活	1・2・3・4前	2												兼3	私バス	
キャリア開発の課題と方法	1・2・3・4後	2												兼2			
インターンシップ入門	1・2後	2												兼3	私バス・集中		
働くということ	2・3・4前	2												兼4	私バス		
キャリア形成とインターンシップ	3前	2												兼3	私バス・集中		

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手						
選 択 科 目 C 群	(国際教養科目)																		
	国際教養基礎論1	1・2・3・4前		2					1										
	国際教養基礎論2	1・2・3・4後		2					1										
	ジョイント・セミナー比較文化論	3・4後		4						1								兼1	
	多文化コミュニケーション学の基礎	1・2・3・4前		2														兼2	
	多文化コミュニケーション学の応用	1・2・3・4後		2														兼2	
	異文化間コミュニケーションA	1・2・3・4前		2														兼1	
	異文化間コミュニケーションB	1・2・3・4後		2														兼1	
	人から人間への道	1・2・3・4前		2														兼2	
	アイデンティティの社会格差	1・2・3・4後		2														兼2	
	日本の伝統と美	1・2・3・4前		2														兼1	
	日本の伝統と文化	1・2・3・4後		2														兼1	
	日本の伝統と芸能	1・2・3・4前		2														兼1	
	日本の伝統と能楽	1・2・3・4後		2														兼1	
	日本の伝統と芸術	1・2・3・4前		2														兼1	
	スタンフォード大学科目	2・3・4前		2														兼1	
	A K P 科目	1・2・3・4後		2														兼1	
	K C J S 科目	1・2・3・4後		2														兼1	
	(人文科学系科目)																		
	宗教学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	宗教学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	哲学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	哲学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	倫理学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	倫理学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	論理学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	論理学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	芸術学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	芸術学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	日本史(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	日本史(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	東洋史(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	東洋史(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	西洋史(1)	1・2・3・4後		2															兼1
	西洋史(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	考古学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	考古学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	日本語(1)	2・3・4前		2															兼1
	日本語(2)	2・3・4後		2															兼1
	日本文学(1)	1・2・3・4前		2															兼1
	日本文学(2)	1・2・3・4後		2															兼1
	ドイツ文学	1・2・3・4前		2															兼1
	フランス文学	1・2・3・4後		2															兼1
	中国文学	1・2・3・4前		2							1								1
	スペイン文学	1・2・3・4後		2							1								1
	ラテンアメリカ文学	1・2・3・4前		2								1							1
	ロシア文学	1・2・3・4後		2							1								1
(社会科学系科目)																			
法学1	1・2・3・4前		2															兼1	
法学2	1・2・3・4後		2															兼1	
政治学1	1・2・3・4前		2															兼1	
政治学2	1・2・3・4後		2															兼1	
経済学1	1・2・3・4前		2															兼1	
経済学2	1・2・3・4後		2															兼1	
商学	1・2・3・4前		2															兼5	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
選択科目C群	(自然・人間科学系科目)																	
	数学1	1・2・3・4前		2													兼1	
	数学2	1・2・3・4後		2													兼1	
	データサイエンス1	1・2・3・4前		2													兼1	
	データサイエンス2	1・2・3・4後		2													兼1	
	物質の科学1	1・2・3・4前		2													兼1	
	物質の科学2	1・2・3・4後		2													兼1	
	地球と宇宙の科学1	1・2・3・4前		2													兼1	
	地球と宇宙の科学2	1・2・3・4後		2													兼1	
	生命の科学1	1・2・3・4前		2													兼1	
	生命の科学2	1・2・3・4後		2													兼1	
	科学史・科学論1	1・2・3・4前		2													兼1	
	科学史・科学論2	1・2・3・4後		2													兼1	
	環境の科学	1・2・3・4前		2													兼1	
	情報と社会	1・2・3・4後		2													兼1	
	心理学1	1・2・3・4前		2													兼1	
	心理学2	1・2・3・4後		2													兼1	
	(先端・複合領域科目)																	
	先端領域科目1	1・2・3・4前		2													兼2	仏・バ・ス
	先端領域科目2	1・2・3・4後		2													兼3	仏・バ・ス
	複合領域科目1	1・2・3・4前		2													兼2	仏・バ・ス
	複合領域科目2	2・3・4後		2													兼7	仏・バ・ス
	(プロジェクト科目)																	
	プロジェクト科目1	2・3・4前		2													兼2	
	プロジェクト科目2	2・3・4後		2													兼2	
	(保健体育科目)																	
	健康の科学	1・2・3・4後		2													兼1	
	スポーツの科学	1・2・3・4前		2													兼1	
	スポーツと健康	1・2・3・4前		2													兼1	
	トレーニングの科学	1・2・3・4前		2													兼1	
	スポーツの文化	1・2・3・4後		2													兼1	
	スポーツのマネジメント	2・3・4後		2													兼1	
	スポーツの心理	2・3・4後		2													兼1	
スポーツ・パフォーマンス1	1・2・3・4前		1													兼2		
小計(111科目)	-	-	0	229	0	-	-	-	3	2	0	2	0	兼90				
自由科目	情報機器の操作	1・2・3・4後			2				1									
	教育実習の研究	4通			1					1							集中	
	教育実習A	3・4通			2					1							集中	
	教育実習B	4通			2					1							集中	
	教育実習C	4通			4					1							集中	
	教職実践演習(中・高)	4後			2					1								
小計(6科目)	-	-	0	0	13	-	-	1	1	0	0	0	0					
日本語・日本文化教育科目	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1		
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1		
日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1			
日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1												兼1			

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
日本語・ 日本文化教育科目	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1											兼1	
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1												兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1												兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1												兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1												兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1												兼1
	日本の文学A	1・2・3・4前		2												兼1
	日本の思想・宗教1	1・2・3・4前		2												兼1
	日本の思想・宗教2	1・2・3・4後		2												兼1
日本の法と政治	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の歴史1	1・2・3・4前		2												兼1	
日本の歴史2	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の社会1	1・2・3・4前		2												兼1	
日本の社会2	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の文化1	1・2・3・4前		2												兼2 仏教	
日本の文化2	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の教育	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の伝統と人間形成	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の伝統と美	1・2・3・4前		2												兼1	
日本の伝統と文化	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の伝統と芸能	1・2・3・4前		2												兼1	
日本の伝統と能楽	1・2・3・4後		2												兼1	
日本の伝統と芸術	1・2・3・4前		2												兼1	
日本の芸術1	1・2・3・4前		2												兼2 仏教	
日本の芸術2	1・2・3・4後		2												兼2 仏教	
異文化間コミュニケーションA	1・2・3・4前		2												兼1	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	異文化間コミュニケーションB	1・2・3・4後		2											兼1
	人から人間への道	1・2・3・4前		2											兼2 仏コバス
	アイデンティティの社会格差	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	世界の歴史1	1・2・3・4前		2											兼2 仏コバス
	世界の歴史2	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	歴史の歴史	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	小計(82科目)	-	0	108	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	兼44
合計(544科目)		-	28	982	13	-	-	-	20	15	0	17	0	0	兼217
学位又は称号		学士(グローバル地域文化学)		学位又は学科の分野				文学関係、社会学・社会福祉学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<p>【全コース共通】 必修科目28単位、選択必修科目のうちA群から6単位以上、B群1単位、C群から24単位以上、選択科目のうちA群20単位以上、C群から16単位以上を含め、合計124単位以上を履修すること。日本語・日本文化教育科目の履修は外国人留学生に限る。日本語1(読解A)～日本語2(文法)の単位は選択必修科目C群、その他の科目の単位は選択科目C群の単位に算入することができる。</p> <p>【履修科目登録の上限】 各学期22単位を上限とする。</p>							1学年の学期区分		2学期						
							1学期の授業期間		15週						
							1時限の授業時間		90分						

教育課程等の概要															
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
必修科目	グローバル地域文化論	1前	2						2						私バス 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1
	グローバル・スタディーズ論	1後	2												
	グローバル地域文化入門	2前	2						1	2					
	グローバル地域文化の基礎	2後	2							3					
	グローバル地域文化導入セミナー	1前	2						4	3			2		
	グローバル地域文化入門セミナー	2後	2						2	1			3		
	グローバル地域文化発展セミナー	3前	2						8	5			4		
	グローバル地域文化発展セミナー	3後	2						8	5			4		
	グローバル地域文化専門セミナー	4前	2						8	5			4		
	グローバル地域文化専門セミナー	4後	2						8	5			4		
	卒業論文	4通	8						8	5			4		
小計(11科目)	-	-	28	0	0				14	10	0	6	0	兼1	
(グローバル・イシュー科目群)	グローバル・イシュー(グローバル化の世界史)	2・3・4前	2							1					兼1 兼1 兼1 兼1
	グローバル・イシュー(ジェンダーと地域文化)	2・3・4後	2												
	グローバル・イシュー(社会開発論)	2・3・4前	2										1		
	グローバル・イシュー(異文化理解と紛争の抑止)	2・3・4後	2												
	グローバル・イシュー(越境する地域文化)	2・3・4前	2												
	グローバル・イシュー(人間の安全保障論)	2・3・4後	2												
	グローバル・イシュー(シチズンシップ論)	2・3・4前	2							1					
	グローバル・イシュー(地球規模課題とアフリカ)	2・3・4後	2												
	小計(8科目)	-	-	0	16	0				2	1	0	1	0	
選択必修科目B群(スタディ・アブロード科目群)	サマープログラム・英語A	1・2・3・4後		4											隔年 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1
	サマープログラム・英語B	1・2・3・4後		3						2					
	サマープログラム・英語C	1・2・3・4後		2											
	サマープログラム・ドイツ語A	2・3・4前		4						1					
	サマープログラム・ドイツ語B	2・3・4前		3											
	サマープログラム・フランス語	2・3・4前		4									1		
	サマープログラム・中国語	2・3・4前		4							1				
	サマープログラム・スペイン語	2・3・4前		4							1				
	サマープログラム・ロシア語	2・3・4前		4						1					
	サマープログラム・コリア語	2・3・4前		3						1					
	スプリングプログラム・英語A	2・3・4前		4						1					
	スプリングプログラム・英語C	2・3・4前		2									1		
	スプリングプログラム・英語D	2・3・4前		1						1					
	スプリングプログラム・ドイツ語	3・4前		3						1					
	スプリングプログラム・フランス語	2・3・4前		3									1		
	スプリングプログラム・中国語	2・3・4前		1						1					
	スプリングプログラム・スペイン語	2・3・4前		1						1					
セメスタープログラム・英語	2・3・4後		4							2					
セメスタープログラム・英語	2・3・4後		4							2					
スタディ・ツアー	3・4前		2						3						
海外インターンシップ	2・3・4後		2						1						
小計(21科目)	-	-	0	62	0				12	4	0	3	0	兼4	
選択必修科目C群(外国語関連科目群)	(英語)														兼1 兼1 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2 兼2
	コミュニケーション・イングリッシュ1	1前		1								1	4		
	コミュニケーション・イングリッシュ2	1後		1								1	4		
	アナリティカル・リーディング1	1前		1					1	1			1		
	アナリティカル・リーディング2	1後		1					1	1			1		
	イングリッシュ・セミナー1	2前		1					1	1					
	イングリッシュ・セミナー2	2後		1					1	1					
	イングリッシュ・セミナー3	2後		2					1						
	イングリッシュ・ワークショップ1	2前		1					1	1					
	イングリッシュ・ワークショップ2	2後		1					1	1					
	イングリッシュ・ワークショップ3	2前		2					1						
	アカデミック・イングリッシュA	2・3・4前		2									1		
	アカデミック・イングリッシュB	2・3・4後		2									1		
	プロフェッショナル・イングリッシュA	2・3・4前		2						1					
	プロフェッショナル・イングリッシュB	2・3・4後		2							1				
プレ・イングリッシュ・プラクティクム	1・2後		4							1					

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	イングリッシュ・プラクティクム1	1・2後		4						1							
	イングリッシュ・プラクティクム2	1・2前		4						1							
	言語文化研究1	3・4前		2						1							
	言語文化研究2	3・4後		2						1							
	現代地域事情・上級講読(英語圏)1	3・4前		2						1							
	現代地域事情・上級講読(英語圏)2 (ドイツ語)	3・4後		2						1							
	ドイツ語入門	1前		2									1			兼1	
	ドイツ語入門	1後		2									1			兼1	
	ドイツ語応用1	2前		1												兼1	
	ドイツ語応用2	2前		1												兼1	
	ドイツ語応用3	2後		1												兼1	
	ドイツ語応用4	2後		1												兼1	
	ドイツ語インテンシヴ	1・2・3・4前		3							1			1			
	ドイツ語インテンシヴ	1・2・3・4後		3							1			1			
	ドイツ語インテンシヴ	2・3・4前		3										1		兼1	
	ドイツ語インテンシヴ	2・3・4後		3										1		兼1	
	ドイツ語インテンシヴ	3・4前		2										1		兼1	
	ドイツ語インテンシヴ	3・4後		2										1		兼1	
	ドイツ語文化事情1	3・4前		2										1			
	ドイツ語文化事情2	3・4後		2										1			
	ドイツ語表現法1	3・4前		2										1			
	ドイツ語表現法2	3・4後		2										1			
	言語文化原典演習(ドイツ語)1	3・4前		2								1					
	言語文化原典演習(ドイツ語)2	3・4後		2								1					
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏)1	3・4前		2							1						
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏)2	3・4後		2							1						
	ドイツ語会話初級1	1・2・3・4前		1										1			
	ドイツ語会話初級2	1・2・3・4後		1										1			
	ドイツ語会話中級1	1・2・3・4前		1										1			
	ドイツ語会話中級2	1・2・3・4後		1										1			
	ドイツ語会話上級1	1・2・3・4前		1												兼1	
	ドイツ語会話上級2	1・2・3・4後		1												兼1	
	(フランス語)																
	フランス語入門	1前		2							1			1			
	フランス語入門	1後		2							1			1			
	フランス語応用1	2前		1										1			
	フランス語応用2	2前		1										1			
	フランス語応用3	2後		1										1			
	フランス語応用4	2後		1										1			
	フランス語インテンシヴ	1・2・3・4前		3							1			1		兼1	
	フランス語インテンシヴ	1・2・3・4後		3							1			1		兼1	
	フランス語インテンシヴ	2・3・4前		3										1		兼2	
	フランス語インテンシヴ	2・3・4後		3										1		兼2	
	フランス語インテンシヴ	3・4前		2							1						
	フランス語インテンシヴ	3・4後		2							1						
	フランス語インテンシヴ	4前		2										1			
	フランス語インテンシヴ	4後		2										1			
	フランス語文化事情1	3・4前		2												兼1	
	フランス語文化事情2	3・4後		2												兼1	
	フランス語表現法1	3・4前		2										1			
フランス語表現法2	3・4後		2										1				
言語文化原典演習(フランス語)1	3・4前		2							1							
言語文化原典演習(フランス語)2	3・4後		2							1							
現代地域事情・上級講読(フランス語圏)1	3・4前		2										1				
現代地域事情・上級講読(フランス語圏)2	3・4後		2										1				
フランス語会話初級1	1・2・3・4前		1												兼1		
フランス語会話初級2	1・2・3・4後		1												兼1		
フランス語会話中級1	1・2・3・4前		1												兼1		

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	フランス語会話中級2	1・2・3・4後		1											兼1	
	フランス語会話上級1	1・2・3・4前		1											兼1	
	フランス語会話上級2	1・2・3・4後		1											兼1	
	(中国語)															
	中国語入門	1前		2												兼2
	中国語入門	1後		2												兼2
	中国語応用1	2前		1												兼1
	中国語応用2	2前		1												兼1
	中国語応用3	2後		1												兼1
	中国語応用4	2後		1												兼1
	中国語インテンシヴ	1・2・3・4前		3						1						兼1
	中国語インテンシヴ	1・2・3・4後		3						1						兼1
	中国語インテンシヴ	2・3・4前		3							1					兼1
	中国語インテンシヴ	2・3・4後		3							1					兼1
	中国語インテンシヴ	3・4前		2									1			兼1
	中国語インテンシヴ	3・4後		2									1			兼1
	中国語インテンシヴ	4前		2						1	1					
	中国語インテンシヴ	4後		2						1	1					
	中国語文化事情1	3・4前		2							1					
	中国語文化事情2	3・4後		2							1					
	中国語表現法1	3・4前		2												兼1
	中国語表現法2	3・4後		2												兼1
	言語文化原典演習(中国語)1	3・4前		2												兼1
	言語文化原典演習(中国語)2	3・4後		2												兼1
	現代地域事情・上級講読(中国語圏)1	3・4前		2									1			
	現代地域事情・上級講読(中国語圏)2	3・4後		2									1			
	中国語会話初級1	2・3・4前		1												兼1
	中国語会話初級2	2・3・4後		1												兼1
	中国語会話中級1	2・3・4前		1												兼1
	中国語会話中級2	2・3・4後		1												兼1
	中国語会話上級1	2・3・4前		1							1					
	中国語会話上級2	2・3・4後		1							1					
	(スペイン語)															
	スペイン語入門	1前		2									1			兼1
	スペイン語入門	1後		2									1			兼1
	スペイン語応用1	2前		1												兼1
	スペイン語応用2	2前		1							1					
	スペイン語応用3	2後		1												兼1
	スペイン語応用4	2後		1							1					
	スペイン語インテンシヴ	1・2・3・4前		3							1		1			
	スペイン語インテンシヴ	1・2・3・4後		3							1		1			
	スペイン語インテンシヴ	2・3・4前		3						1			1			
スペイン語インテンシヴ	2・3・4後		3						1			1				
スペイン語インテンシヴ	3・4前		2												兼1	
スペイン語インテンシヴ	3・4後		2												兼1	
スペイン語文化事情1	3・4前		2												兼1	
スペイン語文化事情2	3・4後		2												兼1	
スペイン語表現法1	3・4前		2									1				
スペイン語表現法2	3・4後		2									1				
言語文化原典演習(スペイン語)1	3・4前		2									1				
言語文化原典演習(スペイン語)2	3・4後		2									1				
現代地域事情・上級講読(スペイン語圏)1	3・4前		2									1				
現代地域事情・上級講読(スペイン語圏)2	3・4後		2									1				
スペイン語会話初級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話初級2	1・2・3・4後		1												兼1	
スペイン語会話中級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話中級2	1・2・3・4後		1												兼1	
スペイン語会話上級1	1・2・3・4前		1												兼1	
スペイン語会話上級2	1・2・3・4後		1												兼1	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	(ロシア語)															
	ロシア語入門	1前		2					1			1				
	ロシア語入門	1後		2					1			1				
	ロシア語応用1	2前		1								1			兼1	
	ロシア語応用2	2前		1								1				
	ロシア語応用3	2後		1								1				
	ロシア語応用4	2後		1											兼1	
	ロシア語インテンシヴ	1・2・3・4前		3					2							
	ロシア語インテンシヴ	1・2・3・4後		3					2							
	ロシア語インテンシヴ	2・3・4前		3					1			1				
	ロシア語インテンシヴ	2・3・4後		3					1			1				
	ロシア語文化事情1	3・4前		2					1							
	ロシア語文化事情2	3・4後		2					1							
	ロシア語表現法1	3・4前		2					1							
	ロシア語表現法2	3・4後		2					1							
	言語文化原典演習(ロシア語)1	3・4前		2									1			
	言語文化原典演習(ロシア語)2	3・4後		2									1			
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏)1	3・4前		2					1							
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏)2	3・4後		2					1							
	ロシア語会話初級1	1・2・3・4前		1					1							
	ロシア語会話初級2	1・2・3・4後		1					1							
	ロシア語会話中級1	1・2・3・4前		1											兼1	
	ロシア語会話中級2	1・2・3・4後		1											兼1	
	ロシア語会話上級1	1・2・3・4前		1					1							
	ロシア語会話上級2	1・2・3・4後		1					1							
	(コリア語)															
	コリア語入門	1前			2											兼2
	コリア語入門	1後			2											兼2
	コリア語応用1	2前			1											兼1
	コリア語応用2	2前			1											兼1
	コリア語応用3	2後			1											兼1
	コリア語応用4	2後			1											兼1
	コリア語インテンシヴ	1・2・3・4前		3					1			1				兼1
	コリア語インテンシヴ	1・2・3・4後		3					1			1				兼1
	コリア語インテンシヴ	2・3・4前		3								2				兼1
	コリア語インテンシヴ	2・3・4後		3								2				兼1
	コリア語インテンシヴ	3・4前		2					1							兼1
	コリア語インテンシヴ	3・4後		2					1							兼1
	コリア語文化事情1	3・4前		2												兼1
	コリア語文化事情2	3・4後		2												兼1
	コリア語表現法1	3・4前		2					1							
	コリア語表現法2	3・4後		2					1							
言語文化原典演習(コリア語)1	3・4前		2							1						
言語文化原典演習(コリア語)2	3・4後		2							1						
現代地域事情・上級講読(コリア語圏)1	3・4前		2												兼1	
現代地域事情・上級講読(コリア語圏)2	3・4後		2												兼1	
コリア語会話初級1	1・2・3・4前		1												兼1	
コリア語会話初級2	1・2・3・4後		1												兼1	
コリア語会話中級1	1・2・3・4前		1												兼1	
コリア語会話中級2	1・2・3・4後		1												兼1	
コリア語会話上級1	1・2・3・4前		1												兼1	
コリア語会話上級2	1・2・3・4後		1												兼1	
(インドネシア語)																
地域文化理解のためのインドネシア語1(文法)	1・2・3・4前		2												兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語2(文法)	1・2・3・4後		2												兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2												兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語4(講読)	2・3・4後		2												兼1	
地域文化理解のためのインドネシア語5(講読)	3・4前		2												兼1	
(トルコ語)																

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	地域文化理解のためのトルコ語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのトルコ語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのトルコ語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2								1			
	地域文化理解のためのトルコ語4(講読)	2・3・4後		2								1			
	地域文化理解のためのトルコ語5(講読) (ポルトガル語)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語4(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのポルトガル語5(講読) (アラビア語)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語1(文法)	1・2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語2(文法)	1・2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語3(コミュニケーション)	2・3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語4(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのアラビア語5(講読) (イタリア語)	3・4前		2											兼1
	イタリア語初級	1・2・3・4前		1											兼1
	イタリア語初級	1・2・3・4後		1											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語1(コミュニケーション)	1・2・3・4後		2											兼1
	イタリア語中級	2・3・4前		1											兼1
	イタリア語中級	2・3・4後		1											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語2(講読)	2・3・4後		2											兼1
	地域文化理解のためのイタリア語3(講読) (フランス語・カナダ)	3・4前		2											兼1
	地域文化理解のためのフランス語(カナダ)1(講読)	2・3・4前		2											兼1
地域文化理解のためのフランス語(カナダ)2(コミュニケーション)	2・3・4後		2											兼1	
小計(208科目)		-	0	374	0					19	13	0	17	0	兼56
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	(地域文化の形成)														
	ヨーロッパ地域文化の形成1	1・2・3・4前		2							1				
	ヨーロッパ地域文化の形成2	1・2・3・4後		2							1				
	ヨーロッパ地域文化形成論1	2・3・4前		2								1			
	ヨーロッパ地域文化形成論2	2・3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論1	3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論2	3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化形成特論3	3・4前		2						1					
	(地域文化の多様性)														
	ヨーロッパ地域文化の多様性1	1・2・3・4前		2									1		
	ヨーロッパ地域文化の多様性2	1・2・3・4後		2									1		
	ヨーロッパ地域文化論1	2・3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化論2	2・3・4後		2						1					
	ヨーロッパ言語・文化論1	2・3・4前		2							1				
	ヨーロッパ言語・文化論2	2・3・4後		2								1			
	ヨーロッパ地域文化特論1	3・4前		2						1					
	ヨーロッパ地域文化特論2	3・4後		2						1					
	ヨーロッパ地域文化特論3	3・4前		2											兼1
	ヨーロッパ地域文化特論4	3・4後		2									1		
	ヨーロッパ地域文化特論5	3・4前		2									1		
ヨーロッパ地域文化特論6	2・3・4後		2											兼1	
(地域と地球規模の課題)															
ヨーロッパの課題1	2・3・4前		2							2					
ヨーロッパの課題2	2・3・4後		2									1			
ヨーロッパの課題3	2・3・4前		2						1						
ヨーロッパの課題4	2・3・4後		2							1					
ヨーロッパの課題5	3・4後		2											兼1	
ヨーロッパの課題6	3・4前		2											兼1	
ヨーロッパの課題7	3・4後		2						1						

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
選択科目 A 群 (地域文化研究科目群)	(地域文化の形成)																	
	アジア・太平洋地域文化の形成1	1・2・3・4前		2						1								
	アジア・太平洋地域文化の形成2	1・2・3・4後		2						1								
	アジア・太平洋地域文化形成論1	2・3・4前		2									1					
	アジア・太平洋地域文化形成論2	2・3・4後		2									1					
	アジア・太平洋地域文化形成特論1	3・4前		2													兼1	
	アジア・太平洋地域文化形成特論2	3・4前		2													兼1	
	(地域文化の多様性)																	
	アジア・太平洋地域文化の多様性1	1・2・3・4前		2														兼1
	アジア・太平洋地域文化の多様性2	1・2・3・4後		2							1							
	アジア・太平洋地域文化論1	2・3・4後		2						1								
	アジア・太平洋地域文化論2	2・3・4前		2						1								
	アジア・太平洋言語・文化論1	2・3・4前		2							1							
	アジア・太平洋言語・文化論2	2・3・4後		2						1								
	アジア・太平洋地域文化特論1	3・4前		2														兼1
	アジア・太平洋地域文化特論2	3・4後		2														兼1
	アジア・太平洋地域文化特論3	3・4前		2														兼1
	アジア・太平洋地域文化特論4	3・4後		2														兼1
	アジア・太平洋地域文化特論5	2・3・4前		2														兼1
	(地域と地球規模の課題)																	
	アジア・太平洋の課題1	2・3・4前		2							1							
	アジア・太平洋の課題2	2・3・4後		2										1				
	アジア・太平洋の課題3	2・3・4前		2														兼1
	アジア・太平洋の課題4	2・3・4後		2														兼1
	アジア・太平洋の課題5	3・4後		2														兼1
	アジア・太平洋の課題6	3・4後		2										1				
	アジア・太平洋の課題7	3・4前		2										1				
	アメリカ	(地域文化の形成)																
南北アメリカ地域文化の形成1		1・2・3・4前		2						1								
南北アメリカ地域文化の形成2		1・2・3・4後		2						1								
南北アメリカ地域文化形成論1		2・3・4後		2						1								兼1
南北アメリカ地域文化形成論2		2・3・4前		2														兼1
南北アメリカ地域文化形成特論1		3・4前		2							1							
南北アメリカ地域文化形成特論2		3・4後		2														兼1
(地域文化の多様性)																		
南北アメリカ地域文化の多様性1		1・2・3・4後		2						1								
南北アメリカ地域文化の多様性2		1・2・3・4前		2							1							
南北アメリカ地域文化論1		2・3・4後		2														兼1
南北アメリカ地域文化論2		2・3・4前		2														兼1
南北アメリカ言語・文化論1		2・3・4後		2														兼1
南北アメリカ地域文化特論1		3・4前		2						1								
南北アメリカ地域文化特論2		3・4前		2						1								
南北アメリカ地域文化特論3		3・4後		2							1							
南北アメリカ地域文化特論4		2・3・4後		2														兼1
南北アメリカ地域文化特論5		2・3・4前		2														
(地域と地球規模の課題)																		
南北アメリカの課題1		2・3・4前		2						1								
南北アメリカの課題2	2・3・4後		2						1									
南北アメリカの課題3	2・3・4後		2						1									
南北アメリカの課題4	2・3・4前		2										1					
南北アメリカの課題5	3・4後		2														兼1	
南北アメリカの課題6	3・4前		2							1								
(専任教員等) 選択科目	フィールドワーク	3・4前		2										1				
	発信スキル実践	2・3・4前		1						1								
小計(74科目)		-	0	147	0					18	11	0	10	0			兼21	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
選択科目B群 (地域文化研究隣接科目群)	ヨーロッパ	ヨーロッパの思想史	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパ社会史1	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパ社会史2	2・3・4後	2												兼1	
		ヨーロッパの政治史	3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパの経済	2・3・4前	2												兼1	
		ヨーロッパの経済史	2・3・4前	2												兼1	
		ロシア・東ヨーロッパの政治	3・4後	2												兼1	
		EUの政治	2・3・4後	2												兼1	
	アジア・太平洋	アジアの教育と社会1	2・3・4前	2												兼1	
		アジアの教育と社会2	2・3・4後	2												兼1	
		中国の政治	3・4前	2												兼1	
		南アジアの政治と社会	3・4後	2												兼1	
		東アジアの国際関係	2・3・4後	2												兼1	
		アジアの経済	3・4後	2												兼1	
		中国の経済	3・4前	2												兼1	
		アセアンの経済	3・4前	2												兼1	
	韓国の経済	3・4後	2												兼1		
	アメリカ	アメリカ文化の歴史1	2・3・4前	2												兼1	
		アメリカ文化の歴史2	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの経済	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの経済史	2・3・4後	2												兼1	
		アメリカの政治と外交	2・3・4後	2												兼1	
		ラテンアメリカの政治と社会	3・4前	2									1			兼1	
小計(23科目)		-	0	46	0	-			0	0	0	1	0	兼16			
選択科目C群	免許・資格関連科目	日本文化史概説	2・3・4通	4												兼1	
		東洋文化史概説(1)	2・3・4前	2												兼1	
		東洋文化史概説(2)	2・3・4後	2												兼1	
		西洋文化史概説(1)	2・3・4前	2												兼1	
		西洋文化史概説(2)	2・3・4後	2												兼1	
		地理学1	2・3・4前	2									1			兼1	
		地理学2	2・3・4後	2												兼1	
		地誌学	2・3・4前	2												兼1	
		社会学概論	1・2・3・4後	4												兼1	
		経済原論	3・4前	4												兼2	
		哲学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		哲学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		倫理学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		倫理学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		宗教学概論(1)	3・4前	2												兼1	
		宗教学概論(2)	3・4後	2												兼1	
		全学共通教育科目	(同志社科目)														
	建学の精神とキリスト教		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教と人間1		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教と人間2		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教とは何か1		1・2・3・4前	2												兼1	
	キリスト教とは何か2		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教会と現代文化		1・2・3・4前	2												兼1	
	人物から学ぶキリスト教の歴史		1・2・3・4後	2												兼1	
	キリスト教の歴史と同志社		1・2・3・4前	2												兼1	
	(キャリア形成支援科目)																
	キャリア開発と学生生活	1・2・3・4前	2												兼3	仏パス	
キャリア開発の課題と方法	1・2・3・4後	2												兼2			
インターンシップ入門	1・2後	2												兼3	仏パス・集中		
働くということ	2・3・4前	2												兼4	仏パス		
キャリア形成とインターンシップ	3前	2												兼3	仏パス・集中		

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考						
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手							
全学 共通 教養 教育 科目 選 択 科目 C 群	(国際教養科目)																			
	国際教養基礎論1	1・2・3・4前		2						1										
	国際教養基礎論2	1・2・3・4後		2						1										
	ジョイント・セミナー比較文化論	3・4後		4							1								兼1	
	多文化コミュニケーション学の基礎	1・2・3・4前		2															兼2	
	多文化コミュニケーション学の応用	1・2・3・4後		2															兼2	
	異文化間コミュニケーションA	1・2・3・4前		2															兼1	
	異文化間コミュニケーションB	1・2・3・4後		2															兼1	
	人から人間への道	1・2・3・4前		2															兼2	
	アイデンティティの社会格差	1・2・3・4後		2															兼2	
	日本の伝統と美	1・2・3・4前		2															兼1	
	日本の伝統と文化	1・2・3・4後		2															兼1	
	日本の伝統と芸能	1・2・3・4前		2															兼1	
	日本の伝統と能楽	1・2・3・4後		2															兼1	
	日本の伝統と芸術	1・2・3・4前		2															兼1	
	スタンフォード大学科目	2・3・4前		2															兼1	
	A K P 科目	1・2・3・4後		2															兼1	
	K C J S 科目	1・2・3・4後		2															兼1	
	(人文科学系科目)																			
	宗教学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	宗教学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	哲学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	哲学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	倫理学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	倫理学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	論理学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	論理学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	芸術学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	芸術学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	日本史(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	日本史(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	東洋史(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	東洋史(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	西洋史(1)	1・2・3・4後		2															兼1	
	西洋史(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	考古学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	考古学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	日本語(1)	2・3・4前		2															兼1	
	日本語(2)	2・3・4後		2															兼1	
	日本文学(1)	1・2・3・4前		2															兼1	
	日本文学(2)	1・2・3・4後		2															兼1	
	中国文学	1・2・3・4前		2							1								兼1	
	スペイン文学	1・2・3・4後		2							1									
	ラテンアメリカ文学	1・2・3・4前		2								1								
	ロシア文学	1・2・3・4後		2							1									
	(社会科学系科目)																			
	法学1	1・2・3・4前		2															兼1	
法学2	1・2・3・4後		2															兼1		
政治学1	1・2・3・4前		2															兼1		
政治学2	1・2・3・4後		2															兼1		
経済学1	1・2・3・4前		2															兼1		
経済学2	1・2・3・4後		2															兼1		
商学	1・2・3・4前		2															兼5		

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
選択科目C群	(自然・人間科学系科目)																
	数学1	1・2・3・4前		2												兼1	
	数学2	1・2・3・4後		2												兼1	
	データサイエンス1	1・2・3・4前		2												兼1	
	データサイエンス2	1・2・3・4後		2												兼1	
	物質の科学1	1・2・3・4前		2												兼1	
	物質の科学2	1・2・3・4後		2												兼1	
	地球と宇宙の科学1	1・2・3・4前		2												兼1	
	地球と宇宙の科学2	1・2・3・4後		2												兼1	
	生命の科学1	1・2・3・4前		2												兼1	
	生命の科学2	1・2・3・4後		2												兼1	
	科学史・科学論1	1・2・3・4前		2												兼1	
	科学史・科学論2	1・2・3・4後		2												兼1	
	環境の科学	1・2・3・4前		2												兼1	
	心理学1	1・2・3・4前		2												兼1	
	心理学2	1・2・3・4後		2												兼1	
	(先端・複合領域科目)																
	先端領域科目1	1・2・3・4前		2												兼2	払バス
	先端領域科目2	1・2・3・4後		2												兼3	払バス
	複合領域科目1	1・2・3・4前		2												兼2	払バス
	複合領域科目2	2・3・4後		2												兼7	払バス
	(プロジェクト科目)																
	プロジェクト科目1	2・3・4前		2												兼2	
	プロジェクト科目2	2・3・4後		2												兼2	
	(保健体育科目)																
	健康の科学	1・2・3・4後		2												兼1	
スポーツの科学	1・2・3・4前		2												兼1		
スポーツのマネジメント	2・3・4後		2												兼1		
スポーツの心理	2・3・4後		2												兼1		
小計(104科目)	-		0	216	0			-		3	2	0	1	0	兼85		
自由科目	情報機器の操作	1・2・3・4後			2					1							
	教育実習の研究	4通			1						1						
	教育実習A	3・4通			2						1						
	教育実習B	4通			2						1						
	教育実習C	4通			4						1						
	教職実践演習(中・高)	4後			2						1						
小計(6科目)	-		0	0	13			-		1	1	0	0	0	0		
日本語・日本文化教育科目	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解A)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(読解B)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(語彙)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(文章表現)	1・2・3・4前		1												兼1	
	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1												兼1	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現A)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(口頭表現B)	1・2・3・4前		1										兼1	
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1											兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1											兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1											兼1
	日本語1(文法)	1・2・3・4前		1											兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(読解B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(語彙)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文章表現)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現A)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(口頭表現B)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本語2(文法)	1・2・3・4後		1											兼1
	日本の文学A	1・2・3・4前		2											兼1
	日本の思想・宗教1	1・2・3・4前		2											兼1
	日本の思想・宗教2	1・2・3・4後		2											兼1
日本の法と政治	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の歴史1	1・2・3・4前		2											兼1	
日本の歴史2	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の社会1	1・2・3・4前		2											兼1	
日本の社会2	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の文化1	1・2・3・4前		2											兼2 仏教	
日本の文化2	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の教育	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の伝統と人間形成	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の伝統と美	1・2・3・4前		2											兼1	
日本の伝統と文化	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の伝統と芸能	1・2・3・4前		2											兼1	
日本の伝統と能楽	1・2・3・4後		2											兼1	
日本の伝統と芸術	1・2・3・4前		2											兼1	
日本の芸術1	1・2・3・4前		2											兼2 仏教	
日本の芸術2	1・2・3・4後		2											兼2 仏教	
異文化間コミュニケーションA	1・2・3・4前		2											兼1	

教 育 課 程 等 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
日本 語・日 本文化 教育科 目	異文化間コミュニケーションB	1・2・3・4後		2											兼1
	人から人間への道	1・2・3・4前		2											兼2 仏コバス
	アイデンティティの社会格差	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	世界の歴史1	1・2・3・4前		2											兼2 仏コバス
	世界の歴史2	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	歴史の歴史	1・2・3・4後		2											兼2 仏コバス
	小計(82科目)	-	0	108	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	兼44
合計(537科目)		-	28	969	13	-	-	-	20	15	0	17	0	0	兼213
学位又は称号		学士(グローバル地域文化学)		学位又は学科の分野			文学関係、社会学・社会福祉学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<p>【全コース共通】 必修科目28単位、選択必修科目のうちA群から6単位以上、B群1単位、C群から24単位以上、選択科目のうちA群20単位以上、C群から16単位以上を含め、合計124単位以上を履修すること。日本語・日本文化教育科目の履修は外国人留学生に限る。日本語1(読解A)～日本語2(文法)の単位は選択必修科目C群、その他の科目の単位は選択科目C群の単位に算入することができる。</p> <p>【履修科目登録の上限】 各学期22単位を上限とする。</p>							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

教 育 課 程 等 の 概 要														
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)														
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
選 択 科 目 C 群 全学共通 教養教育 科目	スポーツ・パフォーマンス1	1・2・3・4前		1										兼1
	小計(1科目)	-	0	1	0	-	-	-	0	0	0	0	0	兼1
合計(1科目)		-	0	1	0	-	-	-	0	0	0	0	0	兼1
学位又は称号		学士(グローバル地域文化学)		学位又は学科の分野			文学関係、社会学・社会福祉学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
【全コース共通】 必修科目28単位、選択必修科目のうちA群から6単位以上、B群1単位、C群から24単位以上、選択科目のうちA群20単位以上、C群から16単位以上を含め、合計124単位以上を履修すること。日本語・日本文化教育科目の履修は外国人留学生に限る。日本語1(読解A)～日本語2(文法)の単位は選択必修科目C群、その他の科目の単位は選択科目C群の単位に算入することができる。 【履修科目登録の上限】 各学期22単位を上限とする。							1学年の学期区分			2学期				
							1学期の授業期間			15週				
							1時限の授業時間			90分				

教 育 課 程 等 の 概 要															
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)															
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
選択科目C群 <small>全学共通教養教育科目</small>	ドイツ文学	1・2・3・4前		2											兼1
	フランス文学	1・2・3・4後		2								1			兼1
	情報と社会	1・2・3・4後		2											兼1
	スポーツと健康	1・2・3・4前		2											兼1
	トレーニングの科学	1・2・3・4前		2											兼1
	スポーツの文化	1・2・3・4後		2											兼1
	スポーツ・パフォーマンス1	1・2・3・4前		1											兼1
	小計(7科目)		-	0	13	0	-	-	-	0	0	0	1	0	兼6
合計(7科目)			-	0	13	0	-	-	0	0	0	1	0	兼6	
学位又は称号		学士(グローバル地域文化学)			学位又は学科の分野			文学関係、社会学・社会福祉学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
【全コース共通】 必修科目28単位、選択必修科目のうちA群から6単位以上、B群1単位、C群から24単位以上、選択科目のうちA群20単位以上、C群から16単位以上を含め、合計124単位以上を履修すること。日本語・日本文化教育科目の履修は外国人留学生に限る。日本語1(読解A)～日本語2(文法)の単位は選択必修科目C群、その他の科目の単位は選択科目C群の単位に算入することができる。 【履修科目登録の上限】 各学期22単位を上限とする。							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要			
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	グローバル地域文化論	<p>(概要)</p> <p>現代を語るキーワード、「グローバリゼーション」とは、どのような現象なのか? 「グローブ(全地球)」と「地域」という、相反する概念を結合させた「グローバル地域文化学」とは、いかなる学問なのか? 「グローバル地域文化論」は、その導入として3名の講師が共同担当する科目であり、「人の流れ」、「モノの流れ」、「言葉・音」、「衣・食・住」、「信仰・思想」という5つのトピックについて、具体例に基づきながら、ヨーロッパ、アジア・太平洋、アメリカの各地域における「グローバリゼーション」と地域文化の関わりを概括的に学ぶ。</p> <p>(オムニバス形式/全15回)</p> <p>(52 伊藤 玄吾/5回)</p> <p>狭い領域内に実に多様な言語や地域文化を抱えるヨーロッパが、グローバリゼーションと向き合いつつ新たな方向性を模索していく様子について、5つのトピックを通して考察する。</p> <p>(20 副島 一郎/5回)</p> <p>中国の文化も独自の面をもつと同時に、他地域との交流を通して変容を遂げてきた面を併せ持つ。歴史的経緯を踏まえて、中国におけるグローバリゼーションを5つのトピックを通して考える。</p> <p>(18 源馬 英人/5回)</p> <p>19世紀後半以降のアメリカ合衆国における政治・経済のおよび文化的ダイナミクスを背景としたグローバリゼーションについて、上記5項目のトピックに基づいて考察する。</p>	オムニバス形式
	グローバル・スタディーズ論	<p>前期の「グローバル地域文化論」が、地域を軸にグローバル化に関する具体例を扱うのに対し、本講義ではグローバル化にまつわる概念と理論を学んだ上で、経済や環境、移民等、イシューを軸にグローバル化の表れ方やそれに対する解釈を扱う。グローバル化を念頭に置いて、各学生が専攻する地域の中に問題点を見出せるようになること、そして、その問題に対して説得力ある意見を持てるよう考え方を養うことが、この講義の目的である。</p>	
	グローバル地域文化入門	<p>(概要)</p> <p>本講義は、ヨーロッパ、アジア・太平洋、アメリカの3つのコースごとに置かれ、学生がそれぞれの地域文化の諸相について具体的に学びながら、自分が専門的に学んでいこうとしている地域の特色、その特色の歴史的背景について総合的な知識を持つことができるようになることを目的としている。いわゆる「地理・歴史」の反復や発展を内容とするのではなく、グローバリゼーションのただ中にある諸地域の現代事情を理解する上で欠くことのできないエポックにさかのぼることによって、それぞれの地域文化への理解を深められるという点に本講義の特色がある。</p> <p>(30 尹 慧瑛担当)</p> <p>主として啓蒙主義以降のヨーロッパについて、地誌、歴史、モダニズム、階級、民族、政治等、様々な角度から考察を行う。また21世紀現在の状況を視野に入れ、いくつかのトピックに焦点をあてながらさらに認識を深める。</p> <p>(26 阿部 範之担当)</p> <p>アジア・太平洋地域について様々な角度から考察を行う。授業では初めに当該地域の地理、歴史等について説明を加えた上で、東アジア、東南アジア、西アジア他、各エリアの文化について検討を行う。また今日の状況を視野に入れ、いくつかのトピックに焦点をあてながらさらに認識を深める。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当)</p> <p>本講義は、北アメリカの地域研究に焦点をあて、いくつかの主要な論点をとり上げながら有効な研究アプローチを学ぶ。具体的には、アトランテック世界の拡大と新大陸、北アメリカの奴隷制度の特質、「フロンティア理論」の有効性、移民と都市文化、宗教とアメリカ社会等について考察し、グローバルな視点から地域研究を行うことの意味を探る。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	グローバル地域文化の基礎	<p>(概要)</p> <p>本講義は、「グローバル地域文化入門」でそれぞれの地域文化の特色について理解を深めた学生が、グローバリゼーションの進む現代において各地域が直面している諸問題について知識を持ち、理解を深めることを目的としている。ヨーロッパ、アジア・太平洋、アジアの3コースごとに講義が置かれ、学生は、それぞれの地域やその地域の特徴的な文化が、グローバリゼーションという地域や国境を超えた巨大な動きの中でどのように変容していくのかを知り、自分が専門的に学んでいこうとする地域に対する、グローバルな視点からの問題意識を持つことができる。</p> <p>(32 小野 文生担当)</p> <p>本講義は、ヨーロッパの地域文化に焦点をあて、いくつかの主要な論点を取り上げながら有効な研究アプローチを学ぶ。具体的には、啓蒙主義とロマン主義、帝国と国民国家の形成、ナショナリズム、植民地主義、ユダヤ人の「同化と解放」とシオニズム等について考察する。これらの諸論点に対し、さらに、19世紀末から20世紀における青年運動、教育改革、神話学やフォークロア研究、科学や宗教、哲学や建築、文芸や身体文化の領域で広く展開したモデルネの運動を丁寧に跡づけることで、ヨーロッパ地域で展開した近代の多様さと複雑さを理解するとともに、あらためてグローバルな視点から地域文化研究を行うことの意味を探る。</p> <p>(29 洪 宗郁担当)</p> <p>本講義では、グローバリゼーションの渦中にある東アジアの現状を、経済成長の光と陰という観点から検討する。まず、東アジアの急速な経済成長をどう見るべきかをめぐって、アジア的特殊性と世界史的普遍性との拮抗関係に注目した諸理論を検討する。そのうえで、NIEsの台頭、中国の改革開放等が当該社会にもたらした変化を、明暗の両面のバランスに留意しつつ分析したい。</p> <p>(37 立林 良一担当)</p> <p>本講義は、ラテンアメリカの地域研究に焦点をあて、いくつかの主要な論点を取り上げながら有効な研究アプローチを学ぶ。具体的には、ヨーロッパのラテンアメリカにおける植民地主義、19世紀初頭の自由主義とラテンアメリカ諸国の独立、ナショナリズムの形成、近代化と低開発等について考察する。また、欧米の帝国主義とラテンアメリカへの干渉に注目することにより、グローバルな視点から地域研究を行うことの意味を探る。</p>	
	グローバル地域文化導入セミナー	1クラス20人程度のクラス編成で、大学での学習を始めるにあたって学習方法の基礎を習得するセミナーである。まず本学部のカリキュラム体系、自学自習支援の様々な学内システム、図書館利用法や情報リテラシーを含む自らの学習環境について理解し、必要な知識を自分で学べるようになる。その上で、自主的に考え責任をもって行動する心構えを学び、グローバル社会における日本のあり方を考えながら、本学の教育理念のひとつである国際主義を理解する。	複数教員が同内容の授業を行う。
	グローバル地域文化入門セミナー	1クラス30人程度のクラス編成の本セミナーでは、これまでに学習した地域文化研究を基礎に、卒業論文を書くために必要な図書・情報の調査収集方法、情報機器の利用方法、フィールド調査等について実践的に訓練する。併わせて、グローバル化が進展する地域文化や現代地域社会における諸問題について、担当教員が紹介・解説し、それを受けて個人またはグループワークで文献調査や討論を行うことで、それぞれの地域文化への知識と関心を深めることを目標にする。	複数教員が同内容の授業を行う。
	グローバル地域文化発展セミナー	<p>(概要)</p> <p>1クラス10人程度のクラス編成とする。本セミナーでは、各種の講義科目、演習の履修、留学経験を通じて理解を深めてきた地域文化の諸問題について、自らの研究テーマを決める。関連文献、資料を収集し、セミナーでの発表と討論を通じて各自の研究テーマを練り、グローバル地域文化専門セミナーにおける卒業論文の輪郭を形づくる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	グローバル地域文化 発展セミナー (つづき)	<p>(4 清水 穰担当) ドイツ、スイス、オーストリア及び歴史的にドイツ語と関わりの深い隣接地域(中欧～東欧)の、近現代の表象文化(アート、写真、映像、音楽、パフォーマンス)に関するテーマを扱う。新聞記事や参考図書を読み、作品鑑賞、研究発表、討論を重ねる中で、現在のドイツ語圏を取り巻くヨーロッパの表象文化が、どのような社会的・制度的背景において、何をいかに表現しているのかを認識し、多角的な視野を形成することを目指す。</p> <p>(3 Anne GONON担当) フランスの現代社会に関するテーマを扱う。経済的・政治的な変動に伴い、人々の日常的な価値観も早いリズムで変わっている。本セミナーでは家族観や労働観をはじめとする日常的な価値観や、集団的な活動を可能にする制度等を分析できるようになることを目指す。主に人々がその価値をどのように表現するか、その形態を取り上げたい。そのため、文献レビューを重点的に行い、また同時に研究方法の指導も行う。</p> <p>(8 松本 賢一担当) ロシア・東欧をはじめとする「スラヴ圏」の社会・文化・歴史・民族問題・日ロ関係史等に関するテーマを扱う。冷戦の終了と社会主義陣営の退潮により、ロシア・東欧地域に生じた変化や周縁地域で生じた変化が抱える諸問題を認識し、主として人文科学的手法の資料の読み込み、調査と研究発表、討論を重ねる中で、多角的な視野を形成することを目指す。</p> <p>(28 水谷 智担当) 近代以降のイギリス社会を、特に非ヨーロッパ諸地域との関係に重点を置きつつ学んでいく。「人種」・植民地主義・移民といった基本的なテーマからアプローチすることにより、イギリス帝国のグローバルな影響を理解することを目指す。海外領土を拡大していく中で、イギリスがアメリカ・アジア・アフリカ諸地域にどのような影響を与え、またその過程でイギリス人自身のアイデンティティーがいかに生成・変容していったのかを、テキストや映像資料を議論しながら考え、多角的な視野を形成することを目指す。</p> <p>(27 石井 香江担当) 近現代ドイツ社会(及びドイツ語圏の社会)におけるジェンダー・社会階層・人種をめぐる社会的諸問題と、職場や政治、テクノロジーが交差するテーマを扱い、現代の社会構造の歴史的な形成過程やメカニズムを理解する一助としたい。様々な史資料や参考文献を読み、関連する映像資料等を見る他、必要に応じてフィールドワークを行い、そのうえで研究発表や議論を重ねることで、幅広い見方と基礎的な研究能力を培うことを目指す。</p> <p>(30 伊 慧瑛担当) イギリス・アイルランドの関係史をふまえながら、現代イギリスおよびアイルランドにおけるエスニシティとネイションについて考える。イギリス・アイルランドは多くの移民を受け入れ多文化社会のあり方を模索してきた一方で、植民地主義の遺産である北アイルランド紛争への対応も迫られてきた。関連テキスト・映像を通じて、こうした差異と暴力、和解と共存をめぐる錯綜した状況をふまえながら、現代イギリスおよびアイルランド社会の諸問題を多角的にとらえる視点を養い、各自の関心を深めることを目指す。</p> <p>(118 菊池 恵介担当) 本セミナーでは、グローバル化の中でヨーロッパ諸国が直面している様々な問題を取り上げる(企業の海外展開にともなう雇用不安の拡大、移民排斥やナショナリズムの高揚、その背景となる移民政策や植民地支配の歴史等)。様々な文献や映像資料を通じて、問題意識の共有を図ると同時に、発表や討論を通じて、独自の研究テーマの発見を目指す。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	グローバル地域文化 発展セミナー (つづき)	<p>(5 錢 鷗担当) 本セミナーは中国の歴史・文化・思想または東アジア比較思想史・文化交渉史及び近現代日中関係を研究したい3年次学生を対象に行う科目である。学生は中国及び東アジアの歴史全般を広く勉強することを心懸けたうえ、自らの問題意識に従って研究課題を見つけ、セミナーでの発表と討論を通じて各自の研究テーマを練ると同時に、自己を客観化する方法、抽象的な観念と実体との乖離を弁別できる力の養成を目標とする。また、海外留学の意欲を持つ学生の要望に応じ、留学に関するアドバイスや推薦を積極的に行う。</p> <p>(26 阿部 範之担当) 中国語圏の映画を中心に、アジア・太平洋地域の大衆文化に関するトピックを扱い、近代化やグローバル化の中でローカルな社会がどのような文化を生み出しているかを探る。資料の分析を行い、考察を加えるとともに、研究発表や討論を通じて、政治、経済、社会等、様々な角度から文化事象を読み解き、問題を捉える能力の向上を目指す。</p> <p>(29 洪 宗郁担当) 朝鮮半島を中心とした東アジアの歴史や社会に関するテーマを扱う。特に植民地期と現代の韓国に焦点をあて、韓国社会固有のダイナミクスを追うと同時に、それが東アジアあるいは世界の中で持つ意味も吟味したい。歴史的背景や現代の問題に関する文献もしくは映像・音声資料を幅広く取り上げる。韓国語の資料も交えることで、参加者の語学力の向上にも心がける。</p> <p>(43 竹内 理樺担当) 中国・台湾をはじめとする「中国語圏」の政治・社会・文化・外交・民族・移民・ジェンダー・日中関係等に関するテーマを扱う。現在の日本を取り巻く東アジアにはどのような問題が存在するかを認識し、新聞記事やテキストを読み、調査と研究発表、討論を重ねる中で、多角的な視野を形成することを目指す。</p> <p>(45 小川原 宏幸担当) 近現代における朝鮮半島を取り巻く事象について、政治・経済・社会・外交・国際関係等に関するテーマを扱う。現在の日本を取り巻く問題について分析することができる視座を養成するために、朝鮮半島を参照系としながら、様々なテキストを、特に歴史学的分析軸を通じて認識していく。史資料の調査と研究発表を行うとともに、セミナー参加者が互いに討論を重ねるなかで、多角的な視野を形成することを目指す。</p> <p>(44 Aysun UYAR担当) グローバル地域文化をより理解するために、地域協力、地域連携や地域統合のあり方を国際関係論や国際政治経済学の視点から学ぶ。各地域連携の事例を分析しながら、地域の規模、あり方やデザインに関して歴史的な側面も含めて、総合的に討論する。</p> <p>(7 松久 玲子担当) 貧困、格差、ジェンダー、教育、国際移動労働、児童労働等について現代のラテンアメリカ社会が抱える諸問題をテーマとして扱う。それに関連する新聞・雑誌、国際機関の報告書、論文等の資料を読みながら、ラテンアメリカ社会の現代的問題に関する理解を深める。また、文献収集や研究方法の基礎について学ぶ。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当) 本セミナーは、北米を中心とした地域の歴史と文化の形成過程に焦点をあてる。合衆国や米加関係をより深く知るための必読文献を読み、文献収集方法や研究アプローチの基本を学ぶ。受講生は課題図書、文献等に前もって目を通し、授業では積極的な発表と討論への参加が求められる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 発展セミナー (つづき)	<p>(1 和泉 真澄担当)</p> <p>北アメリカ文化の多様性を前提に、アメリカに関する文化現象(北アメリカに関係していれば地域は問わない)に関して、学生がおのおのの関心のある研究課題を見つけ、それについて調査を開始する。授業では、個々の学生が関心事項について発表し、そこから学問的に有意義な「リサーチ・クエスチョン」を立てる方法について考える。研究課題を考察するのに必要な社会的・文化的コンテキストについて、リーディングを指導する。</p> <p>(2 落合 明子担当)</p> <p>本セミナーでは、アメリカ合衆国を中心に活躍した人物の実像を探ることから、アメリカ社会への理解を深める。例えば、人種差別撤廃のために尽力した人物を取り上げ、どのような歴史的背景や社会状況の中で活動し、何を成し遂げたのか、その人物に対する評価は時代と共にどのように変遷したのか等を追う。セミナーでのテキストの輪読や議論と並行して、受講者は各自で関心を持った人物についての調査を行い、セミナーで発表をする。発表や討議を重ねることで、その人物を時代の文脈の中で捉えると共に、アメリカの理念と現実についての理解も深める。</p> <p>(46 宮地 隆廣担当)</p> <p>ラテンアメリカの現代政治に関連するテキストを精読する。分析方法と地域に関する事情の両面において、基本的な知識を身に付けることを目指す。</p>	
	グローバル地域文化 発展セミナー	<p>(概要)</p> <p>1クラス10人程度のクラス編成とする。発展セミナーIを受けて、さらに自らの研究テーマを絞り込む。収集した資料や文献を基礎にレポートを作成し、セミナーで発表と討論を行う。自分のテーマについて批判的に分析する能力を養い、グローバル地域文化専門セミナーにおける卒業論文の執筆につなげることを目標とする。</p> <p>(4 清水 穰担当)</p> <p>現在のヨーロッパに見られる多様な表象表現が、他の地域(他のヨーロッパ地域、アジア、アメリカ)とのいかなる交流や影響を経て形成されてきたのかを理解することを目標とする。各自が関心ある課題を選び、先行研究や最新のトピックを調査、報告して問題提起し、全員で議論することを通じて、各地域に個別にみられる現象と「グローバリゼーション」の問題との関連性を考え、自らの研究テーマを絞り込む。</p> <p>(3 Anne GONON担当)</p> <p>フランスはヨーロッパの形成過程に重要な役割を果たそうとしている。その流れの中でフランスの社会がどのような影響をヨーロッパから受けているか、どのような影響を与えているか、特に社会的課題の分野を分析し、共生を可能にする立場とその共生への抵抗という緊張を理解することを目指す。主に横断的なアプローチを優先して文献を講読し、最後に卒業論文執筆に向けた方法論の指導を行う。</p> <p>(8 松本 賢一担当)</p> <p>現在のロシア・東欧地域に見られる様々な事象が、いかなる歴史過程の中で、他の地域との交流や反発、影響を経て形成されてきたのかを理解することを目標とする。各自が関心ある課題を選び、先行研究や最新のトピックを調査、報告して問題提起し、全員で議論する中で、各地域に個別にみられる現象と「グローバル化」・「グローバリゼーション」の問題との関連性を考え、自らの研究テーマを絞り込む。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 発展セミナー (つづき)	<p>(28 水谷 智担当) 発展セミナー で学んだ視点を踏まえ、「奴隷制」「植民地近代」「多文化主義」といったより具体的なテーマから、植民地支配や旧植民地からの移民に関する近現代イギリス社会の諸相についてさらに掘り下げていく。各受講生は、こうしたテーマの中から関心のあるものを選び、先行研究を踏まえた上で自らの考えを発表する。他のメンバーとのディスカッションを通じて問題提起や主張の提示を行う方法を学び、所与のテーマを能動的に追究する姿勢を体得することを目指す。</p> <p>(27 石井 香江担当) 発展セミナー で学んだような現代のドイツ社会及びヨーロッパ社会で見られる社会的諸問題が、「グローバル化」の過程で他のヨーロッパ地域及び非ヨーロッパ地域との接触や交渉を経ていかに形成され、変容してきたかについて考察する。受講生はさらに興味関心を掘り下げ、先行研究を検討・報告し、他の受講生との意見交換の中で、個別の興味関心を練り上げていく。</p> <p>(30 尹 慧瑛担当) 現代イギリス及びアイルランドにおけるエスニシティとネイションを中心とした諸問題に関して、問題の所在を自分なりに整理し、理解する力を養うことを目指す。各自の関心に基づいたテーマを設定し、それに関連する文献・資料を収集し、セミナーでの報告・討論を通じて共有をはかる。最終的に、各自が独自の問題関心を深められるようになることを目指す。</p> <p>(118 菊池 恵介担当) 本セミナーでは、世界経済のグローバル化の中でヨーロッパ諸国が直面している諸問題を扱う(企業の海外展開にともなう雇用不安の拡大、移民排斥やナショナリズムの高揚、その背景となる移民政策や植民地支配の歴史等)。受講者は、セミナーを通じて、自分のテーマを絞り込み、基本文献や資料の収集に取りかかる。</p> <p>(5 錢 鷗担当) 中国の歴史・文化・思想または東アジア比較思想史・文化交渉史及び近現代日中関係について、自らの研究テーマを決め、当該分野の基本的文献や優れた先行研究等を踏まえたうえで、セミナーでの発表と討論を通じて各自の卒業論文につなげるテーマを練ると同時に、多面的・歴史的に問題の深層を見る豊かなまなざしの養成を目標とする。また、海外留学の意欲を持つ学生の要望に応じ、留学に関するアドバイスや推薦を積極的に行う。</p> <p>(26 阿部 範之担当) 中国語圏の映画を中心に、アジア・太平洋地域の 대중文化に関するトピックを扱い、国境を越えた文化の影響関係について探る。受講者は各々関心のあるテーマを選び、先行研究やデータを元に調査、分析を行う。こうした作業を通じて研究の基礎を築くとともに、さらに研究発表や討論を通じて、論理的な思考を高めることも目指す。</p> <p>(29 洪 宗郁担当) 朝鮮半島の歴史や社会に現れる諸事象から興味のあるテーマを各自選び、先行研究を検討したうえでもう一步踏み込んだ分析の可能性を模索する。参加者同士の議論や関連資料の検討を通じて、個別のテーマが全体の韓国社会において持つ意義を常に確認する。最終的にはチーム別あるいは個人別に簡単なプレゼンテーションを行い、テーマの深化と調整を図る。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 発展セミナー (つづき)	<p>(43 竹内 理樺担当) 現在の「中国語圏」を中心とする東アジアに見られる様々な事象が、いかなる歴史過程の中で、他の地域との交流や反発、影響を経て形成されてきたのかを理解することを目標とする。各自が関心ある課題を選び、先行研究や最新のトピックを調査、報告して問題提起し、全員で議論する中で、各地域に個別にみられる現象と「グローバル化」・「グローバリゼーション」の問題との関連性を考え、自らの研究テーマを絞り込む。</p> <p>(45 小川原 宏幸担当) 現在の東アジアにおける様々な事象が、どのような歴史的変遷をたどりながら形成されてきたのかを理解することを目標とする。セミナー参加者各員が個々の関心ある課題を選んで先行研究や最新のトピックを調査、報告して専門性を深めるとともに、その題材を参加者全員で議論する中で、対象地域での個々の現象と「グローバリゼーション」の問題との関連性をとらえながら、それぞれの視点を広げていく。学期末には、自らの研究テーマを絞り込むことを目指す。</p> <p>(44 Aysun UYAR担当) 発展セミナーIを踏まえて、世界の各地域で構築された地域連携フレームワークの諸問題について深く議論する。グループや個人による発表と授業でのディスカッションを実施しながら、グローバル社会の各地域に関する理解及び意識を深める。</p> <p>(7 松久 玲子担当) 発展セミナーIを受けて、ラテンアメリカの現代社会が抱える諸問題を歴史的な背景からより深く理解するために、ラテンアメリカ地域に関する論文や重要な研究書を取り上げ、それに関する議論を通じて批判的に検討する。授業での発表や討論を通じて受講生が卒業論文につながる研究課題を見出すことを目指す。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当) 発展セミナーIを受けて、本セミナーでは、今日的な 이슈でもあるデモクラシーの機能不全、人種・民族的問題、アメリカの自由と平等をめぐる論争等、現代アメリカをより深く理解するために、英米の新聞・雑誌及び重要な研究書を取り上げて議論する。授業での発表や討論を通して受講生各々が卒業論文につながる独自の研究課題を見いだすことを目指す。</p> <p>(1 和泉 真澄担当) アメリカに関する文化現象(北アメリカに関係していれば地域は問わない)に関して、文化分析の観点から「リサーチ・クエスチョン」の焦点を絞る。授業では、個々の学生が関心事項について発表し、参加者全員で、研究課題の現代的意義と妥当性、資料収集の方法、分析手法や、分析に有用な理論とその限界等について、議論を行う。文化分析に必要な理論について、リーディングを指導する。</p> <p>(2 落合 明子担当) 発展セミナーIでは、個人の足跡からアメリカ社会のあり方を探ったが、本セミナーではトランスナショナルな動きも含め、より大きな社会(社会運動)の中に個人の活動を位置づけて考察する。テキストを輪読する作業と並行して、受講者は関心を持った人物と社会の動向について各自で調査を行う。セミナーにおいて発表や討議を重ねることで、多角的な視野から研究テーマを分析・考察できるようになることを目指す。さらに、原文の一次資料に触れたり、研究動向への理解を深めたりして、学術的リサーチの仕方の習得も目標とする。</p> <p>(46 宮地 隆廣担当) 発展セミナーIに関連する、ラテンアメリカに関する論文やテキストを批判的に検討する。これまでに学んだ地域に関する知識や分析方法を、自身の考察に活かすことを目指す。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 専門セミナー	<p>(概要) 学生一人一人にとっての卒業論文セミナーである。グローバル地域文化発展セミナーで設定した自らの研究テーマについて、これまでに培ってきた外国語運用能力と地域文化の抱える諸問題に対する批判的分析を最大限に活かしながら研究を進める。セミナーにおいて、各自の研究テーマについて発表し、担当教員の指導を受けながら、卒業論文の執筆に着手する。</p> <p>(4 清水 穰担当) 発展セミナー ・ で培った視点に基づき、「ドイツ語圏」を中心とするヨーロッパの表象文化についての理解を深めることを目指す。各自が研究テーマを設定し、作品分析の方法や研究史の整理、問題点の所在、今日的課題をまとめて報告する。受講者間での議論を経て、卒業論文の研究計画を作成し、基礎的な調査・研究に着手する。</p> <p>(3 Anne GONON担当) 文献レビュー及び卒業論文執筆に向けて研究方法の指導を行う。フランス社会に関わるテーマを通して、文化人類学的・社会学的分析方法を学ぶ。フランスと他の国家(日本も含めて)の関連性という比較検討も取り入れる。学生は多様な視点から分析できるようになること、また卒業論文執筆に向けて、自ら選択したテーマで研究計画を作成できるようになることを目指す。</p> <p>(8 松本 賢一担当) 発展セミナー ・ で培った視点に基づき、「スラヴ圏」を中心とする地域の諸問題についての理解を深めることを目指す。各自が研究テーマを設定し、資料収集の方法や研究史の整理方法を身に付けると共に、自らのテーマをあえて批判的な目で見直すことによって問題点の所在を明らかにした上で発表する。受講者間での議論を経て、卒業論文の研究計画を作成し、基礎的な調査・研究に着手する。受講者によってはフィールドワークの準備をする。</p> <p>(28 水谷 智担当) 発展セミナー ・ で培った知見をもとに、非ヨーロッパ諸地域との関係における近現代イギリス社会について受講生自ら研究する力を養うことを目標とする。各自は具体的な研究テーマを設定し、先行研究・フィールドワーク・資料収集・研究の意義及び方法について報告する。クラスでの議論及び担当教員のアドバイスを踏まえ、卒業論文の計画書を作成し、研究に着手する。</p> <p>(27 石井 香江担当) 発展セミナー ・ で培ったものの見方や得た知識を踏まえ、ドイツを中心とするドイツ語圏においてジェンダー・社会階層・人種が社会構造の中にかに埋め込まれ、それが変容を迫られてきたかについて理解を深めることを目指す。受講生は具体的な研究テーマを設定し、先行研究を検討・報告しながら、他の受講生との建設的な議論や担当教員のコメントを参考に、研究の意義や方法を模索しつつ、卒業論文の計画書を作成する。</p> <p>(30 伊 慧瑛担当) 発展セミナー ・ で培った視点と問題関心にに基づき、現代イギリスおよびアイルランドにおけるエスニシティとネイションを中心とする諸問題について、より具体的な研究をすすめる。各自が卒業論文の核となる「問い」をたて、先行研究の整理や資料収集、研究の調査法について発表を行う。セミナーでの議論および担当教員の助言をふまえ、卒業論文の「問い」を再設定したうえで研究計画を作成し、基礎的な調査・研究に着手する。</p> <p>(118 菊池 恵介担当) 発展セミナー ・ に引き続き、グローバル化の中でヨーロッパ諸国が直面している諸問題を検討する。受講者は卒業論文のプランを作成し、本格的な調査・研究に着手する。また、発表や討論を通じて、他の地域の問題との共通点や関連性を発見し、状況を分析する多角的な視野を身に付ける。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 専門セミナー (つづき)	<p>(5 錢 鷗担当) 本セミナーは東アジア比較思想史・文化交渉史、近現代日中社会観念の動態的研究、日本の中国観と中国の日本観に関連するテーマで卒業論文を執筆しようとする学生を対象に行う卒業論文指導ゼミである。授業は学生が各自のテーマに関する主要な方法論、基礎的文献、先行研究をよく理解し、研究テーマをより広い歴史的な文脈と確実な根拠のなかに位置付けることができるよう指導する。卒業論文のテーマと枠組みを固めた後、研究の具体化に向けて進み、中間成果を授業で報告する。</p> <p>(26 阿部 範之担当) 中国語圏の映画を中心に、アジア・太平洋地域の大衆文化についての理解をさらに深め、専門的な知識の習得に努める。受講者はこれまでの学習を踏まえ、自ら課題を設定し、卒業論文の研究計画を作成する。さらに研究の内容や意義、方法について報告を行い、討論を通じて問題点を精査する。こうした作業を通じて、研究能力の向上を目指す。</p> <p>(29 洪 宗郁担当) 発展セミナー ・ を通じて手に入れた朝鮮半島に対する問題関心を、今日的かつグローバルな視点に照らしさらに練り上げることによって、卒業論文のテーマを確定する。フィールドワークやアーカイブの調査等、隣接学問の方法論を大胆に導入し、データの収集と分析を拡充していくと同時に、グローバル地域文化固有の視点を堅持することで新たに開かれる地平を確認する。</p> <p>(43 竹内 理樺担当) 発展セミナー ・ で培った視点に基づき、「中国語圏」を中心とする東アジアの諸問題についての理解を深めることを目指す。各自が研究テーマを設定し、収集の方法や研究史の整理、問題点の所在、今日的課題をまとめて報告する。受講者間での議論を経て、卒業論文の研究計画を作成し、基礎的な調査・研究に着手する。</p> <p>(45 小川原 宏幸担当) 発展セミナー ・ で培った視点に基づき、主に日本および朝鮮半島を中心に東アジア地域における諸問題について、理解を深めていくことを目指す。各自に研究テーマを設定し、史資料の収集方法や研究史の整理、問題点の所在、今日的課題をまとめながら、報告を行う。受講者間での議論を経て、卒業論文の研究計画を作成し、基礎的な調査・研究に着手する。</p> <p>(44 Aysun UYAR担当) 発展セミナー ・ で学んだ地域協力および地域連携をより深く分析し、卒業論文のテーマの構成に向けて議論する。特に日本と繋がりがあがる東アジア、東南アジアとアジア・太平洋地域について比較的討論し、アジアにおける地域文化のあり方について学生とともに研究調査を行う。</p> <p>(7 松久 玲子担当) 各受講者の関心に従って設定された、ラテンアメリカ地域の近現代史、文化、教育、ジェンダー等を中心とするテーマについて研究計画を作成し、研究を進める。本セミナーでは、研究の途中経過を発表し討論を通じて、研究課題を整理し、卒業論文の基礎を作ることを目指す。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当) 北米の歴史や合衆国を中心としたグローバルな諸問題を歴史的な視点から読み解くことを実践する演習である。本セミナーでは、受講生が各々の卒論テーマにつながるトピックを選択し、各自の問題関心とその先行研究について報告し、討論することで卒業論文を作成する上での基礎作業とする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 専門セミナー (つづき)	<p>(1 和泉 真澄担当) 発展セミナー・Iに引き続き、研究課題を明確化し、「リサーチ・クエスチョン」に応えるべく、資料収集、分析を進める。授業では、個々の学生が、アメリカに関する文化現象(北アメリカに関係していれば地域は問わない)に関して、研究の進捗状況を発表し、参加者全員で、資料や分析手法、理論の妥当性について議論を行う。卒業論文の執筆に向けて、学術論文の書き方について指導する。</p> <p>(2 落合 明子担当) 本セミナーでは、アメリカ合衆国を中心とした北米地域の歴史・文化の中から卒業論文のテーマを選び、資料の調査や精読を進め、仮アウトラインや論文計画の作成を目指す。明確なテーマの設定の仕方や、先行研究批判、注や文献表の作成等、発展セミナーIで学習したリサーチや論文執筆の基礎を確認した上で、より専門的な論文の執筆への応用を目指す。受講者がお互いに執筆の進捗状況を発表し合うことを通じて、問題意識や論文の論理展開等について批判的な視野を養うと共に、リサーチのスキルや文章力の向上も図る。</p> <p>(46 宮地 隆廣担当) 各受講者の関心に従って設定された、ラテンアメリカの現代政治に関連するテーマについて研究計画を準備し、それに従い研究を進める。研究の途中経過に関する全受講者との討論も行う。卒業論文の基礎を作ることを目指す。</p>	
	グローバル地域文化 専門セミナー	<p>(概要) 卒業論文セミナーの最終段階である。グローバル地域文化専門セミナーIを通じて研究を進めてきた各自のテーマについて、さらに討論を重ね、担当教員の指導を受けながら卒業論文を完成させる。また、卒業論文の研究成果を公開発表する。</p> <p>(4 清水 穰担当) 卒業論文のテーマについて、作品分析と文献資料類の調査を進め、進捗状況を定期的に報告する。受講生間で議論を行って問題意識を共有し、研究・考察の深化をはかる。特に、各受講生が取り上げるテーマ・問題間の関連性や、他のヨーロッパ地域、そしてアジア、アメリカに現れる同時代表現にも留意し、比較検討の視座を取り入れ、卒業論文を完成させる。</p> <p>(3 Anne GONON担当) 卒業論文を完成するのが、この演習の最大の目的である。ゼミでの発表・討論により各自のテーマの内容を深め、論文を書き上げていく。専門セミナーIで立てた研究計画をもとに、主に自分のテーマに関する先行研究をしっかりとめることを目指す。また論文を完成するにあたり、執筆に係る形式的なことについての指導も行う。</p> <p>(8 松本 賢一担当) 卒業論文のために行った資料調査やフィールドワークの結果を分析し、卒業論文執筆の準備をする。作業の進捗状況をゼミの場で定期的に報告し、受講生間で議論を行うことによって銘々の研究・考察の深化をはかる。各受講生が取り上げるテーマ・問題が関連性を持つ事例、周縁地域、他の国家・地域における現象にも受講者の関心が向くよう留意し、常にグローバルな視点を意識させつつ、卒業論文の完成に導く。</p> <p>(28 水谷 智担当) 各受講生は卒業論文に関して研究と執筆の進捗状況を報告しつつ、他の受講生の報告に対して建設的な批判を行っていく。クラスでの議論を通じて互いの研究から学びながら、広い視野から卒業論文に取り組み、完成させる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	グローバル地域文化 専門セミナー (つづき)	<p>(27 石井 香江担当) 既に作成した卒業論文の計画書に沿って資料調査やフィールドワークを進め、その進捗状況を定期的に報告する。また、この過程で、他の受講生の報告から学び多角的な見方や比較の視点を得るだけでなく、自分の知識や経験を動員してコメントし、建設的な議論を形成するスキルを身に付けてもらう。そして、この一連の経験を卒業論文の作成に活かしてもらいたい。</p> <p>(30 尹 慧瑛担当) 各自が卒業論文のテーマについて資料調査やフィールドワークを行い、セミナーで研究計画の進捗と執筆状況を報告する。受講者間での批判的な議論を通じて、問題関心を共有するとともに各自の研究内容を鍛え上げ、卒業論文を完成させる。</p> <p>(118 菊池 恵介担当) 専門セミナー に引き続き、グローバル化の中でヨーロッパ諸国が直面している諸問題を検討する。受講者は、文献研究や調査に基づき、卒業論文の執筆に専念する。また、発表や討論を通じて、他の地域の問題との共通点や関連性を発見し、状況を分析する多角的な視野を身に付ける。</p> <p>(5 錢 鷗担当) 東アジア比較思想史・文化交渉史、近現代日中社会観念の動態的研究、日本の中国観と中国の日本観に関連するテーマで卒業論文執筆の準備をしている学生を対象に行う卒論指導ゼミである。学生は自ら調査研究を行い、一次的資料と理論研究の評価による問題の所在の究明、そして何よりも自らの研究の立場や方法の明確化が求められる。セミナーの中でそれらを報告し、質疑と講評を積み重ねて卒業論文の完成に向かうことを目標とする。</p> <p>(26 阿部 範之担当) 中国語圏の映画を中心に、アジア・太平洋地域の文化について理解の深化や専門的な知識の習得にさらに努める。受講者は研究計画に従って調査、分析を進め、定期的に自身の研究の進捗状況を報告するとともに、発表、討論等を通じて新たな問題点の把握にも努める。こうした作業を通じて、研究能力をさらに向上させ、質の高い卒業論文の完成を目指す。</p> <p>(29 洪 宗郁担当) 授業での報告や討論を通じて、グローバルな視点から朝鮮半島を分析した独創的かつ整合的な説得力のある卒業論文を完成する。また、4年間学んだグローバル地域文化学の視点が、社会進出後に具体的な場面でどのように活かされるかについて、現代の日本社会と朝鮮半島の関係性を中心に考えてみる機会も持ちたい。</p> <p>(43 竹内 理樺担当) 「中国語圏」を中心とする東アジア社会が抱える諸問題について、専門セミナー で設定した各自の卒業論文のテーマに関する資料調査やフィールドワークを行い、進捗状況を定期的に報告する。受講生間で議論を行うことで問題意識を共有し、研究・考察の深化をはかる。特に、各受講生が取り上げるテーマ・問題間の関連性や、他の国家・地域における現象にも留意し、比較検討の視座を取り入れ、卒業論文を完成させる。</p> <p>(45 小川原 宏幸担当) 卒業論文のテーマについて、資料調査やフィールドワークを行い、進捗状況を定期的に報告する。受講生間での議論を通じて互いに問題意識を共有することによって研究・分析を深めていく。特に、各受講生が取り上げるテーマ・問題間の関連性や、他の国家・地域における現象にも留意し、比較史的視座を取り入れながら卒業論文を完成させる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	グローバル地域文化 専門セミナー (つづき)	<p>(44 Aysun UYAR担当) 専門セミナーの中で研究テーマとして選択した課題をもとに、卒業論文を作成する。学術的な研究調査の方法やあり方を経験しながら、論文作成を行う。</p> <p>(7 松久 玲子担当) 専門セミナーでの研究と議論の結果を発展させ、近現代のラテンアメリカ社会が抱える諸問題をテーマとする卒業論文を完成させる。資料調査やフィールドワークを行い、その成果を定期的に発表し、受講生間で議論をすることにより、問題意識をより明確に把握し、研究テーマの分析をより深化させることを目指す。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当) 専門セミナーでは、受講生は卒業論文のテーマを確定させ、資料調査やフィールドワークを行うことが求められる。同時に、受講生の間で共有する問題関心および重要なトピックについて授業で議論しつつ、各自の研究の進捗状況について定期的に報告する。最終的には、研究成果の概要を発表することを目指す。</p> <p>(1 和泉 真澄担当) 個々の学生が卒業論文の執筆に向けて、その内容について発表を行う。授業では、卒業論文で扱う課題の範囲を明確に示し、卒業論文で扱わないが関連する課題についても考察し、今後の課題として明確にする。各受講生が取り上げるテーマ・問題間の関連性について、現代文化のグローバル化の視点から、参加者全員で議論する。</p> <p>(2 落合 明子担当) 本セミナーでは、アメリカ合衆国を中心とした北米地域の歴史・文化の中から選んだ卒業論文の研究テーマについて、資料の精読やフィールド調査を進め、アウトラインを完成させて論文の執筆作業を円滑に進め、最終的な完成を目指す。受講生は執筆の進捗状況をセミナーでお互いに発表し合うことによって、研究テーマや問題意識をより明確化させる。注の付け方や分かりやすい文章の書き方等、執筆に関わる技術面やその他の工夫についても、セミナーで話し合い、よりよい論文を目指す。</p> <p>(46 宮地 隆廣担当) 専門セミナーでの研究と議論の結果を発展させ、ラテンアメリカを扱った卒業論文を完成させる。これまでに学んだことを全面的に活用して、論理的に議論を展開し、考察の軌跡を他者に分かりやすく提示することを目指す。</p>	
	卒業論文	<p>(概要) 卒業論文では、グローバル地域文化専門セミナー及びの指導に基づき、地域文化の諸問題について実証的研究を行い、その成果を論文にまとめる。外国語運用能力を活かして関連文献と資料を収集し、分析するだけでなく、留学やフィールドワーク、海外インターンシップにおける海外体験を活かし、批判的分析の視点を活かした論文を執筆することが求められる。</p> <p>(4 清水 穰担当) ドイツ語圏を中心とするヨーロッパの表象文化について各自のテーマを設定し、歴史的経緯と同時代的なアクチュアリティに留意しながら、文献研究及び表象分析に基づいた卒業論文を執筆する。</p> <p>(3 Anne GONON担当) アフリカも含めたフランス語圏を中心としたテーマを選び、卒業論文に関連した論文や著書を検索、収集、読解して、必要ならフィールドワークを行いつつ、各自の論理で主張を展開することで、独自性のある卒業論文をまとめる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	卒業論文(つづき)	<p>(8 松本 賢一担当) ロシア・東欧地域の社会、文化、歴史、民族問題、日ロ関係史問題について各自のテーマを設定し、歴史的経緯と現代の問題性に留意しながら、文献研究やフィールドワークに基づいた卒業論文の執筆を指導する。</p> <p>(28 水谷 智担当) 非ヨーロッパ諸地域との関係を中心とした近現代のイギリス社会について受講生各自が自らテーマを設定し、文献研究やフィールドワークに基づいた卒業論文を執筆する。</p> <p>(27 石井 香江担当) 近現代ドイツ社会(及びドイツ語圏の社会)におけるジェンダー・社会階層・人種をめぐる社会的諸問題と、職場や政治、テクノロジーが交差するテーマについて、受講生各自が強い関心を抱くテーマを設定し、文献研究のみならず現地でのフィールドワークに基づいたオリジナリティのある卒業論文を執筆する。</p> <p>(30 伊 慧瑛担当) 現代イギリス及びアイルランドにおけるエスニシティ・ネイションを中心とする諸問題について、受講者が自らの問題関心に根ざした「問い」を設定し、適切な文献、資料、フィールドワークに基づいて論文を執筆する。</p> <p>(118 菊池 恵介担当) 世界経済のグローバル化のなかでヨーロッパ諸国が直面している諸問題について各自でテーマを設定し、文献研究や調査に基づいて卒業論文を執筆する。歴史的な観点を重視するとともに、他の地域の出来事との比較を通じて、一見ローカルな現象をグローバルな連関のなかで分析するための幅広い視野を身に付ける。</p> <p>(5 錢 鷗担当) 専門セミナー 及び の指導に基づき、東アジア比較思想史・文化交渉史、近現代日中社会観念の動態的研究、日本の中国観と中国の日本観等について、学生一人一人の研究テーマに即して、必要な相関分野の知識と研究の実践力を込められた卒業論文の作成を指導する。</p> <p>(26 阿部 範之担当) アジア・太平洋地域の文化に関する問題について各自テーマを設定し、先行研究を踏まえた上で各種の資料にあたり、適宜実地調査も行いながら実証的かつ独自の視点を持った研究論文の執筆に従事し、その完成を目指す。</p> <p>(29 洪 宗郁担当) 朝鮮半島を中心とした東アジアの歴史と社会について各自のテーマを設定し、論文を作成する。チーム別あるいは個人別に進捗状況を共有することで、円滑な論文作成を助ける。</p> <p>(43 竹内 理樺担当) 「中国語圏」を中心とする東アジア地域の政治、社会、文化、外交、民族、ジェンダー等の問題について各自のテーマを設定し、歴史的経緯と現代の問題性に留意しながら、文献研究やフィールドワークに基づいた卒業論文の執筆を指導する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修 科目	卒業論文(つづき)	<p>(45 小川原 宏幸担当) 東アジア地域の政治、社会、文化、外交、民族、ジェンダー等の問題について、特に日本および朝鮮半島に関連した事象について各自のテーマを設定し、その歴史的経緯と現代的問題性に留意しながら、文献研究やフィールドワークに基づいた卒業論文の執筆を指導する。</p> <p>(44 Aysun UYAR担当) グローバル社会における各地域の多様性と相互作用を意識しながら、国際社会や自らの地域に貢献できる研究を目指して、卒業論文を執筆する。</p> <p>(7 松久 玲子担当) 専門セミナーでの指導や討論に基づき、各自が近現代のラテンアメリカ社会に関連する諸問題について実証的な研究を行い、その成果を卒業論文にまとめる。先行研究を十分理解したうえで、自分自身のテーマを展開することが求められる。</p> <p>(6 肥後本 芳男担当) 卒業論文では、これまでの専門セミナーでの指導や討論に基づき、各自が北米の歴史・文化の諸問題について実証的な研究を行い、その成果を所定の論文にまとめる。先行研究を十分に消化したうえで、独自の視点から論理的かつ批判的な論文を書くことが求められる。</p> <p>(1 和泉 真澄担当) 個々の学生の卒業論文の執筆を指導し、完成させる。卒論研究と論文執筆を通じて、地域文化研究の基本となる、文化表象(テキスト)とそれを意味づける社会的構造(コンテキスト)との関連性を分析する思考法を、身に付けさせることを目指す。卒業論文執筆にあたっては、引用、注、参考文献等の扱いに注意し、アカデミックとしての倫理について指導する。</p> <p>(2 落合 明子担当) アメリカ合衆国を中心とした北米地域の歴史・文化の中から受講者各自がそれぞれ卒業論文の研究テーマを設定し、原文も含む資料を収集したり、フィールドワークを行ったりして、1年間をかけて卒業論文を執筆する。先行研究を批判的に捉えた上で自分の研究テーマや考察方法を設定しているか、研究テーマに沿った適切な資料を収集しているか、資料のポイントを時代の文脈に沿って的確に捉えて分析を行っているか、それぞれが自分の適性に合わせた執筆計画を立てて着実に執筆を進めているか等を確認しながら指導を行う。</p> <p>(46 宮地 隆廣担当) 学生各自の関心に従って設定された、ラテンアメリカの現代政治に関連するテーマについて、卒業論文の作成を指導する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目A群 (グローバル・イシュー科目群)	グローバル・イシュー (グローバル化の世界史)	アジア太平洋にせよ、アメリカにせよ、ヨーロッパにせよ、特定の地域の文化をグローバルな視点から理解するためには、それを世界史の展開の中に位置づけて考える歴史的視点が不可欠である。本コースは、大航海時代に始まり19世紀に加速する近代世界の「グローバル化」の歴史を概観しつつ、同時に、<物流>(例えば砂糖の生産と流通)、<統治・経済体制>(例えば帝国主義と独立運動)、<人の移動>(例えば奴隷貿易や移民)といった主要テーマに沿って論じていく。それによって、現代世界のグローバルな状況を考える足がかりを掴むことを目標とする。	
	グローバル・イシュー (ジェンダーと地域文化)	様々な社会において性差別的現象が見られるが、そのあらわれ方は各地域の社会や文化によって規定され様ではない。現代社会においても、ジェンダー規範は宗教的規範を伴い女性の社会活動を強く規制する場合もあるし、ほとんど可視化できないほど巧妙に社会構造に組み込まれている場合もある。国連をはじめとする国際社会では、ジェンダー平等の施策を推進し一定の成果を上げてきたが、一方で西欧的価値観の押しつけたと批判されてもいる。地域文化の多様性を踏まえながら、ジェンダー平等をどのように達成していくことができるか考察する。	
	グローバル・イシュー (社会開発論)	国際関係論は、グローバル社会システムに影響する様々なアクターの政治的・経済的、そして社会的な相互関係を理論的に分析する学問である。それによって、現在の国際社会を広く読むことができる。本講義では、国際関係論の中に位置する社会開発論の学問的な紹介をし、グローバル社会における社会開発の各例を分析する。巨大な大陸アジアの、特に東アジアと東南アジア地域の国内および国際的な社会開発の関連性も含め、比較的に議論する。	
	グローバル・イシュー (異文化理解と紛争の抑止)	本講義では、文化の相違が引き起こす摩擦について、グローバルな視点に立って、その原因を分析する。とくに、21世紀に入ってから重要な課題となっている西欧とイスラーム世界との関係に焦点をあてる。	
	グローバル・イシュー (越境する地域文化)	本講義では、コロンブスの「新大陸の発見」以来のヨーロッパによるアジア・アフリカ地域の征服史をたどるとともに、その過程で生み出された「人種」の概念が、歴史のなかでどのように変容し、再生産されてきたかを検討する。また、戦後の移民政策を通じて「南」から「北」へと移住した人々が、1970年代以降、ヨーロッパ社会に定住化していく過程で直面する文化的諸問題について考える。	
	グローバル・イシュー (人間の安全保障論)	21世紀の国際社会の主要規範のひとつである「人間の安全保障」を取り上げ、人権や人間開発といった隣接概念と対比させながら、その意義を解説する。具体的な事例として、暴力的紛争、自然災害、感染症、経済危機といった国境をこえる問題群を紹介し、「人間の安全保障」の考え方によってどのような対処が可能になるか議論していく。各国政府のみならず、国際機関、市民社会、地方自治体、ビジネス等、様々なアクターのパートナーシップによって、恐怖と欠乏からの自由、そして尊厳をもって生きる自由を各人に保障していく方策を考える。	
	グローバル・イシュー (シチズンシップ論)	「シチズンシップ」とはまず法律上の意味をもち、国籍に相当するが、社会学、歴史学、哲学等の人間・社会科学系の学問は人々の間のつながりであり、ある特定の共同体への所属の様式でもありと主張した。本講義では第1にシチズンシップの現代的な意味を明確にするため、共同体における市民として人々の行動や場合によって市民的服従の行動、また世界レベルの市民のあり方などを検討する。第2に日本で「シチズンシップ」はしばしばカタカナ表記されているが、その理由を探り、世界レベルで独自の伝統におけるシチズンシップを考える。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修 ユニーク 科目 目A 群・群 (グローバル・イシュー (地球規模課題とアフリカ)	アフリカにおけるHIV感染症対策や貧困問題への取り組み、環境保全活動等の事例に基づき、世界の人々に持続的な生存を保障するためのグローバル・ガバナンスのあり方について考える。グローバル・ガバナンスとは、国際機関、各国政府、企業、市民社会、地域住民等が協調して地球規模課題に取り組む体制のことである。本講義では、医療や食料安全保障といった分野を中心にグローバル・ガバナンスの手法が発展してきた歴史的な経緯について学ぶとともに、実際の取り組みが人々の多様な価値観やライフコースに与える影響についても理解を深めてもらう。	
選択必修 科目 目B 群 (スタ ディ ・ア プ ロ ード 科 目 群)	サマープログラム・英語A	<p>(概要)</p> <p>夏期休暇中に海外における短期集中の語学研修に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。</p> <p>(1 和泉 真澄担当)</p> <p>本科目ではアメリカのアリゾナ大学で提供される4週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は事前に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(139 鈴木 美紀子担当)</p> <p>本科目ではオーストラリアのディーキン大学で提供される4週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p>	
	サマープログラム・英語B	<p>(概要)</p> <p>夏期休暇中に海外における短期集中の語学研修に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。</p> <p>(14 圓月 優子担当)</p> <p>本科目ではアメリカのカリフォルニア大学デービス校で行われる3週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(17 Robert CROSS担当)</p> <p>本科目ではアイルランドのーク大学で行われる3週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目B群 (スタディ・アブロード科目群)	サマープログラム・英語C	夏期休暇中に海外における短期集中の語学研修に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。本科目ではイギリスのケンブリッジ大学セント・キャサリンス校で行われる3週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。	
	サマープログラム・ドイツ語A	ミュンヘン大学のキャンパスで実施される4週間にわたる初級レベルのサマープログラム。現地のドイツ語のコースは同志社大学向けに作られ、ドイツ留学のいわば「入門編」である。午前中はドイツ人教師による集中的なドイツ語授業、午後はその実践として、学外での体験学習、宿泊は全てドイツ人のホストファミリーといった「語学」・「文化・社会・歴史」・「日常」を含むプログラムである。ミュンヘンでのドイツ語コースへ向けて出発までに日常会話、基本的な知識から、ネット検索、ホストファミリーとのメール等の練習を含む準備授業が行われる。このクラスは選抜試験の合格者のみが登録できる。	
	サマープログラム・ドイツ語B	マルティン・ルター大学で実施される3週間のサマープログラムであり、参加条件はCEFRのB1以上のドイツ語運用能力である。本クラスに参加する学生のためにサポートやガイダンスを行い、ドイツの滞在に必要な知識や能力を養成する。現地のドイツ語コースは、午前中は、ドイツ人教師による集中的なドイツ語授業、午後は「歴史」・「文化」・「社会」に関する体験学習。世界各国からドイツ語学習者が参加するので、「ドイツ」で「世界」を知る機会にもなっている。ドイツ留学のいわば「中級編」である。	
	サマープログラム・フランス語	夏休みの期間に4週間程フランスに滞在し語学研修を行うプログラムである。実際のフランスに触れることで、語学力を高めるだけでなく、その文化・社会について理解を深める。この研修を円滑に行い、実りの多いものにするため、現地に出発するまでに事前授業がある。4～5回参加者全員で集まり、フランスの社会、日常生活、コミュニケーション方法等について学び、またフランス語の勉強を含め出発前までにきちんと準備しておくべき様々な事柄について説明する。フランス現地で1ヶ月間近く行動を共にする参加者たちがお互いの顔を知り、交流を深めておくためのよい機会ともなる。	
	サマープログラム・中国語	2年次生以上の学生が、中国の北京大学で4週間、中国語を学習する授業である。北京大学では、月曜日から金曜日まで午前4時間中国語を学習するほか、午後にも文化に関するプログラムが用意され、週末には郊外の名所旧跡への見学も予定されている。事前準備として、前期中に中国の歴史・文化等について講習を数回行う予定。現地での実習を通して、場面に応じた適切な中国語の運用能力を身に付けるとともに、現代中国についての理解を深めることを到達目標とする。	
	サマープログラム・スペイン語	メキシコのラス・アメリカス大学(Universidad de Las Americas -UDLA-)の言語文化国際センター(Centro Internacional de Lengua y Cultura)で4単位の語学研修を行う。専門スタッフとの連携により、実践的なスペイン語運用の能力を高めることを目的とする夏期研修講座である。この大学における授業は「スペイン語」と「メキシコ文化」からなり、授業は全てスペイン語で行われる。教室での学習以外に様々な文化的プログラムがあり、またホームステイを通じて異文化理解を高めることも目的としている。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目B群 (スタディ・アプロード科目群)	サマープログラム・ロシア語	夏休みのうちの約1か月、ロシア第二の都市サンクト・ペテルブルクにあるサンクトペテルブルク経済商科大学において、ロシア語の集中講座を受けるプログラムである。授業は週5日、1日4時間ロシア人の教員によって行われ、授業の一環としてロシアを紹介する講義、市内の名所を回るエクスカーションも予定されている。中心地にある大学の寮で暮らしながら、現地でロシア語を学ぶ経験は、普段教室で受けている授業とは比べものにならない学習効果をもたらすはずである。	隔年開講
	サマープログラム・コリア語	このプログラムは、同志社大学の教学方針に基づいて、大韓民国ソウルにある延世大学韓国語学堂の協力を得て実施する夏期研修講座である。外国人に対するコリア語教育に長い伝統と豊富な経験を持つ韓国語学堂のスタッフによる指導の下、実践的なコリア語運用能力を高めることを目標とする。	
	スプリングプログラム・英語A	春期休暇中に海外における短期集中の語学研修に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。本科目ではオーストラリア、メルボルンのホーソーン英語学校で提供される4週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は事前に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。	
	スプリングプログラム・英語C	春期休暇中に海外における短期集中の語学学習に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。本科目ではニュージーランドのオタゴ大学で提供される3週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は後期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。	
	スプリングプログラム・英語D	春期休暇中に海外における短期集中の語学研修に参加し、高度な外国語運用能力を養成するとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。本科目ではニュージーランドのオークランド大学で提供される2週間の語学研修プログラムに参加する。参加者は事前に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセーライティングの手ほどきを受ける。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。	
	スプリングプログラム・ドイツ語	春休みを利用してフライブルク大学で実施される3週間のスプリングプログラムであり、初級から上級まで自分に合ったクラスを受講できる。現地のドイツ語コースは、午前中は、ドイツ人教師による集中的なドイツ語授業、午後は「歴史」・「文化」・「社会」に関する体験学習。世界各国からドイツ語学習者が参加するので、「ドイツ」で「世界」を知る機会にもなっている。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目B群 (スタディ・アプロード科目群)	スプリングプログラム・フランス語	春休みの期間に3週間程フランスに滞在し語学研修を行うプログラムである。実際のフランスに触れることで、語学力を高めるだけでなく、その文化・社会について理解を深める。この研修を円滑に行い、実りの多いものにするため、現地に出発するまでに事前授業がある。4～5回参加者全員で集まり、フランスの社会、日常生活、コミュニケーション方法等について学び、またフランス語の勉強を含め出発前までにきちんと準備しておくべき様々な事柄について説明する。フランス現地で行動を共にする参加者たちがお互いの顔を知り、交流を深めておくためのよい機会ともなる。	
	スプリングプログラム・中国語	中国の復旦大学で2週間、中国語を学習する授業である。復旦大学では、月曜日から金曜日まで午前4時間中国語を学習するほか、午後にも文化に関するプログラムが用意され、週末には郊外の名所旧跡への見学も予定されている。事前準備として、前期中に中国の歴史・文化等について講習を数回行う予定。現地での実習を通して、場面に応じた適切な中国語の運用能力を身に付けるとともに、現代中国についての理解を深めることを到達目標とする。	
	スプリングプログラム・スペイン語	スペインのサラマンカ大学(Universidad de Salamanca)の国際コースで(Cursos Internacionales)で1単位の語学研修を行う。専門スタッフとの連携により、実践的なスペイン語運用の能力を高めることを目的とする春期研修講座である。この大学における授業は「スペイン語」や「スペイン文化」からなり、授業は全てスペイン語で行われる。教室での学習以外様々な文化的プログラムがあり、またホームステイや寮生活等を通じて異文化理解を高めることも目的としている。	
	セメスタープログラム・英語	<p>(概要)</p> <p>1セメスターにわたり、海外の研修校で集中的に英語研修を受けることによって、英語の運用能力を総合的に高めるとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。</p> <p>(40 三原 芳秋担当)</p> <p>本科目ではカナダのウィニペグ大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。成績優秀なものはウィニペグ大学の正規科目の聴講も許される。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセライティングの手ほどきをうける。帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(140 Peter NEFF担当)</p> <p>本科目ではニュージーランド、ウェリントンのビクトリア大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセライティングの手ほどきをうける。帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(42 物部 ひろみ担当)</p> <p>本科目ではアメリカのハワイ大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深めるほか、自分の考えを述べる、日本の文化・社会について発信する等の課題によって、コミュニケーション能力育成の訓練やエッセライティングの手ほどきを受ける。帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択 必修 科目 B群 (スタ ディ ・ア プ ロ ー ド 科 目 群)	セメスタープログラム・英語	<p>(概要) 1セメスターにわたり、海外の研修校で集中的に英語研修を受けることによって、英語の運用能力を総合的に高めるとともに、現地での生活体験を通して、その国の文化・社会に対する理解を深め、国際感覚を養うことを目的とする。</p> <p>(40 三原 芳秋担当) 本科目ではカナダのウィネペグ大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。成績優秀なものはウィネペグ大学の正規科目の聴講も許される。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受けたのち、研修地で学習し、帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、帰国後の成果発表の評価、ならびに現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(140 Peter NEFF担当) 本科目ではニュージーランド、ウェリントンのビクトリア大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受けたのち、研修地で学習し、帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、帰国後の成果発表の評価、ならびに現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p> <p>(42 物部 ひろみ担当) 本科目ではアメリカのハワイ大学で提供される約4カ月の語学研修プログラムに参加する。参加者は前期中に本学の科目担当者による事前研修を受けたのち、研修地で学習し、帰国後はレポート作成、帰国報告、研修成果発表等を行う。担当者による成績評価は、事前研修と、帰国後の成果発表の評価、ならびに現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。</p>	
	スタディ・ツアー	<p>(概要) グローバル地域文化発展セミナー、(3年次配当)、グローバル地域文化専門セミナー(4年次配当)を履修している学生が、当該セミナーの担当者の指導、企画のもとに、学期間休暇を利用して海外での研修を行う科目である。現地で使用される外国語の能力はもとより、履修者が将来海外で活動するための基本的な能力を総合的に高めることができる。</p> <p>(8 松本 賢一担当) 本科目は、大学の長期休暇期間を利用し、履修者がロシア連邦のサンクトペテルブルク、モスクワ、ノヴゴロドのいずれかの都市に短期間担当者と共に滞在し、自らの調査目的に合致した研究機関や博物館での調査を行なうことを目的とする。担当者は履修者の調査に適宜助言、助力を与える。また、履修者は帰国後速やかに調査報告書を作成、提出しなければならない。</p> <p>(5 錢 鷗担当) 本科目では、まず中国(香港・マカオを含む)、台湾、シンガポール(履修者の希望によってはその他の地域も相談可)のいずれかの地域に短期間担当者と共に滞在し、自らの調査目的に合わせて研究機関や博物館、図書資料館、その他の必要と認められる訪問先での調査を行うことを目的とする。研究プログラムを立てる際、担当者は履修者の立案に助言、助力を与える。また、履修者は帰国後速やかに調査報告書を作成、提出しなければならない。</p> <p>(1 和泉 真澄担当) 本科目では、アメリカ合衆国、またはカナダのいずれかの都市に3週間程度滞在し、履修者の研究課題に応じて、当地の研究機関、博物館、公文書館、歴史資料館、文化センター等で資料収集、あるいは必要に応じて、現地の人々へのインタビューやイベントの参与観察、大学生との交流等を行う。履修者はあらかじめ、現地での詳細な活動計画を担当者に提出し、帰国後は速やかに調査報告書を作成、提出しなければならない。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 群 (ア ー ホ ウ ラ イ ト ド イ 目 群)	海外インターンシップ	夏期あるいは春期休暇中に、海外の企業、学校、ミュージアム、NPO等において1～4週間にわたる無報酬の就業体験を行う。参加者は事前に本学の科目担当者による事前研修を受け、研修地に関する知識を深める他、基本的な社会人としてのマナー、危機管理等に関する手ほどきを受ける。現地では、受け入れ先の事業の見学、業務に関する基礎的な研修を通じて、仕事の基本を身に付け、できる範囲で就業を行う。帰国後は研修成果に関するレポートをまとめる。担当者による成績評価は、事前・事後の研修の成果と、現地研修先での担当者の評価報告とを勘案して総合的に行われる。	
選 択 必 修 科 目 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	コミュニケーション・イングリッシュ 1	英語を現代社会における国際語と位置づけ、その実際の運用能力を身に付けるため、コミュニケーション・スキルを高めることを目的とした、1年次生向けのコースである。英語の表現を可能な限り日本語の介在なしに的確に聞く力(リスニング力)を養い、さらに聞き取った内容を基に、自分の考え・意見を、口頭あるいは文章で表現する訓練を行う。基本として、'think . . .', 'My point is . . . ' 等のような、自分のポイントを明確にあらわす表現、またその理由を列挙する際の表現等の型をマスターし、口頭での発信ができること、それに基づくl-writingができるようになることが必須である。ネイティブ・スピーカー担当の授業では、特に口頭での受信・発信というコミュニケーション能力が要求される。	複数教員が同内容の授業を行う
	コミュニケーション・イングリッシュ 2	コミュニケーション・イングリッシュ 1と対をなす科目で、1と同様に、英語のコミュニケーション・スキルを高めるための訓練を行う。英語の表現を日本語の介在なしに的確に聞く力(リスニング力)を養うことと、さらに聞き取った内容を基に、自分の考え・意見を英語で表現する力を養成することを目的とする。表現においては、自己紹介が口頭あるいは文章表現でできることを最低の達成目標とし、能力の高い学生の場合は、オピニオン・フォーメーションの訓練の一環として、短い作文やプレゼンテーションができることを目指す。	複数教員が同内容の授業を行う
	アナリティカル・リーディング 1	現代社会において英語が担う役割を踏まえ、英文の読解を通じて様々な分野の基礎的な背景・コンテキストを把握する能力を身に付けさせること、ならびに、パラグラフの概念を理解させることを目標とする。具体的には、英文の構造、パラグラフを理解させつつ、論理的な文章を読む訓練を通じて、受動的・機械的な訳読から、自分の言葉で整理解釈する能動的・批判的読解に誘導する。読む力の強化を通して、文法の復習と語彙力の増強も図る。また、モデル・パラグラフの構造を理解し、トピック・センテンスを抽出したうえで、パラグラフの要約を書かせる訓練を行って、パラグラフ・ライティングの基礎固めを行う。	複数教員が同内容の授業を行う
	アナリティカル・リーディング 2	アナリティカル・リーディング 1と対をなす科目で、1と同様に英文の読解を通じて様々な分野の基礎的な背景・コンテキストを把握する能力を身に付けること、パラグラフの構造を理解し、書けるようになることを目標とする。英語を批判的・能動的に読解する訓練を行い、さらに語彙力の強化を図る。また、文章全体の要旨を英文でまとめるという作業、読んだ内容に関する自分の意見を1パラグラフにまとめる訓練等を通じて、パラグラフ・ライティングの基礎をマスターする。	複数教員が同内容の授業を行う
	イングリッシュ・セミナー 1	1年次のアナリティカル・リーディングで培った読解力を前提に、より高度な内容の英文を素材として、より深い読解力を養成することを目指す2年次生対象の科目である。単なる味読・精読の域にとどまるのではなく、一定の分量を読み切ることで、英語圏の文化・思想・社会背景等の全体像の把握に努める。<人文><社会><自然>の3コースの中の1つを選んで、当該分野で授業担当者が選んだ教材を読み、履修の後には、小説・随筆・論説・新聞雑誌記事等を独習で読みこなせる読解力が身に付くことを目指す。	複数教員が同内容の授業を行う

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	イングリッシュ・セミナー 2	イングリッシュ・セミナー 1と対になる科目で、一定の難易度と長さのある英文を読むことを通じて、読解力を伸ばすと同時に、英語圏の文化・思想・社会背景等について学ぶ。〈人文〉〈社会〉〈自然〉の3コースのうち、1と同じ分野に属するが異なる教材を読み、さらに当該分野についての知識・理解を深める。履修の後には、小説・随筆・論説・新聞雑誌記事等を独習で読みこなせる読解力が身に付くことを目指す。	複数教員が同内容の授業を行う
	イングリッシュ・セミナー 3	英語の読解力向上を目指す2年次生対象科目で、同一担当者により週2回授業が行われる。より複雑な文構造や難易度の高いあるいはやや専門的な語彙を含む英文で、論旨の明快なものを題材として、その総合的な内容理解を目指す。週2回型であることを活かして、読解を受信作業に留めず、理解した内容を自分なりの英語で要約したり、書かれている内容について自分の考えや主張を英語で発表する、あるいは関連するテーマについて個人やグループで調べた内容を発表し相互に批判する等、task-oriented な発信の機会を設ける。	
	イングリッシュ・ワークショップ 1	英語の実際の運用能力(スキル)の習得を重視して、英語力の充実を図る2年次生対象科目である。リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの各コースに分かれ、学習者が自分の伸ばすべきスキルを重視したクラスを選んで学習する。リスニングでは、1年次科目で培った聴解力をさらに伸ばすことを目指す。スピーキングではネイティブ・スピーカーの授業を受け、コミュニケーション能力を養い、プレゼンテーションができるようになることを目指す。リーディングでは、速読・多読等、読むスキルの向上を目指す授業を行う。ライティングは、パラグラフ・ライティングの基礎からはじめて、複数のパラグラフからなるエッセイ等が書けるように指導する。	複数教員が同内容の授業を行う
	イングリッシュ・ワークショップ 2	イングリッシュ・ワークショップ 1と対になる2年次生対象科目である。1と同じく、英語の実際の運用能力(スキル)の習得を重視し、学習者は、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの各コースで引き続き学習して、さらにその能力を伸ばし、総合的な英語力の向上につなげることを要求される。リスニングでは、1とは異なる教材を用い、さらなるリスニング能力の強化に努める。スピーキングではコミュニケーション能力を養い、プレゼンテーションができることを目指す。リーディングでは、異なった教材を用いて、読解力をさらに高める。ライティングでは、さらに長く、複雑な主題を扱う文章が書けるように、訓練を引き続き行う。	複数教員が同内容の授業を行う
	イングリッシュ・ワークショップ 3	英語のスキル向上を目指す2年次生対象科目で、同一担当者により週2回授業が行われる。LL教室で行うリスニングとネイティブ・スピーカー教員によるスピーキングの2種目を提供する。リスニングでは、週2回授業を行うことで、集中的に訓練をし、様々な素材を聞くことにより、聴解力を向上させる。スピーキングにおいても、週2回の授業でコミュニケーション能力を向上させ、最後にはプレゼンテーションができるよう指導する。	
	アカデミック・イングリッシュ A	2年次生以上を対象とした、週2回型の半期集中クラス(上級)で、1年次において優秀な成績を獲得しているか、あるいは英語資格試験等における既定の得点を獲得していることを履修条件とする。授業は全て英語で行う。大学生が習得すべき英語運用能力獲得を目指すものであるが、将来留学や大学院進学を目指す学生にも益するように配慮されている。コンテンツ重視の科目で、担当者が定めたテーマに沿った、アカデミックな内容の教材を用い、論理的・批判的な思考に基づく英文の内容理解と、リスニング・スピーキング・ライティングのスキル上達を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	アカデミック・イングリッシュB	2年次生以上を対象とした、週2回型の半期集中クラス(中～上級)で、1年次において優秀な成績を獲得しているか、あるいは英語資格試験等における既定の得点を獲得していることを履修条件とする。授業は全て英語で行う。大学生が習得すべき英語運用能力獲得を目指すものであるが、将来留学や大学院進学を目指す学生にも益するように配慮されている。教授内容、教材の選定はアカデミック・イングリッシュAに準じるが、Aレベルに達していない学生を対象とすることに配慮する。テーマに沿ったアカデミックな内容の読解・聴取教材を用い、論理的・批判的な思考に基づく英文の内容理解と、リスニング・スピーキング・ライティングのスキル上達を目指す。	
	プロフェッショナル・イングリッシュA	2年次生以上を対象とした、週2回型の半期集中クラス(上級)で、1年次において優秀な成績を獲得しているか、あるいは英語資格試験等における既定の得点を獲得していることを履修条件とする。授業は全て英語で行う。大学生が習得すべき英語運用能力獲得を目指すものであるが、グローバル化する社会の現場で実際に役立つ英語のスキル習得に焦点を置いている。教授内容は、ビジネス・イングリッシュの手ほどき、通訳、翻訳等、実務で役立つ英語の訓練、広く国際的に仕事をこなすために必要なライティング・プレゼンテーション能力の育成など、多岐にわたる。	
	プロフェッショナル・イングリッシュB	2年次生以上を対象とした、週2回型の半期集中クラス(中～上級)で、1年次において優秀な成績を獲得しているか、あるいは英語資格試験等における既定の得点を獲得していることを履修条件とする。授業は全て英語で行う。大学生が習得すべき英語運用能力獲得を目指すものであるが、グローバル化する社会の現場で実際に役立つ英語のスキル習得に焦点を置いている。教授内容や教材の選定は、プロフェッショナル・イングリッシュAに準じ、将来仕事で役立つようなスキルの育成を目指すものであるが、Aの履修レベルに達しない学生を、英語を用いたクラスにおいて訓練し、4技能を伸ばして、Aレベルに達するよう指導する。	
	プレ・イングリッシュ・プラクティクム	1、2年次生を対象とした週2回型の半期集中クラスで、異文化理解に必要な4技能を伸ばさせることを目指す。一定の英語習熟度を達成しており、学習意欲があるが、イングリッシュ・プラクティクム履修レベルには届かない学生を対象にした、準備クラスの性格を持ち、イングリッシュ・プラクティクムよりは低い履修条件が設けられている。授業は英語で行われ、特にリスニング・スピーキング能力向上を意識した訓練が行われる。それと同時に、学習者は多様な教材を読んで、その内容に関する意見をエッセーの形にまとめることも要求されるので、4技能をバランスよく伸ばさせることができる。	
	イングリッシュ・プラクティクム1	一定の英語運用能力と学習意欲を備えた1、2年次生を対象にした、週2回集中型のクラスで、アドヴァンスト・レベルの学生を対象とする。異文化理解に必須の高度な英語の4技能の養成、留学に必要な語学力の養成を目指す。授業は全て英語で行われ、学習者は、与えられた教材を読み、聴き、その内容に関してディスカッションをする等、授業中に積極的な意見表明をすることが求められる。また、自分の意見をまとめて書くアサインメントを複数回与えられ、最終的には一定の長さのエッセー作成やプレゼンテーションが課される。	
	イングリッシュ・プラクティクム2	イングリッシュ・プラクティクム1よりさらに高度な運用能力と学習意欲を備えた1、2年次生を対象にした、週2回集中型のクラスで、アドヴァンスト・レベルの学生を対象とする。イングリッシュ・プラクティクム1よりもさらに高度なレベルでの、異文化理解に必須の高度な英語の4技能の養成、留学に必要な語学力の養成を目指す。授業は全て英語で行われ、学習者は、与えられた教材を読み、聴き、その内容に関してディスカッションをする等、授業中に積極的な意見表明をすることが求められる。また、自分の意見をまとめて書くアサインメントを複数回与えられ、最終的には相当の長さのエッセー作成やプレゼンテーションが課される。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	言語文化研究 1	英語学習を意欲的に継続したい3年次生以上の学習者を対象とした、高度な読解能力を身に付けることを目的とするクラスである。イギリス研究、アメリカ研究、言語論、表現文化論、記号と社会といったテーマに分かれてクラスが設置されており、担当者はそれらのテーマに沿った教材を選定する。クラスでは英語文献の読解力向上のための訓練が行われるが、担当者の専門領域や現在進めている研究テーマを反映した教材の解説、注解を通じ、対象教材の扱う分野、テーマに関する深い知識と理解を得ることが同時に目指される。	
	言語文化研究 2	英語学習を意欲的に継続したい3年次生以上の学習者を対象とした、高度な読解能力を身に付けることを目的とするクラスで、言語文化研究 1と対をなす。学習者は、イギリス研究、アメリカ研究、言語論、表現文化論、記号と社会といった分野の1つを選んで授業を履修する。担当者は言語文化研究 1に引き続き、さらに当該分野の理解を深めるような教材を選定する。クラスでは英語文献の読解力向上のための訓練が行われるが、担当者の専門領域や現在進めている研究テーマを反映した教材の解説、注解を通じ、対象教材の扱う分野、テーマに関する深い知識と理解を得ることが目標とされる。	
	現代地域事情・上級講読(英語圏) 1	現代性、地域性をキーワードとし、英語圏の様々な地域の持つ固有性を学ぶことを重視した、3年次生以上を対象とした上級講読科目である。オーストラリア、アメリカ、イギリス等の地域における時事問題や文化事情を取り扱った教材を、その地域の研究を専門とする担当者が選定し、その講読を行う。履修には、所定の1、2年次の英語科目の履修を終えていることが条件とされ、これまでの英語科目既修を前提として、さらに高度な内容の教材を読み、高度な読解力の育成と共に、上級学年にふさわしい、現代における各地域の社会・文化事情に関する知識の習得を目指す。	
	現代地域事情・上級講読(英語圏) 2	現代性、地域性をキーワードとし、英語圏の様々な地域の持つ固有性を学ぶことを重視した、3年次生以上を対象とした上級講読科目で、現代地域事情・上級講読(英語圏)1と対をなす。1に引き続き、オーストラリア、アメリカ、イギリス等の地域における時事問題や文化事情を取り扱った教材を、その地域の研究を専門とする担当者が選定し、その講読を行う。履修には、所定の1、2年次の英語科目の履修を終えていることが条件とされ、これまでの英語科目既修を前提として、さらに高度な内容の教材を読み、高い読解力を育成すると共に、現代における各地域の社会・文化事情の理解をさらに深めることを目指す。	
	ドイツ語入門	週2回連動のクラスであり、ドイツ語を「読み、書き、聞き、話す」ための技能を、無理なく自然に身に付けるための授業である。入門I(第一セメスター)では、ドイツ語の文字と発音、ドイツ語の骨格をなす動詞の変化と名詞・代名詞・冠詞類等の変化、現在時称などを学びながら、少しずつドイツ語で表現することを学習する。	
	ドイツ語入門	入門(第2セメスター)では、入門Iに続き、さらに多様な文法事項を学びつつ、もう少し立ち入った表現や場面に対応できるドイツ語の学習に進む。ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく検定試験「Start Deutsch 1」に合格するレベルに達することを目標とする。	
	ドイツ語応用 1	ドイツ語応用1では入門、で培ったドイツ語力を無理なく中級レベルに引き上げることを目指す。そのためには、語彙、基本文法等「入門」科目で学んだ事柄を復習しながら、さらに高度なドイツ語表現を練習する。ドイツの文化と社会を楽しく学びつつ、大切な語彙や表現が身に付くように進めていく。ドイツの新聞記事の簡単なものが読める、つまり最低限の情報収集ができるようになることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	ドイツ語応用 2	文法事項の復習をしながら、様々な生きた場面やテキストに対応できる応用的な基礎的レベルのドイツ語能力の確実な養成を目指す。	
	ドイツ語応用 3	ドイツ語圏の文化・政治・経済・社会等についての多様な教材を用いて、応用1に引き続き、4技能のうち「読む」と「書く」に重点を置いた中級レベルのドイツ語力を涵養する。到達目標のレベルはCEFRのA2である。	
	ドイツ語応用 4	ドイツ語の基礎能力を強化しつつ、さらに高度なドイツ語運用能力へと発展・向上させることを目標とする授業である。短期留学プログラムに参加できる程度の語学力(CEFRのA2レベル)を修得することを到達目標とする。	
	ドイツ語インテンシヴ	日本人教員とネイティブ・スピーカーの教員による週3回の授業である。文法事項の進度は入門、に準じているが、週3回のクラスなので、口頭練習や聞き取り練習により大きな重点を置くことで、入門、と差異化される。ドイツ語の学習意欲がはっきりしている学生向けである。	
	ドイツ語インテンシヴ	インテンシヴと同様に、日本人教員とネイティブ・スピーカーの教員とによる週3回の授業である。過去形や現在完了形を使った過去の出来事の表現、命令形や依頼の表現等、様々な文法事項を学びながら、いっそう立ち入った表現や場面にも対応できるドイツ語の学習に進む。ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく「Start Deutsch 1」に良い成績で合格するレベルに到達することを目標とする。	
	ドイツ語インテンシヴ	日本人教員とネイティブ・スピーカーの教員との緊密な連携のもとで運営される、週3回のクラスである。4技能のバランスのとれたドイツ語運用能力の更なるレベルアップ(CEFRのA2)を目標とする。日常生活でよく使われる語彙や表現を習得すること、自分や家族、身近な人や出来事について話し、書くことを練習する。	
	ドイツ語インテンシヴ	インテンシヴと同様、日本人教員とネイティブ・スピーカーの教員との緊密な連携のもとで運営される、週3回のクラスである。CEFRに基づく検定試験「Start Deutsch 2」に良い成績で合格するレベルに達することを目標とする。	
	ドイツ語インテンシヴ	インテンシヴ、または応用の各クラスを終え、ドイツ語を総合的かつ体系的に勉強し続けたい学生向けの、週2回運動のクラスである。4技能(聞く・読む・話す・書く)のバランスのとれた高度なドイツ語運用能力の更なるレベルアップを目指している。同志社大学外国語オナーズ取得の条件の1つになっているドイツ語能力資格Zertifikat Deutsch (CEFR B1)に必要な語学力の養成が目標である。受験指導も行う。	
	ドイツ語インテンシヴ	インテンシヴを履修した学生向けのクラスである。教科書を使い、4技能の高度な運用能力を目指す。さらに、ドイツ語の小スピーチ、日独・独和の翻訳も練習する。CEFRのB2にあたるドイツ語運用能力の修得を目標とする。	
	ドイツ語文化事情 1	ドイツ語の入門、(インテンシヴ、)および応用1~4(インテンシヴ、)を履修済みの学生のための上級クラスである。教科書ではなく、新聞、インターネット、テレビから取った生きた教材に基づく「内容」を中心とした授業である。読解・聴解の能力のレベル・アップとともに、ドイツ語圏の社会・文化に関する知識を深めることが目標である。	
ドイツ語文化事情 2	ドイツ語文化事情1と同様に、新聞、インターネット、テレビから取った生きた教材に基づく「内容」を中心とした授業である。読解・聴解の能力のさらなるレベル・アップとともに、ドイツ語圏の社会・文化に関する知識を深めることが目標である。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	ドイツ語表現法 1	ドイツ語の入門、(インテンシヴ・)および応用1~4(インテンシヴ、)を履修済みの学生のための上級クラスである。新聞等を読むために、または作文を書くために必要な表現を練習する。	
	ドイツ語表現法 2	ドイツ語表現法 1の続きとして、新聞によく出る大切な語彙や表現を練習して、作文の作成によって、作文力を身に付けることを目指す。CEFRのB1にあたる表現力の養成を目標とする。	
	言語文化原典演習(ドイツ語) 1	初級・応用を終えてドイツ語の基礎が固まり、さらにドイツ語能力のアップをはかる学生向けの授業である。学習用ではない、本物のドイツ語テキストを精読し、文法の知識と理解を深めながら高度な読解力の養成を目指す。	
	言語文化原典演習(ドイツ語) 2	初級・応用を終えてドイツ語の基礎が固まり、さらにドイツ語能力のアップをはかる学生向けの授業である。言語文化原典演習 1と同様に、本物のドイツ語テキストを精読し、文法の知識と理解を深めながらさらなる高度な読解力の養成を目指す。	
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏) 1	新聞やインターネット等から取得した、本物のドイツ語の読解に重きをおく授業である。読解力のレベルアップとともにドイツ語圏の政治・社会・文化に関する知識を深めることも目標とする。	
	現代地域事情・上級講読(ドイツ語圏) 2	現代地域事情・上級講読 1に続き、読解力のさらなるレベルアップを目標とする。ドイツの文化・社会に関する知識もさらに掘り下げる。インターネット等で得られるアクチュアルな情報を利用し、ドイツ留学や大学院進学を目指す人向けに、高度なドイツ語読解力の養成を図る。	
	ドイツ語会話初級 1	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。ドイツ語が話せるという実感が湧いてくるように、初級レベルの会話力を養うクラスである。入門・応用で学習している(または学習してきた)文法を「会話」の中で応用し、積極的に使えるようにするため、様々な練習を行う。	
	ドイツ語会話初級 2	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。ドイツ語が話せるという実感が湧いてくるように、初級レベルの会話力を養うクラスである。入門・応用で学習している(または学習してきた)文法を「会話」の中で応用し、積極的に使えるようにするため、様々な練習を行う。到達目標は「ヨーロッパ言語共通参照枠」におけるA1レベルの表現力・会話力、つまり「直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる」・「住んでいる所、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる」力を養成することにある。	
ドイツ語会話中級 1	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。入門・応用で習ってきた文法を「会話」の中で応用し、積極的に使えるようにするため、ロールプレイ等の様々な練習を行う。日常の事柄について単純な文を用いてドイツ語で報告・説明できるような力を養成することを目標とする。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	ドイツ語会話中級 2	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。入門・応用で習ってきた文法を「会話」の中で応用し、積極的に使えるようにするため、ロールプレイ等の様々な練習を行う。到達目標は「ヨーロッパ言語共通参照枠」におけるA2レベルの表現力・会話力を身に付けることである。 (A2の表現力=「家族、周囲の人々、居住条件、学歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる」、A2の会話力:「短い社交的なやり取りができる」)。	
	ドイツ語会話上級 1	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。「ヨーロッパ言語共通参照枠」のB1レベルと定義されている「会話力」と「表現力」を養うのが、この授業の目的である。目標とされる「会話力」は、具体的には「旅行中に起こりやすい多くの状況に対処することができる。例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事等、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話にはいることができる」レベルである。また「表現力」とは「自分の経験や出来事、夢や希望、目標を語るすることができる。意見や計画に対する理由を簡潔に示すことができる。本や映画のあらすじを述べ、またそれに対する感想・考えを表現できる」というレベルである。	
	ドイツ語会話上級 2	各自の学習計画に従って参加できる、自由選択科目である。担当者はネイティブ・スピーカーである。会話上級 1に続き、「ヨーロッパ言語共通参照枠」のB1レベルと定義されている「会話力」と「表現力」の養成をさらに強化し、より高度な運用能力を目指している。	
	フランス語入門	レギュラー・クラスのフランス語は、「文法」は1年次生の春(入門)、秋(入門)、2年次生の春(応用1)の3つのセメスターで習得するようになっている。入門では、週2回の授業が「文法」と「実習」とで構成される。入門の「文法」の授業では、発音と綴り方のルール、名詞、冠詞、形容詞の基礎、動詞の現在活用の基礎を学習し、フランス語の単純な構文(肯定・否定・疑問文)を理解できるようなることを目標とする。「実習」の授業は「文法」とは別の教科書あるいはプリントを用いて行う。発音の練習や、ごくやさしい文を使って、簡単な会話のやりとり等を行い、フランス語になじんでいく。	
	フランス語入門	入門は全3セメスターからなるレギュラー・クラスのフランス語学習の第2セメスター目にあたる。既に入門で学習した内容をさらに発展させ、フランス語のより複雑な文の仕組みを理解するために必要な文法項目を着実に学習していく。「文法」のクラスでは動詞の過去・未来時制、各種代名詞(直接・間接目的語代名詞、中性代名詞、関係代名詞、疑問代名詞等)、様々な構文を学習し、より複雑な文を理解できるようになることが目標である。仏検4級程度に対応する。「実習」のクラスでは入門に引き続き、文法クラスで学んだ内容を補足、補強するとともに簡単に実用的な会話の練習を行うか、もしくはやさしい読み物などを読んでいく。	
フランス語応用 1	応用1は全3セメスターからなるレギュラー・クラスのフランス語学習の第3セメスター目にあたり、入門、入門に引き続いて初級文法の総仕上げを行うクラスである。フランス語に豊かでニュアンスに富んだ表現を可能にしている様々な文法的な道具立ての数々、特に条件法・接続法等の叙法、より複雑な中性代名詞・不定代名詞・関係代名詞等の使い方を学ぶ。このセメスターまでの内容をしっかりと消化することによってはじめてフランス語の初級文法の基礎ができあがることになる。ほぼ仏検3級程度に対応する内容である。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	フランス語応用 2	応用 2は、初級文法学習の仕上げとなる応用 1と並行して進むクラスであり、応用 1の文法学習の内容を補うとともに、今後の中級の学習(応用 3、応用 4)への橋渡しになるように、主にやさしいフランス語で書かれた文章を教材にして、文法・語彙に関する練習を行うとともに、これまで以上にフランス語に慣れ親しんでもらい、フランス語を「読む」、「聴く」、「話す」、「書く」ための確かな基礎を作っていくことを目指すクラスである。ほぼ仏検3級程度に対応する内容である。	
	フランス語応用 3	応用 3の授業では、入門 から応用 1や応用 2に至る授業で学んできた初級フランス語のさらなる基礎固めを行い、そしてそこから中級へと進むために、フランス語で書かれた様々なジャンル(文化、社会、科学等)の文章や新聞・雑誌記事等を精読することによって高度な読解力を培い、また、映画やシャンソン等を教材にして「聴解力」を養成するのが目標である。レベル的には仏検3級から準2級程度に対応する内容となる。	
	フランス語応用 4	応用 3と同様、応用 4においてもフランス語のさらなる基礎固めを行い、そしてそこから先へと進むために、様々な分野に亘るテキスト、そして多様な視聴覚教材を使って授業を進め、中級程度の十分な読解力と聴解力を養うことを目標とする。応用 4では特に読解力をつけたい学生のために、文学作品等の相当高度な内容のテキストを教材にするケースもある。レベル的には仏検3級から準2級程度に対応する内容となる。	
	フランス語インテンシヴ	初心者向けのインテンシヴ・クラスで、週3回の授業をネイティブ・スピーカーと日本人教員とで担当する。ネイティブ・スピーカーは会話や作文等の練習を担当しフランス語運用能力を鍛える。日本人教員は文法書を使用し、発音の基礎と文法を教える。担当教員同士で連絡を取り合い、総合的な力がつくような授業を行う。インテンシヴ では挨拶、人物紹介、買い物、道案内等の表現ができるようになることを目標に、系統的な語彙習得と文法(性と数、重要な動詞の習熟などおおむね入門 の文法と同じ)の授業が組まれている。	
	フランス語インテンシヴ	フランス語インテンシヴ に続くクラスで、週3回の授業をネイティブ・スピーカーと日本人教員とで担当する。ネイティブ・スピーカーは会話や作文等の練習を通して学生のフランス語運用能力を鍛え、日本人教員は文法書を使って文法のより詳しい解説と練習を担当する。インテンシヴ では日常生活、仕事、食べ物に関する表現ができることを目標に、系統的な語彙習得と文法(入門 の「文法」の範囲に対応する内容)の授業が組まれている。担当教員同士で連絡を取り合い、総合的な力がつくような授業を行う。	
	フランス語インテンシヴ	インテンシヴ に続き、週3回の授業をネイティブ・スピーカーと日本人教員とで担当する。ネイティブ・スピーカーは会話や作文等の練習を通して学生のフランス語運用能力を鍛え、日本人教員は文法書を使って文法のより詳しい解説と練習を担当する。インテンシヴ では、自分の意見を表明したり、過去の出来事や未来についての表現ができるようになることを目標に、系統的な語彙習得と文法の授業が組まれる。担当教員同士で連絡を取り合い、総合的な力がつくような授業が行われる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	フランス語インテンシヴ	インテンシヴ に続き、週3回の授業をネイティブ・スピーカーと日本人教員とで担当する。ネイティブ・スピーカーは会話や作文等の練習を通して学生のフランス語運用能力を鍛え、日本人教員は初級文法の総復習を行うとともに固有のテキストを使用し、読解力を養成する。担当教員同士で連絡を取り合っており、総合的な力がつくような授業を行う。インテンシヴ では、これまで学習したフランス語能力をさらに深め、総合的なレベルアップへと導くことを目指す。また同時に文化的理解を深めることも目指す。	
	フランス語インテンシヴ	このクラスは週2回の授業からなる。インテンシヴ 、及び、を学習した後、さらにこのクラスを選んでフランス語の学習を続けていけば「ヨーロッパ規格の語学検定資格」(DELF A2~B1)に十分に対応できよう。またフランスの留学から戻ってきた学生や今後留学を希望する学生も歓迎する。仕事、学校、娯楽で普通出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できること、身近で個人的に関心のある話題について、簡潔ながらもきちんとした脈絡のある文書をフランス語で書けるようになること、自分の経験、出来事、夢、願望、自分の意見や計画をその理由も含めて簡潔に説明できるようになるのが目標である。	
	フランス語インテンシヴ	このクラスは週2回の授業からなる。インテンシヴ 、及び、を学習した後、さらにこのクラスを選んでフランス語の学習を続けていけば「ヨーロッパ規格の語学検定資格」(DELF A2~B1)に十分に対応できよう。またフランスの留学から戻ってきた学生や今後留学を希望する学生も歓迎する。インテンシヴ ではインテンシヴ に引き続き、日常的な話題について標準的なフランス語で語られた内容の要点をきちんと理解できるようになること、身近で個人的に関心のある話題について簡潔ながら筋道だった文章をフランス語で書けるようになること、自分の意見や計画について、その理由も含め簡潔にそして正確に説明できるようになることを目指し、様々な練習を行う。	
	フランス語インテンシヴ	インテンシヴ 、及び、を学習した後さらに高度なフランス語運用能力を身に付けようと望む学生のためのクラスで、週2回の授業からなる。「ヨーロッパ規格の語学検定資格」(DELF)のB1~B2に対応する。日常で身近な話題だけでなく、より専門的な話題についても対応できるフランス語力を着実に養っていく。フランス語で発表をしたり、議論をしたり、初歩的なレポートを書いたりする練習を行う。フランスの留学から戻ってきた学生や今後留学を希望する学生も歓迎する。	
	フランス語インテンシヴ	インテンシヴ に続く、高度なフランス語運用能力を身に付けようと望む学生のためのクラスで、週2回の授業からなる。「ヨーロッパ規格の語学検定資格」(DELF)のB1~B2に対応する。日常で身近な話題だけでなく、より専門的な話題、より複雑なシチュエーションにおいても対応できるフランス語力を着実に養っていく。フランス語で簡単な発表をしたり、議論をしたり、初歩的なレポートを書いたりする練習を行う。フランスの留学から戻ってきた学生や今後留学を希望する学生も歓迎する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	フランス語文化事情 1	3、4年次生においてさらにフランス語の学習を続けようという学生のために「文化事情」、「表現法」、「言語文化原典演習」、「現代地域事情・上級講読」の4種類のクラスが置かれており、フランス語のさらなる実力をつけたい学生は、これらの科目を合わせ取ることで総合的な能力を培うことができる。文化事情 1は特に「聴く」力をつけ、フランス語及びフランス文化の受信能力を養うクラスで、教材は衛星放送のニュース番組、TV番組や映画のビデオ、シャンソン、ポップス等の音楽、さらに新聞広告や料理レシピやパンフレット等を使い、フランスの政治、社会、文化を目と耳を十分に活用して学んでいくクラスである。	
	フランス語文化事情 2	文化事情 2は3、4年次生になってさらにフランス語の学習を続けるための上級科目の1つフランス語文化事情の後期のクラスである。文化事情 1に引き続き、フランス語の聴解力・読解力アップを目指し、テレビ・ラジオのニュースをはじめとする様々な番組、映画、音楽、広告、料理レシピやパンフレット等を使い、フランス語そしてフランス文化を効果的に受信するために必要な力を養成する。目と耳を十分に活用してフランスの政治、社会、文化を学ぶ。	
	フランス語表現法 1	3、4年次生においてさらにフランス語の学習を続けようという学生のために、「文化事情」、「表現法」、「言語文化原典演習」、「現代地域事情・上級講読」という4種類のクラスが置かれており、フランス語のさらなる実力をつけたい学生は、これらの科目を合わせ取ることで総合的な能力を培うことができる。表現法 1は単なる日常会話よりもさらに高度なコミュニケーション、「考えつつ話す」ための力の養成を目指すクラスである。身近なテーマはもちろん、時にはより広く大きなテーマ、場合によってはいくらか専門的なテーマについてフランス語で討論を行う。	
	フランス語表現法 2	表現法2は3、4年次生になってさらにフランス語の学習を続けるための上級科目の1つフランス語表現法の後期のクラスである。表現法1に引き続き、単なる日常的な会話より一歩進んだレベルのコミュニケーション、「考えつつ話す」訓練を行う。身近なテーマはもちろん、時にはより広く大きなテーマ、場合によってはいくらか専門的なテーマについてフランス語で討論を行い、フランス語の高度な表現力を養っていく。	
	言語文化原典演習(フランス語) 1	3、4年次生においてさらにフランス語の学習を続けようという学生のために、「文化事情」、「表現法」、「言語文化原典演習」、「現代地域事情・上級講読」という4種類のクラスが置かれており、フランス語のさらなる実力をつけたい学生は、これらの科目を合わせ取ることで総合的な能力を培うことができる。言語文化原典演習 1は、文学や思想その他の内容的にも語学的にも比較レベルの高いテキストをとりあげて丁寧に読み進め、文法・語彙共に中級から上級レベルの実力をつけ、しっかりした読解力を養成するためのクラスである。	
	言語文化原典演習(フランス語) 2	言語文化原典演習 2は3、4年次生になってさらにフランス語の学習を続けるための上級科目の1つ言語文化原典演習の後期のクラスである。言語文化原典演習 1に引き続き、文学や思想やその他内容の面からも比較的高度で言語的にも様々なニュアンスに富むテキストを取り上げて丁寧に読み進める。文法・語彙共に中級から上級レベルの実力をつけ、さらにある程度複雑な構文にも慣れていくことで、しっかりとした読解力を養っていくことを目標とする。	
現代地域事情・上級講読(フランス語圏) 1	3、4年次生においてさらにフランス語の学習を続けようという学生のために、「文化事情」、「表現法」、「言語文化原典演習」、「現代地域事情・上級講読」という4種類のクラスが置かれており、フランス語のさらなる実力をつけたい学生は、これらの科目を合わせ取ることで総合的な能力を培うことができる。現代地域事情・上級講読 1のクラスでは、新聞・雑誌やその他の時事的なテキストを通して現代フランスやフランス語圏の風土・住民・言語・歴史についての理解を深めながら、上級の読解力の養成を目指す。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	現代地域事情・上級講読 (フランス語圏) 2	現代地域事情・上級講読 2は3、4年次生になってさらにフランス語の学習を続けるための上級科目の1つ現代地域事情・上級講読の後期のクラスである。現代地域事情・上級講読 1に引き続き、新聞・雑誌その他のメディアによってもたらされる最新の情報や、より分析的で高度な時事的なテキストを通して、現代のフランスやフランス本国以外の様々なフランス語圏の風土・住民・言語・歴史についての理解を深めながら、上級の読解力の養成を目指す。	
	フランス語会話初級 1	どちらかといえば「読む」ための力をつけることを目標にしてレギュラー・コースを選択した学生がこの初級会話クラスを履修することで、フランス語の聴解力・会話力をつけ、結果的にバランスのとれた総合的なフランス語能力を養成することができる。一方、インテンシヴ・コースを選択した学生がこの会話クラスも同時に履修すれば、ネイティブ・スピーカーと会話をする機会がさらに増え、フランス語の会話力にますます磨きがかかることであろう。会話初級1では、フランス語のコミュニケーションの基礎である「挨拶」、「自己紹介」、「人物紹介」、「趣味の紹介」等が出来るようになることが目標である。	
	フランス語会話初級 2	会話初級 1に続く後期のクラスであり、継続して履修する事により、フランス語の聴解力・会話力を向上させることができる。会話初級 2では会話初級 1に引き続き、日常生活における基本的な会話表現を学んでいき、フランス語圏の人々との初歩的なレベルでの意志疎通を可能にするための文法、語彙、表現の知識を、様々な実践的な練習を行ってマスターしていく。よりよいコミュニケーションのために耳、口、そして体全体を活用した積極的な授業参加が望まれる。	
	フランス語会話中級 1	会話初級 1、2を終えた学生、もしくはそれと同等の学力のある学生がさらに継続してフランス語の会話力の向上を目指すためのクラスである。会話中級 1では、生活上必要な様々な知識や情報を得るための会話力を養成する。そのためにも様々な事項について適切な形で質問をする方法を学び、また時間や空間に関する正確な表現ができるようになることを目標にしている。ネイティブ・スピーカーの下で、実践的なフランス語の基礎を固めていく。	
	フランス語会話中級 2	会話中級 1に引き続き、日常生活における様々な知識や情報をフランス語を使って表現する力を養う。文法も単に読むための「受け身の」文法ではなく、「主体的に使える」文法を目指し、過去や未来の時制については口頭で正確に使いこなせるようになるまでトレーニングを重ねる。また、空間に関する表現も正確にできるように練習を行う。こうした毎回のネイティブ・スピーカーの下での会話練習を通して実践的なフランス語の基礎を固めるのが目標である。	
	フランス語会話上級 1	会話中級 1、2を履修した学生、もしくはそれと同等の学力を持つ学生向けの上級会話クラスである。会話上級 1では、日常の様々な出来事・状況をより詳細に、より効果的にフランス語で報告する練習や、複数の事柄を比較し、その良し悪しをきちんと理由をつけて説明する練習、自分の計画を筋道を立てて話す練習等を行う。毎回、ネイティブ・スピーカーとの実践的な会話練習を通して、フランス語のより高度で豊かな表現の世界を目指す。より高度な語彙の学習や聴解力のトレーニングも同時に行われる。	
	フランス語会話上級 2	会話上級 1に引き続いてフランス語のより自由で高度な会話能力を養成するための上級会話クラスである。毎回ネイティブ・スピーカーとの会話練習を通して、フランス語で日常の様々な出来事・状況をより詳細に、より効果的に報告したり、また自分の意見や自分の計画等を、その理由もきちんと説明しながらフランス語で相手に伝えたり、議論したりする能力を養う。もちろん、より高度な語彙の学習や聴解力のトレーニングも並行して行われる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	中国語入門	中国語入門 では中国の標準語の発音及び文法の基礎を学ぶ。中国では各地の方言差が大きいため、全国共通の標準語が定められており、これを全国に普(あまね)く通じる言語という意味で「普通話」と呼んでいる。中国語は漢字で表記するが、発音は「ピンイン」と呼ばれるアルファベットで表す。このピンイン表記と発音のしかたを身に付けた上で、挨拶や自己紹介などの簡単な日常会話、さらに文法の基礎を身に付けることを到達目標とする。授業は週2回連動で、ネイティブ教員と日本人教員が週1回ずつ担当する。	
	中国語入門	入門 に引き続いて中国語の発音を確実なものにすると同時に、日常生活でよく使われる会話表現を中心に学んでいく。この授業が終わった段階で、中国語の基本的な文法事項を全て網羅し、約1000単語を習得することになる。入門 で学んだ内容を定着させながら、中国語文法についてさらに理解を深め、より高度な会話、作文の能力を身に付けることを到達目標とする。授業は週2回連動で、ネイティブ教員と日本人教員が週1回ずつ担当する。	
	中国語応用 1	入門 、 またはインテンシヴ 、 で中国語の基礎的な力を身に付けた学生が、さらにバランスよく中国語の全般的な能力を向上させるためのクラスである。使用テキストは、会話、短文を例に文法や語彙の説明をしており、練習問題には作文、リスニングも含んだ総合的な内容となっている。授業では、ピンインを確実に定着させるところからはじめ、多くの実践的な練習を繰り返しながら、中級レベルの総合的な中国語力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語応用 2	入門 、 またはインテンシヴ 、 で中国語の基礎的な力を身に付けた学生が、作文、文法、リスニング、読解といった特定の能力を高める、または中国語検定試験に対処する能力を高めるためのクラスである。いずれの能力の向上を主として図るかによって使用するテキスト、授業の形式、扱う内容等は異なるが、口語の実践能力を集中的に高める内容となっている。授業では、ピンインを確実に定着させるところからはじめ、多くの実践的な練習を繰り返しながら、中国語検定であれば4級(ないし3級)に合格するコミュニケーション能力を身に付けることを目標とする。	
	中国語応用 3	入門 、 またはインテンシヴ 、 で中国語の基礎的な力を身に付けた学生が、さらにバランスよく中国語の全般的な能力を向上させるためのクラスである。使用テキストは、会話、短文を例に文法や語彙の説明をしており、練習問題には作文、リスニングも含んだ総合的な内容となっている。授業では、テキストの暗唱も取り入れて多くの実践的な練習を繰り返しながら、中級レベルの総合的な中国語力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語応用 4	入門 、 またはインテンシヴ 、 で中国語の基礎的な力を身に付けた学生が、作文、文法、リスニング、読解といった特定の能力を高める、または中国語検定試験に対処する能力を高めるためのクラスである。いずれの能力の向上を主として図るかによって使用するテキスト、授業の形式、扱う内容等は異なるが、口語の実践能力を集中的に高める内容となっている。授業では多くの実践的な練習を繰り返しながら、中国語検定であれば4級(ないし3級)に合格するコミュニケーション能力を身に付けることを目標とする。	
	中国語インテンシヴ	週3回、少人数制で集中的に中国語を学習する授業で、ネイティブの教員と日本人の教員とで担当する。ネイティブ教員は発音訓練、置換え練習、会話練習等を担当し、日本人教員は初歩の発音訓練のほかには、主にテキストの本文、文法および文化知識を担当する。初めて中国語を学ぶ学生が、基本的な発音を習得し、ピンイン表記通りに正しい発音ができるようになるとともに、基礎的な単語や文法を身に付け、簡単な文章が会話でも作文でも表現できるようにすることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	中国語インテンシヴ	週3回、少人数制で集中的に中国語を学習する授業で、ネイティブの教員と日本人の教員とで担当する。ネイティブ教員は発音訓練、置換え練習、会話練習等を担当し、日本人教員は主にテキストの本文、文法及び文化知識を担当する。インテンシヴ や入門 で中国語の発音や表記の仕方、基本的な文法の仕組みを学んだ学生が、さらに語彙や文法を習得し、さらに多様な内容の文章を会話でも作文でも表現できるようになり、その後の学習の基礎となる力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	週3回、少人数制で集中的に中国語を学習する授業で、ネイティブの教員と日本人の教員とで担当する。ネイティブ教員は発音訓練、置換え練習、会話練習等を担当し、日本人教員は主にテキストの本文、文法及び文化知識を担当する。インテンシヴ や入門 で中国語の基礎を学んだ学生が、さらに語彙や文法を習得し、より複雑な内容の文章を会話でも作文でも表現できるようになり、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	週3回、少人数制で集中的に中国語を学習する授業で、ネイティブの教員と日本人の教員とで担当する。ネイティブ教員は発音訓練、置換え練習、会話練習等を担当し、運用能力を鍛え、日本人教員は主にテキストの本文、文法及び文化知識を担当する。インテンシヴ や応用クラスで中国語を学んだ学生が、さらに多くの語彙や文法を習得し、より難しい内容の文章を会話でも作文でも表現できるようになり、実践的なコミュニケーション能力を向上させることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	3年次以上の学生が、週2回、少人数制で集中的に中国語を学習するためのクラスである。テキスト本文の読解、発音訓練、置換え練習、会話練習、文法を総合的に学習し、中国語の読解力を養成し、運用能力を高めるとともに、中国に対する文化的理解を深めることを目指す。中国語応用 1~4やインテンシヴ を履修した学生が、さらに多くの語彙や文法を習得し、より高度で複雑な内容の文章を理解し、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	3年次以上の学生が、週2回、少人数制で集中的に中国語を学習するためのクラスである。テキスト本文の読解、発音訓練、置換え練習、会話練習、文法を総合的に学習し、中国語の読解力を養成し、運用能力を高めるとともに、中国に対する文化的理解を深めることを目指す。インテンシヴ を履修した学生が、さらに多くの語彙や文法を習得し、より高度で複雑な内容の文章を理解し、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	主に4年次生が、週2回、少人数制で集中的に中国語を学習するためのクラスである。テキスト本文の読解、発音訓練、置換え練習、会話練習、文法を総合的に学習し、中国語の読解力を養成し、運用能力を高めるとともに、中国に対する文化的理解を深めることを目指す。インテンシヴ を履修した学生が、さらに多くの語彙や文法を習得し、より高度で複雑な内容の文章を理解し、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることを到達目標とする。	
	中国語インテンシヴ	主に4年次生が、週2回、少人数制で集中的に中国語を学習するためのクラスである。テキスト本文の読解、発音訓練、置換え練習、会話練習、文法を総合的に学習し、中国語の読解力を養成し、運用能力を高めるとともに、中国に対する文化的理解を深めることを目指す。インテンシヴ を履修した学生が、さらに多くの語彙や文法を習得し、より高度で複雑な内容の文章を理解し、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択 必修 科目 C 群 (外国語 関連 科目 群)	中国語文化事情 1	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語のビデオやCD等のオーディオ・ビジュアル教材を活用して、現在の中国の社会や文化に対する理解を深めるための授業である。当然、リスニング力が必要になるので、聴き取りの力を高めるために、まずは徹底的な発音矯正から始め、徐々に語彙増強を行っていく。比較的やさしい中国語によるドキュメンタリー番組や映画・ドラマ等を中国語字幕付きで理解できるようになることを到達目標とする。	
	中国語文化事情 2	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語のビデオやCD等のオーディオ・ビジュアル教材を活用して、現在の中国の社会や文化に対する理解を深めるための授業である。当然、リスニング力が必要になるので、聴き取りの力を高めるために、ボキャブラリー増強のためのプログラムも組んでいく。中国語によるドキュメンタリー番組や映画・ドラマ等を中国語字幕があれば内容を理解できるようになることを到達目標とする。	
	中国語表現法 1	応用1~4やインテンシヴ、等で一定の中国語力を身に付けた学生が、文法についてさらに理解を深め、多くの語彙や表現を習得しながら、中国語を使った高度な表現能力及び読解能力を鍛えるための授業で、ネイティブ教員が担当する。実力が確実にアップするように、毎週の宿題を通して語学力向上の機会を増やす。宿題の間違った部分に基づき、関連する中国語文法のポイントや修辞、表現をまとめ、説明する。文単位で、場面に応じた適切な表現ができるようになることを到達目標とする。	
	中国語表現法 2	応用1~4やインテンシヴ、等で一定の中国語力を身に付けた学生が、文法についてさらに理解を深め、多くの語彙や表現を習得しながら、中国語を使った高度な表現能力及び読解能力を鍛えるための授業で、ネイティブ教員が担当する。実力が確実にアップするように、毎週の宿題を通して語学力向上の機会を増やす。宿題の間違った部分に基づき、関連する中国語文法のポイントや修辞、表現をまとめ、説明する。文単位ではなく、ある程度まとまった内容を論理的な中国語で表現できるようになることを到達目標とする。	
	言語文化原典演習(中国語) 1	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語で書かれた文章を味わいながら、中国文化についての知識・教養を身に付けるための授業である。単に字面を追うだけでなく、文章の背景を考えることにより、作品のより深い理解へと導いていく。そのためには授業は精読が主であり、十分な予習が必要となる。比較的容易な評論や、文学作品(小説)を自力で読めるようになることを到達目標とする。	
	言語文化原典演習(中国語) 2	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語で書かれた文章を味わいながら、中国文化についての知識・教養を身に付けるための授業である。単に字面を追うだけでなく、文章の背景を考えることにより、作品のより深い理解へと導いていく。そのためには授業は精読が主であり、十分な予習が必要となる。比較的容易な評論や、文学作品(散文)を自力で読めるようになることを到達目標とする。	
	現代地域事情・上級講読(中国語圏) 1	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語で書かれた文章の講読を行いながら、現代中国に対する理解を深めるための授業である。現在、中国のインターネットは大変発達しており、ラジオもテレビも視聴できるが、情報入手の基本は文章である。その読解力は辞書をひきつつたくさん文章を読むという地道な方法でしか身に付くことはない。この授業では、主にネット上で現代中国について中国語で書かれたものを読み、自力で情報を得られるようになることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 C 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	現代地域事情・上級講読 (中国語圏) 2	応用1~4やインテンシヴ、等で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、中国語で書かれた文章の講読を行いながら、現代中国に対する理解を深めるための授業である。現在、中国のインターネットは大変発達しており、ラジオもテレビも視聴できるが、情報入手の基本は文章である。その読解力は辞書をひきつつたくさん文章を読むという地道な方法でしか身に付くことはない。この授業では、ネット及び書籍・雑誌から現代中国について中国語で書かれたものを読み、ネット上の言論空間と書籍・雑誌の言論空間の違いを認識し、自力で分析できるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話初級 1	入門、もしくはインテンシヴ、で、基本的な発音を習得し、基礎的な単語や文法を身に付けた学生が、実践的な会話練習を行い、コミュニケーション能力を高めるための授業で、ネイティブ教員が担当する。ピンインと実際の発音を対応させるところから始め、発音矯正を徹底的に行う。同時に、常用フレーズを繰り返し音読することによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。ネイティブが話す基本的な表現を聞き取り、また自分でも表現することができるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話初級 2	入門、もしくはインテンシヴ、で、基本的な発音を習得し、基礎的な単語や文法を身に付けた学生が、実践的な会話練習を行い、コミュニケーション能力を高めるための授業で、ネイティブ教員が担当する。発音矯正を徹底的に行い、常用フレーズを繰り返し音読することによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。ネイティブが話す基本的な表現を聞き取り、また自分でも表現することができるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話中級 1	応用1~4またはインテンシヴ、で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、より高度な会話練習を行い、実践的な中国語能力を高めるための授業で、ネイティブ教員が担当する。中国で編集・出版された自然な会話形式のテキストを使用し、徹底的な発音矯正から始める。同時に、常用フレーズの音読を繰り返し行うことによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。比較的難しい表現を聞き取り、また表現することができるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話中級 2	応用1~4またはインテンシヴ、で中級レベルの中国語総合力を身に付けた学生が、より高度な会話練習を行い、実践的な中国語能力を高めるための授業で、ネイティブ教員が担当する。中国で編集・出版された自然な会話形式のテキストを使用し、常用フレーズの音読を繰り返し行うことによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。比較的難しい表現を聞き取り、また表現することができるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話上級 1	会話中級 1、2等でコミュニケーション能力をある程度身に付けた学生が、より高度な会話練習を行い、実践的な中国語能力を高めるための講義で、ネイティブ教員が担当する。中国で編集・出版された自然な会話形式のテキストを使用し、徹底的な発音矯正から始める。同時に、テキストの音読を繰り返し行うことによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。複雑で難しい表現を聞き取り、また自分でも中国語らしい表現をすることができるようになることを到達目標とする。	
	中国語会話上級 2	会話中級 1、2等でコミュニケーション能力をある程度身に付けた学生が、より高度な会話練習を行い、実践的な中国語能力を高めるための講義で、ネイティブ教員が担当する。中国で編集・出版された自然な会話形式のテキストを使用し、テキストの音読を繰り返し行うことによって、スピーキング力・リスニング力の向上を図っていく。複雑で難しい表現を聞き取り、また自分でも場面に応じた中国語らしい表現をすることができるようになることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	スペイン語入門	2人の教員がペアを組み、それぞれ週1回ずつ担当し、スペイン語の基礎を学習する。入門 ではまず、スペイン語のアルファベットと発音から学習を始める。また、動詞現在形の規則・不規則活用や基礎的な文法事項(名詞、形容詞、指示詞、所有詞、疑問詞、目的各人称代名詞、再帰動詞等)を身に付け、平易なスペイン語表現を理解し、スペイン語を使った簡単な表現ができるようになるということが目標である。辞書の活用法についても合わせて学習する。	
	スペイン語入門	2人の教員がペアを組み、それぞれ週1回ずつ担当し、スペイン語の基礎を学習する。入門 では、入門 で学習した内容を基礎としたうえで、動詞の様々な時制の活用と用法を学習していく。また、関係詞や比較、命令の表現等を学習し、より幅広いスペイン語の表現を理解し、また表現できるようになることが目標である。この先のスペイン語の学習に向けて、正しい文法知識を身に付け、それを今後活用していけるようになることも目標である。	
	スペイン語応用 1	入門I、 、あるいはインテンシヴ 、 を修了した学生のための中級クラスである。週1回、主として小説や歴史、時事等を扱ったテキストを用いて、入門で習得した文法知識をもとに、さらに読解力をつけるための勉強をしていく。語彙力を高めると同時に、さらなる文法知識を身に付けることも目標である。また、応用1の次のセメスターでは、連動している応用3を取ることが望ましい。	
	スペイン語応用 2	入門I、 、あるいはインテンシヴ 、 を修了した学生のための中級クラスである。週1回、中級文法や作文等を扱った教材、またオーディオ・ビジュアル教材を用いて、さらなるスペイン語力の強化を目指す。入門で身に付けた基礎文法知識をもとに、さらなる文法知識や表現力を身に付けることも目標である。応用2の次のセメスターでは、連動している応用4を取ることが望ましい。	
	スペイン語応用 3	入門I、 、あるいはインテンシヴ 、 を修了した学生のための中級クラスである。週1回、主として小説や歴史、時事等を扱ったテキストを用いて、入門で習得した文法知識をもとに、さらに読解力をつけるための勉強をしていく。語彙力を高めると同時に、さらなる文法知識を身に付けることも目標である。また、応用1と連動しているのので、応用1を取ってからこの授業に臨むことが望ましい。	
	スペイン語応用 4	入門I、 、あるいはインテンシヴ 、 を修了した学生のための中級クラスである。週1回、中級文法や作文等を扱った教材、またオーディオ・ビジュアル教材を用いて、さらなるスペイン語力の強化を目指す。入門で身に付けた基礎文法知識をもとに、さらなる文法知識や表現力を身に付けることも目標である。応用2と連動しているのので、応用2を取ってからこの授業に臨むことが望ましい。	
	スペイン語インテンシヴ	スペイン語をはじめで学習する人向けられたクラスである。日本人とネイティブの教員がペアを組み、日本人は主として文法を中心とした授業を行い、ネイティブは発音、会話等、発信面を中心とした授業を進めていく。定員も少なく設定され、生徒と教員の活発なやり取りをすることを旨とし、また、週3回の授業によってスペイン語の力を一層強化することを目的としている。インテンシヴ と連動しているのので、継続してインテンシヴ を取ることが望ましい。	
	スペイン語インテンシヴ	スペイン語をはじめで学習する人向けられたクラスである。日本人とネイティブの教員がペアを組み、日本人は主として文法を中心とした授業を行い、ネイティブは発音、会話等発信面を中心とした授業を進めていく。定員も少なく設定され、生徒と教員の活発なやり取りをすることを旨とし、また、週3回の授業によってスペイン語の力を一層強化することを目的としている。インテンシヴ と連動しているのので、継続してインテンシヴ から取ることが望ましい。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	スペイン語インテンシヴ	インテンシヴ、あるいは入門を終了した人のためのクラスである。日本人とネイティブの教員がペアを組み、日本人は主として読解を中心とした授業を行い、ネイティブはスピーチ、ディスカッション等、発信面を中心とした授業を進めていく。週3回の授業によってスペイン語の力を一層強化することを目的としている。インテンシヴと連動しているため、継続してインテンシヴを取ることを望ましい。	
	スペイン語インテンシヴ	インテンシヴを終了した人、あるいは同等の能力がある人のためのクラスである。日本人とネイティブの教員がペアを組み、日本人は主として読解を中心とした授業を行い、ネイティブはスピーチ、ディスカッション等、発信面を中心とした授業を進めていく。週3回の授業によってスペイン語の力を一層強化することを目的としている。インテンシヴと連動しているため、インテンシヴから継続して取ることが望ましい。	
	スペイン語インテンシヴ	インテンシヴ、あるいは応用クラスを修了した人のためのクラスである。ネイティブ教員が週2回担当し、スペイン語の読解、リスニング、表現、また作文等、あらゆる角度からスペイン語力を伸ばすことを目標としている。合わせて、スペイン語技能検定やヨーロッパ基準による検定試験(DELE)の合格も目指していく。	
	スペイン語インテンシヴ	インテンシヴ、あるいは応用クラスを修了した人のためのクラスである。ネイティブ教員が週2回担当し、スペイン語の読解、リスニング、表現、また作文等、あらゆる角度からスペイン語力を伸ばし強化することを目標としている。合わせて、スペイン語技能検定やヨーロッパ基準による検定試験(DELE)の合格も目指していく。	
	スペイン語文化事情 1	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましいアドヴァンスト・クラスである。この授業はスペイン語で行われ、オーディオ・ビジュアル教材を用いて、主として聞き取りの力の強化を図りながら、スペイン語圏の様々な文化と社会事情を学んでいくことを目的としている。また、プレゼンテーションの時間を設け、スペイン語圏の文化や社会についてスペイン語を使って調べ、考え、表現する力も同時に身に付けていく。	
	スペイン語文化事情 2	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましいアドヴァンスト・クラスである。この授業はスペイン語で行われ、オーディオ・ビジュアル教材を用いて、主として聞き取りの力の強化を図りながら、スペイン語圏の様々な文化と社会事情を学んでいくことを目的としている。また、プレゼンテーションの時間を設け、スペイン語圏の文化や社会についてスペイン語を使って調べ、考え、表現する力も同時に身に付け、強化していく。	
	スペイン語表現法 1	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましいアドヴァンスト・クラスである。ネイティブの教師の下で、スペイン語圏の様々な出来事や事象をテーマとして、自分の考えをスペイン語で表現するための訓練を行うことを目的としている。慣用句やことわざ、また言い回しなど、スペイン語独特の表現を幅広く身に付けていく。スペイン語の発信だけでなく、また受信能力を高めることも同時に目標としている。	
	スペイン語表現法 2	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましいアドヴァンスト・クラスである。ネイティブの教師の下で、スペイン語圏の様々な出来事や事象をテーマとして、自分の考えをスペイン語で表現するための訓練を行うことを目的としている。慣用句やことわざ、また言い回しなど、スペイン語独特の表現を幅広く身に付け、これらを状況にあてはめて実際に使いこなしていく力を身に付けていく。スペイン語の発信だけでなく、また受信能力を高めることも同時に目標としている。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	言語文化原典演習(スペイン語) 1	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましい、アドヴァンスト・クラスである。主として読解力の強化を目的とした授業を行う。文学作品や評論等、まとまった量の原書を読んでいく。この中で、辞書の正しい使い方を学び、またスペイン語の高い読解力を身に付けることが目標である。	
	言語文化原典演習(スペイン語) 2	スペイン語の応用1~4あるいはインテンシヴ、を履修済みか、それと同等の学力を持っていることが望ましい、アドヴァンスト・クラスである。主として読解力の強化を目的とした授業を行う。文学作品や評論等、まとまった量の原書を読んでいく。この中で、辞書を使いこなし、またスペイン語の高い読解力を一層強化していくことが目標である。	
	現代地域事情・上級講読(スペイン語圏) 1	応用1~4から2科目以上またはインテンシヴ までを履修済みの人、もしくはそれと同等の力を有すると認められた人を対象にしたアドヴァンスト・クラスである。辞書の正しい使い方を学び、新聞や雑誌の記事レベルのスペイン語を読み取り、正確に理解できる力を習得することが目標である。雑誌や新聞等を教材にすることにより、最新の情報を通して現代のスペイン語圏の事情について理解し、考えることもまた目標のひとつである。	
	現代地域事情・上級講読(スペイン語圏) 2	応用1~4から2科目以上またはインテンシヴ までを履修済みの人、もしくはそれと同等の力を有すると認められた人を対象にしたアドヴァンスト・クラスである。辞書を使いこなし、新聞や雑誌の記事レベルのスペイン語を読み取り、正確に理解できる力を習得することが目標である。雑誌や新聞等を教材にすることにより、最新の情報を通して現代のスペイン語圏の事情について理解し、考えることもまた目標のひとつである。	
	スペイン語会話初級 1	入門、インテンシヴIの授業を履修しながら、ネイティブの教員の下でスペイン語の表現力をつけることを目的とした随意科目である。文法知識も同時に身に付けながら、ネイティブの指導の下、正しい発音や実用的なスペイン語を習得していくことを目標としている。簡単なあいさつ表現から身の回りのことに関する表現まで、テーマは多岐にわたる。また、視聴覚教材も活用し、聴く力も同時に伸ばしていく。	
	スペイン語会話初級 2	入門、インテンシヴIの授業を履修しながら、ネイティブの教員の下でスペイン語の表現力をつけることを目的とした随意科目である。文法知識も同時に身に付けながら、ネイティブの指導の下、正しい発音や実用的なスペイン語を習得していくことを目標としている。様々な事柄について、スペイン語で考え、表現する力を身に付ける。また、視聴覚教材も活用し、聴く力も同時に伸ばしていく。	
	スペイン語会話中級 1	入門、 、あるいはインテンシヴ、 の授業で文法を一通り学習し終えた人、あるいは同等の能力があると認められた人のための随意科目である。ネイティブの教員の下でスペイン語の表現力を強化することを目的としている。多様な状況を設定し、スペイン語で表現し、またスペイン語を聞き取り、理解する力を伸ばすことを目標としている。また、視聴覚教材も活用し、聴く力も同時に伸ばしていく。	
	スペイン語会話中級 2	入門、 、あるいはインテンシヴ、 の授業で文法を一通り学習し終えた人、あるいは同等の能力があると認められた人のための随意科目である。ネイティブの教員の下でスペイン語の表現力を強化することを目的としている。多様な状況を設定し、スペイン語で表現すると同時に、スペイン語を聞き取り、理解する実践力をさらに身に付けていく。また、視聴覚教材も活用し、様々な角度から実践的なスペイン語力を伸ばしていく。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	スペイン語会話上級 1	応用1~4あるいはインテンシヴ を終了した人、あるいは同等の能力があると認められた人のための随意科目である。ネイティブ教員の下、様々なテーマについてスペイン語で考え、理解し、また、スピーチ、ディスカッション等を通して、スペイン語での表現力を一層強化していくことを目標としている。また、視聴覚教材も活用し、様々な角度からスペイン語での表現力を磨いていく。	
	スペイン語会話上級 2	応用1~4あるいはインテンシヴ を終了した人、あるいは同等の能力があると認められた人のための随意科目である。ネイティブ教員の下、また、様々な意見をもつものが集まり、多様なテーマについてスペイン語で考え、理解することを目的としている。また、スピーチ、ディスカッション等を通して、自分の意見をスペイン語で論理的に表現する力を一層強化していくことを目標としている。さらに、視聴覚教材も活用し、様々な角度からスペイン語での表現力を磨いていく。	
	ロシア語入門	文法事項のエッセンスをまとめた教科書を使い、2名の教員が週2回リレー式に授業を行う。ロシア語はキリル文字という独自のアルファベットを用いるので、その読み書きを学んだのち、動詞の3つの時制、名詞・代名詞の6つの格変化、形容詞・持ち主を表すことばの性・数変化等、ロシア語文法の基礎をひと通り学び終える。半年の学習によって、ロシア語の文章の組み立てが理解できるようになり、簡単な挨拶ができることを到達目標とする。	
	ロシア語入門	入門 では入門 とは別の教科書を2人の教員が交互に教えながら、軟変化や不規則な変化、動詞の命令形、数詞と名詞の結合、形容詞の短語尾・比較級・最上級等、入門 では学ばなかった文法事項を学習するとともに、ロシア語を使って話す能力、ロシア語を聞きとる能力、ロシア語を読む能力の育成を目指す。ロシア語で簡単な会話ができるようになるだけでなく、単語帳を与えられれば簡単なロシア語の文章が読めるようになることを目標とする。	
	ロシア語応用 1	入門 と で学んだ初級文法の知識を確かなものにししながら、さらに中級レベルの文法を身に付けることを目標にした授業である。授業の前半でその日のテーマとなる文法事項を学び、後半はそのテーマに沿った文法問題と読解の小テストを行う。提出された答えは翌週に返却し、解説を行ったのちに次のテーマへと進む。取り上げる文法事項は形容詞の短語尾、動詞の命令形、無人称文、動詞等であるが、これまでより難しい事項を学習させるため、能動的な態度で授業に臨むよう指導する。	
	ロシア語応用 2	エッセイや小説等の講読を通して、初級文法の応用力、とりわけ読解力を養うことを目標とする授業である。授業は、あらかじめ担当者を決めて準備してもらい、それを発表してもらったり、時間中に辞書を使って課題の翻訳に挑戦してもらったりして進めていく。また、授業の途中で、入門で学んだ文法の復習をしたり、まだ履修していない文法の補足を行ったりして読解の便宜を図る。読解力を向上させるため予習や授業中での自主的に学習するよう指導する。	
	ロシア語応用 3	入門 、 で学んだ文法の知識をもとに、簡単なロシア語の作文を行い、ロシア語で書く力を養うことを目的とした授業である。最初は具体的な文法項目(動詞の現在形・過去形・未来形、名詞の生格・与格・前置格等)に沿って作文を行うが、後半はシチュエーション(自己紹介する、買い物をする、電話をする等)に沿った作文を練習する。作文のためには文法的知識とともに語彙力も必要であるため、辞書を引くだけでなく、基本的な単語は積極的に覚えるように指導する。	
ロシア語応用 4	ロシア語テキスト用にロシアで作成されたドラマをビデオで鑑賞し、聞き取る力とシナリオを読み取る力を養うことを目的とした授業である。授業ではビデオを繰り返し見ながら、わかりやすい会話の部分聞き取る訓練を行う。一度聞いただけでは理解できない言葉も繰り返し聞かせ、だんだん理解を深めさせる。聞き取った後には、シナリオを見てその意味を読み取る練習をする。また、簡単な会話を実際に使ってみることで、話す能力の向上も目指す。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	ロシア語インテンシヴ	ロシア語を集中的に勉強して身に付けたいと希望する学生のための特別クラスで、日本人の教員とネイティブの教員とが連携して授業を行う。日本人の教員は文字と発音の勉強から文法の基礎まで、教科書に沿って説明をし、ネイティブの教員はその進度に合わせて、発音練習を行ったり、話したり、聞いたりする訓練を行う。ロシア語の文章の組み立てが理解できるとともに、ロシア語で簡単な挨拶ができることを目標とする。	
	ロシア語インテンシヴ	インテンシヴ と同様に、日本人の教員とネイティブの教員とが連携して授業を行う。日本人の教員はインテンシヴ を引き継いで、動詞の時制と体、関係代名詞、形動詞・副動詞等ロシア語の文献を読むのに必要な文法事項をひと通り教え、ネイティブの教員はロシア語でのコミュニケーション能力の育成を図る。ロシア語で簡単な会話ができるようになることと、辞書を引けば簡単なロシア語のテキストが読めるようになることが到達目標である。	
	ロシア語インテンシヴ	1年間学んだ文法の知識をもとに、さらに集中してロシア語力を高めたいと希望する学生のための特別クラスで、日本人の教員とネイティブの教員とが連携して授業を行う。ネイティブの教員はロシア語の発信能力・受信能力をさらに高めて、ロシアに行っても自分の意思を伝えられるレベルのコミュニケーション能力を身に付けることを目標とし、日本人の教員はエッセイ等簡単なロシア語の文章を、辞書を使って読みこなせる読解力の育成を図る。	
	ロシア語インテンシヴ	インテンシヴ を引き継ぎ、集中していっそうロシア語力を高めたいと希望する学生のための特別クラスである。インテンシヴ と同様に、日本人の教員とネイティブの教員とが連携して授業を行う。ネイティブの教員はロシア語の運用能力全般をさらに高めて、不自由なく日常会話ができるレベルにまで達することを目指し、日本人の教員は辞書を使って、簡単な文学作品・新聞記事等、様々テキストを読みこなせる読解力の育成を目指す。	
	ロシア語文化事情 1	ロシア語を2年以上学習した(あるいはそれに相当するロシア語力をもった)人々を対象とする上級クラスである。ここでは最新のロシア映画やアニメのビデオを見て、聞き取りの練習をしたのち、作品のシナリオを読んでその意味を理解させる。字幕のないビデオを聞き取ることは容易ではないが、回を追うごとに理解できる範囲を広げさせるよう指導する。また、最新の映画やアニメを楽しみながら、現代ロシアの文化にも親しんでもらう。	
	ロシア語文化事情 2	ロシア語文化事情 1を引き継いで、ロシア語の受信能力をさらに高める授業である。ここでは最新のロシア映画やアニメのビデオを見て、聞き取りの練習をしたのち、作品のシナリオを読んでその意味を理解させる。ビデオは現代ロシアの文化を映し出したものを選び、ビデオを見たのち、現代ロシアの文化をめぐって自由にディスカッションを行う。聞き取るだけでなく、その内容を語ることによって、コミュニケーション能力の向上も目指す。	
	ロシア語表現法 1	ロシア語を2年以上学習した(あるいはそれに相当するロシア語力をもった)学生を対象とする上級クラスで、ネイティブの教員が担当し、ロシア語の発信能力を高めると同時に、総合的なコミュニケーション能力の向上を目指す。ここではロシアの喜劇のビデオを見てその内容を聞き取り、シナリオを読んで内容を確認してから、ロシア語で自分の意見を述べる練習をする。細かい文法的な間違いにこだわらずに、自分の意見を述べるよう指導する。	
	ロシア語表現法 2	ロシア語表現法 1を引き継いで、さらにロシア語の発信力を高める授業である。ここでは現代ロシアの若者たちの生活を映し出したビデオを見てその内容を聞き取り、シナリオを読んで内容を確認してから、ロシア語で自分の意見を述べる練習をした後、受講者全員で、現代ロシアの生活・文化について、ロシア語でディスカッションする。自分たちの生活と比較しながら意見を交わし合うよう指導し、ロシア語のコミュニケーション能力向上を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	言語文化原典演習(ロシア語) 1	ロシア語を2年以上学習した(あるいはそれに相当するロシア語力をもった)人々を対象とする上級クラスである。ここでは辞書を使って様々なロシア語のテキストを読みながら、読解力の向上を図る。最初は簡単なアネクドット(小話)から始めて、しだいにレベルを上げていき、新聞や雑誌の記事が読めるまで読解力を高めていくことを目標とする。受講生の希望によっては、チャーホフの短編等、文学作品もテキストに取り上げる。	
	言語文化原典演習(ロシア語) 2	言語文化原典演習1を引き継いで、いっそう読解力を高める授業である。ここでは受講生の関心に応じて、プーシキンやトルストイ、ドストエフスキ等の文学作品、ネットで配信されている最新ニュース、映画のシナリオ、スポーツ・芸術に関する記事等、様々なテキストを取り上げる。文学作品を読むときは古語や方言、ニュース記事を読むときは、辞書に載っていない略語・新語等も調べる必要があるため、そうした言葉の調べ方も指導する。	
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏) 1	ロシア語の読解力を高めたい人のためのアドヴァンスド・クラスであるが、ロシア語の入門、(あるいはインテンシヴ、)を終え、応用1、2、3、4から2科目以上(インテンシヴの場合は)を履修済みであることが履修のための条件となる。辞書を使ってロシア語のテキストを読み解く授業であるが、ロシアの事情に触れてもらうことも目的の1つとする。テキストには現代ロシアの社会・風俗・文化等を扱ったものを選ぶ。	
	現代地域事情・上級講読(ロシア語圏) 2	現代地域事情・上級講読1を引き継いで、いっそうロシア語の読解力を高める授業である。読解力の向上とともにロシア事情にも触れてもらうことを目的とし、ネットで配信されているニュースから、ロシアの政治・経済・社会・文化にかかわるようなものを読解させる。また、それと同時にロシアという国を広く理解してもらうために、現代ロシアの生活を皮肉ったアネクドット(小話)やエッセイ・文学作品等も取り上げる予定である。	
	ロシア語会話初級 1	ロシア語会話の基礎を学びたい学生のためのクラスで、ロシア語をまだ学んだことのない人、ロシア語の基礎を学びなおしたいと希望する人も登録することができる。授業は、キリル文字と呼ばれるロシア語独特の文字とその発音との関係をしっかりと理解してから、ロシア語の挨拶の表現を学び、ロシア語で簡単な会話ができることを目指す。授業では適宜ロールプレイングも取り入れて、楽しみながらロシア語会話の基礎が身に付くよう配慮する。	
	ロシア語会話初級 2	会話初級1を引き継いで、難しい発音や、例外的な文字の読み方等を復習してから、ロシア語会話の基礎を学習する。初級1では挨拶の言葉にふれたが、初級2では友人を紹介する会話、自分の家族や自分の学校のこと、自分の趣味等、自己紹介の表現を学び、ロシア語でお互いを理解できる能力を養う。また、他人になりきるといったロールプレイングの方法も取り入れて、楽しみながらロシア語の表現力を高められるように配慮する。	
	ロシア語会話中級 1	ロシア語文法の基礎を身に付けた学生のための会話クラスで、会話初級を学習していない学生でも受講できる。初級会話では挨拶の表現、自己紹介の表現等にふれたが、ここでは店で買い物をしたり、道を尋ねたりする表現を学習する。同時に、相手の言葉をよりよく理解するために、聞き取り能力を高める訓練も行う。受講生がペアになって、相手に質問したり、答えたりする練習を通して、日常会話が自然に身に付くことを目指す。	
	ロシア語会話中級 2	会話中級1を引き継いで、日常会話の能力をさらに高めることを目標とする授業である。ここではアニメ等、子供向けのビデオ教材を見て内容を理解するとともに、その感想をロシア語で表現する練習をする。ビデオ教材を聞き取ることは容易ではないが、繰り返し聞かせることによって、少しずつ理解できるよう指導する。また、ロシア語で述べられた感想をめぐって、お互いに議論をする練習も行い、ロシア語による簡単な討論の訓練も行う。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択 必修 科目 C 群 (外国語 関連 科目 群)	ロシア語会話上級 1	ロシア語を2年以上学習した(あるいはそれに相当するロシア語力をもった)学生のための会話クラスであるが、ロシア語会話初級あるいは中級を受講していない者でも履修できる。ここではテレビドラマ等を聞き取って理解し、その感想をロシア語で表現する練習をする。また、その感想をめぐってお互いに議論し、自分の意見を正確に伝える訓練も行う。このような討論の実践を通じて、かなり難しい会話を行う能力を養成する。	
	ロシア語会話上級 2	会話上級 1を引き継いで、ロシア語会話の能力をいっそう高めようとする授業である。ここではテレビニュースのような聞き取りにくいビデオ教材を繰り返し聞き、その内容を理解するとともに、そのニュースに対する自分の意見を的確に表現する練習を行う。また、ニュースで扱う様々な政治的・社会的・文化的問題に関して討論できる能力も養わせる。こうした訓練を通じて自在な会話能力を身に付けることが最終的な到達目標である。	
	ロシア語入門	同志社大学では、朝鮮半島の人々および朝鮮半島にルーツを持ちながら日本・中国・アメリカ等世界各地に移住した人々が使っている言語について、ロシア語という言語名を用いている。入門 では、現代ロシア語の文字と発音の学習から始めて、「です、ます」という丁寧な表現、英語のB E動詞にほぼ相当する指定詞、物の有無を表す存在詞、漢数詞、固有数詞等の文法事項を体系的に学習する。数詞を正しく表現でき、聞き取れるようになれば買い物ができるようになる。ロシア語は言語構造が日本語と非常によく似ているので、3カ月も集中的に勉強すれば簡単な手紙を書いたり小説を読んだりできるようになるが、発音が難しいので、会話、特に聞き取りが正確にできるようになるまでにはかなり時間がかかる。受講するに際して予備知識は必要とならないが、文字が特殊なので最初の1カ月はきちんと授業を聞いてその都度復習をしておかないと、黒板の文字すら写せず、授業に取り残されることとなる。夏休みに簡単な日記が書けることを入門 の目標とする。	
	ロシア語入門	入門 に引き続いて、辞書を調べて簡単な文を作ったり訳したりするところまでを目標に、体系的にロシア語を学習する。非常に単純化して言うと、名詞に助詞を付け、動詞や形容詞には活用語尾を付け、日本語と同じ順序に並べていけばロシア語は話すことができる。入門 の中心となる文法事項は、尊敬、連体形(現在/過去/未来)、否定形、変則活用、한디体、引用文である。連体形は複雑な文章を作るためにはなくてはならない項目であり、変則活用はロシア語にも存在する。尊敬の表現は会話の基本として非常に重要であり、한디体と引用文は文章語の基本なので、上のクラスに進むには必須の項目である。	
	ロシア語応用 1	応用 1では現代ロシア語文法の残りの部分を学びながら、それに対応する作文の練習を行う。具体的には、체体(略待)、下称疑問形、意図、目的、理由、並行動作の語尾、-기による慣用句、単語間の連音化、口蓋音化、「ㄴ」挿入、等で、これ乗り越えようと、自分の言いたいことを一通りは言えるだけの力が付いたことになる。300語の基本語句リストを配布し、授業中にテストを行う。	
	ロシア語応用 2	ロシア語応用 1に対応した講読練習を行う。短い文から始めて次第に長い文章を読解できるように、段階を踏んで学習していく。あわせて基礎的な作文練習を行う。論説文のような論理的に展開される文章を一通りは読めるだけの力を付けることがこの科目の目標となる。	
ロシア語応用 3	ロシア語応用 1に続いて中級の文法項目を学習しながら、それに対応した作文練習を行う。具体的には、命令形の引用文とその縮約形、理由の語尾、感嘆の語尾、婉曲の語尾、勧誘形、-기による慣用句、単語間の音変化、特殊な濃音化、会話文における縮約形、等である。また、300語の基本語句リストを配布し、授業中にテストを行う。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	コリア語応用 4	コリア語応用 3の文法項目に対応した講読練習と作文を行う。コリア語の言語形式は日本語と非常によく似ているので、基本的な文法さえ修得すれば講読と作文はかなり複雑なものでも日本語からの類推でそれなりにこなすことができる。文章の読解と共に、韓国・朝鮮人の行動様式や思考様式等についても学習する。	
	コリア語インテンシヴ	コリア語インテンシヴ は週3コマ連動の授業で、文法2コマと発音・会話・語彙1コマを履修することにより、総合的にコリア語を学習できるように計画されている。レギュラー・クラスと同様に予備知識は不要で、文字と発音の練習から学習を始める。文法を中心とするクラスでは、基本的な助詞をはじめ、聞き手に対する「です、ます」という丁寧な表現、漢数詞と固有数詞・助数詞、過去形等の文法項目を中心に学習する。運用能力面では、慣用的な言いまわしを用いた挨拶や自己紹介ができること、平易な語句や文章を正しく音読でき、辞書を引いて内容が理解できること、そして自分の知っている単語を用いて、簡単な文章が書けること等が目標となる。発音・会話・語彙を中心とするクラスでは、ハングルが正確にすらすら読めることを目標とし、語彙に関しては『実用韓国語』の巻末に載っている《実力強化用単語リスト》を中心に、この時間にテストを行う。これと共に慣用的な言いまわしを用いて挨拶や自己紹介ができることを目標とする。	
	コリア語インテンシヴ	インテンシヴ と同様、週3コマ連動の授業で、文法2コマと発音・会話・語彙1コマを履修することにより、総合的にコリア語を学習できるように計画されている。文法を中心とするクラスでは、基本的な助詞をはじめ、聞き手に対する「です、ます」という丁寧な表現に加えて丁寧さを一切含まない表現、連体形の現在・過去・未来、尊敬補助語幹、変則用言等について学習する。また引用文、可能・不可能・義務・可否等の基本的な慣用句についても学習する。これらを通じて、状況・場面に応じて適切な挨拶や紹介・対応等ができること、平易な語句や文章を正しく音読でき、辞書を引いて内容が理解できること、そして自分の知っている単語を用いて、簡単な文章が書けること等を目標とする。発音・会話・語彙を中心とするクラスでは、音変化を含むハングルが正確にすらすら読めることを目標とし、語彙に関しては、『実用韓国語』の巻末に載っている《実力強化用単語リスト》を中心にテストを行う。これと共に状況・場面に応じて適切な挨拶や紹介・対応等ができるようになることを目標とする。	
	コリア語インテンシヴ	コリア語インテンシヴ は週3コマ連動の授業で、文法2コマと会話/語彙1コマを体系的に履修する。原則的にはコリア語インテンシヴ 履修者が対象なので、入門 / 履修者の場合は、簡単な面接が必要となる。文法の授業では、教材の第1課～第7課を中心として、引用文命令形、勧誘形等を学習する。その他様々な接続語尾や複雑な音変化、漢字音等についても学習する。また、簡単な記述文・手紙・掲示等を読み、理解することができること、簡単な手紙や日記を書くことができること等が目標となる。会話/語彙では簡単な依頼や伝言、道案内等ができ、電話での簡単な取次ぎをすることができるレベルを目標とする。それに加えて与えられたテーマに関してディスカッションができるようなレベルまで語彙量を増やしていく。このために約500語の語彙を別途準備し、会話の時間にテストを行う。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 (外国語関連科目群)	コリア語インテンシヴ	文法2コマと、会話/語彙1コマがセットになった授業である。 『実用韓国語2』の第8課から第12課まで進み、補充教材の講読を行う。 [聞く・話す] 電話での簡単な取次ぎをすることができることを目標とする。 [読む] やや長い文章の要点を読み取ることができることを目標とする。 [書く] やや長い文章を聞きとってその要点を書くことができ、また短いレポートを書くことができることを目標とする。 [文法項目] 命令・勧誘・禁止、条件文、時の表現、使役と受身、日本語と異なる漢字音、複雑な音変化、品詞の転換。 [語彙] 約450語。	
	コリア語インテンシヴ	コリア語インテンシヴ は、週2コマ運動の授業で、インテンシヴ～で学んだ内容をもとに、継続してコリア語の着実な基礎力を固め、運用能力を高めるためのクラスである。現地の大学・大学院・研究所に正規留学した場合に、講義内容が十分に理解できるような聴解力、書籍・資料を読みこなす読解力、あるいはレポートや論文を執筆できる文章表現力を養うことを目標とする。	
	コリア語インテンシヴ	(1) 比喩の表現等、より高いレベルの多様な表現を学習する。また、インテンシヴと同じように様々なテーマに関する課題の解決を通じて、語彙量を増やしていく。 (2) 上級レベルのコリア語の運用能力を獲得し、レポートや論文の作成、学校や職場での発表・高度なディスカッションなど、実際の場面でのスムーズな意思疎通ができることを目標とする。 (3) 聞き・読み・話し・書きの4つの技能の練習を通じて、バランスのとれた理解・表現能力を養わせる。	
	コリア語文化事情 1	様々な情報(ニュース・講演・映画等)を摂取し、情報を比較相対化しつつ自らの知に統合し、それらの情報を利用して独自の主張を外国語で展開する能力を養成することを目標とする。ここでは、ラジオ報道・講演テープなど、主に耳から入る音声情報を中心とした教材を用い、聞き取り能力の向上を図る。	
	コリア語文化事情 2	様々な情報(ニュース・講演・映画等)を摂取し、情報を比較相対化しつつ自らの知に統合し、それらの情報を利用して独自の主張を外国語で展開する能力を養成することを目標とする。ここでは、主として映画等、目と耳から入る映像と音声情報を中心とした教材を用い、聞き取り能力の向上を図る。	
	コリア語表現法 1	文法事項としては、変則活用や引用文がきちんと修得できていることが要求される。日本語の直訳ではなく、コリア語らしい表現で作文する練習を通して、円滑なコミュニケーション能力を養成することを目標とする。表現法1では論文を書く前段階として、800字程度の短いレポートを作成するための作文能力の獲得を目指す。	
	コリア語表現法 2	ある程度まとまった文章の表現練習を通して、円滑なコミュニケーション能力を養成することを目標とする。表現法2では論文を書く前段階として、1000字から2000字程度の短いレポートを作成するための語学力の獲得を目指す。	
	言語文化原典演習(コリア語) 1	文法事項としては、変則活用や引用文がきちんと修得できていることが要求される。歴史性・普遍性をキーワードに、コリア語の背景をなす文化事情を学ぶ上級の講読科目で、論説文を読みこなす力を養成することを目標とする。	
	言語文化原典演習(コリア語) 2	「読む」という行為を、単に受動的な作業にとどまらせるのではなく、様々なリーディング・ストラテジーを取捨選択しながら、常識・経験・知識・判断等を積極的に用いて、テキストと関わり合う主体的な行為に高めることを目標に、主として韓国・朝鮮の歴史・経済・文化等に関して論述した文を教材としながら、記述された事実を様々な視点から検証しつつ読み解く能力を養成する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	現代地域事情・上級講読 (コリア語圏) 1	現代性・地域性をキーワードとし、量的にも質的にも高度な文献を講読することが目標である。「読む」という行為を、単に受動的な作業にとどまらせるのではなく、様々なリーディング・ストラテジーを取捨選択しながら、常識・経験・知識・判断等を積極的に用いて、コリア語のテキストと関わり合う主体的な行為に高める。ここでは、主として新聞・雑誌等の事実を述べた報道記事を教材としながら、記述された事実を様々な視点から検証しつつ読み解く能力を養成する。	
	現代地域事情・上級講読 (コリア語圏) 2	現代性・地域性をキーワードとし、量的にも質的にも高度な文献を講読することが目標である。「読む」という行為を、単に受動的な作業にとどまらせるのではなく、様々なリーディング・ストラテジーを取捨選択しながら、常識・経験・知識・判断などを積極的に用いて、コリア語のテキストと関わり合う主体的な行為に高める。ここでは、主として新聞・雑誌・インターネットの記事を教材としながら、記述された事実を様々な視点から検証しつつ読み解く能力を養成する。	
	コリア語会話初級 1	文法中心の授業だけでは満足できない人のためのクラスである。慣用的な言いまわしを用いて挨拶や自己紹介ができる、銀行・郵便局等の窓口で用をたすことができる、簡単な買い物ができる、等を目指す。発音に関しては、基本的な音変化(鼻音化・流音化・激音化)を徹底して学習する。	
	コリア語会話初級 2	状況・場面に応じて適切な挨拶や自己紹介ができること、買い物ができることを目標とする。そのためには数詞を使いこなし、それに付随する様々な状況判断が要求される。また、会話の練習を通じて現代韓国の文化についても触れる予定である。発音に関しては、基本的な音変化(鼻音化・流音化・激音化・口蓋音化)を徹底して学習する。	
	コリア語会話中級 1	銀行・郵便局・駅等の窓口で用をたすことができることを目標とする。これらの事項をより深く理解するために、韓国・朝鮮の歴史や文化についても紹介する予定である。	
	コリア語会話中級 2	簡単な依頼・伝言・道案内等ができることや、電話での簡単な取次ぎができることを目標とする。これらの事項をより深く理解するために、韓国・朝鮮の歴史や文化についても紹介する予定である。	
	コリア語会話上級 1	具体的な場面で使える実用会話を学びながら、与えられたテーマに関してディスカッションできるところまでを目標にして学習する予定である。	
	コリア語会話上級 2	目標は、ラジオやテレビの報道番組・講演テープ等、主に耳から入る音声情報を中心とした教材を用い、聞き取り能力の向上を図るとともに、耳から得た情報を的確に把握し、自分自身の言葉を用いて情報を再構築した上で、それに基づいて自己の主張を組み立て、グループ等によるディスカッションができることである。	
	地域文化理解のための インドネシア語 1(文法)	基本的文法事項を習得させることを目標とする。まず個々の事項の説明を行い、次いで、関連の練習問題を多くさせる形で授業を進め、これによって上記の目標達成を図る。本講義で取り上げる文法事項は、基本句型、修飾関係、指示代名詞、人称代名詞、形容詞・副詞の比較表現、接続詞、動詞の接頭・接尾辞、時相、等である。特に、接頭辞のつけ方のルール習得は、以後の学習にとって最重要なので、この科目での学習中に習得の徹底を図る。	
	地域文化理解のための インドネシア語 2(文法)	インドネシア語1の科目で残された文法事項の習得を目標とする。まず個々の事項の説明を行い、次いで、関連の練習問題を多くさせる形で授業を進め、これによって上記の目標達成を図る。本講義で取り上げる文法事項は、能動と受動、関係代名詞・関係副詞の用法、接続詞を使った名詞節・従属節の作り方、等であり、これらの習得を通して、構文把握力を身に付けさせる。あわせて、数詞、時間・暦表現等の知識を与える。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	地域文化理解のための インドネシア語 3 (コミュニケーション)	インドネシア語の音を発音し聴きとることに慣れ、インドネシアの人との間で想定される初歩的な対話ができる能力を習得させることを目標とする。学期初めの3～4回を使って、「誰、何、何時、何処、幾つ、何故」等の質問文と回答文の作り方を学習させる。その後は、毎回、適量の課題文を使い、その内容理解、音読練習、暗誦練習をした後、その内容についての会話を受講者同士で行わせることによって、会話力の基礎を身に付けさせる。	
	地域文化理解のための インドネシア語 4(講読)	インドネシアに関する知識を、インドネシア語を使って獲得する能力を習得させることを目標とする。本講義では、既習の文法的知識を使ってテキストを精読することを通して、正確な構文理解の力を身に付けさせることに重点を置く。インドネシアの地理、文化、歴史に関する事柄を内容とし、コンパクトにかつ平易に書かれた文章をテキストに使い、一授業時一テーマとして授業を進める。学期終了時には、インドネシア語の読解力だけでなく、インドネシアについての初歩的知識も身に付いているようにしたい。	
	地域文化理解のための インドネシア語 5(講読)	インドネシアに関する知識を、インドネシア語を使って獲得する能力を習得させることを目標とする。本講義では、比較的分量の多いテキストを読むことを通して、インドネシア語を読むことに慣れさせることに重点を置く。インドネシアの地理、文化、歴史に関する事柄を内容とし、コンパクトにかつ平易に書かれた文章をテキストに使い、一授業時一テーマとして授業を進める。学期終了時には、読解力がさらに進むとともに、インドネシアについての知識がさらに広がっているようにしたい。	
	地域文化理解のための トルコ語 1(文法)	トルコ語は、シベリアから東欧に分布するテュルク諸語のひとつであり、今後ますます国際政治経済における重要度が高まる、トルコ共和国の公用語である。本科目は、初学者向けにアルファベットからはじめ、トルコ語の会話・講読双方に不可欠な基礎文法習得を目的とする。トルコ語は日本語と同じ膠着語であり、不規則変化が少なく、日本語話者にとって比較的習得が容易な言語である。ただし初歩段階において、母音調和や各時制の人称語尾変化等、やや独特な規則の習得が必須である。講義では練習問題を多用しながら、トルコ語基礎の理解度、規則への習熟度を高める。	
	地域文化理解のための トルコ語 2(文法)	本講義は、日本語も入っているアルタイ語族に属するトルコ語の文法の習得に努める。単に文法を教えるのではなく実際に使う場面での実践を通して文法を教える。講義に参加し、課される宿題等を含め履修する者は、基本会話と文献の解読に必要な基本的な文法知識を身に付けることができる。	
	地域文化理解のための トルコ語 3 (コミュニケーション)	グローバル地域文化の多様性を意識するためには多様な言語を学ぶ必要がある。その一例として、本講義ではトルコ語コミュニケーションを学ぶ。アジアとヨーロッパを結ぶ国であるトルコ共和国の歴史、現代の政治や経済体制と現代社会についての新聞記事やエッセイ等の資料を利用しながら、トルコ語コミュニケーションを練習し、同時にトルコ社会や文化についても学ぶ。講義の前半ではオスマン帝国時代の歴史も含めながら、トルコ語の歴史や現代のトルコ語による社会変化も紹介する。	
	地域文化理解のための トルコ語 4(講読)	本講義では、トルコ語3で学んだトルコ語コミュニケーションに基づいて、現代のトルコ社会についての新聞記事や教科書を講読し、自分でトルコ語でのエッセイを作成できるよう指導する。また、トルコ語でのグループ発表を準備しながら、学生のチームワーク経験を深める。トルコ語の上級レベルの学習になる本講義では、ヨーロッパ、アジア、ロシア、アフリカと中東という各地域の間にある多文化社会トルコのグローバル社会観や各地域に対する国際関係についても紹介する。	
	地域文化理解のための トルコ語 5(講読)	トルコ語の上級レベルの学習になる本講義では、トルコの歴史や文化、時事的話題、さらにはトルコ・イスラム文化の精神を理解できるように、トルコ語で著された文献の精読に努める。講義の際に適宜配布されるトルコ語の文献を元に、受講者と共に討議を加えながら、トルコ文化の理解を深めていく。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 必 修 科 目 群 (外 国 語 関 連 科 目 群)	地域文化理解のためのポルトガル語 1(文法)	ブラジルのポルトガル語に焦点をあてて、ポルトガル語の標準的文法を学習する。名詞、形容詞の性・数一致、動詞変化のメカニズムの理解や直説法の主な時称及び接続法の活用と用法等を概観する。それぞれの文法の形式の基本的意味や用法に触れ、読解力の基礎を養わせる。4技能(「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」)の基礎的な力を身に付けさせ、特に「聞く」力を訓練してポルトガル語2(文法)の学習に備えさせる。	
	地域文化理解のためのポルトガル語 2(文法)	本講義では、ポルトガル語1(文法)で習得した発音や文法事項を再確認することから始め、基本的な文章を理解するために必要な文法事項を体系的に習得することを目標とする。同時に会話や講読の授業へとつなげていけるよう、基礎語彙や日常会話において頻出の表現等も身に付けさせる。4技能(「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」)を総合的に向上できるように、文法事項の解説と練習問題の反復に留まらず、それぞれの文法事項に関連した聴き取りや書き取りの練習も随時取り入れる。	
	地域文化理解のためのポルトガル語 3 (コミュニケーション)	既習の文法知識をもとに、4技能(「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」)の中でも特に「聞く」力と「話す」力を養成する。様々な種類のポルトガル語に触れることにより、文語体と口語体、地域方言や社会方言等の言語変種に関する理解を深め、それにより、実践において状況に適したヴァリエーションを区別できることを目標とする。授業は可能な限りポルトガル語で行い、ペアワーク等も取り入れ、学生がポルトガル語を受信するだけでなく、同時に発信できる環境を作るよう心がける。	
	地域文化理解のためのポルトガル語 4(講読)	既に学んだポルトガル語の文法知識を踏まえて、読解力と表現力を養う。ポルトガル語を通じてブラジルの社会や文化についての理解を深めることを目指す。ブラジル人の日常生活を描く短編小説や、ブラジル社会の動向を伝える新聞・雑誌の記事等を精読する。必要に応じて、文法事項の解説や、テーマとなっている問題に関する解説も行っていく。	
	地域文化理解のためのポルトガル語 5(講読)	ポルトガル語の構文を理解しながら、読解力と表現力を養う。ブラジルの歴史や文化、現代の時事的話題を理解できるような、ポルトガル語で著された教材を精読する。インターネットで入手できるブラジルのメディア情報も積極的に活用する。ジャーナリスティックな文章や歴史家の標準的なポルトガル語の文献を講読し、中級から上級の文法に親しめるようにしたい。	
	地域文化理解のためのアラビア語 1(文法)	アラビア語文法の基礎を学ぶ。アラビア語文法学習の歴史はイスラームという宗教聖典『クルアーン』を信徒たちの間で世代から世代へと正しく読み継がれるために発展したものである。具体的には天使がアッラー(神)の御言葉を預言者ムハンマドに読み伝えた、その朗誦と同じ朗誦を世代から世代へと伝えるために発展したものである。そのためアラビア語文法は啓示が結集された『クルアーン』を正しく再生するために必要な規則をまとめあげたもので、世界の言語の文法規則とは際立った特徴を維持している。またアラビア語の規定の科目履修者、あるいはアラビア語のレベルが一定の段階に達したと認められる履修者は、神学部とカイロ大学との協定に基づいた「カイロ国立大学アラビア語検定試験(初級、中級、上級)」(同志社大学で実施)の受験を奨励する。	
	地域文化理解のためのアラビア語 2(文法)	アラビア語1(文法)に引き続きアラビア語文法の基礎を構文を中心に学ぶ。講義ではアラビア語を母国語とするアラブ人が実際に国文法として学ぶ学習事項を網羅したテキストを用い、それに日本人学習者と教授する経験から改良した解説プリントを配布して活用できるようにする。到達目標はアラビア語の基本表現を暗誦し、暗記してアラビア語で表記できるようになること、またそれらの表現の文法を理解し説明できるようになることである。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	地域文化理解のためのアラビア語 3 (コミュニケーション)	本講義ではアラビア語での日常会話、及びイスラム文化について学習する。講義内では主に日常会話表現や文法の確認を行う。具体的には、ざっくりばらんな会話の練習や、自分の考えを記述する練習を行い、会話能力の向上を図る。また、アラビア語での会話や記述能力向上のため、毎週課題を課す。アラビア語会話を通じて、アラビア文化、イスラム文化についておよびアラビア文化圏、イスラム文化圏の生活についての知識を深めることを本講義の到達目標とする。	
	地域文化理解のためのアラビア語 4(講読)	イスラーム世界の共通語であり、中東・北アフリカの主要言語であるアラビア語の文法の理解を図る。また構文の習得と語彙の増強によって、読解の基礎力向上を目指す。アラビア語による基本的な文章の作文および読解ができるようになることを目標とする。	
	地域文化理解のためのアラビア語 5(講読)	イスラーム世界の共通語であり、中東・北アフリカの主要言語であるアラビア語の文法習得を目的とし、講読の訓練を行う。また、アラビア語の学習を通じてアラブの文化・社会・歴史・宗教に関する理解を深めていく。アラビア語による基本的な文章の作文及び読解ができるようになることを目標とする。	
	イタリア語初級	ヨーロッパ文明の源流のひとつである、イタリア文化を理解する上で不可欠な、イタリア語の初級文法を学習する。本講義では、「現在」を基調とし、現在時制の動詞の活用を反復的に練習することで、その完全な修得を心がけるのみならず、自己紹介をはじめとして自分の現在の状況を説明したり、簡単な意見を述べることで、イタリア語によるコミュニケーション能力の初歩の修得を目指す。また、イタリア語の音とリズムに親しむため、発音する機会をなるべく多く持たせる。	
	イタリア語初級	イタリア語初級 に続き、イタリア語初級文法を学習する。本講義の中心となるのは、イタリア語の「時制」であり、複数の過去形や未来形等、様々な動詞の時制の学習を通じて、時間的な厚みを備えた複雑な思考や、錯綜したコミュニケーションの理解力を培うことを目的とする。また、既に初級文法の基礎が身に付いている受講生を対象としているため、短い会話文の聴き取り等を取り入れ、文字や概念だけでなく、音も合わせた総合的なイタリア語の理解力の修得を目指す。	
	地域文化理解のためのイタリア語 1 (コミュニケーション)	インターネットをはじめとする様々なニューメディアが普及し、グローバルな時代を迎えた現代において、言語コミュニケーション能力には、「読む、書く、話す」の全ての領域での迅速さが要求されている。本講義は、とりわけ会話において、そうした現代社会に必要とされる迅速なイタリアの言語対応能力を培うことを目的とする。そのため、通常の会話の授業以上に、(1)学生の発言回数を多くし、(2)定型句や使用度の高いフレーズを繰り返し口に出させて、イタリア語におけるコミュニケーション能力の向上に努める。	
	イタリア語中級	イタリア語の実践的運用能力を身に付けることを目的とし、その中級文法を系統的に学習する。既に簡単な事柄や事実を、多少複雑な時制も含めて表現することを修得した学生を対象とし、より高度なコミュニケーション能力の養成を目指す。本講義では、とりわけ動詞の4つの法(直説法、条件法、命令法、接続法)の学習を軸に、言語表現において伝えられるのは、内容や意味だけではなく、相手との関係性など、より複雑なものも含まれるということを具体的な個々の表現に基づいて学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目C群 (外国語関連科目群)	イタリア語中級	イタリア語で記述されたテキストの読解を通じて、イタリア語初級～中級で学んだ文法を、実践的に整理し直す。本講義は、とりわけコミュニケーションにおけるイタリア語の運用能力を培うことを目的としているため、テキストは、会話表現を学ぶことのできるものを中心に選定する。文法と講義を取り合わせた講義となるため、文法の深い理解と、伊書を正確に読解する能力の養成が主目的となるが、その双方を成り立たせている、イタリア文化やイタリア人の価値観等の理解についても、学習の重要な点として位置づけ、指導する。	
	地域文化理解のためのイタリア語 2(講読)	それまでに学んだイタリア語の文法知識を活用しながら、長文テキストを読んでいく。基本的な読解スキルを習得するとともに、イタリアの地域文化・言語文化への理解を深めることを目的とする。教材には、小説、論説文、新聞・雑誌の記事等を用いる。辞書を引きながら、書かれた内容を正確に把握し、またその内容を適切な日本語で表現できるようにすることを目標とする。テキストの背景にある歴史、文化、社会についても考察する。	
	地域文化理解のためのイタリア語 3(講読)	イタリア語の読解スキルを向上させ、運用能力を高めるとともに、イタリアの地域文化・言語文化への理解を深めることを目的とする。小説、論説文、新聞・雑誌の記事等、様々なテキストを読むことを通じ、文章を正確に読み、その内容を日本語で適切に表現する力を向上させることが目標である。また、テキストを手掛かりとして、イタリアの社会、政治、歴史、文化の諸問題についても考察する。必要に応じて、映画等の映像メディアも利用する予定である。	
	地域文化理解のためのフランス語(カナダ) 1(講読)	フランス語の基礎を1年間学習した学生を対象に、カナダ、特にケベック社会-文化について、平易なフランス語で書かれたテキストを読みながら学ぶ。テキストは、カナダの社会、歴史、文化、経済等、様々な分野において誰もが興味を覚えるような話題を扱い、読解を助ける語彙の説明を加えており、それらを読み進めることでフランス語の読解能力を高めるとともにカナダのフランス語社会に関する知識をバランスよく学んでいく。	
	地域文化理解のためのフランス語(カナダ) 2(コミュニケーション)	フランス語を1年間学習した学生を対象に、カナダのフランス語を理解し現地の人々とコミュニケーションができるように練習する。カナダとフランスのフランス語は書き言葉としてほとんど同じだが、発音はずいぶん違うため、まずはカナダフランス語の音韻体系を説明し、映画や歌、インターネット等を活用して聞き取り能力を高める。さらにカナダにおける様々な日常的場面を取りあげ、カナダ特有の語彙を学習し、読み取り能力及び会話の能力を高めていく。	
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	ヨーロッパ地域文化の形成 1	本講義では多様な資料と映像を用いて、ドイツ現代史を中心に、ヨーロッパ文化を「衝突と和解」という視角から読み解く。戦後ドイツ社会の歩みは、周辺諸国との和解を見据えた「過去の克服」に特徴づけられるが、男性兵士と女性の関わりをめぐる問題については加害と被害をめぐる錯綜した論争が現在も続き、世論の注目も高い。本講義では、独ソ戦とベルリン陥落という歴史的事象における、ジェンダー・人種/民族・セクシュアリティ・権力の織りなす関係を読み解くことを通じて、ヨーロッパにおける戦争の記憶をめぐる動きに迫りたい。	
	ヨーロッパ地域文化の形成 2	本講義の目的は、植民地主義によって被支配地とされたアメリカ・アジア太平洋・アフリカ諸地域との関係におけるヨーロッパの歴史と社会を理解することである。史上最大の植民地帝国を形成したイギリスの経験の中心にヨーロッパによる植民地支配の歴史を概観しつつ、〈労働〉、〈教育〉、〈ジェンダー〉、〈人種主義〉、〈文化〉等の主要テーマに沿って具体的に論じ、近代世界のグローバル化におけるヨーロッパ地域の役割とそれが生みだした様々な矛盾や問題について考察していく。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目 A 群 (地域文化研究科目群)	ヨーロッパ地域文化 形成論 1	本講義では、フランス第二帝政から第三共和政初期の政治的・経済的激動によって変容した社会空間において、《モデルニテ(近代性)》に対する意識がどのように形成されたのかを、同時代の文化特に、文学、絵画、写真に表象された様々なイメージを分析することによって歴史的に考察する。特に第二帝政期におけるオスマンによるパリ大改造事業と都市空間の変容、鉄道網の飛躍的発展とレジャーの流行、新たな視覚装置の発明と大衆娯楽産業の隆盛などに焦点をあて、それらの表象の分析を通して、《モデルニテ》の生成過程を検討する。	
	ヨーロッパ地域文化 形成論 2	表現主義の監督フリッツ・ラングによるドイツ中世叙事詩の映画化「ニーベルンゲン」、文豪ゲーテの作品をもとにしたムルナウ監督の「ファウスト」、東欧のユダヤ人共同体に伝わる土人形伝説を扱った映画「ゴレム」、20世紀初頭の発展する都市ベルリンの様子を記録した「伯林/大都会交響曲」、ワーグナーのオペラに心酔したバイエルン王ルードヴィッヒ2世を描いた「ルードヴィッヒ/神々の黄昏」、ベルリンの壁崩壊の時代を映し出す「ベルリン天使の歌」等、文化史上の主要な事象を題材とした映像作品を見ながら、ドイツ文化形成の歴史を学ぶ。	
	ヨーロッパ地域文化 形成特論 1	ヨーロッパの端の端に位置する弱小国イギリスが、繁栄を極めるにいたった近代そこではいかなる文化が形成されたかを探る。18世紀と19世紀を中心とした文学、絵画、建築・庭園等の特質を、社会の制度との双方向の影響関係をみながら検証していく。「繁栄を極める」社会の背後には、もともと4つの王国から創られたがための微妙な不協和音、他のヨーロッパ諸国からの独特の距離感、大英帝国としての拡大がもたらすアイデンティティ・クライシス等、影の部分があるのも見落とせない。文化の中に社会を、社会の中に文化を読み取っていきいたい。	
	ヨーロッパ地域文化 形成特論 2	スペインはヨーロッパでありながら中世イスラム文化圏に属していたという過去を持ち、近世には大航海時代を切り開いて、ヨーロッパ以外の諸文化がヨーロッパに入ってくる窓となった。さらに強大な海軍力を背景にベルギー、オランダにも領地を拡げ、ヨーロッパ中の王家に威容を誇った。このようなスペイン独特の文化形成と、その背景を概観すると同時に、それらが現代のスペインのアクチュアルな状況にどのようにつながってくるのかを考察する。対象は主として近代以降のスペインであるが、必要に応じてそれ以前のスペイン史上のテーマを扱うこともある。本講義を履修することによって、受講者はヨーロッパの他の地域と異なるスペイン文化の特性を理解できるようになる。	
	ヨーロッパ地域文化 形成特論 3	本講義の目的は、自らがヨーロッパの一部であるか否かという強い民族的自意識を特性とするロシア地域の文化形成と、その背後となる歴史的諸事情を概観すると同時に、現代ロシアにもかわりの深い固有の問題性を持ついくつかのトピックスについて知識を深めることにある。対象は主として18世紀以降のロシアであるが、必要に応じてそれ以前のロシア史上のトピックスを扱うこともある。本講義を履修することによって、受講者は、近現代ロシア史の大きな流れを把握すると共に、ヨーロッパの他の地域と異なるロシア文化の特性を理解できるようになるであろう。	
	ヨーロッパ地域文化 の多様性 1	19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパ諸国では、主として装飾芸術・建築・デザインの分野において、有機的な曲線模様をモチーフにした《アール・ヌーヴォー》と呼ばれる新たな芸術運動が同時期に出現する。本講義では、フランス・ベルギーにおける《アール・ヌーヴォー》に焦点をあて、それを、同時期のイギリス、ドイツ、オーストリアで独自に展開した新しい芸術運動の理念と比較することによって、どのようにして近代ヨーロッパ文化が、同質性を維持しつつ、多様な広がりをもたせられて形成されてきたのかを考察する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目 A 群 (地域文化研究科目群)	ヨーロッパ の多様性 2	地理的には比較的狭いながらも多くの言語が使われているヨーロッパでは、2001年の「欧州言語年」宣言に見られるように、言語の多様性、各言語間の平等を尊重する方向性が示されている。本講義では映像や音声を通してできるだけ多くのヨーロッパの言語の姿に触れるとともに、各々がどのような歴史 他言語との摩擦、競合、混合を経て現在に至っているかを概観し、ヨーロッパの市民の意思決定において言語的多様性がいかに重要な要因の一つであるかの認識を深め、言語の視点からヨーロッパの統合と分離をめぐる今日的な問題を考察する。	
	ヨーロッパ地域文化論 1	フランス文化の本質は、フランスの空間（インテリア、都市計画等）のありかたに関わっている。本講義では、「空間」がどのように認識され表現されてきたかを、17世紀後半（フランス語がほぼ今の形になった時代）から20世紀までのフランスの詩や小説の抜粋、さらにこの問題は近隣のヨーロッパ地域とも関連するので、ドイツ文学や英文学にも言及しながら考察する。とりわけ空間を分割する「閘（しきい）」の機能に注目したい。	
	ヨーロッパ地域文化論 2	フランスやイギリスとは異なり、統一の遅れたドイツでは「ドイツ文化」はドイツという一国の文化ではなく、東欧をも含む「ドイツ語」圏に広く拡がっている。さらにドイツ文化は、ロンドンやパリといった一極集中的な中心をもたずに、複数の中心のあいだを行き来しながら、ネットワーク状に展開してきた。そんなドイツ語圏の文化を、ベルリン、ケルン、ミュンヘン、ウィーン、グラーツ、プラハ、チューリヒ、ベルン、バーゼルといった都市を中心に、それぞれの都市の地理的、歴史的、政治的背景を紹介しながら、主として、20世紀以降の美術、デザイン、音楽、建築の面から紹介し、解説する。	
	ヨーロッパ言語・文化論 1	「マジョリティの言語と文化」とは、すなわち、「帝国」の言語と文化のことである。もともと「国語」に過ぎなかったはずの言語が、帝国の拡大とともに、「帝国語」として被征服民に強制される結果、彼/女らがその言語を用いて文化活動を行うようになり、そのことがあって「帝国語」の単一性・純粋性（の神話）を破壊し、「マイナー文学」「ポストコロニアル文学」等と呼ばれる転覆的な言語・文化現象を産みだすことになる。本講義では、主に「帝国語」としての英語の事例に沿いながら、日本語等他の「帝国語」とも比較しつつ、今日まで続く帝国主義の遺産を言語・文化的側面から考察する。	
	ヨーロッパ言語・文化論 2	本講義では、ヨーロッパ内のロマや移民、また、スペインのカタルーニャやバスク、そしてガリシアなどに焦点をあて、マイノリティの文化や言語に関して学ぶことにより、ヨーロッパの文化的な多様性や豊かさについての理解を深める。また、EU拡大等により、西ヨーロッパと東ヨーロッパ間の人やモノの移動が自由になるなか、現在のヨーロッパにおいて、人びとの文化や言語に関連するどのような問題や課題があるのか等について、マイノリティの視点から明らかにしていく。	
	ヨーロッパ地域文化特論 1	本講義では、1945年から現在にいたるまでのイギリス社会とポップカルチャーのなかで、鍵となる様々な流れを検証していく。特に質素厳格な40年代 (austerity)、豊かさの50年代 (affluence)、文化的大転換(cultural revolution) の60年代、サッチャーリズム・・・といった現象や事件のインパクトに焦点をあわせる。ポピュラー・カルチャーでは、この時期の音楽 (Skiffle、Beatles、Punk 等)、ブリティッシュ・シネマ (New Wave、James Bond、Heritage Cinema等)、ファッション (Teddy Boys、Mods、Hippies等) を扱いたい。ポピュラー・カルチャーは、どのようにイギリス社会そしてグローバルな世界を反映しているだろうか。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	ヨーロッパ	ヨーロッパ地域文化特論 2	スペインが多民族・多言語国家だということは意外と知られていないし、さらにはヨーロッパの中央部から見れば西の端に位置している、中にはイベリア半島を「ヨーロッパ半島」と表現することもできるくらいである。こうした民族・言語・地理的特殊性とスペインの地域文化がどのように関わってくるのかを解き明かしながら、それにも拘わらず冬には雪も降るくらいに寒いスペインが南国のイメージを持つに至ったかについて考察する。具体的にはスペインを語るわけだが、常に中央ヨーロッパとの関わりの中で見ていくので、イギリス・フランス・ドイツについての基本的な知識も必要とする。本講義を履修することによって、受講者はスペインの真の姿とヨーロッパの他の国々がスペインをどのようにとらえているかを理解できるようになる。	
	ヨーロッパ地域文化特論 3	ヨーロッパを構成する基本的な要素は都市である。本講義では、まさに一個の有機体とみなすことのできる都市のひとつ、ナポリの内に身を置いて、そこからイタリア文化を論じる。都市の内部に折り重なる地層を現在に浮かび上げながら、その特異な風貌と個性を詳らかにし、ナポリという都市の生命活動の働きを理解していきたい。ナポリを通してイタリアを解読する一方、ナポリからヨーロッパや日本、世界がどのように見えるかを体験する。イタリアで最も複雑な都市を媒介として、イタリア、ヨーロッパ、そして世界に対して、新たな視座を獲得することが目的である。		
	ヨーロッパ地域文化特論 4	本講義の目的は、「ヨーロッパ」を内部から見る視点を離れてヨーロッパ周縁地域という「外側」から見る視点を獲得し、その上で再びヨーロッパの「内側」からヨーロッパ周縁地域を見た場合に、われわれの持っていた「ヨーロッパ」というイメージがどれだけ変容するかを実地体験してもらうことにある。したがって本講義ではヨーロッパ周縁地域と見なされてきた地域を具体例として一つ取り上げ、その地域の言語や文化をも概観することになる。当該地域の「ヨーロッパ」イメージは、受講者にヨーロッパに対する複眼的な視点を提供するであろう。		
	ヨーロッパ地域文化特論 5	本講義では、第二次大戦後のヨーロッパ文化の変容を、フランスを例に論じる。この時代のフランスを語る時に1940年の夏からおよそ4年間続いた対独協調路線を選んだヴィシー政権を抜きにして語ることはできない。なぜならばこの4年間はフランスの政治史上のみならず文化の面においても大きな亀裂の時代であったからである。「暗黒の時代」を経てフランス文化は再びどのような道を進んだのか、冷戦下における大衆文化、アルジェリア戦争から始まり68年の5月革命にピークを迎えた反体制運動の、ヨーロッパ文化への波及(映像、文学、音楽)について多角的な視点から考察する。		
	ヨーロッパ地域文化特論 6	本講義ではヨーロッパの社会・文化の多様性を気候や地形、天然資源等の自然条件との関連で論じる。例えば、各地域の農業は気候に制約を受け、地域ごとの農産物は現在にいたる食文化に影響を及ぼす。森林の存在はガラス産業や陶磁器産業を生み出した。石炭や鉄鉱石などの資源は 各国の産業革命、工業化に大きな寄与をした。このようにヨーロッパ社会・文化の多様性の背景には様々な自然条件もあることを一緒に考えたい。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 A 群 (地 域 文 化 研 究 科 目 群)	ヨーロッパ	<p>ヨーロッパの課題 1</p> <p>(概要) 1960年代のアフリカ諸国の独立をもってヨーロッパの植民地主義は終焉を迎えたとされている。しかし現実には、現代のヨーロッパ地域が内外で直面する社会問題の多くが、紛争や移民への人種差別等に顕著に見られるように、ヨーロッパの植民地支配に起源を持つものであり、その解決を模索するには「ポストコロニアル」の視座が不可欠である。本コースは、「ポストコロニアル研究」における最新の学術的議論を踏まえ、北アイルランド紛争、パレスチナ問題、多文化主義、「テロ」といった、主にイギリスに関連することがらを例に取りながら論じていく。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(28 水谷 智 / 8回) 「ポストコロニアル」の視座とは何か、脱植民地化と「移民問題」、多文化主義とその課題 等について学ぶ。</p> <p>(30 尹 慧瑛 / 7回) 帝国の遺産としての紛争(北アイルランド紛争、パレスチナ問題等)、記憶と和解 等について学ぶ。</p>	オムニバス形式
	ヨーロッパの課題 2	<p>本講義ではヨーロッパ社会の多様性を、今日のフランス社会の変容を実例にして検討する。まずは「フランスとは何か?」という素朴な問いから発し、歴史を通じてその概念がどのようにして生まれ、定義され、変化していったのかを考える。そして1958年に第五共和国憲法が制定されて以来、「唯一不可分」とされている共和国はどのように植民地帝国が崩壊した後、文化の多様化、様々な民族、宗教との共存を試みているのか、その現状と課題を、メディアに取り上げられた象徴的な問題や事件を取り上げて考えていきたい。</p>	
	ヨーロッパの課題 3	<p>グローバル化の過程はヨーロッパに生じたとししば言われる。17世紀以降、ヨーロッパの諸国は経済市場を拡大しながら普遍主義という価値を普及させようとした。本講義では、財や労働等の交換からなる経済のグローバリゼーションの中で現在のヨーロッパが占める位置と、普遍主義に基づいて運営されている国際機関におけるヨーロッパの役割という2つの局面を明らかにする。そのためには、経済的な課題だけではなく、衛生・環境・民族といった問題をも考察し、最後にヨーロッパの普遍主義の本当の意味を考える。</p>	
	ヨーロッパの課題 4	<p>人の移動は、管理・統制の対象とされてきた一方で、その社会のあり方に大きな変容を迫るものでもある。本講義では、人の移動とそれが社会にもたらす影響を、グローバリゼーションの深化と「国民国家」の見直しのプロセスとしてとらえ、ヨーロッパという場における歴史的な背景と特性について考える。具体例として、フランスやドイツ等、各地域の移民政策をめぐる状況を概観したうえで、特にイギリスにおける移民の歴史と多文化状況を取り上げる。</p>	
	ヨーロッパの課題 5	<p>現代のヨーロッパには約2000万人のイスラーム教徒が居住しているとされ、その多くは第二次大戦後に旧植民地や地中海沿岸諸国から労働者として渡ってきた人びととその家族や子孫である。だが近年、特に2001年のアメリカ同時多発テロ事件以後は、ヨーロッパ各地で反イスラーム感情が高まり、あからさまに反イスラームを掲げる一部の政党も勢力を伸ばしている。本講義では、ヨーロッパ社会におけるイスラームとの共存をめぐる様々な課題について、とりわけフランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、北欧諸国が抱える問題と取り組みに焦点をあてて論じていく。</p>	
	ヨーロッパの課題 6	<p>環境問題は、物質が物理的に排出、循環、蓄積していくという自然現象の側面と合わせ、社会的な側面もある。そもそも、どのように問題として成立していったのか、またどの範囲までを取り扱うのかは、メディア、社会運動、政治の場の社会での力学が影響してくる。本講義では、越境大気汚染、植民地であった熱帯雨林等を歴史的な題材から出発して、ヨーロッパの環境問題で、非政府組織、国際機関、科学者、国内政治がどのように変遷したのかを概観しながら、現代の環境問題のルーツを探る。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
選択科目 A 群 (地域文化研究科目群)	ヨーロッパ	ヨーロッパの課題 7	16世紀にヨーロッパから日本にやってきた伝道師の紀行文から始まったヨーロッパ人の日本についての知識が、19世紀にロンドン、パリ、ベルリン、サンクトペテルブルグ等の大学でアカデミックな日本学の形を整えるようになる。本講義の目的は、現代のヨーロッパにおける日本研究の事情と課題をヨーロッパ各国の歴史の視点ならびに、グローバルの視点から取り上げたいと思う。最近20年間のヨーロッパ日本研究協会 (EAJS) の活動を中心に、ヨーロッパ地域文化と日本文化を総合的に認識する。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化の形成 1	アジア・太平洋の地域文化を学ぶための導入の科目として、歴史の観点からその形成と展開の過程を辿ることを目的とする。「中央ユーラシア」や「海域アジア」など前近代のグローバル空間を舞台に、帝国・交易ネットワークの拡大、異文化接触・社会変容等のテーマを軸に、長期的視野でアジアの地域文化の凝集過程や特徴を学ぶ。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化の形成 2	本講義では、アジア・太平洋地域における文化の多様性と、異文化間の交流・影響について総括的に学ぶ。特にハワイに焦点をあて、もともと先住民の王国でありながら、18世紀のヨーロッパ人の到来、19世紀末のアメリカへの併合、大量のアジア系移民の受け入れ等を経て、ハワイの多民族・多文化社会が形成されていった過程を考察する。また、米西戦争後にアメリカに割譲されながらも、太平洋戦争中は日本の統治下にあったグアムも扱う。移民、戦争、植民地化、教育、観光業等、多様な問題について考えることにより、アジア、欧米、太平洋諸国を越境的な視点から理解することを目指す。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化形成論 1	アジア・太平洋地域の文化に関する基礎的知識を身に付けるために、その形成および展開にかかわる歴史過程について学習・考察することを目的とする。主に19世紀後半から現代にいたる中国・台湾の歴史について、東アジア諸国家との関係に留意しながら、政治、経済、外交、社会面における歴史的経緯を概観する。現代の東アジアの国際関係がどのような歴史的背景に基づくのかを理解することを目指す。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化形成論 2	本講義では、アジア・太平洋地域の文化の形成とその展開にかかわる歴史過程を学ぶため、特に19世紀後半から現代までの朝鮮半島の歴史を、同時代における東アジアの国際関係を踏まえながら、政治・経済・思想等の諸側面から概観する。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化形成特論 1	アジア・太平洋地域の文化に対する理解をより発展させるために、当該地域の歴史や社会に関する知識を拡充しつつ、他地域と比較・対照することができる視座を身に付けることを目的とする。本講義では主に太平洋地域の文化を対象としている。人類の海洋世界への進出と太平洋地域の基層文化の誕生、大航海時代で幕を開け植民地勢力による支配に至るまでの西洋を中心とする外部社会との接触による太平洋社会の変貌、そして近代国家となって以降現在起きている諸問題までを可能な限り射程に入りたい。	
	アジア・太平洋	アジア・太平洋地域文化形成特論 2	東南アジアの歴史を振り返ってみると、インド化した国家、マンダラ国家、家産制国家等、非常に興味深い国家形態を産み出してきていることがわかる。更に、国民国家が形成され始めてからは、多様な宗教集団、民族集団を1つにまとめあげ、経済成長を遂げるために様々な国家形態が模索されてきた。本講義では、長い歴史的スパンで東南アジアの国家の変遷を検討する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 A 群 (地 域 文 化 研 究 科 目 群)	アジア・太平洋地域文化の多様性 1	グローバルな視点を獲得するための導入の科目として、アジア・太平洋地域の文化の多様性を理解するために必要な基本的知識の習得を目的とする。アジアの環太平洋地域では、教育の現場において英語・中国語が圧倒的な影響力を行使する一方で、話しことばの方言や地域言語が豊かな文化的多様性の継承に貢献している。東アジアから東南アジア、オセアニア地域にかけての多様な言語の分布と特徴を、言語類型論の視点から整理するとともに、その類型構造の連続性と歴史的文化的な相互影響についても概観する。新しい文化事象が多様な言語社会へ伝播するありようを今日的課題として積極的に取り上げ、社会言語学の視点から分析を試みたい。	
	アジア・太平洋地域文化の多様性 2	本講義では、映像資料を多用し、総合的な理解を促す。初めにアジア・太平洋地域の文化について概略を示し、次にその多様性について確認した上で、異文化間の交流や影響についても、特に日本を含む東アジアを中心に例示する。取り上げるトピックに関しては、近代以降の現象を中心とし、今日的な状況を視野に入れながら、この地域の文化について幅広い角度から認識を深める。	
	アジア・太平洋地域文化論 1	アジア・太平洋地域の文化に関する基礎的知識を身に付けるため、当該地域の思想、制度、社会の様式及び特徴を理解することを目的とする。時代的には、中国古代から近世に至るまでを扱い、その過程で思想的伝統がどのように形成され、いかなる特徴をもつに至ったのかを概観する。思想は単独で発展するわけではなく、社会制度、生活様式とも相互に密接に関係する。それら三者が相互にいかに関わりあって、中国独自の文化的伝統となったのかを理解する。独自と言っても、孤立的に発展したわけではなく、仏教という外来思想を受容したことを典型例として、他地域との関わりの中で形成されてきた。そのような他地域との交流も視野に入れつつ、文化的伝統生成のダイナミズムを理解する。	
	アジア・太平洋地域文化論 2	本講義では、アジア・太平洋地域の思想、制度、社会の様式及び特徴を理解するため、特に朝鮮半島に「固有の文化」と言われている色々な文化的現象や、いわゆる開化期以降日本や西洋を始めとする様々な文化との相互作用の中で形成された朝鮮半島の社会と文化の特徴を理解することを目標とする。	
	アジア・太平洋言語・文化論 1	アジア・太平洋地域に関する基礎的知識を身に付けるため、当該地域の言語・文化のあり方と歴史を理解することを目的とする。言葉ほど人間社会を根底から特徴付けるものはないと言われるが、外国語を流暢に操れる事以上に、言語の背景にある「文化」への理解が重要である。本講義では、主に言語(中国語)に焦点をあて、中華圏における多様な言語・文化の様態とその背景、他の文化との関係を概説する。	
	アジア・太平洋言語・文化論 2	本講義では、コリア語およびそれを表記する文字であるハングルの全般的な歴史を概括しつつ、それと漢字の関係についても検討する。またコリア語の使用に現れる当該言語使用者の社会的慣習や生活の様式等について考察することにより、朝鮮半島における言語・文化のあり方と歴史を理解することを目標とする。	
	アジア・太平洋地域文化特論 1	アジア・太平洋地域の文化に関してさらに視野を広げて発展的に学習するために、東南アジア地域の言語や文化、宗教の問題について理解を深めることを目的とする。3年次以上を対象とする。具体的には、東南アジアの中でも大陸部の上座仏教を信仰する人口が多い社会を取り上げ、そこでの宗教文化の多様性と共通性を人類学・社会学的な視点から論じる。講義の中では、複数の文化、政治過程、歴史が交差する関係性の中で浮かび上がるジェンダーやグローバル化の問題等についても触れる。	
	アジア・太平洋地域文化特論 2	本講義では、南アジアの地域文化について、生態・社会・政治・経済の各側面との連関に注意しながら読み解いていく。また歴史的に形成されてきた地域的な固有性を全体的に把握するとともに、グローバルなつながりの中での新たなダイナミズムを理解することを試みる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	アジア・太平洋地域文化特論 3	西アジアでは、アラブ、イラン、テュルクをはじめとする複数の言語や民族性がイスラームという宗教の要素と関わりながら複雑に交錯し、全体として豊かな文化を形成してきた。本講義では、そのような西アジアの言語や文化がもつ特色と、それが生まれた歴史的背景について考察する。	
	アジア・太平洋地域文化特論 4	ユーラシアの中心に位置する中央アジアでは、古代から現代にいたるまで常に複数の言語や文化が交錯し複雑な歴史を形成してきた。本講義では、主にペルシア語・テュルク語文化を基盤として形成された前近代の中央アジア・イスラーム文化と、19世紀以降ロシアの要素が加わって変容していった近現代の中央アジアについて考える。	
	アジア・太平洋地域文化特論 5	近年、アジア・太平洋地域における都市の変容は目覚ましいものがある。本講義ではその状況を把握するために、まずはアジア・太平洋地域における自然や社会、文化について、地理学・地誌学的な観点から学んでいく。その後、特定の都市・地域を事例に、アジア・太平洋地域におけるグローバル化の影響やそれが引き起こす諸問題について考えていく。本講義を通じて、受講生には今後、アジア・太平洋地域で活動・研究していくことを念頭に置きながら、より実践的な知を獲得してもらいたい。	
	アジア・太平洋の課題 1	アジア・太平洋地域を理解するための基礎の科目として、当該地域の歴史や社会に関する知識を拡充しつつ、今日のかつグローバルな課題に取りくむことを目的とする。激動の近現代史がアジアに残した傷痕は、現在の国際関係を規定する要因の一つでもある。本講義では、20世紀前半における日本のアジア支配や占領に由来する諸問題に焦点をあて、事象の真実に迫る一方、そうした葛藤がいかに語られてきたかという記憶の問題までを吟味したい。具体的には、戦後処理、領土問題、歴史教育等を取り上げる。	
	アジア・太平洋の課題 2	みずからの地域を出発点としてグローバル社会を理解するために、現在アジア・太平洋で最も注目される開発援助についての理論を学び、実証的に議論する。アジア・太平洋の国際関係や地域連携を、歴史的小および政治経済的に分析しながら、なぜ開発援助は重要なものかについて討論する。50年代からの開発援助のシステムとその変更点を説明し、様々な地域における経済連携や、貿易連携の中での開発援助とその問題点等について、学生のディベートによるアクティブな参加も含め、詳しく分析する。	
	アジア・太平洋の課題 3	21世紀前半の世界は構造的変化あるいは地政学的変化ともいえる大規模かつ重要な変容過程にある。その渦の中心にあるのが中国である。グローバル化する中国の経済的・政治的・社会的影響力は世界の隅々に及ぶが、とりわけ注目すべきは「膨張する中国」と接するアジア周辺地域との関係である。本講義では改革開放政策で大きく変容した中国自身に注目すると同時に、陸で、海洋で、あるいは河川でつながる周辺地域との間に生まれる新しい関係性、あるいは摩擦・紛争について多角的に考察する。	
	アジア・太平洋の課題 4	本講義では、アジア地域における近年の紛争問題を取り上げ、紛争問題とは何か、なぜ紛争が起きるのか、紛争をどのように解決に導くべきか、紛争後の社会をどのように復興・再建させるのか、なぜ国際社会は介入するのか等を取り上げる。そして、平和を構築するための方法論について講義を展開し、国際社会の平和構築と紛争解決に向けての取り組みを体系的に理解する。講義では、アフガニスタン、東チモール等をはじめとしたアジア地域における紛争問題を事例として取り上げ、その際、国連をはじめとした国際社会の役割と、平和構築の実践的活動(武装解除、動員解除および社会復帰、紛争当事者間の和解、法整備、民主的選挙の実施、司法制度改革等のガバナンス構築、経済改革、開発援助等)について説明する。到達目標は、アジア地域における紛争問題について理解し、それに取り組むための平和構築の方法論、そして国際社会の役割について知識を深めることである。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目 A 群 (地域文化研究科目群)	アジア・太平洋の課題 5	アジア・太平洋地域に対する理解をより発展させるために、当該地域の歴史や社会に関する基本的知識を活かしつつ、今日のかつグローバルな課題に取りくむことを目的とする。地球規模の環境問題のメカニズムと現状を把握した上で、世界人口の1/5近くを占め、急速に経済が発展した中国の環境問題とガバナンスを経済、法政策、社会の視点から論じる。環境汚染、自然環境の破壊の顕在化とその原因を探るとともに、解決のための方策を日本の公害問題とも比較しながら考察する。	
	アジア・太平洋の課題 6	本講義では、近代以降の東アジアにおける国境を越えた人的移動のもたらす問題を検討する。東アジアにおける移民の歴史的推移と、現地での共存・共生と反発、移民の受け入れに伴う社会的問題を分析し、グローバル化がもたらす社会の多様化について考察する。	
	アジア・太平洋の課題 7	本講義では、アジア・太平洋地域に関する今日のかつグローバルな課題に取り組むという観点から、「アジア」という地域概念をアジア・太平洋地域の人々が歴史的にどのようにとらえてきたのかを明らかにしながら、日本とアジア・太平洋地域とのかわりを考察する。	
アメリカ	南北アメリカ地域文化の形成 1	本講義は、北米アメリカ植民地の開始と成熟、アメリカ革命の到来、連邦共和国の誕生とその世界史的意義、19世紀合衆国の領土膨張の光と影について考察する。また講義では主に合衆国の形成過程に重心をおくが、カナダやカリブ海地域等の隣接地域(ボーダーランド)との関係にも注意を払いつつ、グローバルな文脈の中に北アメリカ全体の発展を位置づける。	
	南北アメリカ地域文化の形成 2	本講義は、ラテンアメリカの独立以降の近代化の過程に焦点をあて、政治風土、階層格差、従属的経済構造、急速な都市化等、ラテンアメリカを特徴づける社会的事象について歴史的な背景を踏まえ考察する。また講義では欧米とラテンアメリカの関係に着目し、グローバルな文脈のなかにラテンアメリカの低開発と周縁化を位置づける。	
	南北アメリカ地域文化形成論 1	ある地域の文化は、狭義の文化・芸術だけではなく、政治や経済等多岐にわたる分野と深く関わりながら形成され、常に混交・融合・摩擦・対立等を繰り返している。アメリカ合衆国の場合、「移民の国」として外部からの影響を常に受ける一方で、建国以来の自由・平等という理念(価値観)を絶大な政治力・軍事力・経済力を背景に世界に発信し続け、多大な影響を及ぼしてきた。こうした特徴を踏まえて、本講義では、特に平等を求める社会運動と文化形成のダイナミズムに注目し、その諸相を考察する。	
	南北アメリカ地域文化形成論 2	本講義では、ラテンアメリカ地域において、フランス、スペイン、ポルトガル等のヨーロッパ文化とアフリカの文化、先住民文化が融合して形成された言語や音楽、文学等に表れた文化の雑種性に着目する。ポスト・コロニアリズムの立場から単一的民族や言語を前提とする国民国家の在り方を問い直し、異質なものとのかいりや融合によって生まれた文化的創造力について考察する。そして、多文化・他民族「共生」の有り様を考えるヒントとしたい。	
	南北アメリカ地域文化形成特論 1	ラテンアメリカ文化は、ヨーロッパによる植民地化以前から存在したアステカ、マヤ、インカに代表される先住民文化、征服と入植によってもたらされたスペインを中心とするヨーロッパ文化、奴隷として強制移住させられたアフリカ系の人々の文化という、3つの混交によって形成された。本講義では、国や地域の違いによって多様な色彩を見せるラテンアメリカ文化の形成を、これら3つの文化基盤の出会いと混交という視点から、歴史的に考察する。理解を深めるための材料として、年代記、歴史的テーマに基づいた文学作品を随時取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	アメリカ 南北アメリカ地域文化形成特論 2	大航海時代に世界の異文化交流をけん引したポルトガルの植民地であったため、これを背景とする異種族混濁とキリスト教精神がブラジル文化の基層をなしている。大西洋を取り囲むように散在するポルトガル語圏との貿易関係も多様な文化の形成を支えた。19世紀以降は、イタリアやドイツ等から気候温暖な南部を目指して大量の移民が到来する。このように、広大な熱帯空間における、多様性と統一性に彩られたブラジル文化の形成を、歴史の文脈において講義する。	
	南北アメリカ地域文化の多様性 1	本講義では、北米文化の多様性について、地域・人種・民族・宗教・アイデンティティ等の観点から考察する。アメリカ社会は、歴史を通じて、世界各地からやってくる多様な人々によって人口の大部分が構成されてきた。また、広い国土の中で、多様な自然環境や産業経済、社会構造によって、様々な異なる地域文化が発達してきた。本講義では、北米文化に関する知識とともに、文化を分析するための諸理論を紹介し、現代文化の批判的分析方法を身に付けることを目指す。	
	南北アメリカ地域文化の多様性 2	ラテンアメリカでは、ヨーロッパによる征服、植民地化から500年を経て、人種的、文化的混交が進む中、都市の近代文化と農村の伝統文化、先住民文化とヨーロッパ文化が様々な形で共存し、複雑な社会を形成するに至っている。本講義では、国や地域によって異なる様相を見せるラテンアメリカの文化的多様性を理解すると同時に、そうした多様性がもたらす社会的格差、そこから生じる政治、経済、社会問題についても考察を進める。具体的な事例を見ていくために、文学、映画作品を積極的に活用する。	
	南北アメリカ地域文化論 1	アメリカ合衆国先住民達の歴史と文化について学ぶ。対象は先住民族と西洋人達とが出会った時代(16世紀)から現代(21世紀)までとし、講義は、「先住民の立場からみたアメリカ合衆国の歴史」、「アメリカ先住民の子供たちと教育」、「世界的視野からみるアメリカ先住民史」の3つの単元に分けて行う。授業全体の到達目標は、第1に、先住民の歴史や文化についての理解を深めること(知識・理解)、第2に、先住民の歴史を、普遍的なテーマ(ナショナリズム・帝国主義等)と関連させて分析し、的確な考察ができるようになること(思考・判断)、第3に、異なった文化や伝統に対して、相手の立場を汲んだ認識を持つことができること(関心・意欲)、の3点とする。	
	南北アメリカ地域文化論 2	ラテンアメリカの文化は、征服の歴史によって規定されている。北アメリカと異なり、比較的混血化が進んだ同地域では、征服は暴力の歴史であると同時に、ヨーロッパとアメリカ大陸先住民の文化が融合し、豊かな文化的土壌がはぐくまれた。その一方、現在にいたるまで征服以前の習俗を保ち続ける人々もいる。彼らは外部との接触によって大きな変容を受けながらも、核となる文化を有している。本講義では、先住民文化の変容と非変容に着目し、文化の持つ意味を考察していく。	
	南北アメリカ言語・文化論 1	本講義では、20世紀から現在にかけてのアフリカ系アメリカ人の言語と文化について、学際的なアプローチを用いて考察する。とりわけ、アフリカ系アメリカ人特有の英語(African American Vernacular English: AAVE)の発展と進化に注目し、それがヒップポップから日常生活にいたるまで、グローバルなポップカルチャーにもたらした様々な影響について考えていく。	
	南北アメリカ地域文化特論 1	本講義では、主としてアメリカ合衆国の大衆文化を通じて、現代アメリカの地域文化について、そしてより広く現代の社会とはどのようなものかを考える。合衆国のポップカルチャーは、現代社会に暮らすわれわれの衣食住、ライフスタイルから、ものの考え方、人間関係にまで、大きな影響を与えている。合衆国のポップカルチャーを題材としつつ、同時に自分たちの生活について考えてほしい。また、大衆文化、あるいは現代文化に関するいくつかのカギとなる概念を手がかりとして社会を読み解く試みの可能性と限界についても考察する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 A 群 (地 域 文 化 研 究 科 目 群)	アメリカ 南北アメリカ地域文化 特論 2	本講義では、移民国家と呼ばれているアメリカ合衆国とカナダの移民の事例より、近代以降の国際人口移動という現象を理論的かつ歴史的に理解することを目指す。北米大陸は、まさに他の四大陸（ヨーロッパ、アフリカ、アジア、南米）からの国際人口移動の集積地であり、北米の産業構造、人種・ジェンダー・社会関係、思想や文化を考えるには、人口移動の観点は欠かせない。講義の最初には、国際人口移動を考察するための理論的基礎を学び、その後、北米社会がいかに大規模な世界的人口移動を引き起こしたかについて考察していく。講義の後半では、北米のエスニック・マイノリティが築いてきた文化の変遷やその社会的政治的機能について明らかにする。	
	南北アメリカ地域文化 特論 3	ジェンダーは、人種やエスニシティ、宗教や階級とともに、人々の歴史的経験を規定してきた社会における最も基本的なファクターの一つである。本講義では20世紀のフェミニズムを牽引してきたアメリカ合衆国におけるジェンダー研究を基礎として、性差別、人種と階級との関係性、性的マイノリティ、同性婚等を取りあげ、現代アメリカ社会においてジェンダーがどのように作用しているかを考察する。	
	南北アメリカ地域文化 特論 4	大西洋岸から太平洋岸にわたる広大な領土を占める北アメリカは、壮大な自然と点在する都市が織り成す多様な活力溢れる地域文化を形成している。本講義は、北アメリカの全体像と地域区分概念を把握するため、まず北アメリカの多様な自然環境について概観する。次に、いくつかの主要な地域区分に沿いながら、それぞれの特有な歴史的背景、人種・民族構成、主要な産業と都市、諸地域とその特色等について講義する。その上で、北アメリカの自然や風土がいかに独特な地域文化の醸成に貢献したのかについて学ぶ。	
	南北アメリカ地域文化 特論 5	中米やアマゾンの湿潤熱帯雨林、降雨が皆無に近いペルー海岸砂漠、熱帯・亜熱帯に属するが冷涼なアンデス高地等、リオ・グランデ川以南の中南米（ラテン・アメリカ）の自然環境は多様性に富む。この多様性を背景に、植民地以前から居住する先住民、植民地時代の植民者、独立期以降の新規移民入植者たちは、多様な文化・歴史的背景を持つ社会を構築してきた。ラテン・アメリカ社会にみられる多様性について分析・考察する。	
	南北アメリカの課題 1	建国以来、「法の下での平等」を憲法で謳ってきたアメリカ合衆国において、「人種」や「エスニシティ」の問題は理想と現実のギャップを如実に示してきた。本講義では、多様な背景を持つ人々がアメリカ社会を形成した過程において、「人種」や「エスニシティ」のカテゴリーがいかに構築されたのか、そして構築されたカテゴリーはどのような影響をアメリカ社会に及ぼしてきたのかを、隣国のカナダやメキシコと比較しながら、歴史的に概観する。学期の後半には、20世紀後半以降の現状や課題・展望を多く取り上げる。	
	南北アメリカの課題 2	アメリカ合衆国文化の諸相に働くダイナミズムを、消費とグローバル化の尺度から分析し、この国の実像を文化の面から立体的に探る。グローバル化は時にアメリカナイゼーションと同一視される。それはこの現象（運動）が、合衆国の強大な経済力を一つの推進源にしているだけでなく、この複雑な国に働く遠心力と求心力を鮮烈に反映しているからでもある。今日、アメリカ文化は多様な商品や生活様式の形で世界中に浸透しているが、その根底にある「アメリカ」とはいかなる概念なのか、合衆国内・国外の両視点から、その輪郭を描出してみたい。	
	南北アメリカの課題 3	建国期のアメリカ合衆国は、共和主義的なシビック・ヒューマニズムの強い影響の下で「市民」と「他者（黒人奴隷）」、政体外に居住するとみなされたインディアン部族とを峻別した。しかし、アメリカの市民資格の境界線は絶えず流動的であり、人種、エスニシティ、ジェンダーによってしばしば制限されてきた。本講義では、いくつかの重要な歴史的局面で引きなおされたシティズンシップの定義とその変遷、またそうしたプロセスが合衆国の政治文化に及ぼした影響を考察する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目A群 (地域文化研究科目群)	南北アメリカの課題 4	本講義ではアメリカ地域を構成するアメリカ合衆国、カナダ、そしてラテンアメリカ諸国の国際関係が現在までにどのような変遷をたどってきたのかを学ぶ。変遷を体系的に知るためには、現代世界史の大きな流れや、南北アメリカ各地域の歴史の基礎、そして国際関係を捉えるための理論的な枠組みを理解する必要があるため、これらの点に関する解説も適宜行う。アメリカ地域に対するマクロレベルでの理解を深めることが本講義の目的である。	
	南北アメリカの課題 5	本講義は、現在アメリカ合衆国内で最大のマイノリティ集団であるラティーノ/ヒスパニックの現状が、どのように形成されてきたのかを歴史的に位置づけることを目的とする。その際、国際的な労働力の移動という観点から、メキシコをはじめとする移民送り出し国との連関として歴史を考察することが重要である。さらにはラティーノ/ヒスパニック・コミュニティがアメリカ社会の中でその存在感を増大させていく過程で、アメリカ社会・文化、さらには移民送り出し国の社会・文化に与えた影響についても考察する。	
	南北アメリカの課題 6	本講義では、北米及び南米の視点から日本を考察する。開国以来、日本はアメリカ社会から、好奇心や憧れ、そして猜疑心や憎悪等、様々な感情の対象として見られてきた。そこには日米の政治・軍事的関係、経済関係、移民問題等、多様な要素がからんできた。人口移動や国際関係等を通じた日本と南北アメリカの関係を、アメリカ側の視点から見ることにより、アメリカ地域とともに、日本への理解も深めたい。なお、本クラスではレポートおよびグループ発表の課題がある。	
選択科目A群 (実践科目群)	フィールドワーク	本科目は、論文の執筆に向け、フィールドワークについて理解する講義と小規模のフィールドワークを実際に行う演習から成る。講義では、フィールドワークを行うための問題設定や先行研究を含めた文献研究、調査者と被調査者との関係や倫理上の問題、また、データをまとめるときの姿勢や問題点等について学ぶと同時に、参与観察やインタビュー等の技法についても学ぶ。演習では、各参加者が設定したテーマに基づいた小規模のフィールドワークを試み、データを分析し、その成果を発表する機会を設け、問題点や疑問点について討論する。	
	発信スキル実践	1クラス20人程度のクラス編成とする。授業はコンピュータラボで行う。静止画あるいは動画に音声を組み込んだ、説得力あるデジタル・プレゼンテーション作品を作成することを最終の目標とする、プロジェクト型学習を行う。最初の数セッションで、短いエッセイライティングとデジタル・ストーリーテリングの方法を学んだ後、各自の海外研修経験やその時点でに関心に応じて、地域とテーマを選び、グループワークに入る。書籍や論文等の二次資料やネット上の情報ばかりでなく、新聞雑誌データベースから得られる一次資料を参照し、学内外の専門家、NPO、日本在住の現地の方々への取材を重ねてテーマを掘り下げ、資料を収集し、発表用のエッセイを書き上げる。それを元に、スライドや動画をを用いたプレゼンテーション作品を仕上げ、相互に成果を発表して評価し、建設的な意見交換を行って情報発信の知識と技能を高める。	
(地域文化研究隣接科目群)	ヨーロッパの思想史	主要な哲学者たちを取り上げて、イギリス経験論哲学と大陸合理論哲学の展開過程を概括する。どの哲学者についても、(1)その哲学者の生きた時代と生涯、(2)主要著作、(3)主要学説・思想、(4)テキストの邦訳と解説・研究書の順に解説する。なお、毎回B4 2~3枚の「講義レジュメ」を配布し、そのレジュメにしたがって講義をすすめる。	
	ヨーロッパ社会史 1	高度工業化社会の中で自己主張をするようになった大衆が、社会の中でどのような役割を演じるようになるのかを踏まえながら、ドイツの帝政期からナチ期までの社会の変化を論じていく。近代ドイツ社会史の研究動向を踏まえつつ、帝政期からナチ期にかけてのドイツ史の流れを理解できるようになることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目B群 (地域文化研究隣接科目群)	ヨーロッパ	ヨーロッパ社会史 2	環境史は、人間と自然の関係、人間の生活圏の環境、自然保護運動、環境保護運動等、人間の日常的な営みを社会史的(文化史・理念史を含む)にとらえることができる研究分野である。授業ではまず、ヨーロッパの環境大国とされているドイツの19世紀・20世紀の環境史を多面的に取り上げ、近代ドイツ社会史の大きな流れを理解できるようにする。さらに、日本人によるドイツ環境史研究の成果として、都市の緑化問題についての研究を紹介する。
		ヨーロッパの政治史	本講義では、第二次世界大戦後から今日に至るまでのイギリスの歴代政権について、ヨーロッパ諸国との関係やEUに見られるような欧州統合への対応等に注目しながら、内政・外交の様々な側面から検討する。特に、戦後の衰退に歯止めをかけ、再び活力を取り戻すためにイギリスの歴代政権が実施した様々な改革について、ヨーロッパ諸国における改革との比較の視点も入れながら、首相の政治的リーダーシップのあり方に焦点をあてて検討する。
		ヨーロッパの経済	第二次世界大戦以降、現在に至るまでのヨーロッパ経済の歩みを概観する。特に戦後ヨーロッパを一面的に理解するのではなく、80年代までの東西ヨーロッパの分裂と90年代以降の統合、60年代までの高度成長と70年代以降の低成長との比較に基づき、多面的な理解を促す。講義内容は(1)ヨーロッパ統合の経済的影響 (2)1945年以降の経済成長 (3)1945年以降の産業構造の変化 (4)1945年以降の景気変動と経済政策 (5)1945年以降の人口と生活水準 である。
		ヨーロッパの経済史	18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ経済の歩みを概観する。特に、ヨーロッパ経済が近代的な経済成長の原型となったことを中心に、あわせて各産業部門や生活水準の歴史的な変化についても理解を促し、また、ヨーロッパ経済の歴史的な経験を経済学の理論的な示唆と対照する。講義内容は(1)経済成長と景気変動 経済成長～人口動態～制度～帝国主義～景気変動 (2)各産業部門の分析 農業～工業～商業 (3)生活水準 生活水準～都市化～アジアとの格差 である。
		ロシア・東ヨーロッパの政治	1989年に東欧革命が起こり、1991年にはソ連が崩壊した。今日、ロシア・東欧諸国はそれぞれ民主化の道を歩んでいるが、その中で様々な問題も生じている。本講義では、ロシア・東欧地域が社会主義体制下の晩期においていかなる政治・経済状況であったのかを説明し、さらに社会主義を廃棄して以後の国造りの実態に即して説明する。主要なテーマは、社会主義体制の問題点、民主化過程における諸問題、冷戦の克服過程、民族対立等である。主として教員による講義形式で進めるが、適宜小レポートを提出してもらおう。成績は小レポートを含めた平常点と学期末試験によって算出する。
		EUの政治	本講義は、第二次世界大戦後のEU(欧州同盟)の政治史的展開を中心に解説する。その際、EUという既存の国際組織とは異なった超国家的国際組織の特徴を明確に浮かび上がらせることを常に念頭に置きつつ講義を行う。編年史的に話は展開するものの、全体的にEUをどう捉えるのかという視点を持って、EUの特徴をできるだけ適切に把握してもらうように講義する予定である。具体的には、テキストを用いて、EUの政治史を、政治家のリーダーシップが欧州統合の過程にいかに大きな影響を及ぼしたかという視点をを用い、各時代を区分しつつ概説する。
アジア・太平洋	アジアの教育と社会 1	アジア諸国、特に東アジア諸国、東南アジア諸国、南アジア諸国の教育文化の諸事象、教育、芸術文化、スポーツ等について歴史的な諸問題や現在のトピックを取り上げる。特に子ども、女性の問題を重点的に取り上げる。それら教育文化に関する諸事象を日本との関係を視野に入れて、比較教育論的、比較文化論的観点から分析する。取り上げるテーマは、次の3分野、(1)アジア諸国の教育文化、(2)日本の中の多文化、(3)異文化との出会いから選ばれる。取り上げられるテーマについて歴史的および現段階の状況と問題点を把握できるようになること、さらに、その学習過程を通じて異文化理解を深め、多文化共生とはいかなるものかを理解できるようになることが到達目標である。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目B群 (地域文化研究隣接科目群)	アジアの教育と社会 2	アジアの教育と社会1 で取り上げることのできなかったアジア諸国、特にイスラム諸国の教育文化の諸事象について取り上げる。教育、芸術文化、スポーツ等について歴史的な諸問題や現在のトピックを取り上げる。特に子ども、女性の問題を重点的に取り上げる。それら教育文化に関する諸事象を日本との関係を視野に入れて、比較教育論的、比較文化論的観点から分析する。取り上げるテーマは、次の3分野、(1)アジア諸国の教育文化、(2)日本の中の多文化、(3)異文化との出会い、から選ばれる。取り上げられるアジアの教育文化の諸事象について歴史的および現段階の状況と問題点を把握できるようになること、さらに、その学習過程を通じて異文化理解を深め、多文化共生とはいかなるものかを理解できるようになることが到達目標である。	
	中国の政治	中国に関する理解を深める上で必要な基本知識と枠組みの提供を主要な目的とし、基本的な政治体制や制度(党、国家、中央と地方等)について解説した後、体制変容、対外政策等を中心に、問題や争点別に分析を進める。講義は時系列に進めるのではなく、問題や争点に焦点をあてる。	
	南アジアの政治と社会	南アジア各国は独自の歴史、社会、宗教、文化をもちながら、植民地時代を経て、第二次世界大戦後は、独立国家として様々な問題を抱えつつそれぞれの道を歩むことになった。そして、現在においては宗教・民族的対立や貧困との闘い、人口問題、環境問題等、政治・社会・経済にわたる広範な課題を抱えている。しかし一方で、近年インドをはじめとする南アジア地域の重要性は、政治的にも経済的にも増大しつつある。本講義では、このような南アジア地域を、様々な角度から分析し現状を把握するとともに、今後の発展の可能性を探っていく。	
	東アジアの国際関係	東アジア地域の国際関係について、基本的かつ巨視的な理解ができるようにする。ここでの東アジアとは、東北アジア(中国、北朝鮮、韓国、日本)、東南アジア、台湾を含む。東アジアの国際政治を、(1)グローバル、(2)リージョナル、(3)各種メカニズム(6カ国協議、ASEAN、ARF、ADMM Plus等)、(4)各国(台湾を含む)の内政と対外政策の連動の中で基本的な理解ができるようにする。東アジアの国際関係では、ステレオタイプの捉え方をしがちだが、冷静で深い理解ができるための基本的な知識を得ることを目的とする。	
	アジアの経済	急速な経済成長を遂げ、世界の工場とも世界最大の市場とも呼ばれる中国をはじめ、液晶パネルや半導体などICT産業で圧倒的な競争力を持つに至った韓国や台湾など東アジア地域の経済発展はめざましい。本講義はこうした東アジア地域の経済発展の要因を分析し、これらの国々の経済発展の背景に存在する発展の諸条件を明らかにする。またさらに、同じ東アジア地域においても順調に経済発展している国と、そうではない国とに分かれていることを紹介し、こうした成長の差を生んだ背景を、講義の中で明らかにした発展の諸条件に照らし合わせて考察する。	
	中国の経済	中国は改革開放政策を採択後、日本をはじめ世界各国から多国籍企業を受け入れ、高度経済成長を続けてきた。現在、北京オリンピック(2008年)および上海万国博覧会(2010年)を成功裏に終了させ、世界での経済的・政治的地位を強化した一方で、人民元の上昇、賃金の上昇等国際競争力を低下させるような状況が出現し始めた。授業では、計画期における中国経済の特徴を明らかにしたうえで、改革開放後の現状を確認する。また、経済格差、環境汚染、「三農」問題等の問題を検討する。	
	アセアンの経済	本講義の主要な目的は、ASEAN加盟諸国の経済の現状、及び今後の展望と課題について、地域経済統合への動きを視野に入れて考察することである。まず、各加盟国経済がたどってきた発展過程について、制度構築と開発政策の展開に焦点をあてて論じる。次に、極めて多様な各国経済の特徴に関して、マクロ・データを用いて横断的に比較しながら把握する。さらに、ASEAN域内における経済的相互依存関係が実態面でどれほど深化してきたかについてみた後、東アジア首脳会議参加国など域外主要国との関係を軸に、今後の発展の展望と課題について考察する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目B群 (地域文化研究隣接科目群)	アジア・太平洋 韓国の経済	「漢江の奇跡」と称された1960年代以降の高度経済成長を実現することができた発展メカニズムや、1997年におこった経済危機によってこれまでの経済システム全体を大幅に見直すことを迫られることとなった経済改革等を中心に韓国経済の軌跡を建国から現在まで概観する。そのあと韓国国内に圧倒的なプレゼンスを占める財閥について検討することで韓国経済のより深い理解を試みる。	
	アメリカ アメリカ文化の歴史 1	西洋史・世界史におけるアメリカ(合衆国)の特質は、人種的・民族的な多様性とそれを統合しようとする国家的・社会的な動きがいち早く成立し、展開してきたことである。本講義は、植民地時代から現代にいたる、アメリカにおける人種的・民族的な多様性と統合の推移を、主として異人種間の男女関係と結婚に焦点をあてて、講義する。受講生が、アメリカ史の事例から、21世紀のわれわれが向かう社会の多様性と「共生」の課題について考えるための知識と感性を身に付けることが、本講義の目的である。	
	アメリカ文化の歴史 2	史跡や記念碑をとりあげて、国家や民族の歴史と記憶のあり方を、ナショナリズムや国民統合との関わりで考えることが、歴史研究の重要な一部となっている。本講義は、植民地建設、独立建国、西部開拓、南北戦争、移民、世界大戦をテーマにして、それぞれに関してアメリカ合衆国において形作られてきた記憶の表象と影響を講義する。受講生が、アメリカの事例から、史跡・記念碑・博物館等の記憶の装置に込められた意味を理解する能力を身に付けることが、本講義の目的である。	
	アメリカの経済	1990年代のアメリカ経済の復活は、その後の世界経済のあり方に大きな影響を与えた。そこで本講義では、第1に「ニューエコノミー」と称されるこの時期のアメリカについて詳細に解説する。その一方で、現在のアメリカは多くの問題を抱えている。その代表として、アメリカに超える格差と貧困について考察することが、本講義の第2のテーマである。1970年代以降に拡大した格差と貧困の実態を明らかにしつつ、歴史的な展開も含めて分析することによって、アメリカにおける格差と貧困の問題の根深さについて考える。	
	アメリカの経済史	アメリカの特異性を理解するためには、その歴史的展開から考察する必要がある。そこで本講義では、以下の2点からアメリカ経済の歴史を解説する。第1は西漸運動として現れたアメリカの外縁的拡大の歴史であり、第2はドルを基軸通貨とする、IMFを中心とした国際通貨制度の歴史である。これら2点を、アメリカにおける19世紀の歴史、20世紀後半の歴史の根幹と捉え、その歴史的展開と意義について詳細に分析する。	
	アメリカの政治と外交	20世紀を中心に、アメリカの外交と内政の運動を歴史的に検討する。特に、大統領のリーダーシップの役割と日米関係に重点を置く。とりわけ、近年研究の進むレーガン大統領と1980年代について、十分に時間をかけて議論する。また、様々なアメリカ論を紹介して、アメリカのイメージの変遷にも注意を払う。大衆文化、特に映画と政治や外交との関係、映画の中のアメリカの自己イメージにも論及する。さらに、アメリカにおける日本論や日本イメージの変遷についても考察したい。	
	ラテンアメリカの政治と社会	ラテンアメリカ諸国の政治を、政治体制論や民主化論といった政治学の基本となる理論と関連させて説明する。授業形態は講義であり、理解を助けるためにパワーポイントや映像資料も用いられる。日本をはじめとする先進国とは異なる条件のもと、歴史を積み上げてきたラテンアメリカ諸国は、現代政治の多様なあり方を理解する上で、非常に示唆に富む事例を提供している。政治学の理論と結び付けて、ラテンアメリカ諸国の政治の変遷及びその特徴を具体的に理解することが、本講義の目的である。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	日本文化史概説	本講義は、日本の歴史を単に通史的に講ずるのみならず、文化史的に把握する試みでもある。文化史学とは、歴史を過去の諸事家の集積として復元するだけではなく、価値value もしくは意味meaning の領域にまで踏み込んで、歴史の中に働く精神の展開を描き出そうとする学問である。価値はバラバラに存在するものではなく、一つの価値体系をなして特定の時代を規定する。そこに時代の様式、思考のパラダイムが発生する。こういった視点から設定される時代区分には、文化の諸領域(政治・宗教・美術・生活意識等)を総体としてとらえる可能性が含まれている。私たちは自分の過去を、価値や意味の問題から切り離して振り返ることができるだろうか? また、自分が意識的・無意識的に行ってきた個々の行為や判断の間に、相互関係が存在しないなどということがありうるだろうか? 文化史学とは既成の時代区分を超えて、自分の眼で過去を捉えなおし、意味づける試みであるといっていよい。	
	東洋文化史概説(1)	7-15世紀の中東イスラーム史を概説する。まず初期史については、イスラーム共同体の成立からアラブ帝国期を概観した後、アッバース朝イスラーム帝国の支配体制、法の確立、広域的な交流、経済生活について解説する。中世については東アラブ地域を中心に、シーア派諸王朝、スンナ派勢力によるシリア・エジプトの統合、イスラーム圏の拡大を概観した後、マムルーク朝の支配体制や商人・知識人などについて解説する。以上を通じて、とりわけイスラーム世界の国家と社会を秩序づける仕組みを考えることに努める。	
	東洋文化史概説(2)	オスマン帝国史の展開を、近世を中心に概説する。まずオスマン帝国の多面性と近世世界における位置づけについて考察した後、14-16世紀の領域の拡大及び支配組織の発展と構造について概観する。次いで16-18世紀の変容について、支配組織、社会構造、都市社会、商業空間の観点から検討し、またオスマン支配期のエジプト政治史及びカイロ社会についても概観し、最後に西洋化の過程から近代史を展望する。以上を通じて、オスマン帝国史の展開を、周辺世界との関係をも含む多様な視点から考えることに努める。	
	西洋文化史概説(1)	本講義は「文化史」という視点から西洋の歴史を捉えることを目的とする。まず、古典的文化史から現代歴史学における「新しい文化史」的方法論にいたる西洋史学における文化史の発展を検討する。その上で、西洋の古典古代から中世における歴史を他者意識・贈与論・文化変容・ジェンダー・死生観といった文化史的トピックから概観する。	
	西洋文化史概説(2)	本講義は「文化史」という視点から西洋の歴史を捉えることを目的とする。中世から現代にいたる歴史を文化史的に概観するが、トピックとしては身ぶり・ミクロヒストリー・身体・言語・読書・政治文化・感性・文化接触・階級文化・ナショナリズム・セクシュアリティといった文化史的方法論が用いられるジャンルを扱う。	
	地理学 1	経済や文化のグローバル化の進展によって、地球上の諸地域における基幹経済や人々の暮らしの在り方も変貌している。本講義では、現代の日本と世界における産業・社会・文化活動の空間的構成の変容について講義する。ここでは、グローバリゼーション・格差問題・環境問題・地域再編成等のテーマに着目して、事例を踏まえながら世界各地の変容や特有の問題を検討していく。また、本講義を通して、地理学的なフレームワークならびに地図やグラフ類の表現・解釈法についても言及する。	
	地理学 2	現在の生活において、地形や気候といった自然地理について学ぶことはますます必要とされている。例えば地震や火山の噴火等の災害を予防するためには、身近な地域における地形条件を知っておかなければならないし、気候変動や異常気象への対策においても、過去の温度変化や季節による気象条件の違いを知っておくことが役に立つ。さらに地球環境問題を理解するためには、陸地や海洋の分布、自然植生の変化、自然景観へ人間活動が及ぼす影響等が前提知識となる。地図や映像資料を用いながら、世界や日本の自然地理について学習する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	地誌学	地誌学は系統地理学と並んで地理学の根幹をなす分野である。地誌学は地域に関する総合的な科学ともいわれ、その大きなテーマとなるのは、地理的条件の複合性を構造的に把握し、地域とは何かを明らかにしていくことである。本講義では、身近な地域から海外の国々に至るまで様々な「地域」を多様な空間スケールで取り上げ、特色ある景観を読み解きながら「地域」の性格について説明する。日本及び各国の「地域」の成り立ちを総合的に把握し、多様な文化を理解する方法と、学校教員や社会人として不可欠な知識・技法の習得につなげたい。	
	社会学概論	あらためていうまでもなく、私たちは「社会」の中で「生活」をしている。そのあたりまえの「社会」や「生活」といったことも、「社会学」という“ものの見方”を学ぶと、あたりまえではなくなってくる。本講義は受講生が「社会的なもの見方」ができるようになることを到達目標としている。講義はビデオや映画を取り入れながら、一話完結方式で進める。授業では、ほぼ毎回、テレビ番組や映画を映像教材として用い、受講生にとって身近な話題を扱うようにしたい(前半はやや「個人」の方に比重をおいた話題を、後半はやや「社会」の方に比重をおいた話題をそれぞれ扱うこととする)。	
	経済原論	近代経済学の中核はミクロ経済学とマクロ経済学であり、本講義ではそれぞれの入門レベルを概説し、受講生が経済学の基本的な用語や考え方が理解できるようになることを目標とする。ミクロ経済学パートでは主に、市場の役割と生産者・消費者の行動について学習する。マクロ経済学パートでは、国民経済を全体的に捉えて、GDPと物価、貯蓄と投資、雇用、利子率、為替レート等がどのように決定され、またそれらの変数の相互依存関係を分析して、どのように変動するのかを学習する。	
	哲学概論(1)	本講義は、まず何よりも「哲学」という学問の特性と固有性を理解させることを目標としている。したがって、講義の前半では、哲学的思惟と日常的・経験的思惟の違い、学問としての哲学と経験的・実証的諸学問との違い等をテーマに取り上げ、受講生に哲学の特性と固有性について基礎的理解を促す。講義の後半は、哲学的思惟の主要テーマである「存在」と「認識」についての哲学的理解の具体的事例を取り上げ、受講生の「哲学」理解の基本を形成する。	
	哲学概論(2)	本講義は、「哲学概論(1)」での「哲学」という学問についての基礎的、基本的理解の形成を踏まえて、「哲学」の特性と固有性について受講生により具体的な理解をもたらすことを目標としている。したがって、「自我と世界」、「自由と必然」、「時間と空間」、「有限と無限」、「自己と他者」等、哲学史上の主要テーマを取り上げ、受講生に哲学的思惟の内実に触れさせ、もって、哲学的思惟とは何であるかを体得させることを目指す。	
	倫理学概論(1)	古来人間は自己の生き方に多大の関心を向けて倫理的考察を続けてきたが、その探究は結局、人間存在とその現実世界への問いに帰着する。特に生命操作や環境破壊等の最近の倫理的問題は、自然科学的世界像とこれと無関係に放置されている人間の世界のあり方との再考を促している。本講は、「よく生きたい」と望む人間の包括的な世界理解を土台にして、この「よさ」を幸せと正しさ、自由と責任という意志の構造から検討し、あらゆる倫理的探究に通底する私たちの生き方の原理的課題を提示する。	
	倫理学概論(2)	私たちが自覚的にしろ無自覚にしろ「よく生きること」を望むとき、私たちがとり囲む社会のあり方が問題にならざるを得ない。人間は長い歴史の中で、この個人の多様な望みと生き方の選択を可能にする社会を模索してきたのであり、私たちにもまたさらに望ましい社会を構想し築いていくことが課されている。それは社会のルールを守る道徳とそれを吟味する倫理との緊張関係を自覚的に生きていくことでもある。本講は、この現代の社会と個人のあり方を批判的に検討し、可能な社会像を提示して、受講生の展望を開く支援をする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	宗教学概論(1)	「啓蒙主義の子」としての近代宗教学は、神学や哲学から独立して宗教の現象をできるだけ実証的・科学的に研究する学問として19世紀後半に成立した。諸宗教の歴史と比較への視野をもって始まったその宗教研究の方法論や領域(宗教史学、宗教社会学、宗教心理学、比較宗教学、宗教現象学etc.)、それらの研究成果や関連諸学との関係等の考察を通して宗教という現象と宗教的な視点についての理解を深めたい。講義は後期の「宗教学概論(2)」と連続的に構成されているので、(1)・(2)を併せて受講することが望ましい。	
	宗教学概論(2)	宗教学概論(1)での宗教学的な考察を受けて、伝統的な諸宗教(仏教・キリスト教・イスラーム)の展開をたどりながら、それぞれの宗教理念、人間観、超越的なものへの関わり、社会的役割について考察するとともに、現代における新しい宗教運動についても考えたい。日本では宗教に対する浅薄で否定的な見方が支配的であるが、宗教をめぐる世界の常識と日本の非常識のギャップを知り、人間の歴史とともに古く、また現代のことでもある宗教を問うことは「世界と人間を問う作業」でもあることを理解したい。講義は前期の「宗教学概論(1)」と連続的に構成されているので、(1)・(2)を併せて受講することが望ましい。	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (同 志 社 科 目)	建学の精神とキリスト教	同志社大学は日本におけるキリスト教主義大学の代表であるばかりでなく、全国の数ある大学のなかでもっとも歴史のある大学のひとつである。1875年に新島襄が多数の協力者のサポートを受けて「同志社英学校」(男子校)を創立して以来、日本の近代史の中に大勢の有為な人材を送り込んできた。本講義では、同志社がどういう経緯で、どういう人たちにより、また何を目的として創立されたかを学ぶ。同志社大学に入学したばかりの1年次生にせよ、あるいはすでに大学生活を送っている上級生にせよ、同志社大学で学ぶ以上、自らの大学の歴史と独自性を最低限度知っておく事は、以後の生活に貴重な指針を与えてくれるはずである。 授業のテーマは、大きく分けてふたつである。まず前半は、新島を始めとする創立に関わった人たちの動向と思想を取り上げる。とりわけ新島の教育・宗教思想を軸とする「建学精神」を分析、検証する。後半は、「建学精神」のもうひとつの基盤であるキリスト教を取り上げる。	
	キリスト教と人間 1	本講義はキリスト教の正典のひとつである旧約聖書を取り上げ、その概要を解説すると共に、主要な登場人物の生涯や言動から、現代にも通用する私たちの人生観や価値観に関わる洞察と知見について学ぶ。主なテーマは「聖書の世界観と歴史観」「人間とは何か」「罪について」「人生の目的と使命(モーセ)」「権力と人間(ダビデ)」「イスラエル預言者」「人生を見つめる視点」等、全15回の講義形式である。初めてキリスト教に接する学生を対象として、キリスト教に関する基礎的知識を提供することをねらいとしている。	
	キリスト教と人間 2	本講義はキリスト教の正典のひとつである新約聖書を取り上げ、キリスト教の開祖であるイエス・キリストの生涯と思想と行動、その背景となった古代イスラエルの状況、そして初期キリスト教についての考察を通して、現代にも通用する私たちの人生観や価値観に関わる洞察と知見について学ぶ。主なテーマは「イエスの時代のパレスチナ」「イエスの先駆者」「イエスの思想と行動」「イエスの弟子」「初期キリスト教の成立」等、全15回の講義形式である。初めてキリスト教に接する学生を対象として、キリスト教に関する基礎的知識を提供することをねらいとしている。	
	キリスト教とは何か 1	同志社の徳育の基本であるキリスト教主義教育の一環として提供する科目である。主に旧約聖書に記された神話や物語、歴史を通して、キリスト教信仰の源となった神観、人間観、世界観、そしてそこに込められたメッセージの意味を探り、人間の生きざまとの関わりを考察しながら、学びをすすめていく。キリスト教入門として、基本的な聖書理解及び旧約聖書に示された神観、人間観、世界観等を理解し、それによって受講生が自らの生きざまを見つめ、人格形成の根幹となる「良心」を養う基盤を持てるようになることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	全学 共 通 教 養 教 育 科 目 (同 志 社 科 目)	キリスト教とは何か 2	同志社の徳育の基本であるキリスト教主義教育の一環として提供する科目である。主に新約聖書の福音書を中心として、キリスト教信仰の源となったイエスの言葉や癒しのわざ、受難等について学び、そこに込められたメッセージの意味を探り、人間の生きざまとの関わりを考察しながら、学びをすすめていく。キリスト教入門として、新約聖書に記されたイエス・キリストの福音宣教と生涯について学び、それによって受講生が自らの生きざまを見つめ、人格形成の根幹となる「良心」を養う基盤を持てるようになることを到達目標とする。
	キリスト教会と現代文化	本講義はキリスト教の長い歴史の中から生まれてきた独自の文化、習慣、儀式等の考察を通じて、現代社会においてキリスト教のしめる位置とその影響を学ぶことをねらいとしている。主なテーマは「キリスト教の時」「キリスト教の空間」「キリスト教と美術」「キリスト教と音楽」「キリスト教と文学」等、全15回の講義形式である。初めてキリスト教に接する学生を対象として、キリスト教に関する基礎的知識を提供することをねらいとしている。	
	人物から学ぶキリスト教の歴史	本講義はおよそ2000年間に及ぶキリスト教の歴史の概略を、各時代における象徴的な人物を取り上げながら学ぶ。古代、中世、宗教改革、近世、近現代の社会的状況との関わりの中で、宗教的活動のみならず、政治、経済、思想、民衆運動等、様々な分野に関わったキリスト者を選び、その生涯を多面的に考察する。取り上げる主な人物は「イエス」「コンスタンティヌス皇帝」「ルター」「ザビエル」「J・ウェスレー」「M・L・キング」「マザー・テレサ」等、全15回の講義形式である。初めてキリストに接する学生を対象として、キリストに関する基礎的知識を提供することをねらいとしている。	
	キリスト教の歴史と同志社	16世紀の宗教改革によって生まれたプロテスタント・キリスト教諸教派の流れから、19世紀の日本へのキリスト教伝道に至るまでの歴史を、同志社創立の過程を含めてたどっていく。歴史のなかで信仰に基づいて新たな社会と文化を形成しようとした人々の思想と活動について考察しながら、学びをすすめていく。キリスト教主義大学である同志社が、どのような歴史と伝統の流れから誕生したのか、その問いをもってキリスト教史を学び、多様なキリスト教思想や文化等についての基礎的な知識や教養を習得することを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	キャリア開発と学生生活	<p>(概要) 本講義では、学内外の多彩なゲスト教師を迎え、働くことの意味、人生と職業の関わり、経済・企業環境、起業やNPO等の仕事形態の変化、家族と仕事との関わり等の情報と観点を提供する。職業は学生生活からの自らのキャリア開発の一環としてある。受講生が、現在の仕事の状況を理解し、自らのキャリア開発に役立つ情報を調査検討し、学業を土台とする自己開発に取り組み、仕事と重ね合わせて自分の将来の人生を構想できるようになることを授業の目標とする。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(80 工藤 和男 / 8回) 第1回：はじめに：いまなぜ仕事と生き方を考えなければならないのか 第4回：キャリアチェンジと自己啓発(ゲスト) 第8回：ワークライフバランスと男女共働(ゲスト) 第9回：社会の変化と多様な仕事像 第12回：社会のために、自分のために -NPO、NGO、公共企業で働く(ゲスト) 第13回：学ぶこと・働くこと・生きること 第14回：課外体験から学ぶ -クラブ、インターンシップ、ボランティア(ゲスト) 第15回：おわりに：これから大学でどう学ぶか</p> <p>(147 森山 智彦 / 4回) 第1回：はじめに：いまなぜ仕事と生き方を考えなければならないのか 第7回：大学生のキャリア形成 - 新卒就職と転職 第10回：賃金と昇進のしくみ 第15回：おわりに：これから大学でどう学ぶか</p> <p>(221 神谷 雄績 / 7回) 第1回：はじめに：いまなぜ仕事と生き方を考えなければならないのか 第2回：キャリアとは何か -ライフスタイルと仕事 第3回：社会・企業・仕事の変化(ゲスト) 第5回：企業の求める人材 第6回：新時代のキャリア開発 -起業精神(ゲスト) 第11回：働くことを支える法律(ゲスト) 第15回：おわりに：これから大学でどう学ぶか</p> <p>初回および最終回は担当者全員が担当する。</p>	オムニバス方式
	キャリア開発の課題と方法	<p>(概要) 本講義はこの時代をいかに生き抜くか、そのためにどのような力をつけなければならないのかについて、大学で学ぶことの意味と併せて、考える機会を提供する。労働市場における需要側と供給側の両面から現代の労働における課題について、現場で活躍する人々の生の声を通して、各自が主体的に考え、みずからのキャリア形成に取り組める人間となるための知識や知恵を身に付けることを目標とする。</p> <p>担当者2名はともに全回出席し、「時代の変化と労働市場」、「仕事とキャリア形成」、「企業が学生に求めるもの・雇用のミスマッチ」、「社会の変化と社会が求める人材の変化」等について講義を行うほか、企業の関連担当者等のゲストスピーカーも交えて講義を進める。</p>	複数教員が共同で授業を行う
	インターンシップ入門	<p>(概要) 「働くこと」に対してインターンシップ受入れ担当者や若手社員、インターンシップ修了生からコメントをいただく他、受講生同士のディスカッションにより、学生生活におけるクラブ・サークル、ボランティア、アルバイトといった活動に主体的に取り組むことで得られる経験を共有し、最後にグループ単位でまとめて発表する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	全学 共通 教 養 教 育 科 目 (キ ャ リ ア 形 成 支 援 科 目)	インターンシップ入門 (つづき)	
	働くということ	<p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(85 岡本 博公 / 5回) 「大学生活とキャリア」：パネリスト講演の後、グループディスカッションで整理する。</p> <p>(126 岸 基史 / 4回) 「自らのキャリアプランを考えるために」：働くとはどういうことか、「実践的経済学」「人間の経済活動」等を通して考える。</p> <p>(84 多田 実 / 6回) 「プレゼンテーションの準備」：問題発見の技法等も紹介しながら発表スライドを作成するグループワークを行う。</p> <p>(概要) 本講義は、社団法人教育文化協会の協力による「連合寄付講座」として開講される。企業活動のグローバル化やメンタルヘルスの問題、評価制度や雇用制度の変化等、労働領域における今日的課題について、第一線で活躍する労働組合役員がそれぞれの得意分野について講義する。各テーマについて最も適切な人物を講師に迎え、組合活動の視点から現実的な課題を提示し、その課題解決に向けた具体的取り組みを講義する。第一線の労働組合役員の知見を通じて、現場が直面している最も重要な課題を知ることは「働くということの意味」を総合的に考える手がかりを掴むことになると考えられる。自らの体験を超えて総合的かつ課題提起的に「働くということ」を考えること、これが本講義の目的である。 働く上での課題を具体的に理解し、その課題解決に向けて考える姿勢を養う。労働組合の活動や課題を正確に知り、労働の意味を深く考え、そこからさらに労働組合の意義、企業のマネジメント職の意義に発想を及ぼすことができる能力を養う。労働や雇用を手がかりに、日本社会で何が問題であるのかを正確に認識できるようになる、自分自身がどのような職業生活を送るべきか、展望を抱くことができるようになることが、到達目標である。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(88 石田 光男 / 6回) これから社会に出る学生に対して、「働くということ」の意義について課題を提示し、労働組合が目指す社会像について、連合が提起している「働くことを軸とする安心社会」の紹介を通じて学生に理解してもらい、実現に向けて、これまでどのように取り組んできているのか、今後どう取り組んでいくのかについて明確化し、理解を深めてもらう。また、雇用と生活を守る自動車産業労組における取組みについて、産業空洞化の現状と労働組合の対応を中心に考察を深める。</p> <p>(89 上田 眞士 / 6回) 公正・公平な賃金と処遇制度のあり方、確立に向けた取組みについて考察を深める。</p> <p>(128 寺井 基博 / 6回) 長時間労働の是正に向けたワークルール確立の取組み、ワーク・ライフ・バランスを実現する上での前提条件と言える労働時間短縮・長時間労働の是正に向けて、制度・運営の両面において労働組合としてどう関わり、どう対応しているかについて理解してもらう。</p> <p>(127 三山 雅子 / 6回) 非正規社員の組織化と処遇改善に向けた取組みについて、非正規社員が数多く活躍する流通産業を取り上げ、そこに働く非正規労働者に労働組合に加入してもらうことの意義と処遇改善の必要性等について、具体的な取組み事例の紹介を交えて、理解を深めてもらう。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
選 択 科 目 C 群	全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (キ ャ リ ア 形 成 支 援 科 目)	<p>キャリア形成とインターンシップ</p> <p>(概要) 本科目は、受入機関と連携を図り学生を派遣するプログラムである。在学中に実社会の就業実習によって以下の達成を目指す。 (1) 大学で学んだ社会の諸課題と就業現場における問題解決法や専門知識との総合的理解。 (2) 社会を知ることによる学習意欲の喚起。 (3) 将来の仕事やキャリアに関する関心の醸成と就業意識の形成。 インターンシップ実習期間は原則として夏期休暇中の2週間とし、実習前には事前講座を、実習後には事後講座を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (85 岡本 博公/9回) 第1回 オリエンテーション/インターンシップのすすめと体験学習の意義 第6回 企業から見たインターンシップの意義 第9回 グループディスカッションによるインターン実習の目標設定 第10回 インターン実習の振り返りと自己理解 第11回 インターン実習における経験の共有化 第12回 インターン実習における経験の共有化 第13~15回 夏期休暇中のインターン実習に充当</p> <p>(86 秋篠 恵一/6回) 第3回 企業が求める人材と社会人基礎 第4回 ビジスマナーを含めたスキルアップ研修 第5回 ビジスマナーを含めたスキルアップ研修 第13~15回 夏期休暇中のインターン実習に充当</p> <p>(87 浦坂 純子/6回) 第2回 これからの企業と働き方 第7回 企業から見たインターンシップの意義 第8回 グループディスカッションによるインターン実習の目標設定 第13~15回 夏期休暇中のインターン実習に充当</p>	オムニバス方式	
	全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (国 際 教 養 科 目)	国際教養基礎論 1	<p>国際教養基礎論 1</p> <p>高度な外国語運用能力と国際的な教養を身に付けさせることを目的とする国際教養教育科目群の中で、入門的役割を果たす講義である。諸外国の歴史・地理・文化に関する新入生の知識の不足を補い、同時に外国語学習への意欲を高めることを目的とする。特定地域の言語、歴史、地理、文化に関する一般的な講義、または一般的な言語学や比較文化研究の方法論的な講義を主な内容とする。特に制限は設けないが、1、2年次での履修が望ましい。前期に開講され、半期完結とする。</p>	
	全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (国 際 教 養 科 目)	国際教養基礎論 2	<p>国際教養基礎論 2</p> <p>国際教養基礎論 1と同じく、諸外国の歴史・地理・文化に関する新入生の知識の不足を補い、同時に外国語学習への意欲を高めることを目的とする。特定地域の言語、歴史、地理、文化に関する一般的な講義、または一般的な言語学や比較文化研究の方法論的な講義を主な内容とする。特に制限は設けないが、1、2年次での履修が望ましい。後期に開講されるが、国際教養基礎論 1との間にグレード制は設けず、半期完結とする。</p>	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (国 際 教 養 科 目)	ジョイント・セミナー比較文化論	<p>ジョイント・セミナー比較文化論</p> <p>本講義は、同志社大学の学生と、Associated Kyoto Program (AKP)に参加する15のアメリカの大学に学ぶ学生とで構成され、これらの学生の生産的な議論や共に学ぶ場として、また、日本人学生にとっては、映像や読書を踏まえた、英語での討論、発表等を体験する機会として設定されている。内容は日米のformative textsすなわち、日米の双方の視点から、学生の人格に寄与してきた小説、アニメ、まんが等を利用する。授業担当者やゲストスピーカーによる講義、学生同士のディスカッション、日米文化関連のトピックに関する学内外での調査、発表等である。教室での使用言語は基本的には英語(日本語も可)である。15回全ての授業をSusanna PAVLOSKAと加賀谷真子の2名で担当する。</p>	複数教員が共同で授業を行う	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	多文化コミュニケーション 学の基礎	<p>(概要) 広義の言語研究を学際的に「多文化コミュニケーション学」ととらえ、その中核となるトピックスを中心に、母語である日本語と外国語として最もなじみ深い英語を題材にして、多文化コミュニケーション学の基礎的理解を図ることを目指す。前期の講義で扱うテーマは、「言語の一般的特徴」「動物の言語」「音声学・音韻学」「形態論」「統語論」を含む。各テーマについて、まず、基本的な情報を講義によって補い、さらに、担当者またはゲストスピーカーによって関連したトピックを2～3程度提供する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(全員 / 4回) 「オリエンテーション」「人間にとってことばとは何か」「まとめ」「質疑応答」</p> <p>(90 山内 信幸 / 5回) 「ことばの諸性質」「動物のことば」「音について1(概説)」「音について2(概説)」「音について3(各論：身近な音の現象)」</p> <p>(129 長谷部 陽一郎 / 6回) 「語について1(概説)」「語について2(概説)」「語について3(各論：身近な語の現象)」「文について1(概説)」「文について2(概説)」「文について3(各論：身近な文の現象)」</p>	オムニバス方式
	多文化コミュニケーション 学の応用	<p>(概要) 広義の言語研究を学際的に「多文化コミュニケーション学」ととらえ、その周辺となるトピックスを中心に、母語である日本語と外国語として最もなじみ深い英語を題材にして、多文化コミュニケーション学の応用的理解を図ることを目指す。後期には、私たちの身のまわりにみられる「ことば」の生態にアプローチする。扱うテーマは、周辺のものはあるが、それだけ具体性をおよび、身近で興味深いもので、大まかには、「意味論」「ことばと認知」「ことばと社会」「ことばと文化」「ことばとコミュニケーション」等を含む。各テーマについて、まず、基本的な情報を講義によって補い、さらに、担当者またはゲストスピーカーによって関連したトピックを2～3程度提供する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(全員 / 3回) 「オリエンテーション」「まとめ」「質疑応答」</p> <p>(90 山内 信幸 / 7回) 「意味について1(概説)」「意味について2(概説)」「ことばと社会1(概説)」「ことばと社会2(各論：身近な例)」「ことばと文化1(概説)」「ことばとコミュニケーション1(概説)」「ことばとコミュニケーション2(各論：身近な例)」</p> <p>(129 長谷部 陽一郎 / 5回) 「意味について3(各論：身近な意味の現象)」「ことばと認知1(概説)」「ことばと認知2(各論：身近な例)」「ことばと文化2(各論：身近な例)」「ことばとコミュニケーション3(各論：身近な例)」</p>	オムニバス方式
	異文化間コミュニケーション A	<p>日本語によるコミュニケーションと主として英語によるコミュニケーションの比較を通して、それぞれのコミュニケーションの方法の特徴を学ぶ。担当者による講義と、教科書を使った実践を組み合わせ、両言語によるコミュニケーションの特徴を自らの体験を通して理解してもらう。授業の後半を受講生によるプレゼンテーションが短いスキットにあてる。講義の部分は、平易な日本語と英語の両方を使って説明する。ディスカッション、質問、プレゼンテーションは、日本語・英語とも使用することができる。使用するテキストには、日本人と主としてアメリカ人のスキットがビデオ収録されており、それを見ることによって、両言語によるコミュニケーションの特徴を理解する手助けになる。それぞれのスキットに関連する異文化コミュニケーションの重要な概念は、クラスで説明し、理論的にもコミュニケーションの諸相を理解することができるようになる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目C群 全学共通教養教育科目 (国際教養科目)	異文化間コミュニケーションB	留学生活にとって切っても切れないのは現地の生活への不適応、つまりカルチャーショックの問題である。カルチャーショックは否定的な意味づけをされることが多いが、むしろ文化学習の経験であり、自己に対する理解を深め、自己成長をもたらしてくれるといえる。このクラスでは、担当者による講義と、教科書を使った実践とを組み合わせて、日本語および英語コミュニケーションの特徴を自らの体験を通して理解してもらう。授業の後半は、受講生によるプレゼンテーションかスキットにあてる。講義の部分は、平易な日本語と英語の両方を使って説明する。	
	人から人間への道	<p>This course explores how it is that humans have thought and theorized about themselves as social beings throughout recent history into the present. The role that cultural anthropology has played in helping lay people to understand themselves as part of larger social groups (ethnic communities, cultures, nations) is the core focus. Examples of how anthropological fieldwork findings (with both primate and human societies) have led anthropologists, and subsequently the general public, to certain understandings are introduced, and class discussions on the influence of certain theories in their own lives and identities, as well as those around them, are encouraged. The weekly themes range from: understanding indigenous local knowledge (in traditional and modern societies), to inter-group discrimination, to narrative theory, to assessing the impact of globally shared technologies and ideologies on individual and collective identities.</p> <p>(和訳) 本講義では、比較的近年の歴史から現在にいたる過程において、人間がいかに自分たちのことを捉え、それを社会的な生き物として理論化してきたかという点について探究しようとする。このとき注目すべきは文化人類学が果たしてきた役割であり、とりわけ当該学問が、人間がみずからをより大きな社会集団(民族、文化、国家等)のなかへ位置づけることを促してきたという側面に焦点をあてる。 本講義では、対象が霊長類であれ人間社会であれ、人類学的フィールドワークでの各種発見を通じて、人類学者がそれに続いて一般社会が到達した特定の理解の仕方を紹介するとともに、ディスカッションを通じて、人類学的理論が学生自らや周囲の人間の生活、アイデンティティに与えている影響を考察していくことが奨励される。 テーマは各週ごとに異なり、それらは例えば土着のローカル・ノレッジの理解の仕方(伝統的/近代的社会の両方が対象となる)、間集団的な差別のメカニズム、ナラティブ理論、地球規模で共有されるテクノロジーがもたらすインパクトの検証、そして個人/集団のアイデンティティに関するイデオロギー等である。</p> <p>(オムニバス形式/全15回)</p> <p>(130 Bruce WHITE / 14回) 上記内容の具体的なケースを取り上げ、レクチャーする。</p> <p>(91 Gregory POOLE / 1回) 上記に関連したケーススタディを取り上げることで、受講者の理解を深める。</p>	オムニバス方式
	アイデンティティの社会格差	<p>Psychological anthropology as well as a variety of ethnographies on modern conflict have begun to offer a range of insights into the way in which systems of self-representation (such as identity) operate on, and are related across, the personal, inter-personal, and collective levels of existence. This class begins by understanding key concepts and findings in anthropological literature, moving on to investigate and theorize on the links between the everyday experience of social life and the symbolic dimension which comments upon and informs it. Forging a successful and sustainable relationship between worlds is our common human experience but some of us have more resources than others with which to do so.</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	アイデンティティの社会格差(つづき)	<p>(和訳)</p> <p>近代紛争に関する心理人類学並びに様々な研究論文は、自己表象(アイデンティティ等)の仕組みがどのように機能し、これが個人的、対人的、集合的な存在のあり方に関わっているかについての幅広い見識を提供するようになっている。本講義はまず、人類学の文献の主要概念と発見事項を理解するところから始まり、次いで社会生活における日常の経験と上述の象徴的な側面との結び付きを調査、理論化する。人は誰も社会と良好かつ持続可能な関係を築こうとしているが、その理解力や包容力には人によつての違い(格差)が存在する。</p> <p>(オムニバス形式/全15回)</p> <p>(130 Bruce WHITE/14回) 上記内容の具体的なケースを取り上げ、レクチャーする。</p> <p>(91 Gregory POOLE/1回) 上記に関連したケーススタディを取り上げることで、受講者の理解を深める。</p>	
	日本の伝統と美	<p>花は、世界中どここの国でも、どの時代にも、好まれ、飾られてきた。特に、日本での「いけばな」は、四季に恵まれた風土の中で、500 有余年の歴史と伝統を持ち、生活文化の中で「花の芸術」「華道」(The Way of Ikebana)として、精神性も大切にされて、発達してきた。「いけばな」は、花を生ける行為と共に、それに伴う驚きや喜びを感じることであり、切り取った草花の色や姿を通じて、背後にある様々な事情を察知しながら、それぞれの環境を考え、いろいろな行事に合わせて対処しながら、発達してきたのである。長い伝統を持つ「いけばな芸術」には、形を越え、心に響く何かがある。「いけばな」を通して、楽しい、魅力ある、美しい、伝統の世界を学ぶ。到達目標は、日本におけるいけばなの歴史的背景を知る。自由花、盛花、生花等のルールや生け方を学び、一人でも生けられるようになることである。花展で作品を見たときに知識をもって鑑賞できるようになることである。</p>	
	日本の伝統と文化	<p>本講義では、日本の伝統と文化を色々な角度から学習することを目的とする。日本の伝統文化は、情緒を育み、自然と一体化する面を多く持っている。日本人と花のかかわりを「いけばな」のみでなく、文化としての「茶」・「能」・「狂言」・「焼物」・「絵画」・「文学」・「音楽」等を日本の伝統を切り口として、分析し、考察する。到達目標は、日本の伝統的文化の歴史的背景を知ることである。</p>	
	日本の伝統と芸能	<p>本講義では、はじめに、わが国の伝統と芸能の基本的な知識を紹介する。その上で、第一線で活躍する様々な分野のゲストスピーカーを招聘し、各分野における芸能・文化がどのように発展し、成立してきたかを学ぶ。特にわが国の芸能全ての源流である雅楽を中心に、日本の芸能の伝統が日本人の心性・習俗性にいかに影響を及ぼしているかを考察し、その成立の過程を検証する。到達目標は、芸能・文化がどのように発展し、成立してきたかを考察し、芸能全ての源流である雅楽を中心に、日本の芸能の伝統が日本人の心性・習俗性にいかに影響を及ぼしているかを学び、日本の伝統文化を理解する為の基礎知識を習得することである。</p>	
	日本の伝統と能楽	<p>日本の伝統芸能である能楽について授業を行う。能楽は、室町時代の14世紀から現代までの600年間、演じ続けられている演劇である。10世紀や11世紀の文学作品をもとにして、14世紀に作られた劇であり、その言葉は現代日本語に比べれば難しいものである。しかし、いつの時代にも人々を引きつける魅力を持っていたから、現代まで続いているのであり、その内容は古くなく、普遍的な人間の心や美を描いている。能楽に現れた日本人の感性を理解すると共に、日本の文化との関係を示しつつ、伝統について考えて欲しい。到達目標は、教室での講義、能楽堂での実技体験、実演の鑑賞、史跡巡りを通して、日本の文化の中で能に関する基本的な知識を身に付け、日本文化と伝統を考える態度を養うようにすることである。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	日本の伝統と芸術	日本の文化的伝統の特色として、微細なもの、凝縮されたもの、清らかなもの、うつろいゆくはかないものを愛好する美意識が挙げられる。大きく豊かなもの、力強いもの、合理的な秩序を持つものに美の理想を見いだす西洋とは対照的である。その特質は、盆栽からフィギュアまで、古くは中国、近代に入ってからでは西洋との交流を繰り返しても変わらず受け継がれていると言われる。本講義では、造形芸術を中心に、その日本独自の美意識が、どのような要因から生じ、何を結果したのかを西洋や中国との比較を通じて考える。日本の美的伝統はくぐみ、優れた芸術を生み出してきた京都で学ぶ地の利を生かして、見学会を行う。到達目標は、日本独自の美意識がどのように日本文化にあらわれているかを理解することである。	
	スタンフォード大学科目	Religion and Japanese Culture Introduction to the importance of religion in Japanese culture covering the major traditions of the country. Visits to relevant religious centers for observation of current religious practices. Opportunities to participate where appropriate (e.g. meditation session). Topics include: relation between religion and culture; description of ancient Japanese religion and Shinto; outline of Buddhist schools of Heian Japan; introduction to Zen Buddhism as it flourished in the Kamakura period; analysis of Confucianism, both as originally conceived in ancient China and as transmitted to Japan in the Edo period in its Neo-Confucian form; discussion of some characteristic modern practices. (和訳) 宗教と日本文化 日本の主要な伝統と共に、日本文化における宗教の重要性を紹介。現在の宗教的実践の観察のため、関連する宗教センターを訪問。テーマは以下を含む：宗教と文化の関係、古代日本の宗教と神道、平安時代の仏教寺院の概要、鎌倉時代に開花した禅宗、古代中国で発生し、新儒教の形で江戸時代の日本へ伝来した儒教の分析、特徴的な現代の宗教的実践についての考察	
	A K P 科目	Lenses of Culture: A Comparative Analysis of Japanese Cognitions, Values, and Behaviors In this class, we will investigate our positionality and cultural lenses in understanding Japanese every day cultural behaviors. We hope to better understand a range of phenomenon, macro to micro. Using this distinction, macro levels will include a look at Japanese interindividual and intergroup processes like group decision making, individual and group negotiation styles in work, and forging and maintenance of close interpersonal relationships. The Micro level analysis will reflect intraindividual processes like cognition, motivation, and values in Japan. We'll even look at some emergent literature on experientially based neural differences of Japanese and North Americans! We will look at the importance and meaning of context, how macro processes might affect micro level phenomena and vice versa, and the antecedents and consequences of these similarities and differences. If possible, the class will include several field trips to a variety of organizational, educational, athletic, and consumer settings in the Kansai area to observe Japanese behaviors and interactions in context. Ultimately, students will develop a Japan based cognitive or behavioral framework derived from their personal experiences or observations.	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択科目C群 全学 共通 教養 教育 科目 (国際 教養 科目)	A K P 科目 (つづき)	(和訳) 文化のレンズ：日本人の認識、価値観、行動についての比較分析 本講義では、日本人の日々の文化的行動を理解するために、我々の立場性と文化レンズについて研究する。そのために様々な現象やマクロ及びミクロをよりよく理解したい。この分類において、マクロレベルとはグループの意思決定や職場での個人やグループでの交渉スタイル、また親密な対人関係の構築と維持等の日本人の個人間やグループ間プロセスの観察を含む。また、ミクロレベルの分析とは、日本における認識、自発性、価値観等の個人内プロセスを反映する。更に、日本人とアメリカ人の神経の差異について経験を基に書かれた新興文学について研究する。また、文脈の重要性や意味、どのようにマクロプロセスがミクロレベルの現象に影響を与えるか、またその逆はどうか、またこれらの類似点や相違点の素性や影響についても研究する。可能であれば、日本人の行動や相互交流を観察するため、関西圏の様々な組織や教育および競技や消費の場への社会見学も行いたい。最終的には、学生が個人の経験や観察から派生する認識または行動の枠組みに基づいたそれぞれの日本を発展させることを期待する。	
	K C J S 科目	Japanese in Action: Language Use in the Anime of Miyazaki Hayao This course examines the Japanese language in action, as utilized by the multitude of characters depicted in the anime films of Miyazaki Hayao. We will consider how language usage can vary depending upon a range of situational factors, for example, relative social distance between participants, type of interaction or event, in/out group membership, and attitudinal stance toward the topic of discussion. Readings, class discussions, and homework assignments will first consider English examples from everyday conversation in order to introduce a number of fundamental linguistic concepts, and subsequently apply them to Japanese excerpts drawn from Miyazaki 's works. Special attention will be paid to how the linguistic behavior of a character contributes to his or her overall portrayal and identity in a film. Our discussions will also include comparisons of English translations in film dubbings and subtitles with the original Japanese in order to consider how various social actions such as requests, apologies, and invitations may be conveyed in the two languages. We conclude with group-based multimedia projects on related topics developed and presented by the students. [No previous knowledge of linguistics is necessary or assumed for this course.]. (和訳) 動きの中の日本語：宮崎駿アニメで使用される言語 本講義では宮崎駿のアニメ映画の中で描かれる多数のキャラクターによって使用される動きの中の日本語を考察する。また、様々な状況要因、例えば参加者間の相対的な社会的距離、相互交流やイベントの種類、集団への帰属及び離脱、ディスカッションのテーマに対する態度等によって、どのように言語用途が変化するかについても考察する。リーディングや講義でのディスカッション及び宿題は、いくつかの基本的な言語学的概念を紹介するため、まず英語の日常会話の例を考察し、その次に宮崎映画からの日本語の引用を考察する。キャラクターの言語行動が、映画の中のそのキャラクターの描写やアイデンティティに、いかに作用するかにも注目する。また、2つの違った言語において要求、謝罪、招待といった様々な社会行動がどのように伝達されるかを考察するため、映画の英語の吹き替えの翻訳とオリジナルの日本語字幕の比較を講義の中で行う。講義の最後は、関連するテーマについてのグループでのマルチメディア・プロジェクトで締めくくる。(本講義を履修するにあたり、言語学に関する事前知識は必要ない。)	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群 全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (人 文 科 学 系 科 目)	宗教学(1)	本講義ではキリスト教の基礎知識を提供し、同志社の建学の精神について理解を深める。学問的な方法論によって、キリスト教の古典的な議論を現代の状況において再解釈していく。講義は旧約聖書ダイジェスト、新約聖書ダイジェスト、キリスト教史ダイジェスト、キリスト教思想の4つのブロックから構成されている。キリスト教思想を主題としつつも、関連する他宗教、神話、歴史、哲学、文学、芸術といった広範囲にわたる話題に触れる。	
	宗教学(2)	近代の「世俗化」傾向によって宗教の影響力は衰退するかと思われたが、現代では世界的に宗教へ回帰していく現象が顕著となっている。世界の動向を適切に理解するためには、宗教に関する一定の知識が欠かせない。本講義では現代宗教学の方法論に基づき、多様な宗教現象を客観的に説明する。具体的には、現代における宗教の問題性、宗教の起源と本質、世界の宗教の歴史、日本人の宗教的感性等、順次取り上げる。	
	哲学(1)	哲学の歴史は、同時に人間が確立したことばの力との複雑な絡まり、格闘、共同、敵対、裏切り、相互浸透、寄生等の歴史でもあった。そうした歴史的な経緯と様々な場面を、思想史に取材し、紹介しながらクローズアップして、ことばと哲学それぞれの立場に新たな光をあてる。本講義では、受講生諸君が、それを使って日常生活を送り、生きる世界を日々築き上げてゆく主要な手段としている「言葉」といものについて新しいまなざしを向け、同時に哲学というものの営みの一面を理解してもらうことを到達目標とする。	
	哲学(2)	「こころ」とはなんであろう。それは、意識や脳の働きとは異なるものなのか。それは、人間にだけ固有なものなのか。他の動物にも、あるいは高度な機械やコンピュータにもあるのだろうか。「こころ」には歴史がある、と言ったら驚くだろうか。そのような話題を最近の脳科学の知見等も紹介しながら、また哲学史の中での議論などにも触れ、「こころ」とは何かを考えてみたい。本講義では、「こころ」と言われているものを見つめなおす機会を提供することを主な目的として、様々な議論を紹介し、自らの問題として捉えなおせるようにしたい。	
	倫理学(1)	現代の応用倫理学、特に環境倫理学と生命倫理学の基本問題を考察する。具体的な事柄を吟味することが重要であることは言うまでもないが、それを通して、従来の「倫理学」がどのような見直しを迫られることになるかを明らかにし、環境と生命についての新しい哲学的思索の可能性を探り、あるべき「倫理学」の姿を模索したい。本講義では、環境倫理学と生命倫理学にどのような主要問題があるかを理解し、それについて哲学的に思索する姿勢を身に付けること、常識や通念から距離をとって物事を吟味できるようになることを到達目標とする。	
	倫理学(2)	人間は感性的存在者として様々な欲求をもっているだけでなく、理性的存在者として、それらの欲求が充足してもなお、何かを欲望している。例えばプラトンはそれに見事なミュートスの表現を与えたが、その「何か」は洋の東西を問わず、人間の思考を挑発し、翻弄し続けた。その結果生まれた学問が「形而上学」である。しかし、「この問題には別な解決の仕方があるのではないか」と立ち止まって考え、形而上学批判を果敢に試みた人たちがいる。例えばカントであり、東洋では仏教徒たちである。彼らの共通の答えは、「理性的存在者の関心事、つまり形而上学の問題は実践的のみに解決される」というものであった。本講義では理性的存在者が求めてやまない「何か」との関連において倫理学の根本問題を考えたい。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	論理学(1)	形式論理学の体系化では、出発点となる論理的公理を定め、一定の手続きに従って、論理的定理を露わにしていく。そのための方策として、はじめに設定する論理的公理のほうをできるかぎり少ない数にとどめ、所与の論理式の形を変えて別の論理式を産みだしていくための規則、すなわち、変形規則を適切に配置していく、という方法がある。本講義では、ゲンツェンが考案した論理体系に照準を定め、論理の形式的組織化がどのように成立しているのかを把握する。そのうえで、矛盾を含む論理体系は欠格であるから、ゲンツェンの論理体系の無矛盾性に関する証明にとり組みたい。	
	論理学(2)	形式的論理の公理的体系が充足しなければならない要件には、3つある。すなわち、当の体系に矛盾が含まれていないことを要求する無矛盾性、はじめに設定する公理が他の公理からは導出できない、という独立性、当の体系で真であるとみなせる論理式を全て網羅するための完全性である。周知のように、1930年にゲーデルが第一階の述語論理に関する完全性の証明を与えた。本講義では、無矛盾性、独立性、完全性という、論理の形式的体系が備えるべき特性について考察を進めながら、ゲーデルが証示した完全性定理の理解を深めて、本講義を、いわゆる「ゲーデルの不完全性定理」の導きとしたい。	
	芸術学(1)	本講義では、京都を舞台に近代日本における建築物、風景、都市景観、芸術等を切り口にして、日本的な美意識とはなにかを考察する。日本的な美意識の特色として、微細なもの、凝縮されたもの、清らかなもの、うつろいゆくはかないものへの愛好が挙げられる。大きく豊かなもの、力強いもの、合理的な秩序を持つものに美の理想を見いだす西洋とは対照的である。その特質は、盆栽からフィギュアまで、古くは中国、近代に入ってから西洋との交流を繰り返しても変わらず受け継がれていると言われる。本講義では日本独自の美意識が、文化の器である建築物、そして風景、都市景観において何を結果しているのか、またどのようなありかたが好ましいのか、といった問題を西洋や中国との比較を通じて考えてみたい。	
	芸術学(2)	マーケティングを、視覚文化論の枠組みにおいて 視覚表象をメディアと見なす立場から 理解することが、本講義の目標である。具体的には、企業が、顧客に向けて商品・サービスを流通させるために、商品そのものと広告(ポスター/テレビCM)のレベルで、どのような工夫をしているかを、芸術学(修辞学/物語論/デザイン論/演劇学/映像学/音楽学)的に分析することが課題である。受講生は、単に理解するだけでなく、自らも分析する力を身に付けることが求められる。	
	日本史(1)	歴史とは、時代ごとの変化生成の様相の把握である。またその研究対象となるのは各時代の人間が創造したものの総体であり、現代のわれわれの興味関心や様々な問題意識に由来するものである。本講義では、日本人の心性に少なからぬ影響を及ぼしている宗教について、通史的な理解を目標とする。神と仏・国家と宗教・文化創造の場としての寺院等の視点から各時代の宗教・文化の特質を考えていきたい。とくに「神」信仰が、仏教と接近しながら、いわゆる「神道」へと変容していく過程を1つの柱として考えていきたい。また、歴史史料・文学作品といった過去の記述、あるいは寺社に伝わる聖教類等の典籍や絵画・彫刻・建築といった文化遺産といった具体的な「モノ」を通じて何が言えるのか、あるいはそれらから何を考えられるのかといったこともあわせて言及していきたい。日本史(1)では、日本宗教文化史の諸相を古代の神仏信仰を中心にみていく。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群 全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (人 文 科 学 系 科 目)	日本史(2)	歴史とは、時代ごとの変化生成の様相の把握である。またその研究対象となるのは各時代の人間が創造したものの総体であり、現代のわれわれの興味関心や様々な問題意識に由来するものである。本講義では、日本人の心性に少なからぬ影響を及ぼしている宗教について、通史的な理解を目標とする。神と仏・国家と宗教・文化創造の場としての寺院等の視点から各時代の宗教・文化の特質を考えていきたい。とくに「神」信仰が、仏教と接近しながら、いわゆる「神道」へと変容していく過程を1つの柱として考えていきたい。また、歴史史料・文学作品といった過去の記述、あるいは寺社に伝わる聖教類などの典籍や絵画・彫刻・建築といった文化遺産といった具体的な「モノ」を通じて何が言えるのか、あるいはそれらから何を考えられるのかといったこともあわせて言及していきたい。日本史(2)では、日本宗教文化史の諸相を中世を中心にみていく。	
	東洋史(1)	巡礼は世界各地で見られる宗教的行為である。中国においても巡礼は大変盛んに行われ、宗教学や人類学の分野での研究の対象となってきた。近年は歴史研究の分野でも関連する研究が増えつつある。本講義では、中国においていかなる巡礼が行われてきたのか具体例を提示しながら概観した上で、巡礼という現象を通して民衆の生活や心性、社会経済史、さらには権力と宗教の関係や東アジアの国際交流といった様々な問題の解明を試みる。また他の文化圏の巡礼との比較もあわせて行うことによって中国的な特徴を浮き彫りにしていきたい。なお、本講義では前近代の事例を幅広く扱うが、関連する史料が格段に増える16世紀以降に重点を置いて議論していく予定である。	
	東洋史(2)	近年の中国の経済発展と国際社会での発言力の高まりは、この隣国に対する関心を引き起こしている。しかしながら、現代中国に見られる様々な現象がいかなる歴史的背景に基づいているのかについては、必ずしも十分な注意が払われているとは言いがたい。本講義では東洋史の分野における豊富な研究成果をもとに、毎回異なるテーマを選び、現代中国を特徴付ける社会構造や文化が歴史的にどのように形成されてきたのかを理解することを目指す。なお、本講義では中国前近代史を幅広く扱うが、16世紀以降の事象にとりわけ重点を置く。	
	西洋史(1)	現代のイギリス史について講義する。20世紀初頭から1970年代のイギリス社会は大きな時代的転換期にあった。自由党の凋落と労働党の躍進、チャリティの衰退と国家福祉の増大、ヴィクトリアニズム批判と大衆文化の興隆、白人中心社会から多民族社会への変貌等、イギリス史は近代と決別し新たなステージに入ったと言える。本講義では、同時期のイギリスの社会状況について概観し、現代史の面白さを伝えたいと思う。	
	西洋史(2)	本講義では、テューダー朝期からヴィクトリア時代までのイギリス史の潮流を念頭に置きつつ、近代イギリスにおける福祉社会について述べたい。ナイチンゲール、トワイニング夫人、モリス、ディケンズ等、著名人の貧者救済の取り組み、さらにはロンドンにおける下層階級の「悲惨な生活実態」等を紹介する。貧困に取り組む歴史上の人々について講義することで、社会史の面白さを伝えたい。	
	考古学(1)	考古学は人間が様々な関わりをもった「もの」すなわち遺跡や遺構・遺物等の物質資料の分析によって歴史を叙述する学問であり、文字によって語らなかつた社会や、自ら歴史を語ることの許されなかつた人々のなかに踏みいって行くこともできる。講義では古代(貴族社会)から中世(武家社会)への時代の転換期を中心に考古学の成果を紹介し、地域史としてはその時期にも大きく関与する「宇治」を取り上げる。歴史を自分なりにとらえる視点を養ってもらおう。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群 全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (人 文 科 学 系 科 目)	考古学(2)	発掘調査で出土した陶磁器を研究することによって、日本とアジア、ならびに世界の歴史について、講義形式を中心として学ぶ。日本の「江戸時代」を中心に、日本の中の「京都」、「京都」からみた中国大陸・朝鮮半島・東南アジア、そして西洋の文化について、陶磁器を研究することを通して学んでいく。毎回、考古学の研究成果と研究法を紹介しながら述べる予定である。陶磁器が焼かれた「窯」の調査で出土した陶磁器、陶磁器が使用されたことがわかる「都市」遺跡出土の陶磁器について、「地域」ごとに話を進める。日本だけでなく世界の「窯」と「都市」、「地域」について授業の対象とする。陶磁器をつくり、使い続けてきた人々の歴史を、考古学によって語る。	
	日本語(1)	日本語は日常生活の中で誰もが当たり前のように使用している言語であるが、それゆえ、あまり考察の対象になっていない場合が多い。授業でとりあげる身近な日本語の一つ一つの表現を分析することで、なぜ、そのような表現となっているか解明していきたい。何か気になった表現に出会ったとき、自身でも内省できるようになるためにも、日本語の基本的な特徴を学ぶ必要がある。講義では、文法・語彙・音声・文字表記・方言等、主だった分野において、学術的なアプローチを紹介していく。	
	日本語(2)	文法・語彙・音声・文字表記等、日本語に関する基本的な知識を踏まえ、身近な言語表現を資料として、日本語について、様々な角度から考えていく。日本語が持つ辞書的な意味だけでなく、その言葉が用いられる場面を考慮して日本語の表現を考察する。特に、日本語を用いる話し手(書き手)がその表現を選択し、用いる際には、どのようなことを意識し、或いは、意図しているか等についてとりあげたい。そして、日本語らしさとは何なのか、何を指して日本語特有の表現とされるのかを解明していきたい。	
	日本文学(1)	人生とは、一度だけのものである。できることなら、幅広い視野を持ち、いつもリラックスして、自分の目的に向かって邁進したいものである。しかしながら、現実には、そのようにうまくはいかない。作品中の登場人物たちの場合、それは劇的に表れてくる。こだわりや、執心が人一倍強いために、結果として他人を貶めたり、自ら不幸を選び取るといった作品が多く存在している。本講義では、特に男性の執心が描かれている作品を選び出し、解説・講読する。解説では、版本の紹介や読み方、類似作品(影響作品)との比較についても取り組む。また、作品によっては、プリントやDVD等の視聴覚教材も使用する。	
	日本文学(2)	人生とは、一度だけのものである。できることなら、幅広い視野を持ち、いつもリラックスして、自分の目的に向かって邁進したいものである。しかしながら、現実には、そのようにうまくはいかない。作品中の登場人物たちの場合、それは劇的に表れてくる。こだわりや、執心が人一倍強いために、他人を貶めたり、自ら不幸を選び取るといった作品が多く存在している。本講義では、特に女性の執心が描かれている作品を選び出し、解説・講読する。解説では、類似作(影響作品)との比較についても取り組む。また、作品によっては、プリントやDVD等の視聴覚教材も使用する。	
	ドイツ文学	本講義は、ドイツ語圏の近・現代文学についての一般的な知識を習得し、さらに文学の周縁をなす諸ジャンルとの相互関係について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。ドイツ語圏の近・現代文学を理解する上で欠くことのできない歴史や文芸思潮についての一般的な知識を紹介、整理することから始め、それを踏まえたうえで、授業の後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	フランス文学	本講義は、フランス語圏の文学についての一般的な知識を習得し、さらに文学と関係の深い諸ジャンルとの相互関係について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。フランス語圏の文学を理解するためには当該地域の歴史や文芸思潮史についての一般的な知識が必要である。授業の前半ではそれらを紹介、整理し、それを踏まえたうえで、授業の後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	
	中国文学	本講義は、中国語圏の文学についての一般的な知識を習得し、さらに文学の周縁をなす諸ジャンルとの相互関係について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。中国語圏の文学を理解する上で欠くことのできない中国の歴史や文芸思潮史についての一般的な知識を紹介、整理することから始め、それを踏まえたうえで、授業の後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	
	スペイン文学	本講義は、スペイン語圏の文学についての一般的な知識を習得し、さらに文学と深いかわりを持つ周縁の諸ジャンルとの相互関係について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。スペイン語圏の現代文学を理解する上で欠くことのできない歴史や文芸思潮史についての一般的な知識を前半の講義で紹介、整理し、それを踏まえたうえで、後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	
	ラテンアメリカ文学	本講義は、ラテンアメリカ文学についての一般的な知識を習得し、さらに、世界的なブームを引き起こしたラテンアメリカ現代文学の特殊性について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。ラテンアメリカ文学を理解する上で欠くことのできない歴史や文芸思潮史についての一般的な知識を前半の講義で紹介、整理し、それを踏まえたうえで、後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	
	ロシア文学	本講義は、ロシア語圏の文学についての一般的な知識を習得し、さらに西欧とは異なった伝統を持つロシア文学の特殊性について理解を深めることを目的としている。授業は主として講義形式で進めるが、適宜視聴覚教材を援用する予定である。ロシア語圏の文学を理解する上で、ロシアの歴史や文芸思潮史についての知識は欠くことのできない。したがって、講義の前半では、そのような知識を紹介、整理し、後半ではかなり専門的な領域にも踏み込むので、履修者には絶えず内容の連続性を意識しながら講義を受講するよう指導する。	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (人 文 科 学 系 科 目)	法学 1	本講義は、法学をいわゆる教養科目として学ぶ人々を対象とし、受講生が、わが国の裁判員制度および裁判制度、ならびに国内法・国際法の体系等について知識を得たうえで、法の世界の様々な現象を理解し、自ら考えられるようになることを目指す。講義期間の前半では、法・裁判の世界の基本的なしくみや特徴を解説する。後半では、法・裁判の世界を吟味する視座となる具体的な問題として、死刑制度についておよび法の下の平等をめぐる諸問題を取りあげる。	
	法学 2	本講義は、法学をいわゆる教養科目として学ぶ人々を主な対象として、受講生が、ジェンダー及び家族をめぐる問題についての理解と考えを深めたうえで、それらの問題を手がかりに、法の世界を理解及び吟味することを目指す。まず、フェミニズムの歴史及びフェミニズム法学の展開を確認する。次に、ジェンダー及び家族をめぐる問題、ポジティブ・アクションの導入をめぐる議論、わが国の労働状況におけるジェンダーをめぐる問題等を取りあげる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	政治学 1	現代政治が直面する重要課題を理解するのに必要な政治学の基本的知識と体系を、講義形式で解説する。特に現代国家の2つの最重要な制度的特徴「福祉国家」と「自由民主制」の理解を最も重視する。以上の目的のために、本講義では大きく分けて、(1)現代国家形成の経緯、(2)現代国家の思想的・理論的枠組み、(3)現代国家の政治制度の3点についての、基礎的な知識と「考え方」の習得を目標に、全15回の講義を行う。	
	政治学 2	国際政治学(国際関係論)の2大潮流であるリアリズムとリベラリズムの対比を中心に、講義形式で解説を行い、その基礎的な考え方の習得を目指す。以上の目的のために本講義では、最初に「国際社会」の基本的な特徴を確認した上で、国際政治学の発展過程を、実際の国際政治史の展開とあわせて概観することで、代表的な国際政治理論・アプローチの特徴と、その背後にあった問題関心を、全15回の講義で説明する。	
	経済学 1	本講義は、経済学の基礎理論のうちマクロ経済分析に焦点をあてて講義を行う。具体的にはGDPの定義、国民経済計算、乗数理論、消費関数、貯蓄関数、45度分析など財(生産物)市場について説明する。また、講義内容の復習をかねて受講生にプリントを配付し、練習問題の解答、解説を行う。本講義を受講した学生がマクロ経済学の基礎を理解し、マクロ経済学の資格試験レベルの問題が解けるようになることを目標とする。	
	経済学 2	本講義は、経済学の基礎理論のうちマクロ経済分析に焦点をあてて講義を行う。具体的には貨幣の機能、信用創造、信用乗数、貨幣保有動機、貨幣需要関数、金融政策の効果等、金融市場について説明する。また、講義内容の復習をかねて受講生にプリントを配付し、練習問題の解答、解説を行う。本講義を受講した学生がマクロ経済学の基礎を理解し、マクロ経済学の資格試験レベルの問題が解けるようになることを目標とする。	
	商学	(概要) 商学部の教育・研究領域を大きく5つに分けて、各領域の主要なテーマについてリレー形式で講義する。 (オムニバス方式/全15回) (149 川満 直樹/3回) 歴史的な観点から、商品の普及が私たち日本人の生活や意識(価値観や社会観)をどのように変化させたのかについて考える。 (133 内野 雅之/3回) 市場の概念について概説し、企業が市場に対して働きかけを行う手段としてのマーケティングの基本的枠組みを解説する。 (145 遠藤 敏幸/3回) 第二次世界大戦以降のアジア経済の動向を、各国のキャッチアップや通貨危機といったトピックスを織り込んで概観する。 (132 谷本 啓/3回) 日本の労働市場の現状と日本企業における人事戦略や雇用形態の多様化に関して、非正規社員の活用を含めて解説する。 (96 百合野 正博/3回) 日本において会計や監査がどのような社会的役割を果たしているかについて、カレント・トピックスを交えながら講義する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	数学 1	現代科学において基本的な考え方のひとつである関数について主として学ぶ。高校での数学の復習から始め、自然数、整数、有理数、実数、複素数等の数の基本的事項を学び、多項式の基本的な事項を概観する。三角関数、逆三角関数、指数関数、対数関数等の初等関数を基礎から扱う。これらの関数の定義やグラフ、基礎的な諸性質を見る。また微分や微分係数の意味やこれらの関数の計算、積分や定積分の定義や簡単な計算を通じて微分積分学の考え方を学ぶ。	
	数学 2	文化現象や社会現象等に現れる多くのデータやそれらの間の関係を記述、解析する時、多変量や多変数の関数が必要になる。特に、データ等を変数としてのベクトルと見ての取り扱いや線形関係が基本的であり、その基礎となる線形代数を学ぶ。内容としては数ベクトルと行列の定義や計算から始めて行列の基本変形と位数、連立1次方程式の解法、行列式の定義と計算およびその応用等をへて、ベクトル空間と線形写像に関する諸定義及び諸概念の学習に至る。	
	データサイエンス 1	本講義では、文化や社会に関する調査報告書が読めるための基礎知識として、広く使用されているグラフの読み方や作成方法、単純集計、度数分布、代表値等の記述統計データの読み方や基本的な計算の仕組み、質的データの読み方とクロス集計のような質的データのまとめ方、因果関係、相関関係、疑似相関の概念等の内容を扱う。実際のデータサイエンスを鳥瞰するために、現実の問題の具体的な例に則して、目的に応じたデータの作成及び処理に関する基礎を学ぶ。	
	データサイエンス 2	通常データ解析に用いるデータは母集団から抽出された標本のデータである。よって、データ解析では標本データの性質から母集団の性質を科学的に推測する必要がある。本講義では、推測統計の基礎知識として、確率、確率分布、推定と検定の考え方と基礎理論及びその応用として比率の検定や平均の差の検定、独立性の検定等について学習する。また、推測統計の統計解析への応用として回帰分析および分散分析に関する基礎知識も学ぶ。	
	物質の科学 1	有機物質・化合物はDNA・遺伝子やタンパク質等の生体物質から合成繊維やプラスチック等の材料や医薬品、香料、染料、そしてまた、エネルギー資源としても大変重要かつ身近な物質である。現代社会においてこのような様々な有機物質・化合物を作りだし利用して、我々は便利で快適な生活を享受している。しかしながら、その大規模な利用に伴い、様々な環境問題（地球温暖化、オゾン層破壊、廃棄物、有害物質等）が生じてきた。我々が享受している利便性（光）とこれらの環境問題（陰）をどのように解決し、持続可能な社会を上げていくかは、21世紀に生きる我々にとって実に重要な課題である。以上の観点から、本講義では有機物質・化合物の基本的な構造や機能ならびにその利用、そしてそれがもたらす環境問題について、特に有機資源とエネルギー利用、石油化学工業や有機材料（合成繊維・プラスチック）の利用、地球温暖化、オゾン層破壊物質や有害物質などに焦点をあてて解説する。	
	物質の科学 2	有機物質・化合物はDNA・遺伝子やタンパク質等の生体物質から合成繊維やプラスチック等の材料や医薬品、香料、染料、そしてまた、エネルギー資源としても大変重要かつ身近な物質である。現代社会においては、種々の生体物質の構造と機能が解明され、我々の生活に対して大きな利便性（光）のみならず、重大な影響（陰）をもたらししている。例えば、医療技術や遺伝子工学の進歩と倫理性等、様々な問題を引き起こす可能性がますます大きくなっている。以上の観点から、本講義では代表的で重要な生体物質・分子として、特にアミノ酸・タンパク質、糖・炭水化物、DNA・遺伝子・ゲノムに焦点をあてて、その基本的な構造・形から機能・仕組み、そして利用について基礎的な事項を解説する。本講義は文系学生諸君も理解できるように、基本的な事項から解説し、理解を深めるために適宜ビデオを使用する。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	地球と宇宙の科学 1	それぞれの時代や地域において、人間は様々な眼で地球と宇宙を眺めてきた。世界はどこまで広がっているのか、山や海はどのようにしてつくられたのか。このような疑問から、例えば「曼陀羅」のような宇宙観や「ノアの洪水」のような地球観が誕生した。20世紀の後半には地球を1つの星として観測することが可能になり、太陽系の歴史の中で地球の過去と未来を考える視点が得られた。そのなかで生まれた地球観と比較惑星学の成果を紹介する。	
	地球と宇宙の科学 2	自然の認識が文化や社会の活動と一体のものであることは、たとえば日本の伝統的な文化に見られる「花鳥風月」の要素や、1995年の兵庫県南部地震、2011年東北地方太平洋沖地震が私たちに与えた衝撃を思えば明らかだろう。プレートの沈み込み帯に住む私たちは、常に火山活動や地震の怖れとともに生きている。また、このような変動があればこそ、日本列島が存在するのである。プレート・テクトニクスによって明らかになった地球表層の構造と変動について講述し、さらに新しい自然観の創出を目指す地球科学の研究の動向を伝える。	
	生命の科学 1	春にはタンポポ、夏はセミ、秋は鳴く虫のマツムシや黄色い花のセイタカアワダチソウ、冬はドングリと雑木林等、季節に応じて身近な生きものを追いかける。街路樹や食べられる植物、ヒロヘリアオイラガ等の帰化昆虫をはじめ生物の社会的関係も取り上げる。なかでも、市街地の自然環境に注目し、毎木調査ほか、身近な自然環境を量的・質的に評価・診断する手法をいくつか紹介する。また、動物・植物の性の分化等、行動生態学や種生物学の最新の研究成果を紹介する。空間分布の解析方法等、生物の数学的側面についても触れる。講義時にはできるだけ実物を持参する。天気の良い日には野外に出かけ、生の自然に触れる機会を増やす。以上のように、生きものの実物を重視し、人間も含めた「自然との対話」を目指す。なお、野外の自然観察時のスケッチでは、美術と異なり自然科学におけるスケッチの技法で行う。	
	生命の科学 2	秋はマツムシやセイタカアワダチソウ、冬はドングリと雑木林等、季節に応じて里山や市街地の身近な生きものを追いかける。街路樹や食べられる植物、ヒロヘリアオイラガ等の帰化昆虫をはじめ、人間と生物の社会的関係も取り上げる。なかでも、市街地の自然環境に注目し、毎木調査ほか、身近な自然環境を量的・質的に評価・診断する手法をいくつか紹介する。また、動物・植物の性の分化等、行動生態学や種生物学の最新の研究成果を紹介する。空間分布の解析方法等、生物の数学的側面についても触れる。講義時にはできるだけ実物を持参する。天気の良い日には野外に出かけ生の自然に触れる等、分かりやすい講義を目指す。以上のように、生きものの実物を重視した講義、人間も含めた「自然との対話」を目指す。なお、野外の自然観察時のスケッチでは、美術と異なり自然科学におけるスケッチの技法を用いる。	
	科学史・科学論 1	技術（環境を変える手段）は人間の独占物ではないが、人間の技術が他の動物のそれを量的質的にはるかに凌駕することになったのは科学（数理の言葉で環境を認識し理解しようとする試み）に負うところが大きく、また人間の認識方法は科学に限らないが、科学が他の認識方法より説得力を持つに至ったのは数学的真理の普遍性によるところが大きい。このクラスでは古代のエジプトとメソポタミアで人々が発達させた数理の言葉とそれによる環境理解の一端をそれぞれの地域や文化の特殊性を考慮しつつ見ていく。	
科学史・科学論 2	江戸時代の日本には、そろばんをベースにして広い裾野を持つ庶民の数学文化が存在した。それは一方では日常的な経済活動を支える基盤となり、他方では関孝和や建部賢弘に代表されるような、高踏的な要素も含む専門数学（後に洋算と区別して和算と呼ばれた）の研究者を多数生み出す基盤ともなった。そのような庶民の数学文化の形成に極めて重要な役割を果たしたのが、江戸時代初期に京都嵯峨角倉家の吉田光由によって著された塵劫記（寛永4年、1627年）である。本講義では、塵劫記の内容、塵劫記に至る日本の数学文化の歴史、その出発点としての中国の数学文化、塵劫記が後世に与えた影響等を見ていく。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	環境の科学	地球環境の諸問題といわれている事柄について、誰もが理解できる科学的常識から見直してみると、その意外な疑問点や理解できない点が浮かび上がってくる。実は環境問題は、意外にも国際政治と大きな関わりをもっているのである。そういった点を考慮しながら、いくつかの事柄について述べていく。社会で一般的に言われている事柄、例えば二酸化炭素による地球温暖化や石油枯渇によるエネルギー問題等も、常識で理解できる科学的視点から見てみると矛盾点が浮かび上がってくる。そういった数多くの矛盾点、疑問点をしっかりとふまえることによって、環境問題や対策そのものの本質を理解することができるようになることを到達目標とする。	
	情報と社会	情報処理技術は、文系・理系を問わず、我々の生活に深く根付いている。その影響から我々は逃れることはできない。また、技術的進展も「ドッグイヤー (Dog Year)」と呼ばれるように、短い時間で大きな変化を遂げている。一方、「コンピュータの導入なんてほどほどに」との消極的視点も意外に社会に多いように感じる。本講義では、中学校・高等学校の「情報」教員となるための基本的な技術的知識を習得することを第一義的な目的として、インターネットと社会の関係への理解を深めることを狙いとしている。	
	心理学 1	本講義では、こころと行動を理解するための鍵となる基本的な仕組みと、それを見つけて出すための方法について学ぶことを目的とし、特に、行動の生理的基礎、感覚、学習、記憶、動機づけの仕組みについてとり上げる。 本講義の到達目標は、こころと行動の基本的な仕組みとそれを見つけて出すための方法を理解し応用できるようになることである。	
	心理学 2	本講義では、こころと行動を理解するための鍵となる基本的なしくみと、それを見つけて出すための方法について学ぶことを目的とし、特に、感情、発達、パーソナリティ、臨床、健康、社会心理学といったトピックを取り上げる。本講義の到達目標は、こころと行動の基本的な仕組みとそれを見つけて出すための方法を理解し応用できるようになることである。	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (先 端 ・ 複 合 領 域 科 目)	先端領域科目 1	<p>(概要)</p> <p>実践された地域デザイン事例を通して、これから求められる地域デザイン論を理解し、それを構成する学問領域とその融合化について考える。講義後半は、地域デザインの定義(地域の持続的発展に向けて、構想・計画等を企画考案し、その実現に向けて関係者に働きかけ、法制度の整備や自己組織化等の実践活動を行う)と地域デザイナーの役割(きっかけをつくり・それを支え・自立を促し・見守る、このような地域発達の介添者)を理解し、具体的な事例を通じて地域デザインを検証する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(101 井口 貢 / 1回)</p> <p>文化政策の視点を重視しながら、「地域社会をデザインする」ということの意味と意義について概論的に考察する。とりわけハードウェア・ソフトウェア・ヒューマンウェアが三位一体となって地域社会が推進されていくことの必要不可欠性と重要性について、地域経済と地域文化との円滑な協調関係のなかで「デザイン」されなければならないことを、観光やまちづくり、あるいはアーツマネジメントの視点等で示唆しながら、各論的にさらに詳細な考察を金武に引き継ぐための講義とする。</p> <p>(243 金武 創 / 14回)</p> <p>人が生きて環境をなす、その蓄積された叢智がデザインである。実践された地域デザイン事例を通して、これから求められる地域デザインの姿を理解し、それを校正する学問領域とその融合化について検討する。また、デザインは人間にとって本質的な何かを覚醒させる。地域社会を対象にしながら、「モノ」のデザインだけでなくとどまらず、アイデンティティやコミュニケーション、気付きの素材といった「コト」のデザイン、さらにはそれらを社会の中に生み出す仕組みのデザイン等について、授業を通して考える。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群 全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (先 端 ・ 複 合 領 域 科 目)	先端領域科目 2	<p>(概要) 政策を対象として研究、調査する政策学そのものは1951年にアメリカで始まったと言われるが、日本ではまだまだ一般化していない。その政策学のフロンティアと称する本講義では研究者と政令指定都市の地方公務員、そして地方政治家(府議会議員)がいま喫緊の政策課題になっている「地域力再生」に対して地方自治体の現場がどのような政策的取り組みを行っているのか、その実践活動を中心に講義を行う。すなわち政策をめぐる制度、政策を実施するプロセスと住民との地域協働、政策効果とその評価方法等である。それによって、政策学の新しいアプローチを提供する。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(102 山谷 清志 / 3回) 政策学の現在の理論を学生に提示して、それをツールにして「地域力再生」政策を分析してもらおう。すなわち政策デザイン論(政策目標にかなう政策手段の選択とその運用方法のデザイン)、政策手段論(補助・助成、規制・規制緩和・規制撤廃・特区、広報・教育、政策税制、民営化・地方分権・民活等の制度改革)、政策評価論である。この政策デザインと政策手段、政策評価を比較の視点で見る比較政策論(国際比較、国内の地方間での比較)も近年注目されつつある。京都府の行ってきた地域力再生政策と内閣府の行う地域力再生とはどこがどのように違うのか、中央と地方との比較もあり得る。</p> <p>(244 佐川 公也 / 7回) 「地域力再生」政策として各地方自治体は多様でユニークなプログラムを展開する。例えば京都府においても地域力再生を推進するため地域独自の活動に対する支援策を講じ、従来のNPOの法人化や助成金交付を本庁だけでなく現場に近い各広域振興局でも実施できるようにした。逆に「関西広域連合」はスケールメリットを生かした地域力再生政策の実現にむけ稼働し始めている。すなわち地域特性や地方自治体の規模に応じたプログラムが政策学の研究と実践における新しいフロンティアを形成し始めているが、講義ではこのような新しい動向に基づいた議論を積極的に行いたい。</p> <p>(245 西本 哲也 / 9回) 京都府の地域力再生政策や近年の地域開発政策の動向を題材に、政策学や行政学の知見に実際の行政実務の視点を加え、政策目標と政策手段の関係や政策の評価について学ぶことを中心としている。とりわけ、地方分権の進展に伴い、「政策評価の段階における中央と地方の関係」という新たな状況が生まれていることに着目し、多様な主体(都道府県、独立行政法人、公益法人、地方自治体、NPO、民間企業等)がかかわる、政策の体系や過程に応じた評価方法の実態等を紹介しつつ、あるべき姿を学生とともに検討する。</p>	オムニバス方式
	複合領域科目 1	<p>(概要) 健康について、スポーツ・運動の視点から、医学の視点等から考える。到達目標は、受講生が各視点からの知見と自己の生活習慣とのかかわりを考えることができるようになることである。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(103 富居 富 / 8回) 具体的内容は、筋の分類と有酸素的・無酸素的エネルギー供給過程、単純性肥満とエネルギー消費のための運動強度、ストレス解消と運動との関係等について述べる。</p> <p>(246 富岡 裕彦 / 7回) 内容を大きく分けると、感染症、外傷と応急処置、生活習慣病について講義する。</p>	オムニバス方式
	複合領域科目 2	<p>(概要) 昨今のエネルギーと都市環境の諸問題を対象として、今後の持続発展可能な社会形成・都市生活と、エネルギー資源・代替エネルギー等を体系的に解説する。本講義は、今後のエネルギー持続と都市域環境保全の両立の可能性を、経済・工学的な観点から身に付け、「環境共生」を「持続可能な社会構造」をキーワードとした地域連携型の都市再生に関するスキルを身に付けた学生を育成することを目的としている。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	複合領域科目 2(つづき)	<p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(247 室田 武 / 2回) エネルギー利用の日本史 燃料革命以前とその後 日本のエネルギー政策と環境問題</p> <p>(126 岸 基史 / 2回) エネルギーと生物圏 バイオマス・エネルギー利用と関西文化学術研究都市</p> <p>(108 和田 喜彦 / 2回) 地球環境の持続可能性とエコロジカル・フットプリント 持続可能性の回復へ</p> <p>(247 室田 武・126 岸 基史・108 和田 喜彦 / 1回) 経済学部 総合演習</p> <p>(105 千田 二郎 / 2回) 持続可能な街づくり：Sustainable Urban City 取り組み例 現在の環境/エネルギー問題と新エネルギーシステム概論</p> <p>(104 稲葉 稔 / 2回) 水素エネルギーと燃料電池の最新開発動向 リチウム二次電池と今後の電池技術の動向</p> <p>(106 藤原 耕二 / 2回) 自然エネルギーと太陽光発電 電気自動車用各種バッテリー技術と電磁環境</p> <p>(107 盛満 正嗣 / 2回) 高エネルギー密度を有する一次電池・二次電池の開発動向 省エネルギー・低環境負荷型の資源開発とリサイクル</p>	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (プ ロ ジ エ ク ト 科 目)	プロジェクト科目 1	<p>絵本は心のごちそうである。ページをめくって、笑えて、泣けて、癒されて・・・子供も大人も楽しめるエンターテイメントとして、感動がギュッと詰まっている。また、絵本から誕生した、キャラクターのトータルプロデュースによって、わくわくする世界が広がっている。そこで、本プロジェクトは、この絵本の持つ力に注目し、「楽しさの提供」をテーマにした空間と創作物をプロデュースする。チームを組み、後期終了までに一度、</p> <p>(1) チームの興味関心に沿ったイベントを、京都市内の会場で開催する。</p> <p>(2) イベントの連動企画として、コンテンツの企画制作を行う。前期科目のプロジェクト科目1では、企画作成を行う。本プロジェクトの目的は、「魅せて伝える表現力」をあげ、やりたいことをできるようにする楽しさの共有である。</p>	
全 学 共 通 教 養 教 育 科 目 (プ ロ ジ エ ク ト 科 目)	プロジェクト科目 2	<p>絵本は心のごちそうである。ページをめくって、笑えて、泣けて、癒されて・・・子供も大人も楽しめるエンターテイメントとして、感動がギュッと詰まっている。また、絵本から誕生した、キャラクターのトータルプロデュースによって、わくわくする世界が広がっている。そこで、本プロジェクトは、この絵本の持つ力に注目し、「楽しさの提供」をテーマにした空間と創作物をプロデュースする。チームを組み、後期終了までに一度、</p> <p>(1) チームの興味関心に沿ったイベントを、京都市内の会場で開催する。</p> <p>(2) イベントの連動企画として、コンテンツの企画制作を行う。後期科目のプロジェクト科目2では、プロの方々の協力も得ながら前期に作成した企画を実施する。本プロジェクトの目的は、「魅せて伝える表現力」をあげ、やりたいことをできるようにする楽しさの共有である。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	健康の科学	現代の日本では高齢化、機械化・省力化による運動不足、過食、ストレス過多等により生活習慣病やうつ病等の体と心の病が急増している。本講義では、健康の概念や人体の構造や機能、メタボリックシンドロームの診断基準や概要等について理解し、日頃、自分の健康管理を行なう上で必要となるバイタルサイン（生命徴候）のセルフチェック法、健康的に痩せるためのダイエット法、休養やアルコールの適正なとり方、健康・体力づくりのための正しい運動の仕方等について身に付ける。	
	スポーツの科学	生活を便利にするために現代社会では、ヒトの移動や物の運搬等の機械化が進んでいる。このように生活を支援する機器は、我々の日常生活を便利にしてきた。しかしその便利さゆえに、日常生活において人は身体を動かすことが少なくなり、便利な機器を多用して生活している。このような現代社会において、健康な生活を送るためには、体を適切に動かす必要がある。そのためには、身体を動かす効果と、体を適切に動かす方法について学ぶことが重要である。本講義の目的は、健康な生活を送るために、身体を動かすしくみについて学ぶ。そして、健康の維持・体力の維持、向上のための知識を学ぶことである。	
	スポーツと健康	現代社会は飽食と運動不足の時代といわれ、肥満を伴う生活習慣病の克服がきわめて重要な課題となっている。生活習慣病の予防・克服に向けて様々な取り組みが展開されているが、運動や食事療法が肥満やインスリン抵抗性及び2型糖尿病の予防や治療法に有効であることは多くの研究で支持されている。本講義では、運動が健康に及ぼす効果の科学的知見を紹介し、健康の維持増進及び疾病予防における運動の役割について自ら考え、行動できることを到達目標としている。講義は、健康とスポーツに関わるトピックスやテーマについてオムニバス形式で展開し、全体として、健康を維持・増進するための運動・スポーツの役割とその重要性についてまとめる。	
	トレーニングの科学	ひとの“からだ”と“健康”と“酸素”を中心に、日常生活に深く密着したトピックスを紹介する。生物の進化、ポストゲノムからの遺伝子研究、最近注目されている病気、運動の効用、日本人の生理人類学、高齢化社会に向けた健康21の取り組みなど、生きた知識としてup-to-dateな内容を解説する。本講義では、自己の健康を自分自身で管理していくために、からだの仕組みを生物学的な観点から理解する。その上での近年注目されているいくつかのトピックスとについて学習し、実践的な知識としてこれらを自己のライフマネージメントに取り入れる態度を育成する。	
	スポーツの文化	レジャー論、子どものスポーツ、障がい者スポーツ、オリンピックの諸問題、スポーツとジェンダー、海外のスポーツと日本の伝統スポーツ等、様々なスポーツ事象について、その文化社会的な背景を探る。単にスポーツに関する知識を身に付けるだけでなく、なぜスポーツに関わる諸問題が起こるのか?について考える。「覚える」より「考える」がキーワードとなる。また、受講者一人一人が今後スポーツとどのように付き合っていくのか、それぞれの人生においてスポーツがどのような機能を果たすのかについて考える。	
	スポーツのマネジメント	スポーツが社会、政治、経済に及ぼす影響は大きい。現代社会において急速に発展したスポーツは、人々に「する」「みる」楽しさを与えており、われわれの生活に密接に関わっている。現代社会において、スポーツ産業の拡大と発展がもたらす社会変動、経済効果、地域活性化といった側面は見逃すことができない。その一方で、過度な勝利至上主義が招いているルール違反や不正行為、ドーピング、暴力行為が発生している。過熱した商業主義による弊害として、スポンサー料や放送権料の高騰、自然環境の破壊といった問題も生じている。こうしたスポーツ産業の功罪について理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 科 目 C 群	スポーツの心理	「運動実践への動機づくり」をメインテーマとし、健康のための運動実践という一般的なレベルから、よりよいパフォーマンスの発揮を目指す競技スポーツのレベルに至るまで、「スポーツ」と「こころ」の関係について触れていく。本講義では、「運動やスポーツの実践」と「実践者の心理的側面」の関係を理論的に理解し、運動実践指導者としての糧にすることができることを到達目標とする。	
	スポーツ・パフォーマンス 1	人間が、生涯にわたって良好な健康状態と体力を維持するためには、運動習慣の獲得は欠かせないものである。もしそれがなければ、逆に健康破壊を招く危険性が予想される。しかしここで重要なことは科学的な理論に基づいた指導の下に、スポーツを実践し技術を習得することである。本科目では、正確なスポーツ技術を学ぶとともにスポーツを安全に行う態度を身に付け、体力を向上させる方策を学習する。種目はバスケットボール、バレーボール、ダンス、卓球、フェンシング、剣道、柔道、ソフトボール、軟式野球、ゴルフ、バドミントン、テニス、ソフトテニス、アスレチックス、フィットネス、ニュースポーツ、ライトエクササイズ、インラインホッケー、サッカーの中から選択して学習する。	複数教員が同内容の授業を行う
自 由 科 目	情報機器の操作	本講義は、情報化社会を担っていく上で必要となるコンピュータとネットワークの基礎知識と活用方法を、実習を通して習得することを目的とする。コンピュータリテラシーと情報活用能力を養成するために、比較的使用頻度の高いワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの基本的な操作方法を講義し、実習を行う。また、インターネットを利用した効率的な情報収集の方法と、それに伴う著作権等の遵守についても解説し、実習を通じてメディアリテラシーの知識を修得する。講義資料の配布、内容確認テスト等は、汎用的な授業管理システム上でを行い、今後教職に就いて授業管理システムを活用する準備としたい。	
	教育実習の研究	教育実習は、実際の現場に立ち、生徒との関係を築く大切な機会である。この実習にあたり、注意する点を実習前の前期に行う。中学校及び高等学校ではオリエンテーションが行われるので、その注意点についてもクラスで共有し、レベルの高い参加ができるように工夫する。また、ビデオによる授業の検討や模擬授業等も行う。教育実習後には、その内容を反省的に復習し、将来教員となったときに役立つような心がける機会とする。	
	教育実習 A	本科目では、実際の教育実習の具体的な準備等を行うことを目的とする。2週間の実習に対して、十分に対応できるような準備を行うとともに、実際に学校に赴くこととなる。実際に学校で生徒や教諭に接するが、かつて授業を受ける立場で在学した学校で、教える立場でかかわることにより、新しい視野が開けることとなる。この演習では、教育実習の実践を中心に、勉学を進めることとなる。	
	教育実習 B	本科目では、実際の教育実習の具体的な準備等を行うことを目的とする。高等学校の2週間実習に対して、十分に対応できるような準備を行うとともに、実際に学校に赴くこととなる。実際に学校で生徒や教諭に接するが、かつて授業を受ける立場で在学した学校で、教える立場でかかわることにより、新しい視野が開けることとなる。この演習では、教育実習の実践を中心に、勉学を進めることとなる。	
	教育実習 C	本科目では、実際の教育実習の具体的な準備等を行うことを目的とする。中学校の3週間あるいは4週間の実習に対して、十分に対応できるような準備を行うとともに、実際に学校に赴くこととなる。実際に学校で生徒や教諭に接するが、かつて授業を受ける立場で在学した学校で、教える立場でかかわることにより、新しい視野が開けることとなる。この演習では、教育実習の実践を中心に、勉学を進めることとなる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由科目	教職実践演習(中・高)	教職課程の総まとめとして、これまでの教職課程の履修をふりかえることにより、自らの不足している教員としてのスキルを認識したうえで、教員として必要な資質能力とは何かを考え、教職につくまでの準備期間に役立てる。また、これまでの学生生活を振り返り自分には何が不足しているのか、今後、教員としてどのように成長していくべきかを考えてもらいたい。そのきっかけとして、大学の建学の精神を通じて社会人、教員として必要な社会的スキルとは何かを学ぶ。そして、同時に同志社大学卒業の教員、出身学部卒業の教員としての強みとは何かを考え、これからの教員になるにあたり自らの目指すべき理想の教員像や克服すべき課題を明確にしていく機会とする。	
日本語・日本文化教育科目	日本語1(読解A)	外国語で文章を読む場合、語彙や文法の処理に多くの認知資源が使われてしまい、読んだけれども意味が理解できない、あるいは理解が浅いということが多々ある。本講義では、様々なタイプの文章の読解を通して、下位処理の自動化を促進し、日本語でより流暢に、より正確に、そしてより深く読めるようになることを目標とする。授業においてはペアやグループによる読みの練習を多く行うので、受講生は積極的に授業に参加することが望まれる。到達目標は、読みのストラテジー(スキミング、スキミング等)を身に付けること、語彙認知の速度を高めること、文章を正確に且つ速く読めるようになることである。	
	日本語1(読解A)	本講義では、「速読」を中心とした読解を行う。新聞記事を中心に、速く正確に必要な情報を得るためのスキミングやスキミング等の技術、予測や推測の力を高めるためのトレーニングをしていく。速読の力を身に付けると同時に、語彙力も向上させるために、前の回に使用した文章中の語彙から、毎回講義のはじめに5~10分程度の語彙・表現の小テストを行う。前半は新聞記事、後半は雑誌記事や論説文等を扱う。到達目標は、基本的なスキミングやスキミング等の技術、予測や推測の力を身に付け、必要な情報が速く正確に読めるようになること、読解力向上のために不可欠な語彙力も高めることである。	
	日本語1(読解A)	本講義では、新聞記事や論説文等、複雑な構造の長文を、正確に理解する力、速く読み進めていく力を養成することを目的とする。同時に、周辺語彙を増やしていくこと、日本社会や日本文化全般に対する理解を深めることを目標とする。また、各自の興味に応じ、新聞や雑誌から記事を選び、それについての発表を行う。到達目標は、複雑な構造の長文を、速く正確に読めるようにすること、それらの文を理解するために必要な語彙力を身に付けること、新聞等から興味のある記事を選び、内容をまとめ、発表することができるようになることである。	
	日本語1(読解A)	様々なタイプの文章(新聞記事、社会評論、科学評論、歴史等)を正確に読み取る練習、また、スキミングやスキミングを通して、必要な情報を素早く得る練習等を行い読解力を高める。さらに、日本の社会や文化についてより詳しく知り、理解することも目指す。毎回のテーマや背景についてもクラスで意見交換を行う。到達目標は、様々なタイプの文章が深く読み取れ、さらに、日本社会に対する理解が深まるようになることである。	
	日本語1(読解B)	授業は講義形式で行うが、担当者が一方的に行うのではなく、学習者からの積極的な参加も非常に重要である。本講義ではエッセイや小説を取り扱うが、まず、その日の授業で取り扱う作品の著者について説明・紹介を行う。次に、本文中に出てくる語彙や文法についてその意味と使われ方を把握した上で、本文の読解に入る。本文を読み進めながら、語彙や表現についてさらに詳しく確認し、内容を理解した後、本文に関する質問に答えていく。最後に、本文を読んでどのように感じたかについても話し合うことで「思い」を共有し、また、視点の違いを確認する時間を持つことにする。	
日本語1(読解B)	本講義では主に日本の文学を教材とする。詩、小説、エッセイ、評論等、日本語の様々な文章表現やリズムに触れることによって読解力を高め、日本の文学や社会的背景、価値観等も理解することができるようになるだろう。到達目標は、様々な文学作品を通して、著者の主張やテーマ、登場人物の心情、人間関係、社会的背景等も読み取れるようになることであり、教材で使われている日本語表現や語彙を学び、文章を書く際に応用することができることである。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	日本語 1 (読解 B)	本講義では、インテンシブ・リーディング（精読）の力をつけると同時に、日本語による高度の思考能力と表現力をつけることを目的とする。主に、上級学習者向けの読解テキストの中から、優れた小説、知的水準の高いエッセー、評論等を取り上げる。単に文法的な理解に止まらず、日本語の特質、文章の書き方、文体についても理解を深める。到達目標は、日本語の小説、エッセー、評論を深く読むことができるだけでなく、高度な思考能力と表現力が身に付けられることである。	
	日本語 1 (読解 B)	様々な日本語に触れ、また表現してきた上級レベルの受講者とともに、日本文学を味わう。日本語で日本文学を読むことにより、1つの語が持つ意味、与える印象、また背景にある日本文化や習慣等を解説し、一言一句にこだわりながら作品を読み進め、文学の世界を「頭」と「心」の両方で理解することを目標とする。到達目標は、学生が、日本語で日本文学を読み、その文学を生み出した「日本」そのものに触れることができるようになることである。	
	日本語 1 (語彙)	様々なテーマの文章を読み、文章のテーマ別に頻繁に用いられる語・表現を学ぶのみならず、幅広い語彙力を身に付けるうえで必要な読解力も同時に高める。また、学生の母語と日本語との表現の違いにも焦点をあてると同時に、日本語特有の慣用句、連語表現等が使えるようになることも目的とする。用例収集や語の使い分けに関する分析を行うため、学生の積極的な授業参加が望まれる。到達目標は、授業を通して語彙量を増やし、その定着を図るのはもちろんのこと、学生自らが状況に応じた語の選択・使い分けができるようになることである。	
	日本語 1 (語彙)	日常会話で使用される語彙と、大学での学習、研究活動に必要な上級レベルの語彙とは異なる部分が多くある。本講義では、新聞記事（社説、報道記事、評論、他）に使用される抽象的な意味の漢語、連語、慣用句、比喩表現等の書き言葉的な表現を学ぶ。発展学習として、概説的な文章の内容を整理して把握する練習を行う。到達目標は、(1)上級レベルの書き言葉的な表現を理解し、適切に使用できるようになること(2)文化、社会に関する概説的な文章の内容を、キーワードを正しく把握して要約することができるようになることである。	
	日本語 1 (語彙)	本講義では、名詞や動詞の連語を中心に、比喩表現・慣用句等も含めた語彙を増やすことが目的である。講義の内容は、新聞記事や社説、雑誌、学術論文等の難解な文章を読みこなすための語彙の習得である。本講義では、重要表現の意味理解、短文作成といった練習を進めていく。1課終了ごとに、習った表現が使われている記事や、関連する内容の記事の読解も適宜取り入れる。到達目標は、まとまった文章の中で、「どんな表現が」「どうやって」使われているかがわかるようになること、更に、連語表現や、比喩、慣用句等の意味を理解するだけでなく、それらを使った短文作成をすることで、語彙の定着を図ることであり、こういった作業を通じて、新聞記事や論文等、比較的長い文章を読む力も養成する。	
	日本語 1 (語彙 IX)	本講義は超上級レベルの学生を対象としている。外国語で情報発信を行う場合、特に論文作成のような高度な言語表現が要求されるような場で、適切な表現を用いることができるかということ、なかなか自信の持てない向きもある。そこで、本講義では、各自が母語を使用した際の知的レベルと同等の、高度で洗練された表現に習熟し、それらを可能な限り身に付けることができるよう、演練に励む。まず、ジャンル、形態を問わず、日本語で表現されたものに数多く触れ、現実で使用されている表現を実感し、上級学習者として身に付けておくべき表現を理解する。こうした積み重ねにより、上級表現に敏感な目と耳を養成する。次に、例文作成及び発表を通して、上級表現の運用の仕方を理解し、いざというときに役立つ表現を身に付ける。	
日本語 1 (文章表現 VI)	本講義では、レポートの基本的な書き方を学ぶことを目的とする。レポートが必要とされる書き言葉については、まず話し言葉との違い、文体、表記の決まり等を導入する。次に、段落や文章構成を考え、定義・問題提起・データ説明・事実文と意見文・原因の考察・結論の述べ方・引用の仕方・参考文献の書き方等を学ぶ。期末レポートでは、2000字程度のレポートを書く予定である。到達目標は、学生が授業で学んだ表現や技法を用いてレポートを書けるようになるだけでなく、より良い文にできるように表現力を磨くことである。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本語 1(文章表現 VII)	本講義では、大学学部レベル以上のレポート及び論文が書けるようになることを目標に、アカデミックな内容のレポート・論文作成に必要な知識と技術、日本語の表現力・運用力・論理的に思考し論理的に文章を組み立てる能力を養成する。授業ではレポート作成の基礎を学びながら、要約練習、課題作文の作成やテーマについての議論等も行う。その成果の確認として、学期末に2000字程度(またはそれ以上)のレポートを作成する。到達目標は、作文の基本、テーマの決め方、全体の構成、表現、グラフの使い方等について練習し、最終的に2000字以上のレポートが書けるようにする。	
	日本語 1(文章表現 VIII)	本講義では、大学学部レベル以上の学生に求められる日本語の文章能力を養成することを目的とする。レポートや論文を作成するために必要な知識や技術、表現を学ぶことが中心となるが、その他の文章、例えば、改まったメール文等を作成するために必要とされる技術、表現についても扱う予定である。期末のレポートの他に、項目ごとに、学習内容確認のための課題(作文等)を課し、添削等を行う。必要に応じて、文法面の補強を図るための練習等も行う。	
	日本語 1(文章表現 IX)	既にレポートを書いたことがある学生を対象に、よりよいレポート作成を目指す。問題提起をして、問題の解決案を示し、自分の主張を述べるという論理的なレポートが書けるようになることを目的とする。レポートの書き方(レポートの文体と表現、テーマの設定、アイデアをまとめる、情報を収集する、情報をまとめる、適切に引用する、アウトラインを作成する、レポートの構成、段落と段落の関係、パラグラフ・ライティング等)を確認しながら、学ぶ。出来上がったレポートをよりよくするためには、レポートの内容面、日本語の表現形式、フォーマットの改善等を考える。	
	日本語 1(口頭表現A VI)	中上級レベルに要求される口頭運用能力を身に付けることを目的とする。口頭で人に伝える力・技術を養うため、主にスピーチ、プレゼンテーションを通して訓練を行う。的確な表現を用い正しい音声で発表できる能力を養うことを目指す。そのための発音発話トレーニングも行う。到達目標は、テーマについて簡潔にまとめた内容を伝えることができるようになることである。正しい音声でわかりやすく伝えることができるようになることである。	
	日本語 1(口頭表現A VII)	本講義では、アカデミックな場で自分の考えを論理的に伝える口頭発表ができる日本語運用能力を身に付ける。そのために、資料作成等準備の方法、発表の方法、質疑応答の方法、及びそれらの際に用いる表現等を学習する。また、聴解力を身に付けるための練習等も併せて行なう。学生には、2回の発表と、その原稿の提出が課せられる。発表の日程や提出期限を守り、授業に積極的に参加することが必要である。到達目標は、一般的、学術的な話題について、自分の考えを論理的に伝えられるようになることである。	
	日本語 1(口頭表現A VIII)	本講義では、アカデミックな場で自分の考えを論理的に伝える口頭発表ができる日本語運用能力を身に付ける。そのために、資料収集等準備の方法、発表の方法、意見交換・質疑応答の方法、及びそれらの際に用いる表現等を学習する。また、聴解力を身に付けるための練習等も併せて行なう。学生には、2回の発表と、その原稿の提出が課せられる。発表の日程や提出期限を守り、授業に積極的に参加することが必要である。到達目標は、一般的、学術的な話題について、自分の考えを深く論理的に伝えられるようになることである。	
	日本語 1(口頭表現A IX)	本講義は上級話者を対象に、さらに上のレベルの「超級」の口頭表現能力を目指すことを目的とする。スピーチ・プレゼンテーションの練習を通して、話す場面・相手によって適切な日本語が使い分けられるようになること、学術的・抽象的な話題に関してよみかなく的確に細部に渡って表現することができるようになること、発表内容を的確に聞き取り、質疑、議論できるようになることを目指す。「超級」を目指す話者として、自律的に学習を進めていくことが望まれる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	日本語 1(口頭表現B VI)	本講義では、上級前期として必要とされる口頭運用能力を身に付けることを目的とする。ロールプレイ、談話練習を通じて「場面や相手に合った表現を選択し、話す力」、「複雑なことをわかりやすく伝える力」を、社会問題に関するディスカッション及び対立討論を通して、「他人の意見を正確に聞き取る力」、「自分の意見を論理的に組み立ててわかりやすく話す力」を養う。到達目標は、(1)社会問題について、情報や他人の意見を正確に聞き取る力を身に付けること、(2)自分の考えを論理的に組み立て話せるようになること、(3)場面や相手に合わせて適切な表現を選択し、話せるようになることである。	
	日本語 1(口頭表現B VII)	本講義では、上級として必要とされる口頭運用能力を身に付けることを目的とする。「社会的なテーマについての自分の意見を論理的に組み立てながら、それを人に伝える力」「相手の意見を正しく聞き取り適切に質問する力」を養うための訓練を行う。また、人の前で自分の意見をアカデミックな話し方で発表できる能力を養うことも目指す。到達目標は、(1)自分の意見を論理的に伝える力を身に付けること、(2)アカデミックな話し方、表現を用いることができるようになること、(3)相手の意見や情報を聞き取り、適切な質問をする力を身に付けるようになることである。	
	日本語 1(口頭表現B VIII)	本講義では、日本語上級話者として必要な口頭表現能力のうち、「社会問題や学術的話題について様々な視点から考える力」「他人の意見を正しく聞き取り、質疑・応答・議論する力」「自分の意見を論理的に組み立て、わかりやすく伝える力」を身に付けることを目指す。到達目標は、(1)自分の意見を論理的にわかりやすく伝える力を身に付けること、(2)場面に適した表現を用い、聞き手に配慮した話し方ができるようになること、(3)相手の意見や情報を正確に聞きとる力を身に付けることである。	
	日本語 1(口頭表現B IX)	日本語の上級話者が「超級話者」になるための訓練を行う授業である。特に、大学や大学院で学ぶ上で必要な議論する力を養成するため、ディスカッションやディベート、プロジェクトワークの実践を行う。ACTFL(全米外国語教育協会)が実施するOPI(口頭能力インタビュー試験)の基準によると、超級話者は(1)社会的・専門的な話題についての詳細な説明、描写等ができること、(2)相手との関係を損なうことなく説得力のある裏づけを伴った意見を述べたり、相手との意見に反論したりできること、(3)相手に対する配慮を示しながら、説得・助言・交渉等ができることと定められている。本講義で実施するディスカッション、ディベート、プロジェクトワークは、上述(1)(2)の能力養成を目指すものであり、上述(3)については、「会話の技術」(全9回の短い講義・演習)において訓練を図る。活動中心の授業なので、受講生には日本語の「超級話者」を目指して積極的に取り組むことを期待する。	
	日本語 1(文法 VI)	日常会話でよく使われる文型や頻繁に目にする文型を中心に、文型を機能別に分類し学んでいく。また、似通った意味・用法の文型がどのように使い分けられているか、実際に例文を収集し考察する。学期前半は、文中で用いられる文型を、後半は文末で用いられる文型を取り上げる。なお、授業で扱うのは日本語能力試験N2レベルの文型を主とする。到達目標は、文型の意味・用法を理解した上で、実際の日常生活や学校生活で状況に応じて、適切な文型を選択し使えるようになることである。	
日本語 1(文法 VII)	上級文法を正確に身に付けていない学生を対象に、上級文法を再確認し、正しく運用できることを目的とする。併せて、学習者が苦手とする文法事項、或いは、間違いやすい文法事項等も取りあげ、再確認する。授業は、毎時間多くの練習問題に取り組む形で進めていく。到達目標は、上級文法が正しく身に付き、運用できるようになり、正しい文法への意識が高まるようになる、苦手な文法事項を克服することである。		
日本語 1(文法 VIII)	主に日本語能力試験1級の文法項目を中心に、基本的な用法やどのような場面で使われるかを学習し、それらを使って文を作る練習を行う。そういった練習を繰り返すことで、どんな時にどう使われるのかを身に付け、上級文法の定着を図る。到達目標は、既習の文法項目を使って、短作文が書けるようになることである、またはそれらの表現が含まれる文章を抵抗なく読めるようにすることである。これらを通じて、大学で学ぶ上で、必要とされる上級文法を身に付けることができるようになる。		

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本語 1(文法 IX)	大学学部レベルの教科書、専門書にも頻出する、日本語能力試験N1レベルの機能語を中心に、意味、用法の解説を行う。小説や新聞記事等で実際に行われているそうした機能語の用法を確認し、そこから、当該機能語を用いるべき状況を明確にした上で、典型的な文型を導入する。取り上げる機能語は既習のものがほとんどであろうが、単に知っているのではなく、正しく用いることができるようになってほしい。とはいえ、週1度の授業であり、ドリル的な演習の時間は十分にとれないため、日本語学習者の陥りがちな誤用例を挙げ、それを訂正する作業を通して、運用力を身に付けられるようにする。	
	日本語 2(読解A VI)	外国語で文章を読む場合、語彙や文法の処理に多くの認知資源が使われてしまい、読んだけれども意味が理解できない、あるいは理解が浅いということが多々ある。本講義では、前期に引き続き、様々なタイプの文章の読解を通して、下位処理の自動化を促進し、日本語でより流暢に、より正確に、そしてより深く読めるようになることを目標とする。授業においてはペアやグループによる読みの練習を多く行うので、受講生は積極的に授業に参加することが望まれる。到達目標は、読みのストラテジー(スキミング、スキミング等)を身に付けること、語彙認知の速度を高めること、文章を正確に且つ速く読めるようになることである。	
	日本語 2(読解A VII)	本講義では前期に引き続き、「速読」を中心とした読解を行う。新聞記事を中心に、速く正確に必要な情報を得るためのスキミングやスキミング等の技術、予測や推測の力を高めるためのトレーニングをしていく。速読の力を身に付けると同時に、語彙力も向上させるために、前の回に使用した文章中の語彙から、毎回講義のはじめに5～10分程度の語彙・表現の小テストを行う。前半は新聞記事、後半は雑誌記事や論説文等を扱う。到達目標は、基本的なスキミングやスキミング等の技術、予測や推測の力を身に付け、必要な情報が速く正確に読めるようになること、読解力向上のために不可欠な語彙力を高めることである。	
	日本語 2(読解A VIII)	本講義では前期に引き続き、新聞記事や論説文等、複雑な構造の長文を、正確に理解する力、速く読み進めていく力を養成することを目的とする。同時に、周辺語彙を増やしていくこと、日本社会や日本文化全般に対する理解を深めることを目標とする。また、各自の興味に応じ、新聞や雑誌から記事を選び、それについての発表を行う。到達目標は、複雑な構造の長文を、速く正確に読めるようにすること、それらの文を理解するために必要な語彙力を身に付けること、新聞等から興味のある記事を選び、内容をまとめ、発表することができるようになることである。	
	日本語 2(読解A IX)	前期に引き続き、様々なタイプの文章(新聞記事、社会評論、科学評論、歴史等)を正確に読み取る練習、また、スキミングやスキミングを通して、必要な情報を素早く得る練習等を行い読解力を高める。さらに、日本の社会や文化についてより詳しく知り、理解することも目指す。毎回のテーマや背景についてもクラスで意見交換を行う。到達目標は、様々なタイプの文章が深く読み取れ、さらに、日本社会に対する理解が深まるようになることである。	
	日本語 2(読解B VI)	授業は講義形式で行うが、担当者が一方的に行うのではなく、学習者からの積極的な参加も非常に重要である。本講義では前期に引き続き、エッセイや小説を取り扱うが、まず、その日の授業で取り扱う作品の著者について説明・紹介を行う。次に、本文中に出てくる語彙や文法についてその意味と使われ方を把握した上で、本文の読解に入る。本文を読み進めながら、語彙や表現についてさらに詳しく確認し、内容を理解した後、本文に関する質問に答えていく。最後に、本文を読んでどのように感じたかについても話し合うことで「思い」を共有し、また、視点の違いを確認する時間を持つことにする。	
	日本語 2(読解B VII)	本講義では前期に引き続き、主に日本の文学を教材とする。詩、小説、エッセイ、評論等、日本語の様々な文章表現やリズムに触れることによって読解力を高め、日本の文学や社会的背景、価値観等も理解することができるようになるだろう。到達目標は、様々な文学作品を通して、著者の主張やテーマ、登場人物の心情、人間関係、社会的背景等も読み取れるようになることであり、教材で使われている日本語表現や語彙を学び、文章を書く際に応用することができることである。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本語 2(読解B VIII)	本講義では前期に引き続き、インテンシブ・リーディング(精読)の力をつけると同時に、日本語による高度の思考能力と表現力をつけることを目的とする。主に、上級学習者向けの読解テキストの中から、優れた小説、知的水準の高いエッセー、評論等を取り上げる。単に文法的な理解に止まらず、日本語の特質、文章の書き方、文体についても理解を深める。到達目標は、日本語の小説、エッセー、評論を深く読むことができるだけでなく、高度な思考能力と表現力が身に付けられることである。	
	日本語 2(読解B IX)	前期に引き続き、様々な日本語に触れ、また表現してきた上級レベルの受講者とともに、日本文学を味わう。日本語で日本文学を読むことにより、1つの語が持つ意味、与える印象、また背景にある日本文化や習慣等を解説し、一言一句にこだわりながら作品を読み進め、文学の世界を「頭」と「心」の両方で理解することを目標とする。到達目標は、学生が、日本語で日本文学を読み、その文学を生み出した「日本」そのものに触れることができるようになることである。	
	日本語 2(語彙 VI)	前期に引き続き、様々なテーマの文章を読み、文章のテーマ別に頻繁に用いられる語・表現を学ぶのみならず、幅広い語彙力を身に付けたうえで必要な読解力も同時に高める。また、学生の母語と日本語との表現の違いにも焦点をあてると同時に、日本語特有の慣用句、連語表現等が使えるようになることも目的とする。用例収集や語の使い分けに関する分析を行うため、学生の積極的な授業参加が望まれる。到達目標は、授業を通して語彙を増やし、その定着を図るのはもちろんのこと、学生自らが状況に応じた語の選択・使い分けができるようになることである。	
	日本語 2(語彙 VII)	日常会話で使用される語彙と、大学での学習、研究活動に必要な上級レベルの語彙とは異なる部分が多くある。本講義では前期に引き続き、新聞記事(社説、報道記事、評論、他)に使用される抽象的な意味の漢語、連語、慣用句、比喩表現等の書き言葉的な表現を学ぶ。発展学習として、概説的な文章の内容を整理して把握する練習を行う。到達目標は、(1)上級レベルの書き言葉的な表現を理解し、適切に使用できるようになること(2)文化、社会に関する概説的な文章の内容を、キーワードを正しく把握して要約することができるようになることである。	
	日本語 2(語彙 VIII)	本講義では前期に引き続き、名詞や動詞の連語を中心に、比喩表現・慣用句等も含めた語彙を増やすことが目的である。講義の内容は、新聞記事や社説、雑誌、学術論文等の難解な文章を読みこなすための語彙の習得である。本講義では、重要表現の意味理解、短文作成といった練習を進めていく。1課終了ごとに、習った表現が使われている記事や、関連する内容の記事の読解も適宜取り入れる。到達目標は、まとまった文章の中で、「どんな表現が」「どうやって」使われているかがわかるようになること、更に、連語表現や、比喩、慣用句等の意味を理解するだけでなく、それらを使った短文作成をすることで、語彙の定着を図ることであり、こういった作業を通じて、新聞記事や論文等、比較的に長い文章を読む力も養成する。	
	日本語 2(語彙 IX)	本講義は超上級レベルの学生を対象としている。外国語で情報発信を行う場合、特に論文作成のような高度な言語表現が要求されるような場で、適切な表現を用いることができるかということ、なかなか自信の持てない向きもある。そこで、本講義では前期に引き続き、各自が母語を使用した際の知的レベルと同等の、高度で洗練された表現に習熟し、それらを可能なかぎり身に付けることができるよう、演練に励む。まず、ジャンル、形態を問わず、日本語で表現されたものに数多く触れ、現実に使用されている表現を実感し、上級学習者として身に付けておくべき表現を理解する。こうした積み重ねにより、上級表現に敏感な目と耳を養成する。次に、例文作成及び発表を通して、上級表現の運用の仕方を理解し、いざというときに役立つ表現を身に付ける。	
	日本語 2(文章表現 VI)	本講義では前期に引き続き、レポートの基本的な書き方を学ぶことを目的とする。レポートで必要とされる書き言葉については、まず話し言葉との違い、文体、表記の決まり等を導入する。次に、段落や文章構成を考え、定義・問題提起・データ説明・事実文と意見文・原因の考察・結論の述べ方・引用の仕方・参考文献の書き方等を学ぶ。期末レポートでは、2000字程度のレポートを書く予定である。到達目標は、学生が授業で学んだ表現や技法を用いてレポートを書けるようになるだけでなく、より良い文にできるように表現力を磨くことである。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	日本語 2(文章表現 VII)	本講義では前期に引き続き、大学学部レベル以上のレポート及び論文が書けるようになることを目標に、アカデミックな内容のレポート・論文作成に必要な知識と技術、日本語の表現力・運用力・論理的に思考し論理的に文章を組み立てる能力を養成する。授業ではレポート作成の基礎を学びながら、要約練習、課題作文の作成やテーマについての議論等も行う。その成果の確認として、学期末に2000字程度(またはそれ以上)のレポートを作成する。到達目標は、作文の基本、テーマの決め方、全体の構成、表現、グラフの使い方等について練習し、最終的に2000字以上のレポートが書けるようにする。	
	日本語 2(文章表現 VIII)	本講義では前期に引き続き、大学学部レベル以上の学生に求められる日本語の文章能力を養成することを目的とする。レポートや論文を作成するために必要な知識や技術、表現を学ぶことが中心となるが、その他の文章、例えば、改まったメール文等を作成するために必要とされる技術、表現についても扱う予定である。期末のレポートの他に、項目ごとに、学習内容確認のための課題(作文等)を課し、添削等を行う。必要に応じて、文法面の補強を図るための練習等も行う。	
	日本語 2(文章表現 IX)	前期に引き続き、既にレポートを書いたことがある学生を対象に、よりよいレポート作成を目指す。問題提起をして、問題の解決案を示し、自分の主張を述べるといった論理的なレポートが書けるようになることを目的とする。レポートの書き方(レポートの文体と表現、テーマの設定、アイデアをまとめる、情報を収集する、情報をまとめる、適切に引用する、アウトラインを作成する、レポートの構成、段落と段落の関係、パラグラフ・ライティング等)を確認しながら、学ぶ。出来上がったレポートをよりよくするためには、レポートの内容面、日本語の表現形式、フォーマットの改善等を考える。	
	日本語 2(口頭表現A VI)	前期に引き続き、中上級レベルに要求される口頭運用能力を身に付けることを目的とする。口頭で人に伝える力・技術を養うため、主にスピーチ、プレゼンテーションを通して訓練を行う。的確な表現を用い正しい音声で発表できる能力を養うことを目指す。そのため発音発話トレーニングも行う。到達目標は、テーマについて簡潔にまとめた内容を伝えることができるようになることであり、正しい音声でわかりやすく伝えることができるようになることである。	
	日本語 2(口頭表現A VII)	本講義では前期に引き続き、アカデミックな場で自分の考えを論理的に伝える口頭発表ができる日本語運用能力を身に付ける。そのために、資料作成等準備の方法、発表の方法、質疑応答の方法、及びそれらの際に用いる表現等を学習する。また、聴解力を身に付けるための練習等も併せて行なう。学生には、2回の発表と、その原稿の提出が課せられる。発表の日程や提出期限を守り、授業に積極的に参加することが必要である。到達目標は、一般的、学術的な話題について、自分の考えを論理的に伝えられるようになることである。	
	日本語 2(口頭表現A VIII)	本講義では前期に引き続き、アカデミックな場で自分の考えを論理的に伝える口頭発表ができる日本語運用能力を身に付ける。そのために、資料収集等準備の方法、発表の方法、意見交換・質疑応答の方法、及びそれらの際に用いる表現等を学習する。また、聴解力を身に付けるための練習等も併せて行なう。学生には、2回の発表と、その原稿の提出が課せられる。発表の日程や提出期限を守り、授業に積極的に参加することが必要である。到達目標は、一般的、学術的な話題について、自分の考えを深く論理的に伝えられるようになることである。	
	日本語 2(口頭表現A IX)	本講義は前期に引き続き、上級話者を対象に、さらに上のレベルの「超級」の口頭表現能力を目指すことを目的とする。スピーチ・プレゼンテーションの練習を通して、話す場面・相手によって適切な日本語が使い分けられるようになること、学術的・抽象的な話題に関してよどみなく的確に細部に渡って表現することができるようになること、発表内容を的確に聞き取り、質疑、議論できるようになることを目指す。「超級」を目指す話者として、自律的に学習を進めていくことが望まれる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本語 2(口頭表現B VI)	本講義では前期に引き続き、上級として必要とされる口頭運用能力を身に付けることを目的とする。ロールプレイ、談話練習を通じて「場面や相手に合った表現を選択し、話す力」、「複雑なことをわかりやすく伝える力」を、社会問題に関するディスカッション及び対立討論を通して、「他人の意見を正確に聞き取る力」、「自分の意見を論理的に組み立ててわかりやすく話す力」を養う。到達目標は、(1)社会問題について、情報や他人の意見を正確に聞き取る力を身に付けること、(2)自分の考えを論理的に組み立て話せるようになること、(3)場面や相手に合わせて適切な表現を選択し、話せるようになることである。	
	日本語 2(口頭表現B VII)	本講義では前期に引き続き、上級として必要とされる口頭運用能力を身に付けることを目的とする。「社会的なテーマについての自分の意見を論理的に組み立てながら、それを人に伝える力」「相手の意見を正しく聞き取り適切に質問する力」を養うための訓練を行う。また、人の前で自分の意見をアカデミックな話し方で発表できる能力を養うことも目指す。到達目標は、(1)自分の意見を論理的に伝える力を身に付けること、(2)アカデミックな話し方、表現を用いることができるようになること、(3)相手の意見や情報を聞き取り、適切な質問をする力を身に付けるようになることである。	
	日本語 2(口頭表現B VIII)	本講義では前期に引き続き、日本語上級話者として必要な口頭表現能力のうち、「社会問題や学術的課題について様々な視点から考える力」「他人の意見を正しく聞き取り、質疑・応答・議論する力」「自分の意見を論理的に組み立て、わかりやすく伝える力」を身に付けることを目指す。到達目標は、(1)自分の意見を論理的にわかりやすく伝える力を身に付けること、(2)場面に適した表現を用い、聞き手に配慮した話し方ができるようになること、(3)相手の意見や情報を正確に聞きとる力を身に付けることである。	
	日本語 2(口頭表現B IX)	前期に引き続き、日本語の上級話者が「超級話者」になるための訓練を行う授業である。特に、大学や大学院で学ぶ上で必要な議論する力を養成するため、ディスカッションやディベート、プロジェクトワークの実践を行う。ACTFL(全米外国語教育協会)が実施するOPI(口頭能力インタビュー試験)の基準によると、超級話者は(1)社会的・専門的な話題についての詳細な説明、描写等ができること、(2)相手との関係を損なうことなく説得力のある裏づけを伴った意見を述べたり、相手との意見に反論したりできること、(3)相手に対する配慮を示しながら、説得・助言・交渉等ができることと定められている。本講義で実施するディスカッション、ディベート、プロジェクトワークは、上述(1)(2)の能力養成を目指すものであり、上述(3)については、「会話の技術」(全9回の短い講義・演習)において訓練を図る。活動中心の授業なので、受講生には日本語の「超級話者」を目指して積極的に取り組むことを期待する。	
	日本語 2(文法 VI)	前期に引き続き、日常会話でよく使われる文型や頻繁に目にする文型を中心に、文型を機能別に分類し学んでいく。また、似通った意味・用法の文型がどのように使い分けられているか、実際に例文を収集し考察する。学期前半は、文中で用いられる文型を、後半は文末で用いられる文型を取り上げる。なお、授業で扱うのは日本語能力試験N2レベルの文型を主とする。到達目標は、文型の意味・用法を理解した上で、実際の日常生活や学校生活で状況に応じて、適切な文型を選択し使えるようになることである。	
	日本語 2(文法 VII)	前期に引き続き、上級文法を正確に身に付けていない学生を対象に、上級文法を再確認し、正しく運用できることを目的とする。併せて、学習者が苦手とする文法事項、或いは、間違いやすい文法事項等も取り上げ、再確認する。授業は、毎時間多くの練習問題に取り組む形で進めていく。到達目標は、上級文法が正しく身に付き、運用できるようになり、正しい文法への意識が高まるようになる、苦手な文法事項を克服することである。	
	日本語 2(文法 VIII)	前期に引き続き、主に日本語能力試験1級の文法項目を中心に、基本的な用法やどのような場面で使われるかを学習し、それらを使って文を作る練習を行う。そういった練習を繰り返すことで、どんな時にどう使われるのかを身につけ、上級文法の定着を図る。到達目標は、既習の文法項目を使って、短作文が書けるようになることであり、またはそれらの表現が含まれる文章を抵抗なく読めるようにすることである。これらを通じて、大学で学ぶ上で、必要とされる上級文法を身に付けることができるようになる。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・ 日本文化 教育科目	日本語 2(文法 IX)	前期に引き続き、大学学部レベルの教科書、専門書にも頻出する、日本語能力試験N1レベルの機能語を中心に、意味、用法の解説を行う。小説や新聞記事等で実際に行われているそうした機能語の用法を確認し、そこから、当該機能語を用いるべき状況を明確にした上で、典型的な文型を導入する。取り上げる機能語は既習のものがほとんどであるが、単に知っているのではなく、正しく用いることができるようになってほしい。とはいえ、週1度の授業であり、ドリル的な演習の時間は十分にとれないため、日本語学習者の陥りがちな誤用例を挙げ、それを訂正する作業を通して、運用力を身に付けられるようにする。	
	日本の文学A	様々な日本語に触れ、また表現してきた上級レベルの受講者とともに、日本文学を味わう講義である。本講義のサブタイトル「京都文学散歩」が示すように、京都が舞台となった作品を読み、文学を通して京都に触れることを目標とする。当然ながら、京都を舞台とした全ての文学を網羅するのは難しいため、季節に合うものを選び、関連性を持った数作品を選ぶ予定である。日本語で日本文学を読むことにより、一つの語が持つ意味、与える印象、また背景にある日本文化や習慣等を解説し、一言一句にこだわりながら作品を読み進め、文学の世界を「頭」と「心」の両方で理解することを目標とする。講義では内容の理解度を確認する「確認プリント」を宿題として配布する。この「確認プリント」はその次の講義で提出すること。担当者が内容をチェックした上で返却し、全員で答え合わせする。	
	日本の思想・宗教 1	日本の江戸時代には、様々な思想が生まれた。江戸時代の人々は何を考へ、どのように生きていたのかについて、武士の思想を中心に考へていく。日本語テキストの読解が中心となるが、ビデオ教材等も使用しながら授業を進める予定である。日本の江戸時代についての理解を深めてもらいたい。授業中に討論も入れる予定である。積極的に議論に参加して欲しい。到達目標は、日本の歴史における江戸時代の意味と武士の思想を理解するとともに、日本の古文に触れることによって日本語の読解能力も向上することになることである。4回目以降、『葉隠』や『武家義理物語』を講義を進めていく。	
	日本の思想・宗教 2	日本の江戸時代は、庶民への教育も広がった時代であった。江戸時代の人々は何のような教えを受け入れ、どのように生きていたのか、江戸時代前期の儒者である中江藤樹のテキストを講読しながら考へていく。日本語テキストの読解が中心となるが、ビデオ教材等も使用しながら授業を進める予定である。日本の江戸時代についての理解を深めてもらいたい。授業中に討論も入れる予定である。積極的に議論に参加して欲しい。到達目標は、江戸時代の儒者である中江藤樹のテキストを講読することによって、儒学や仏教の思想を理解するとともに、日本の古文に触れることで日本語の読解能力も向上することになることである。4回目以降、『翁問答』や『鑑草』を講読していく。	
	日本の法と政治	本講義は留学生科目であるが、日本語と英語で講義を行う。最初の数週のクラスでは、日本の法と政治についての基本的な知識を得ることが目標になる。授業に必要な文献を事前に読んでおくことが重要である。この文献をもとに、質疑応答の形で授業を進める。講義では、宗教や靖国問題、領土問題、安全保障、家族、民族的マイノリティ等の問題について、自らの関心に基づいて選択し、発表を行うことが求められる。報告後の議論を通じて理解が深まることになるであろう。	
	日本の歴史 1	授業は、「日本の歴史」について講義を行う。特に17世紀から19世紀までの、江戸時代と呼ばれる時代を中心に講義する。江戸時代には、現代日本社会を構成している要素のうち、多くが現れると言われている。したがって、江戸時代の日本社会を理解することと同じ意味なのである。講義では、江戸時代における日本社会を、政治・経済・社会・文化等の項目ごとに時期を追って紹介し、講義に必要な歴史学の専門用語についても説明する。また、江戸時代から近代(19世紀～20世紀)への移行についても触れる。この講義を通じて、日本の歴史を、より広い範囲で理解してもらうことが目的である。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本の歴史 2	「日本」とは、どういう国なのか。「日本文化」とは? 「日本人」とは? という問いに対して、稲作文化、男性上位、閉鎖的な島国、単一国家単一民族と、よく言われるが、近年の考古学や日本史の研究は、それらのイメージを大きく塗り替えている。そうした研究成果を紹介し、日本についての理解を深めてもらいたい。本講義により、歴史を通じて、日本という国、日本文化の個性を理解することができるようになってほしい。講義項目は、以下の通りである。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代「日本」誕生～7世紀という時代、律令国家、律令制とその後の日本、東日本と西日本、大坂の歴史、日本女性の歴史、西洋人がみた日本、江戸時代の暮らし。	
	日本の社会 1	本講義では、戦後日本の政治について、とりわけアジアとの関係に注目して、歴史的な観点から考える。ここでは、文学作品・新聞史料等も用いる予定である。日本の政治の特質や、現代日本の抱える課題を理解することにより、日本の社会そのものへの認識を深めることができるであろう。講義する項目は以下の通りである。戦後の占領と戦後改革、東京裁判と戦争責任、戦後日本の民主主義、単独講和と国家の独立、一九五五年体制の成立、戦争体験論の諸相、高度経済成長と大衆消費社会、六〇年安保闘争、戦後日本とアジア、戦後日本と沖縄、歴史認識論争、戦後の終焉。	
	日本の社会 2	本講義では、近代日本の政治について、とりわけアジアとの関係に注目して、歴史的な観点から考える。ここでは、文学作品・新聞史料等も用いる予定である。この講義を通して、日本の社会を一国的にとらえるのではなく、アジアとの関係性の中で理解できるようになるであろう。講義する項目は、以下の通りである。開国と開港、近代国民国家の形成、大日本帝国憲法発布と条約改正、日清戦争とアジア、日露戦争と帝国意識の形成、政党政治の形成と展開、ヴェルサイユ・ワシントン体制とアジアの民族運動、満洲事変と政党政治の崩壊、日中戦争からアジア・太平洋戦争へ、占領と戦後改革、東京裁判と戦争責任、単独講和と国家の独立。	
	日本の文化 1	(概要) 日本の文化を言語的視点、歴史的視点から学ぶ。本講義は、2名の担当者により構成される。 (オムニバス形式 / 全15回) (269 山村 孝一 / 8回) 日本の文化、社会、あるいは日本人を理解するのに格好の素材は川柳(せんりゅう)である。本講義では、江戸時代の川柳を簡単に紹介し、俳句との違いを説明した後で、現代川柳を味わう。川柳に見られる日常語彙や口語表現、俗語、会社用語などは日本語の教科書にないものも多く、楽しく学修することができる。 (232 松本 公一 / 8回) 本講義では、カミ信仰(いわゆる神道)・仏教・天皇・祭礼・伝統文化(茶道・華道等)等のテーマについて、歴史的に説明することでその特質を明らかにしていくことを目標としたい。また、受講者それぞれの関心にそったテーマを選び、発表を割り当て、それにもとづいて討論を行う。なお、受講者の関心によっては、適宜、寺社や祭りの見学等も行う。	オムニバス方式
	日本の文化 2	現代日本の産業は、近代になってヨーロッパの方式を取り入れたことで発展した。その基礎は江戸時代にすでに準備されていた。授業では、江戸時代の産業を紹介する。また、産業発展の基礎となった江戸の政治や社会についても説明する。本講義では、日本の歴史に関する専門的な知識を理解し、自分でも専門用語や知識を活用する機会とする。本講義では、最初に、日本の歴史区分から学ぶ。次に、日本の政治と外交をレクチャーした後、江戸時代の日本の社会、文化、農業、林業、工業を学んでいく。その後、明治時代も学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・ 日本文化 教育科目	日本の教育	日本における教育および教育文化（日本人をつくってきた教育）の歴史を通して、「日本的なるもの」例えば人間関係や行動様式の特質等を考察する。講義と質問、発表報告と討議等によって講義を構成する予定。到達目標は、日本の教育についての基礎知識を身に付けてもらうこととともに、学びの神聖さを認識してもらうことである。また、自分の国の教育と日本の教育との対比を行って、それぞれの良い点を1つでも多くつかむこと。講義項目は、現在日本の教育の問題点、2つの教育基本法、進学（経済）格差、日本の教育の歴史、中世における武士の教育と芸能、近世における儒学、近世後期における新しい学問、寺子屋等である。	
	日本の伝統と人間形成	日本の両親のもとに生まれた子どもを、中国で中国人が育てたとき、法律上の問題はさておき、その子どもは果たして日本人と呼べるだろうか。また、アメリカ人の夫妻に生まれた子どもを日本で日本人の家庭で育てた場合、その子どもはアメリカ人の特性を持つだろうか。このように考えると、家族間の人間関係のあり方や言語や食習慣、身体動作や年中行事、結婚式や葬式等、人は文化を通して自己形成をするといえる。本講義では、こうした日本の伝統文化が持っている教育機能に着目し、日本人の特性を明らかにしたい。具体的には、日本人の家庭観や子ども観、または職業観を明らかにし、留学生の日本と日本人理解をより豊かなものにするように努める。	
	日本の伝統と美	花は、世界中どここの国でも、どの時代にも、好まれ、飾られてきた。特に、日本での「いけばな」は、四季に恵まれた風土の中で、500 有余年の歴史と伝統を持ち、生活文化の中で「花の芸術」「華道」(The Way of Ikebana)として、精神性も大切にされて、発達してきた。「いけばな」は、花を生ける行為と共に、それに伴う驚きや喜びを感じることであり、切り取った草花の色や姿を通じて、背後にある様々な事情を察知しながら、それぞれの環境を考え、いろいろな行事に合わせて対処しながら、発達してきたのである。長い伝統を持つ「いけばな芸術」には、形を越え、心に響く何かがある。「いけばな」を通して、楽しい、魅力ある、美しい、伝統の世界を学ぶ。到達目標は、日本におけるいけばなの歴史的背景を知る。自由花、盛花、生花等のルールや生け方を学び、一人でも生けられるようになることである。花展で作品を見たときに知識をもって鑑賞できるようになることである。	
	日本の伝統と文化	本講義では、日本の伝統と文化を色々な角度から学習することを目的とする。日本の伝統文化は、情緒を育み、自然と一体化する面を多く持っている。日本人と花のかかわりを「いけばな」のみでなく、文化としての「茶」・「能」・「狂言」・「焼物」・「絵画」・「文学」・「音楽」等を日本の伝統を切り口として、分析し、考察する。到達目標は、日本の伝統的文化の歴史的背景を知ることである。	
	日本の伝統と芸能	本講義では、はじめに、わが国の伝統と芸能の基本的な知識を紹介する。その上で、第一線で活躍する様々な分野のゲストスピーカーを招聘し、各分野における芸能・文化がどのように発展し、成立してきたかを学ぶ。特にわが国の芸能全ての源流である雅楽を中心に、日本の芸能の伝統が日本人の心性・習俗性にいかに影響を及ぼしているかを考察し、その成立の過程を検証する。到達目標は、芸能・文化がどのように発展し、成立してきたかを考察し、芸能全ての源流である雅楽を中心に、日本の芸能の伝統が日本人の心性・習俗性にいかに影響を及ぼしているかを学び、日本の伝統文化を理解する為の基礎知識を習得することである。	
	日本の伝統と能楽	日本の伝統芸能である能楽について授業を行う。能楽は、室町時代の14世紀から現代までの600年間、演じ続けられている演劇である。10世紀や11世紀の文学作品をもとにして、14世紀に作られた劇であり、その言葉は現代日本語に比べれば難しいものである。しかし、いつの時代にも人々を引きつける魅力を持っているから、現代まで続いているのであり、その内容は古くなく、普遍的な人間の心や美を描いている。能楽に現れた日本人の感性を理解すると共に、日本の文化との関係を示しつつ、伝統について考えて欲しい。到達目標は、教室での講義、能楽堂での実技体験、実演の鑑賞、史跡巡りを通して、日本の文化の中で能に関する基本的な知識を身に付け、日本文化と伝統を考える態度を養うようにすることである。	

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	日本の伝統と芸術	日本の文化的伝統の特色として、微細なもの、凝縮されたもの、清らかなもの、うつろいゆくはかないものを愛好する美意識が挙げられる。大きく豊かなもの、力強いもの、合理的な秩序を持つものに美の理想を見いだす西洋とは対照的である。その特質は、盆栽からフィギュアまで、古くは中国、近代に入ってから西洋との交流を繰り返しても変わらず受け継がれていると言われる。本講義では、造形芸術を中心に、その日本独自の美意識が、どのような要因から生じ、何を結果したのかを西洋や中国との比較を通じて考える。日本の美的伝統はくみ、優れた芸術を生み出してきた京都で学ぶ地の利を生かして、見学会を行う。到達目標は、日本独自の美意識がどのように日本文化にあらわれているかを理解することである。	
	日本の芸術 1	<p>(概要) 本講義は、前半部分は、日本のヴィジュアル・カルチャー（視覚文化）について学ぶ。後半部分では、京都に関わる絵画や美術作品を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(95 岸 文和 / 7回) 日本のヴィジュアル・カルチャー（視覚文化）の多様性を概観する。時代的には19世紀から現代まで、領域的には、博物・美術・商品・ファッション・挿絵・マンガ・ポスター・TV コマーシャル等を、視覚的コミュニケーションの視点から紹介する。誰が、誰のために、何を、どのように制作する（作る / 描く / 撮る）ことによって、また、どのように見せる（展示 / 編集する）ことによって、何をしようとした / しているのか。画像を実際に見ながら、その多様な機能について考えることが目標である。なお毎週、授業の終わりに、出席確認を兼ねて、作品を見て感想文（解釈・記述・評価）を書いてもらう。</p> <p>(271 熊倉 一紗 / 8回) 京都市周辺や少し足をのびた地方にある寺院や美術館を取り上げ、その寺院・美術館に關係する美術作品、あるいは芸術家を時代を追って紹介する。そうすることによって、日本美術の流れ、日本の絵画作品の見方を修得してもらうことを目的とする。中世から現代までの絵画作品や画家の活動を紹介したい。到達目標は、実際に受講生が京都周辺の寺院・美術館を訪れた時に日本絵画のおもしろさを体験することができ、さらに日本の芸術の特質を把握することができるようになることである。</p>	オムニバス方式
	日本の芸術 2	<p>(概要) 日本のヴィジュアル・カルチャー（視覚文化）の多様性を概観する。時代的には19世紀から現代まで、領域的には、博物・美術・商品・ファッション・挿絵・マンガ・ポスター・TV コマーシャルなどを、視覚的コミュニケーションの視点から紹介する。誰が、誰のために、何を、どのように制作する（作る / 描く / 撮る）ことによって、また、どのように見せる（展示 / 編集する）ことによって、何をしようとした / しているのか。画像を実際に見ながら、その多様な機能について考えることが目標である。なお毎週、授業の終わりに、出席確認を兼ねて、作品を見て感想文（解釈・記述・評価）を書いてもらう。到達目標は、多様な日本のヴィジュアル・カルチャー（視覚文化）の構造 / 機能が理解できるようになることである。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(95 岸 文和 / 8回) 広告の歴史について、TVコマーシャルについて。</p> <p>(272 中間 志織 / 8回) ヴィジュアル・カルチャーと展示、少女とヴィジュアル・カルチャー。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	異文化間コミュニケーションA	日本語によるコミュニケーションと主として英語によるコミュニケーションの比較を通して、それぞれのコミュニケーションの方法の特徴を学ぶ。担当者による講義と、教科書を使った実践を組み合わせ、両言語によるコミュニケーションの特徴を自らの体験を通して理解してもらう。授業の後半を受講生によるプレゼンテーションが短いスキットにあてる。講義の部分は、平易な日本語と英語の両方を使って説明する。ディスカッション、質問、プレゼンテーションは、日本語・英語とも使用することができる。使用するテキストには、日本人と主としてアメリカ人のスキットがビデオ収録されており、それを見ることによって、両言語によるコミュニケーションの特徴を理解する手助けになる。それぞれのスキットに関連する異文化コミュニケーションの重要な概念は、クラスで説明し、理論的にもコミュニケーションの諸相を理解することができるようになる。	
	異文化間コミュニケーションB	留学生生活にとって切っても切れないのは現地の生活への不適応、つまりカルチャーショックの問題である。カルチャーショックは否定的な意味づけをされることが多いが、むしろ文化学習の経験であり、自己に対する理解を深め、自己成長をもたらしてくれるといえる。本科目では、担当者による講義と、教科書を使った実践とを組み合わせ、日本語および英語コミュニケーションの特徴を自らの体験を通して理解してもらう。授業の後半は、受講生によるプレゼンテーションがスキットにあてる。講義の部分は、平易な日本語と英語の両方を使って説明する。	
	人から人間への道	<p>This course explores how it is that humans have thought and theorized about themselves as social beings throughout recent history into the present. The role that cultural anthropology has played in helping lay people to understand themselves as part of larger social groups (ethnic communities, cultures, nations) is the core focus. Examples of how anthropological fieldwork findings (with both primate and human societies) have led anthropologists, and subsequently the general public, to certain understandings are introduced, and class discussions on the influence of certain theories in their own lives and identities, as well as those around them, are encouraged. The weekly themes range from: understanding indigenous local knowledge (in traditional and modern societies), to inter-group discrimination, to narrative theory, to assessing the impact of globally shared technologies and ideologies on individual and collective identities.</p> <p>(和訳)</p> <p>本講義では、比較的近年の歴史から現在にいたる過程において、人間がいかに自分たちのことを捉え、それを社会的な生き物として理論化してきたかという点について探究しようと試みる。このとき注目すべきは文化人類学が果たしてきた役割であり、とりわけ当該学問が、人間がみずからをより大きな社会集団(民族、文化、国家等)のなかへ位置づけることを促してきたという側面に焦点をあてる。</p> <p>本講義では、対象が霊長類であれ人間社会であれ、人類学的フィールドワークでの各種発見を通じて、人類学者がそれに続いて一般社会が到達した特定の理解の仕方を紹介するとともに、ディスカッションを通じて、人類学的理論が学生自らや周囲の人間の生活、アイデンティティに与えている影響を考察していくことが奨励される。</p> <p>テーマは各週ごとに異なり、それらは例えば土着のローカル・ノレッジの理解の仕方(伝統的/近代的社会の両方が対象となる)、間集团的な差別のメカニズム、ナラティブ理論、地球規模で共有されるテクノロジーがもたらすインパクトの検証、そして個人/集団のアイデンティティに関するイデオロギー等である。</p> <p>(オムニバス形式/全15回)</p> <p>(130 Bruce WHITE / 14回)</p> <p>上記内容の具体的なケースを取り上げ、レクチャーする。</p> <p>(91 Gregory POOLE / 1回)</p> <p>上記に関連したケーススタディを取り上げることで、受講者の理解を深める。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語・日本文化教育科目	アイデンティティの社会格差	<p>Psychological anthropology as well as a variety of ethnographies on modern conflict have begun to offer a range of insights into the way in which systems of self-representation (such as identity) operate on, and are related across, the personal, inter-personal, and collective levels of existence. This class begins by understanding key concepts and findings in anthropological literature, moving on to investigate and theorize on the links between the everyday experience of social life and the symbolic dimension which comments upon and informs it. Forging a successful and sustainable relationship between worlds is our common human experience but some of us have more resources than others with which to do so.</p> <p>(和訳) 近代紛争に関する心理人類学並びに様々な研究論文は、自己表象(アイデンティティ等)の仕組みがどのように機能し、これが個人的、対人的、集会的な存在のあり方にいかに関わっているかについての幅広い見識を提供するようになっている。本講義はまず、人類学の文献の主要概念と発見事項を理解するところから始まり、次いで社会生活における日常の経験と上述の象徴的な側面との結び付きを調査、理論化する。人は誰も社会と良好かつ持続可能な関係を築こうとしているが、その理解力や包容力には人によつての違い(格差)が存在する。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(130 Bruce WHITE / 14回) 上記内容の具体的なケースを取り上げ、レクチャーする。</p> <p>(91 Gregory POOLE / 1回) 上記に関連したケーススタディを取り上げることで、受講者の理解を深める。</p>	オムニバス方式
	世界の歴史 1	<p>(概要) 本講義では、前3000年ごろから1500年代までの世界の各地域の歴史を扱う。授業の前半は、古代文明(エジプト・メソポタミア・インダス・黄河)の出現からいくつかの「世界」がつくられていく過程をたどる。後半は、その世界が崩れ、新しい世界へと再編されるとともに、各世界の内部や、各世界のあいだの交流が増していく様子を見る。授業では特に、風土と人間の関係、人類の移動(戦争も含む)、経済活動、知識や技術・制度の広まり、宗教の発生と拡大等に注目する。これは、民族国家をもとにした歴史に慣れ親しんでいる現代のわれわれにとって、より大きな枠組みで過去の人類の経験を学び、現在を理解する視点を与えてくれるだろう。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(273 亀高 康弘 / 15回) 講義およびディスカッションを行う。</p> <p>(124 堀井 優 / 3回) ディスカッション(1・7・15回の授業日)には堀井が参加する。</p>	オムニバス方式
	世界の歴史 2	<p>(概要) 本講義は、1500年ごろから現在までの世界の各地域の歴史を扱う。授業の前半は、西ヨーロッパ諸国が、互いに争いながらアメリカ大陸やインド、東南アジアに進出し、世界商業や植民地支配を通じて世界的な分業体制を築き上げる過程をたどる。特に19世紀に入り、イギリスを中心に工業化が進む中、欧米諸国が国民国家形成を進める一方で植民地を拡大し、かつて繁栄を誇ったアジアの大帝国や日本が西洋への対応に苦しむさまに注目する。授業の後半は、20世紀の歴史で3つの点に注目する。1つ目は、アジア・アフリカにおけるナショナリズム革命・独立運動である。2つ目は、ソヴィエト連邦、中国等社会主義国家の実験である。3つ目は、覇権国アメリカの動向である。授業では特に、人類の移動、世界経済、知識や技術、制度の伝播等に注目する。近現代の世界史を学ぶことは、自分の国と他の世界のつながりを確認するとともに、自国の歴史の特徴をより深く理解することにつながる。さらには、南北格差、人種・民族問題、環境問題といった現代の課題について歴史的視野をもって考えることを可能にするであろう。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日 本 語 ・ 日 本 文 化 教 育 科 目	世界の歴史 2 (つづき)	<p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(273 亀高 康弘 / 15回) 講義ならびにディスカッションを担当する。</p> <p>(70 服部 伸 / 3回) ディスカッションの授業(1・8・15回)には服部が参加する。</p>	
	歴史の歴史	<p>(概要)</p> <p>歴史の見方、考え方は社会や時代によって変化してきている。これが正しい歴史の見方だというのは存在しない。ある意味で歴史はそれを語り、書き表し、教えてきた人々が社会と向かい合い自らを理づけてきた知的活動の産物だと言える。その意味では客観的な歴史は存在しない。ただ、私たち人類は、昔から今日に至るまで重要と思われる出来事を記録に残し、何故起きたのか、どのような意味があったのかを探ってきた。それが「歴史の父」ヘロドトスの言う <i>historizein</i> (探求する) ということである。近代歴史学は客観的な歴史学を確立するために史料批判という研究法を提唱してきた。しかし今日、歴史は国家の歴史に限らず、人々の感性や個人の内面にまでその対象を広げてきている。もはや政治史だけが歴史ではないのである。本講義では、中国の司馬遷やギリシアのヘロドトスといった歴史の古典から、19世紀ヨーロッパにおける近代歴史学の成立を経て現代にいたる、歴史という学問の歴史をたどる。大学で教えられる歴史学が19世紀ヨーロッパで成立したため、計画ではヨーロッパの歴史学が多くなっているが、受講者の関心に応じて地域や時代を変化させる。歴史の見方・考え方の変化を歴史家と歴史家を取り巻く時代や社会の変化を関係させながらともに考えていく。</p> <p>(オムニバス形式 / 全15回)</p> <p>(273 亀高 康弘 / 15回) 講義ならびにディスカッションを担当する。</p> <p>(124 堀井 優 / 3回) ディスカッションの授業(1・8・15回)には服部が参加する。</p>	オムニバス方式